

# 学生による授業認識 と大学教育

大東文化大学授業認識報告書（全学データ）

2021 年度

大東文化大学

## 目次

1. はじめに.....	3
2. 授業関連アンケートのアップデート.....	4
2.1 基本的な考え方.....	4
2.2 2021 年度アンケートのラインナップ.....	5
3. 結果.....	7
3.1 前期.....	7
3.1.1 学生による授業認識アンケート【前期】.....	7
3.1.2 教員による授業認識アンケート【前期】.....	39
3.1.3 学生による評価認識アンケート【前期】.....	59
3.1.4 各学部・学科による考察【前期】.....	68
3.2 後期.....	89
3.2.1 学生による授業認識アンケート【後期】.....	89
3.2.2 履修者数と総合満足度.....	117
3.2.3 教員による授業認識アンケート【後期】.....	122
3.2.4 学生による評価認識アンケート【後期】.....	140
3.2.5 各学部・学科による考察【後期】.....	146
4. 考察とまとめ.....	173
資料.....	177
1. 大東文化大学全学 FD 委員会規定.....	177
2. 2021 年度 授業関連アンケート実施要項.....	179

## 1. はじめに

全学 FD 委員会  
委員長 静 哲人

大学教育の中心的部分は言うまでもなく授業である。「授」の字を用いることにも象徴的に表れているように、従来の授業はどちらかと言えば教員が学生に知識などを「授ける」営みであると捉えられてきたかも知れない。授業において講義するのが教員の役割で、それを聞くのが学生の役割であるという一方向的モデルである。

しかしながら現代社会に生きる有為な構成員として豊かな教養・幅広い知識および学部学科の専門知識・技能を修得し、活用することができるようになるためには旧来の一方向的授業モデルでは不十分であり、双方向的モデルが不可欠であることも今や広く認識されている。学生が講義を聞くだけでなく、積極的かつ主体的に質問し、意見を述べ、討論し、グループプロジェクトに参加するなどを通じて学びを深められるよう、授業のデザイナーたる教員は自らの授業がアクティブなラーニングの場になることを保証してゆく責務があろう。

そしてそのような双方向性は授業内部の営みにだけでなく、授業に対する認識や評価にも求められる。教育の受け手である学生が授業をどのように認識し評価しているのかを、教育の送り手である教員が正確に認識することにより、それまでの授業運営を振り返り、必要があればその後の授業運営に修正を加え、それまでよりのさらに良い学びを保証してゆくことができる。

そのような認識にたって大東文化大学全学 FD 委員会では毎年授業評価アンケートを実施し、集計結果を学内にフィードバックし、学外に公開してきたが、2021 年度にはそれまでの流れを踏まえた上でアンケートの大幅な見直しを行った。具体的にはアンケートの種類を増やし、名称を修正し、質問項目をアップデートし、実施回数も増やし、集計結果の学内へのフィードバックもより迅速なものとした。この見直しの詳細については次節で詳しく述べる。

この見直しにより、授業の受け手である学生の認識が、従来よりもさらに正確に可視化された状態で授業の送り手である教員に届けられることとなり、それ以降の授業運営に資するものとなったものと考えている。本報告書は 2021 年度の授業関連アンケートの詳細と結果をまとめたものである。

アンケートの実施にあたってご理解とご協力を賜ったすべての学生および教職員の方々に心より感謝したい。

以上

## 2. 授業関連アンケートのアップデート

### 2.1 基本的な考え方

前項で述べたように 2021 年度の授業関連アンケートの実施にあたっては前年度までの実績を踏まえつつ大幅なアップデートを行った。その際の基本的な考え方を記す。

(1) アンケートの名称内の「評価」という文言を「認識」に変更する。

「授業評価」という表現はすでに十分に流通し市民権を得ていると言えるが、その一方でその表現に対して根強い心理的抵抗を感じる教員がいるのもまた事実ではないだろうか。それらの教員の気持ちを代弁するならば、「知識も不十分な学生に、教員の授業の良し悪しを評価する能力や資格が果たしてあるのだろうか」ということかと思われる。そのような感覚はある意味で無理からぬものであると思われたため、2021 年度のアンケートからは名称内に「授業評価」という表現を使わず、代わりに「授業認識」という表現を使うこととした。「評価」という文言は、その内容が正しいもの／妥当なものであるという含意を多少なりとも持つと思われるが、「認識」であればそのような含意のないニュートラルなものとなり、より実態に即したものとなると考えたからである。すなわち本アンケートは、「それが等を得ているか否かは別として、少なくとも学生からはどのように認識されているのかを探る」というスタンスを明確にしたいと考えた。

(2) アンケートの文言を見直す。

2020 年度のアンケート文言には、必ずしも全教員が評価を共有しているとは考えられない命題（例えば、「授業内で学修の目標や目的について説明がなされるべきである」「授業内で取り組み方について丁寧に説明がなされるべきである」）が真であるという前提にたった項目が散見された。そこで「授業分野に関わらず、どのような教員・学生であっても評価が共有できるであろう」という命題のみ（例えば、「提出物に対するフィードバックは丁寧にされたほうが、そうでないよりも良い」「授業内容はシラバスに沿っていたほうが、沿っていないよりも良い」）に基づいたアンケート文言になるように、ほぼゼロから作り直した。

(3) 教員に対するアンケートも行ってみる。

従来は授業に関するアンケートは学生に対してのみ実施してきた。しかし(2)で述べたような「授業についての認識」を調査対象とするならば、同じ授業を学生の側からみた時と教員の側から見た時では、見え方がどのくらいまたどのように異なるのか（あるいは異なるのか）、は興味深いことである。認識がおおむね一致していればよいが、大きく乖離しているならば、授業に関して学生の求めるものと教員の目指すものがずれていることになり、何らかの修正が必要だからである。そこで学生に対する設問と同様の設問を教員に問うこと（例えば、「自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか」を学生に、「学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか」を教員に問う。）で、同一の授業について、「受け手である学生の認識」と「送り手である教員の認識」を比較対照してみることにした。

(4) 評価に関するアンケートも行ってみる。

従来は授業に関するアンケートを学期あるいは学年終了の直前に行っていた。学生がその授業における自分の成績評価を知るのはその後である。すなわち従来のアンケートでは、「その授業の成績評価を知った後で、学生がその授業についてどう考えたのか、その成績評価についてどう考えたのか」は一切調べてい

ない。もしそのような情報が得られたならば、その後の授業運営の参考にできるはずである。そこで学生が成績評価を知ったあとで、その評価をどのように（厳しすぎる、適正である、甘すぎる等）認識しているのかを調べることにした。

(5) 頻度を増やし、フィードバックを早める。

従来は年度に1度実施していたのみであり、かつその結果の集計フィードバックも十分に迅速であったとは言い難い。このためアンケートを実施してその結果をそのすぐ後の授業運営に活かすという本来の目的が十分には達せられていない面があった。そこで2021年度はアンケートを前期末、後期末に実施し、かつ前期末アンケートの結果は後期授業開始前までに、後期末アンケートの結果は次年度前期授業の開始前までに学内的なフィードバックを完了することで、授業改善のためという目的により役立てやすいようにした。

(6) 結果を学生にも明示的にフィードバックする。

従来は、授業アンケートの結果は学生に直接フィードバックされていなかった。アンケート実施後半年から1年ほどもたった時期に大学HPに報告書が掲載されるのが学生に対する唯一のフィードバックであった。しかも「報告書を掲載した」旨を学生に通知したわけではないので、そのような報告書が自分たちに見える形で存在していることを知っていた学生は極めて稀であったはずである。したがって典型的な学生の認識は、「毎年授業評価アンケートというものが実施されているが、その結果はどうなっているのかまったくわからない」というものだったと推測される。しかし授業の第一当事者は学生である。時間をかけてアンケートに回答したならば、その結果がどうであったのか、授業についてどのような示唆が得られたのか、そしてその示唆を受けてその後の授業がどのように運営されていく方針なのか等を知る権利が彼らにはあるはずだ。そこで本年度のアンケート結果は学部長会議で報告すると同時に必ずDBポータル(学内ネットワーク)を通じて全学生に直接配信することとした。

## 2.2 2021年度アンケートのラインナップ

以上の基本的考え方に基づいて、2021年度の授業関連アンケートのラインナップを以下のようなものとした。

アンケート名称	実施タイミング	何を調べるか
(1) 学生による授業認識アンケート【前期】	前期授業終了前	学生は授業をどう認識したか？
(2) 教員による授業認識アンケート【前期】	前期成績入力時	教員は授業をどう認識したか？
(3) 学生による評価認識アンケート【前期】	前期成績判明後	学生は評価をどう認識したか？
(4) 学生による授業認識アンケート【後期】	後期授業終了前	学生は授業をどう認識したか？
(5) 教員による授業認識アンケート【後期】	後期成績入力時	教員は授業をどう認識したか？
(6) 学生による評価認識アンケート【後期】	後期成績判明後	学生は評価をどう認識したか？

前期には(1)(2)、後期には(4)(5)を学部長会議で報告した際に、各学部・学科に対して自学部または学科の結果に対する考察の報告を依頼した。次章において(1)～(6)のアンケートの集計結果および各学部・学科による報告を掲載する。



### 3. 結果

#### 3.1 前期

### 3.1.1 学生による授業認識アンケート【前期】

#### 1. 目的

履修学生の授業に対する認識を調査することで授業の内容や方法の改善に役立てるために実施した。

#### 2. 実施の対象

- (1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が5名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とした。
- (2) 実施対象科目を全学FD委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とした。

#### 3. アンケート項目

2021年度前期の授業に関する学生の認識アンケートの項目は以下の通りであった。

Q1a あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか？ [シラバス既知]

- 2 (はい、(おおよそ) 知っています)
- 1 (いいえ、知りません)

Q1b この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。 [シラバス通り]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。 [難易度適切]

- 5 (とても難しかった)
- 4 (やや難しかった)
- 3 (適切だった)
- 2 (やや易しかった)
- 1 (とても易しかった)

Q3a あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。 [メール連絡]

- 2 (はい、あります)
- 1 (いいえ、したことはありません)

Q3b 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q4a この授業では提出物を出しましたか。[提出経験]

- 2 (はい、出しました)
- 1 (いいえ、出していません)

Q4b 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q5 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q6 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q7 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

10 (100%) 9 (90%)... 2 (20%) 1 (10%)

Q9a 授業について良かった点があれば具体的に書いて下さい (授業担当教員が直接読みます)。

Q9b 授業について改善すべき点があれば具体的に書いて下さい (授業担当教員が直接読みます)。

## 4. 結果

### 4.1 対象科目数

対象科目数は 2159 科目、対象のべ学生人数 (各対象科目内の履修者数の合計) は 101314 名であった。

### 4.2 のべ回答者数と回答率

回答者数は設問によって異なる。最も包括的な設問である Q8 に回答したのべ学生数は、30105 名である。よって回答率は  $(30106/101314 = 0.297)$  29.7% である。この数値は Web 方式のアンケートとしてはほぼ例年通りと言える。部局/学科別回答率および学年別回答率を図表 1 に示す。

図表 1 部局/学科別 (左) および学年別 (右) 回答率

学科	回答率 合計
スポーツ科学科	31.3%
英語学科	33.0%
英米文学科	27.6%
環境創造学科	34.0%
看護学科	30.4%
教育学科	26.4%
教職課程センター	30.1%
経営学科	24.5%
健康科学科	23.2%
現代経済学科	23.9%
国際関係学科	35.3%
国際交流センター	54.7%
国際文化学科	33.6%
社会学科	42.6%
社会経済学科	25.4%
書道学科	23.8%
政治学科	28.9%
中国語学科	35.2%
中国文学科	31.0%
日本語学科	32.0%
日本文学科	31.4%
法律学科	31.4%
歴史文化学科	32.1%

	学年				
	0	1	2	3	4
	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率
	合計	合計	合計	合計	合計
	44.3%	42.5%	30.1%	19.3%	11.2%

注：0 は科目等履修生

最も回答率が高かったのは 部局では国際交流センターの 54.7% で、学科では社会学科の 42.6% であった。学年別に見ると 1 年 > 2 年 > 3 年 > 4 年 と回答率が漸減したのが分かる。

### 4.3 結果

Q1a~Q8 までの質問項目ごとに結果を提示してゆく。分析の単位は個別授業に関して回答した個々の学生の回答である。すなわち個別授業ごとに学生の回答をまとめることはしていない。例えば「A 学科の平均値」とは「A 学科で開講していた複数科目に関して回答したすべての学生の回答を平均した値」を指す。授業によっては回答学生数が極めて少ないため個別授業ごとの平均値を出してからそれをさらに平均するという手順は避けた。

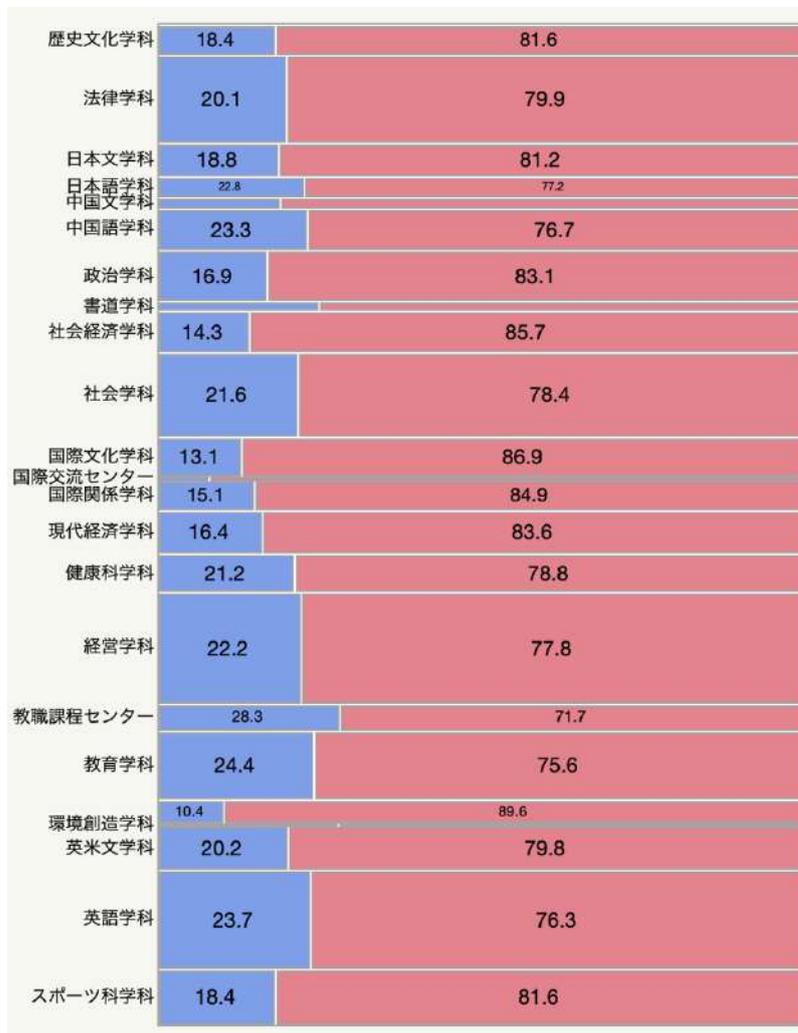
なお Q9a と Q9b（自由記述）については各授業担当者のみが読み、当該クラスの学生に対してコメントしている。その部分については本報告では扱わない。

### 4.3.1 【Q1a】 あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか？ [シラバス既知?]

全学では 2（知っている）と回答したのは 79.84%であった。2 割ほどがシラバスを承知していない。学科別の内訳を図表 2 に示す（なお図内の学科／部局ごとのバーの太さは回答人数に比例している。バーが細くて学科／部局名が表示されていない場合は表の数値を参照されたい。「知っている」と回答した比率が最も高かった部局は国際交流センター（91.82%）で、学科で最も高かったのは看護学科（89.61%）であった。

図表 2 Q1a「シラバス既知？」の部局／学科別回答

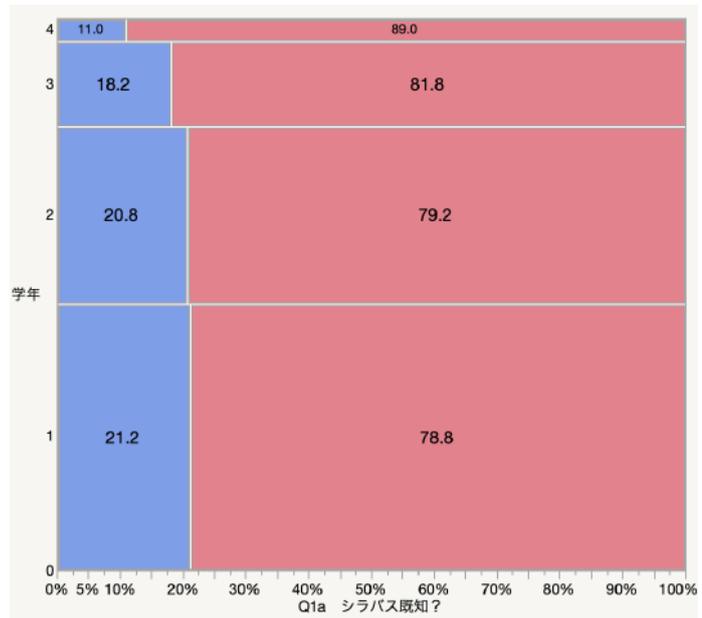
Q1a シラバス既知？		
行%	1	2
スポーツ科学科	18.40	81.60
英語学科	23.70	76.30
英米文学科	20.24	79.76
環境創造学科	27.94	72.06
看護学科	10.39	89.61
教育学科	24.37	75.63
教職課程センター	28.28	71.72
経営学科	22.20	77.80
健康科学科	21.16	78.84
現代経済学科	16.35	83.65
国際関係学科	15.13	84.87
国際交流センター	8.18	91.82
国際文化学科	13.11	86.89
社会学科	21.64	78.36
社会経済学科	14.26	85.74
書道学科	24.91	75.09
政治学科	16.92	83.08
中国語学科	23.32	76.68
中国文学科	18.93	81.07
日本語学科	22.77	77.23
日本文学科	18.84	81.16
法律学科	20.08	79.92
歴史文化学科	18.40	81.60



学年別の内訳を、図表 3 に示す。科目等履修生はさすがに 100%がシラバスを把握したうえで履修している。学年別には 1 年<2 年<3 年<4 年と学年が上がるにしたがってシラバス内容を把握している率は上がっている。

図表3 Q1a 「シラバス既知？」の学年別回答割合

学年	行%	
	1	2
0	0.00	100.00
1	21.16	78.84
2	20.80	79.20
3	18.21	81.79
4	10.96	89.04



#### 4.3.2 【Q1b】 この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。[シラバス通り?]

この設問は Q1a で 2 「はい (おおよそ) 知っています」と回答した学生 (のべ 25123 名) のみが回答した。全学の平均は 4.32 で標準偏差は 0.75 であった。部局/学科別の数値を表 4 に示す。

表 4 Q1b 「シラバス通り？」の部局/学科別 (左) および学年別 (右) の平均値と標準偏差

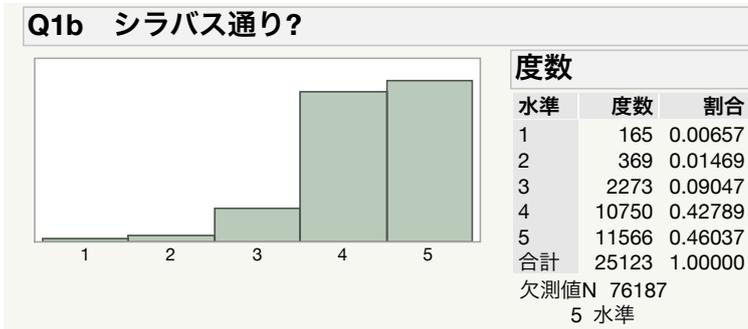
学科	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	1473	4.18	0.91
英語学科	2411	4.28	0.78
英米文学科	1116	4.37	0.79
環境創造学科	52	4.19	0.63
看護学科	659	4.45	0.64
教育学科	1627	4.31	0.76
教職課程センター	625	4.17	0.89
経営学科	2770	4.28	0.74
健康科学科	937	4.37	0.70
現代経済学科	1154	4.35	0.71
国際関係学科	794	4.49	0.68
国際交流センター	101	4.76	0.55
国際文化学科	1033	4.44	0.67
社会学科	2108	4.26	0.75
社会経済学科	1088	4.30	0.72
書道学科	227	4.35	0.80
政治学科	1372	4.31	0.74
中国語学科	994	4.35	0.76
中国文学科	296	4.40	0.71
日本語学科	484	4.49	0.68
日本文学科	830	4.37	0.70
法律学科	2182	4.33	0.71
歴史文化学科	790	4.32	0.75

学年	数	平均	標準偏差
科目等	27	4.67	0.48
1	12029	4.35	0.75
2	7972	4.29	0.77
3	3974	4.28	0.74
4	1121	4.34	0.69

部局／学科によって大きな差は見られないが、国際交流センターが 4.76 と最も高い値であった。また学年進行によって変化するという傾向は観察されない。

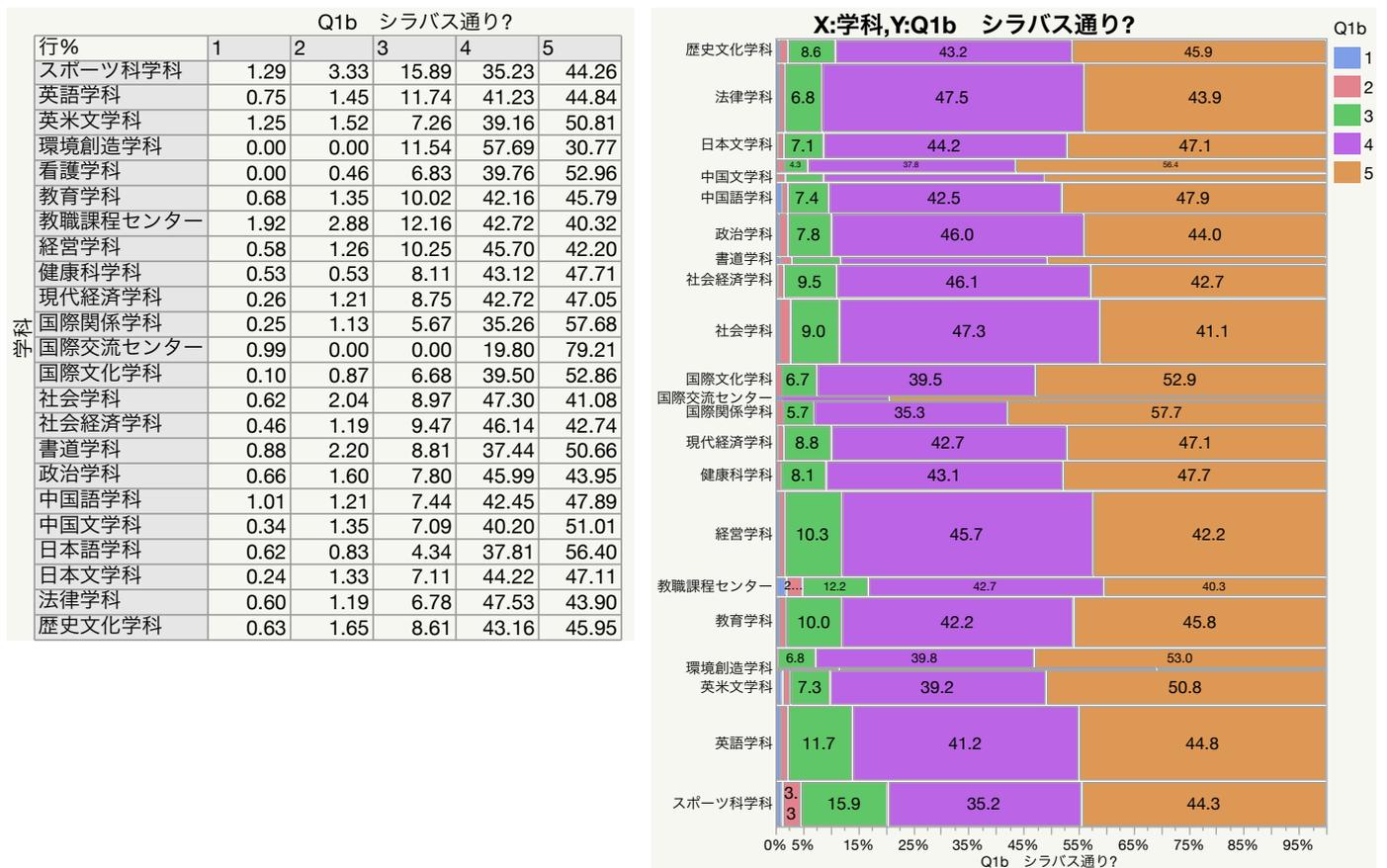
より詳細なデータとして 5～1 の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表 5 の通りである。5 が、強くそう思う、4 が「どちらかと言えばそう思う」なので、4 と 5 の合計で、88.8% の学生が「シラバスは記述どおりに行われた」と認識したことになる。

図表 5 Q1b 「シラバス通り？」に対する回答分布（全学）



部局／学科別回答分布を図表 6 に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは国際交流センター（79.21%）で、学科で最も大きかったのは国際関係学科（57.7%）であった。5 と 4（そう思う）を合わせた割合が最も大きかったのが国際交流センター（99.01%）で、学科では日本語学科（94.21%）であった。

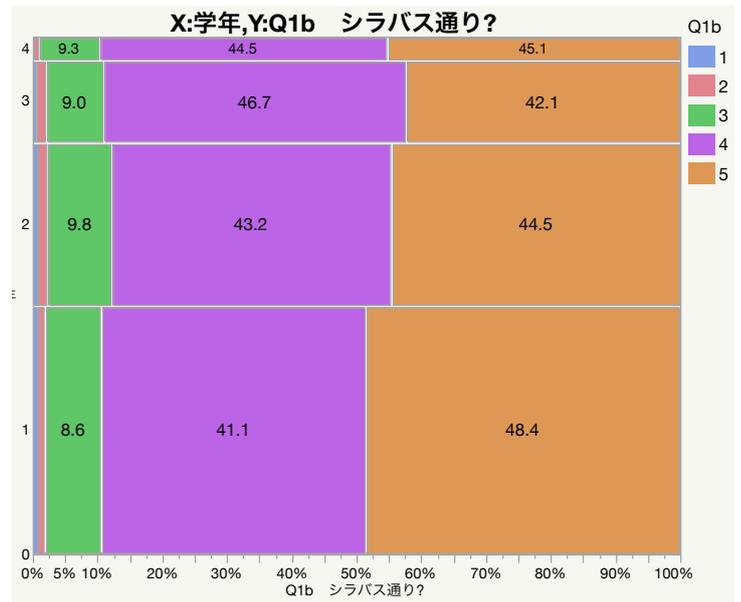
図表 6 Q1b 「シラバス通り？」に対する部局／学科別回答分布



学年別回答を図表 7 に示す。科目等履修生の数値が格段に高いほかは、1 年生の 5 の割合が他の学年より高い。

図表7 Q1b「シラバス通り？」に対する学年別回答分布

		Q1b シラバス通り?				
行%	1	2	3	4	5	
0	0.00	0.00	0.00	33.33	66.67	
1	0.67	1.35	8.56	41.06	48.37	
2	0.77	1.69	9.80	43.23	44.52	
3	0.60	1.51	9.01	46.73	42.15	
4	0.00	1.07	9.28	44.51	45.14	



#### 4.3.3 【Q2】 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切?]

この設問の回答は、5（とても難しい）～1（とても易しい）であり、真ん中が3（ちょうどよい）であるので、数値が高いほどよいわけではないことに再度留意したい。全学の平均は、3.57、標準偏差 0.79 であった。すなわち「ちょうどよい」と「やや難しい」の間に平均があるということであり、全体の傾向としては適切と言えるだろう。

部局／学科別および学年別の平均値を図表8に示す。部局／学科では平均値が最も3に近いのはスポーツ科学科（3.22）であった。学年別にはほとんど違いは見られないが、1年→2年→3年→4年と学年が進行するにしたがって「難易度がちょうどいい」と感じる傾向がわずかに強まっていると言える。

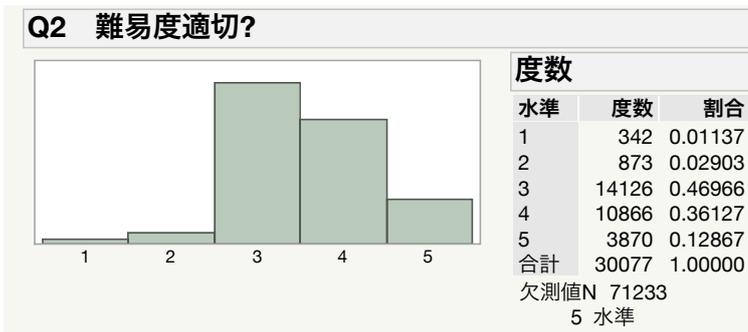
図表8 Q2「難易度適切？」の部局／学科別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	1711	3.22	0.89
英語学科	2952	3.53	0.79
英米文学科	1351	3.45	0.80
環境創造学科	68	4.07	0.74
看護学科	709	3.71	0.74
教育学科	2044	3.59	0.77
教職課程センター	830	3.49	0.76
経営学科	3348	3.58	0.77
健康科学科	1133	3.58	0.76
現代経済学科	1325	3.67	0.80
国際関係学科	910	3.60	0.77
国際交流センター	110	3.34	0.75
国際文化学科	1166	3.57	0.74
社会学科	2569	3.60	0.77
社会経済学科	1224	3.69	0.78
書道学科	279	3.37	0.80
政治学科	1579	3.67	0.81
中国語学科	1231	3.62	0.81
中国文学科	351	3.46	0.66
日本語学科	607	3.45	0.71
日本文学科	999	3.44	0.75
法律学科	2645	3.69	0.83
歴史文化学科	936	3.61	0.72

学年	数	平均	標準偏差
0	27	3.67	0.96
1	14554	3.58	0.81
2	9647	3.56	0.79
3	4636	3.54	0.76
4	1213	3.50	0.76

1～5の全学の分布は図表9の通りである。

図表9 Q2「難易度適切？」に対する全学の回答分布

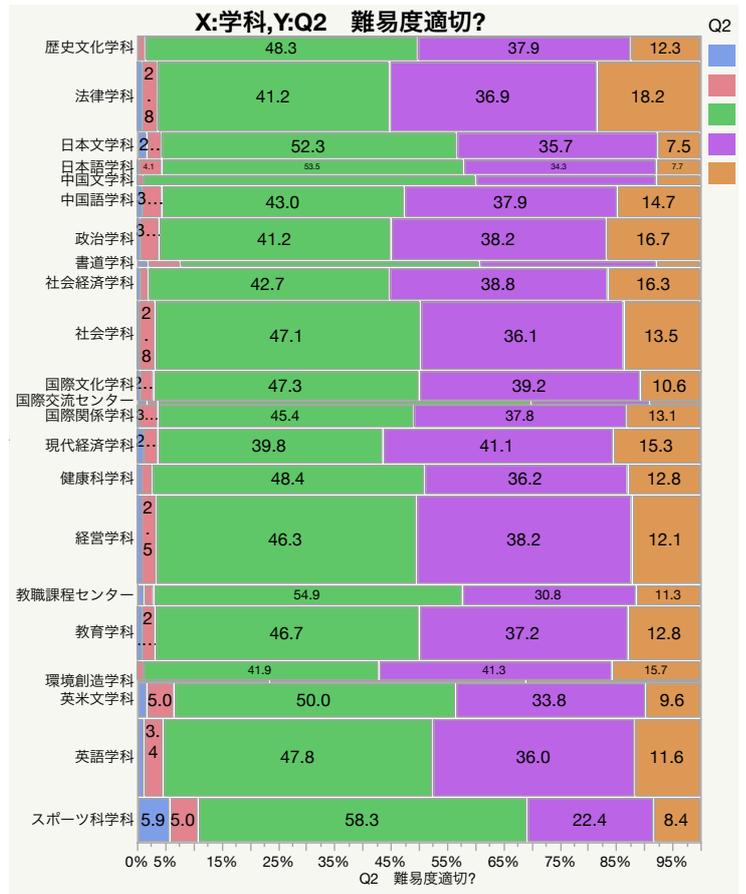


3「ちょうど良い」が約47%で、4「やや難しかった」が約36%、5「とても難しかった」が約13%である。1「とても易しい」と2「すこし易しかった」は合わせて約4%である。つまり「ちょうど良い」と思っている学生と、「難しい」と思っている学生が約半々であり、「易しい」と思っている学生はごく少数しかいない。しかし割合は少ないものの、「易しい」と感じている学生が存在していることには留意せねばならないだろう。

部局／学科別の分布を図表10に示す。3の割合が最も大きいのは国際交流センター（66.36%）で、次いでスポーツ科学科（58.27%）であった。ただしスポーツ科学科は1（とても易しい）と回答した割合（5.90%）も最も大きかった。

図表 10 Q2「難易度適切？」に対する部局／学科別回答分布

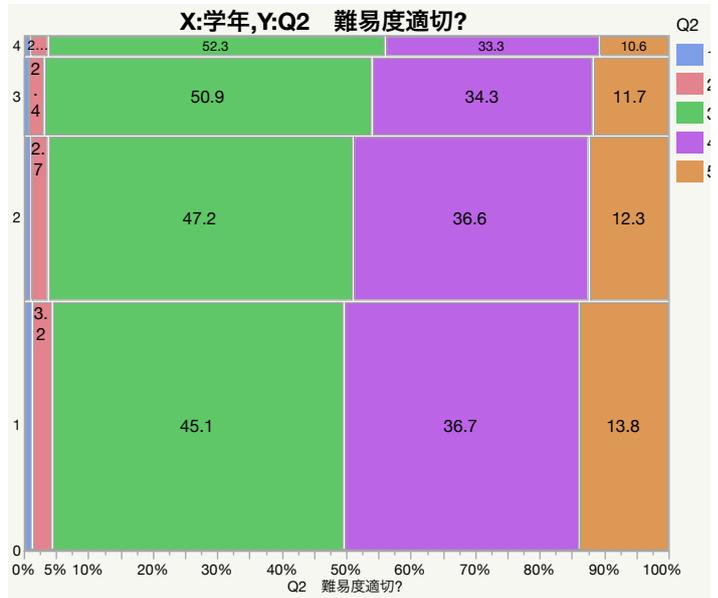
Q2 難易度適切?					
行%	1	2	3	4	5
スポーツ科学科	5.90	5.03	58.27	22.44	8.36
英語学科	1.22	3.42	47.76	35.98	11.62
英米文学科	1.70	4.96	49.96	33.75	9.62
環境創造学科	0.00	0.00	23.53	45.59	30.88
看護学科	0.14	0.99	41.89	41.33	15.66
教育学科	0.78	2.50	46.72	37.18	12.82
教職課程センター	1.20	1.69	54.94	30.84	11.33
経営学科	0.90	2.54	46.30	38.17	12.10
健康科学科	0.79	1.85	48.37	36.19	12.80
現代経済学科	0.98	2.72	39.85	41.13	15.32
国際関係学科	0.44	3.30	45.38	37.80	13.08
国際交流センター	1.82	1.82	66.36	20.91	9.09
国際文化学科	0.60	2.32	47.26	39.19	10.63
社会学科	0.43	2.80	47.14	36.08	13.55
社会経済学科	0.49	1.63	42.73	38.81	16.34
書道学科	2.15	5.73	53.05	31.18	7.89
政治学科	0.57	3.36	41.17	38.19	16.72
中国語学科	0.89	3.57	42.97	37.86	14.70
中国文学科	0.28	0.85	58.97	32.19	7.69
日本語学科	0.33	4.12	53.54	34.27	7.74
日本文学科	1.80	2.70	52.25	35.74	7.51
法律学科	0.91	2.80	41.21	36.90	18.19
歴史文化学科	0.21	1.28	48.29	37.93	12.29



学年別には、図表 11 の通りである。学年が進行するにつれて「適切である」と認識する割合が高くなる傾向が見える。5 (とても難しい) の回答は1年生 (13.76%)、2年生 (12.34%) 3年生 (11.67%)、4年生 (10.63%) と徐々に少なくなり、3 (ちょうどよい) と認識する割合が1年生(45.11%)、2年生(47.19%)、3年生(50.88%)、4年生(52.27%) と大きくなっている。

図表 11 Q2「難易度適切？」に対する学年別回答分布

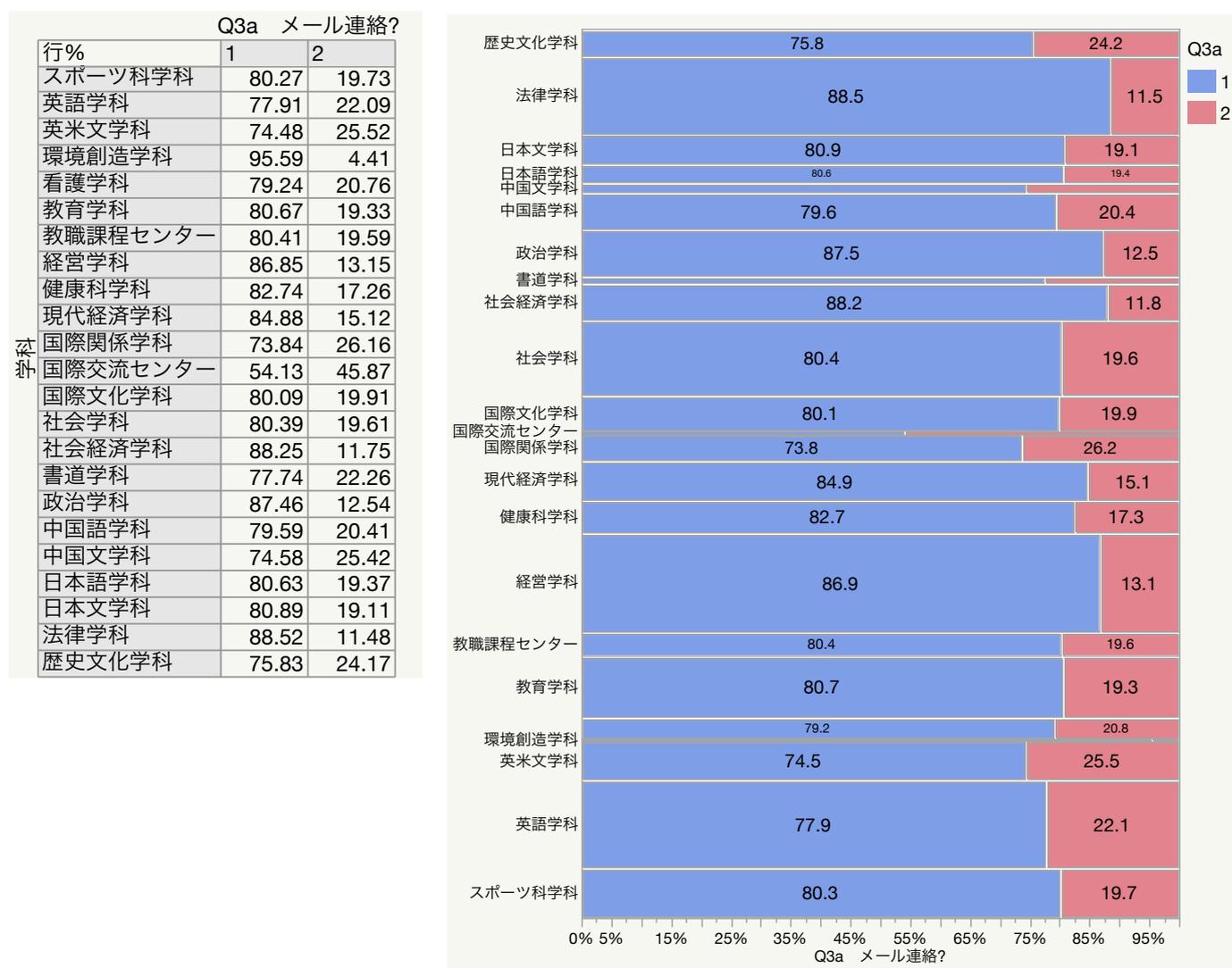
Q2 難易度適切?					
行%	1	2	3	4	5
0	0.00	3.70	55.56	11.11	29.63
1	1.24	3.23	45.11	36.66	13.76
2	1.19	2.67	47.19	36.61	12.34
3	0.69	2.42	50.88	34.34	11.67
4	1.15	2.64	52.27	33.31	10.63



#### 4.3.4 【Q3a】 あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。[メール連絡?]

全学では、2（したことがある）と回答したのは18.24%であった。学科別の内訳を図表12に示す。

図表12 Q3a 「メール連絡？」の部局／学科別回答

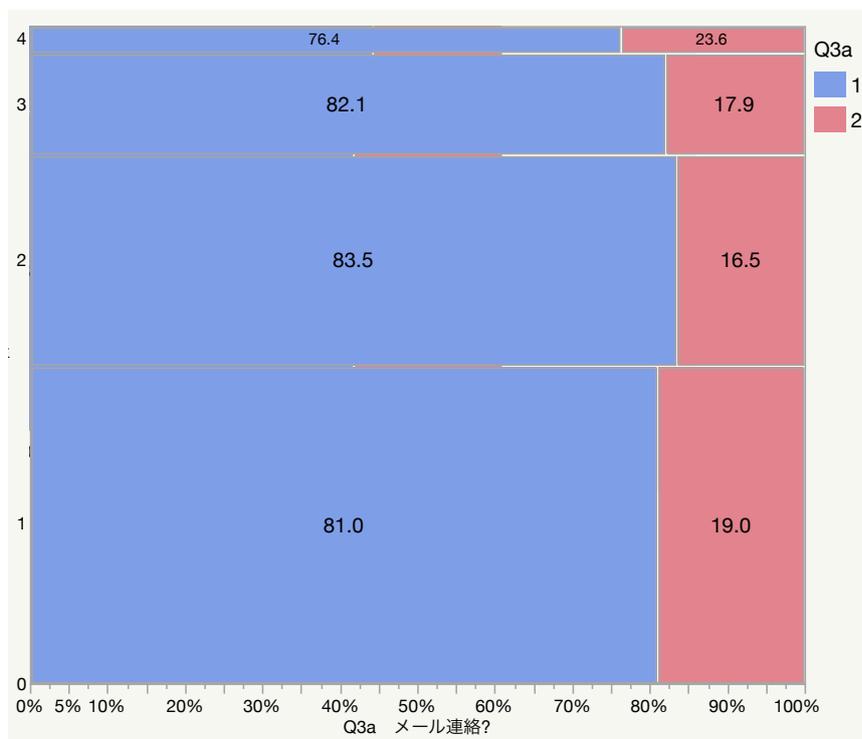


部局／学科のなかで、メールで連絡したことがある割合がもっとも高いのは国際交流センター（45.87%）であった。数値は部局／学科によってかなり異なっているのが観察できる。

学年別の回答を図表13に示す。4年生が1～3年生よりもやや高く、約4人に一人が連絡をしたことがある。これと別に、科目等履修生は格段に高く、約78%がメールで連絡をとったことが分かる。

図表 13 Q3a「メール連絡？」の学年別回答

Q3a メール連絡?		
行%	1	2
0	22.22	77.78
1	81.03	18.97
2	83.55	16.45
3	82.07	17.93
4	76.35	23.65



#### 4.3.5 【Q3b】 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速?]

この設問には Q3a で「メールで連絡をしたことがある」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 3.99 で標準偏差は 1.04 であった。ほぼ 4（そう思う）という平均値なので、概ね「迅速である」と認識されていたと言える。

部局／学科別および学年別の数値を図表 14 に示す。最も数値が高い部局は国際交流センター(4.58) で、最も数値が高い学科は中国文学科 (4.37) であった。学年別に見てみると、数の少ない科目等履修生が突出して高くなっている以外は、学年による特段の違いはないようである。

図表 14 Q3b「対応迅速？」の部局／学科別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

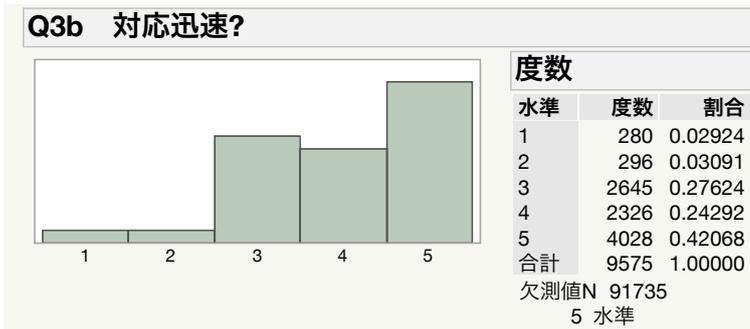
学科	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	635	4.07	1.03
英語学科	1082	3.97	1.07
英米文学科	490	4.10	1.11
環境創造学科	13	3.23	0.93
看護学科	232	4.20	0.99
教育学科	619	4.04	1.06
教職課程センター	235	4.11	1.08
経営学科	987	3.79	0.98
健康科学科	328	4.06	1.01
現代経済学科	390	3.97	0.98
国際関係学科	393	4.18	1.01
国際交流センター	65	4.58	0.75
国際文化学科	423	3.95	1.03
社会学科	819	3.97	1.07
社会経済学科	331	3.92	1.01
書道学科	82	4.10	1.04
政治学科	452	3.79	1.04
中国語学科	406	3.98	1.14
中国文学科	126	4.37	0.90
日本語学科	202	4.22	0.89
日本文学科	321	4.07	1.01
法律学科	650	3.82	1.03
歴史文化学科	294	4.22	0.96

学年	数	平均	標準偏差
0	22	4.64	0.95
1	4609	4.02	1.04
2	2879	3.95	1.06
3	1545	3.98	1.02
4	520	4.04	1.02

より詳細な状況を示すデータとして5～1の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表 15 の通りである。上に述べたように平均値は3.99とほとんど4に近かったが、最頻値は5（とてもそう思う）で、約42%の学生がメールに対する対応は迅速であったと強く認識した、ということで良いニュースであると言える。

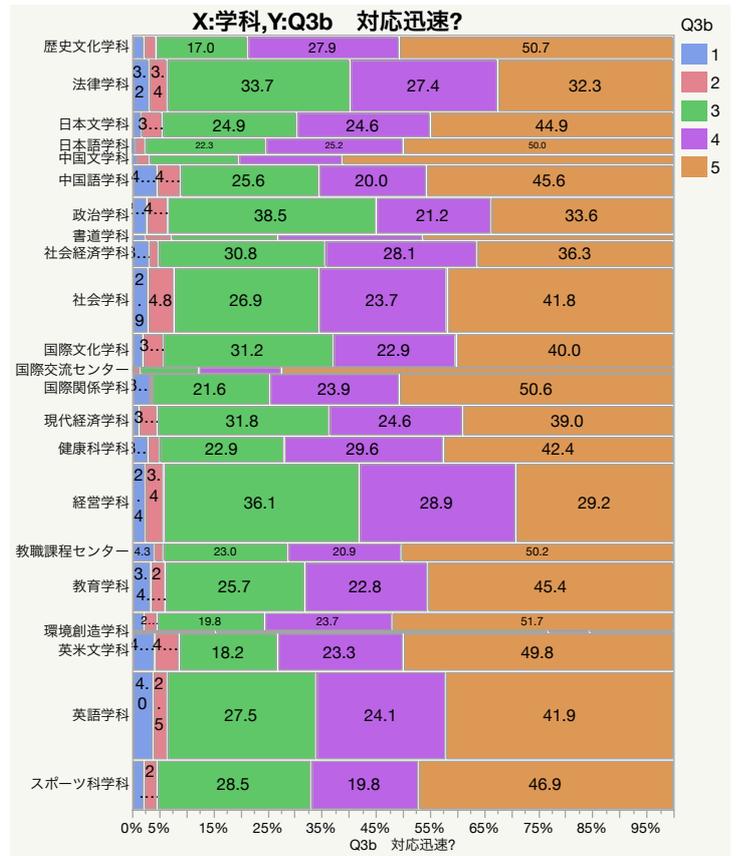
図表 15 Q3b「対応迅速？」に対する全学の回答分布



部局／学科別回答分布を図表 16 に示す。部局で平均値が最も高かった国際交流センターは72.31%が5（強くそう思う）と回答し、中国文学科は61.11%が5と回答している。逆に1（まったくそう思わない）という回答も数パーセントとは言え、たしかに存在している学科が多いことは看過すべきではないだろう。

図表 16 Q3b「対応迅速？」に対する部局／学科別回答分布

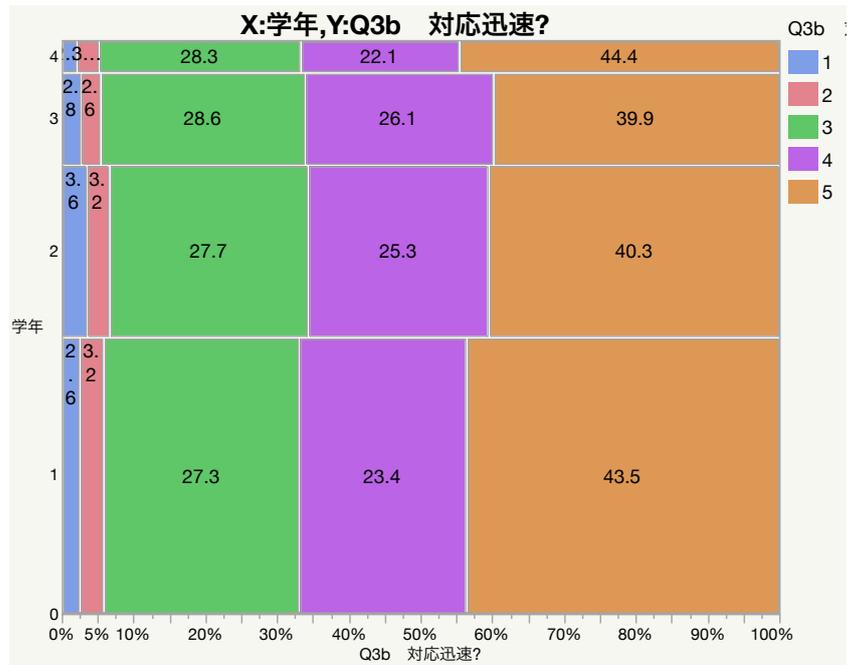
Q3b 対応迅速?					
行%	1	2	3	4	5
スポーツ科学科	2.36	2.36	28.50	19.84	46.93
英語学科	3.97	2.50	27.54	24.12	41.87
英米文学科	4.08	4.69	18.16	23.27	49.80
環境創造学科	0.00	15.38	61.54	7.69	15.38
看護学科	2.16	2.59	19.83	23.71	51.72
教育学科	3.39	2.75	25.69	22.78	45.40
教職課程センター	4.26	1.70	22.98	20.85	50.21
経営学科	2.43	3.44	36.07	28.88	29.18
健康科学科	3.05	2.13	22.87	29.57	42.38
現代経済学科	1.28	3.33	31.79	24.62	38.97
国際関係学科	3.56	0.25	21.63	23.92	50.64
国際交流センター	0.00	1.54	10.77	15.38	72.31
国際文化学科	2.13	3.78	31.21	22.93	39.95
社会学科	2.93	4.76	26.86	23.69	41.76
社会経済学科	3.32	1.51	30.82	28.10	36.25
書道学科	2.44	4.88	19.51	26.83	46.34
政治学科	2.65	3.98	38.50	21.24	33.63
中国語学科	4.68	4.19	25.62	19.95	45.57
中国文学科	0.79	2.38	16.67	19.05	61.11
日本語学科	0.50	1.98	22.28	25.25	50.00
日本文学科	1.87	3.74	24.92	24.61	44.86
法律学科	3.23	3.38	33.69	27.38	32.31
歴史文化学科	2.38	2.04	17.01	27.89	50.68



学年別の分布を図表 17 に示す。分布からは平均値から読み取れなかった情報は特段読み取れない。科目等履修生の 5 と回答した割合が 81.82% と突出して高いほかは、学年ごとの違いはそれほど大きくはない。

図表 17 Q3b「対応迅速？」に対する学年別回答分布

Q3b 対応迅速?					
行%	1	2	3	4	5
0	4.55	0.00	4.55	9.09	81.82
1	2.65	3.21	27.29	23.39	43.46
2	3.58	3.20	27.68	25.25	40.29
3	2.78	2.59	28.61	26.15	39.87
4	2.12	3.08	28.27	22.12	44.42

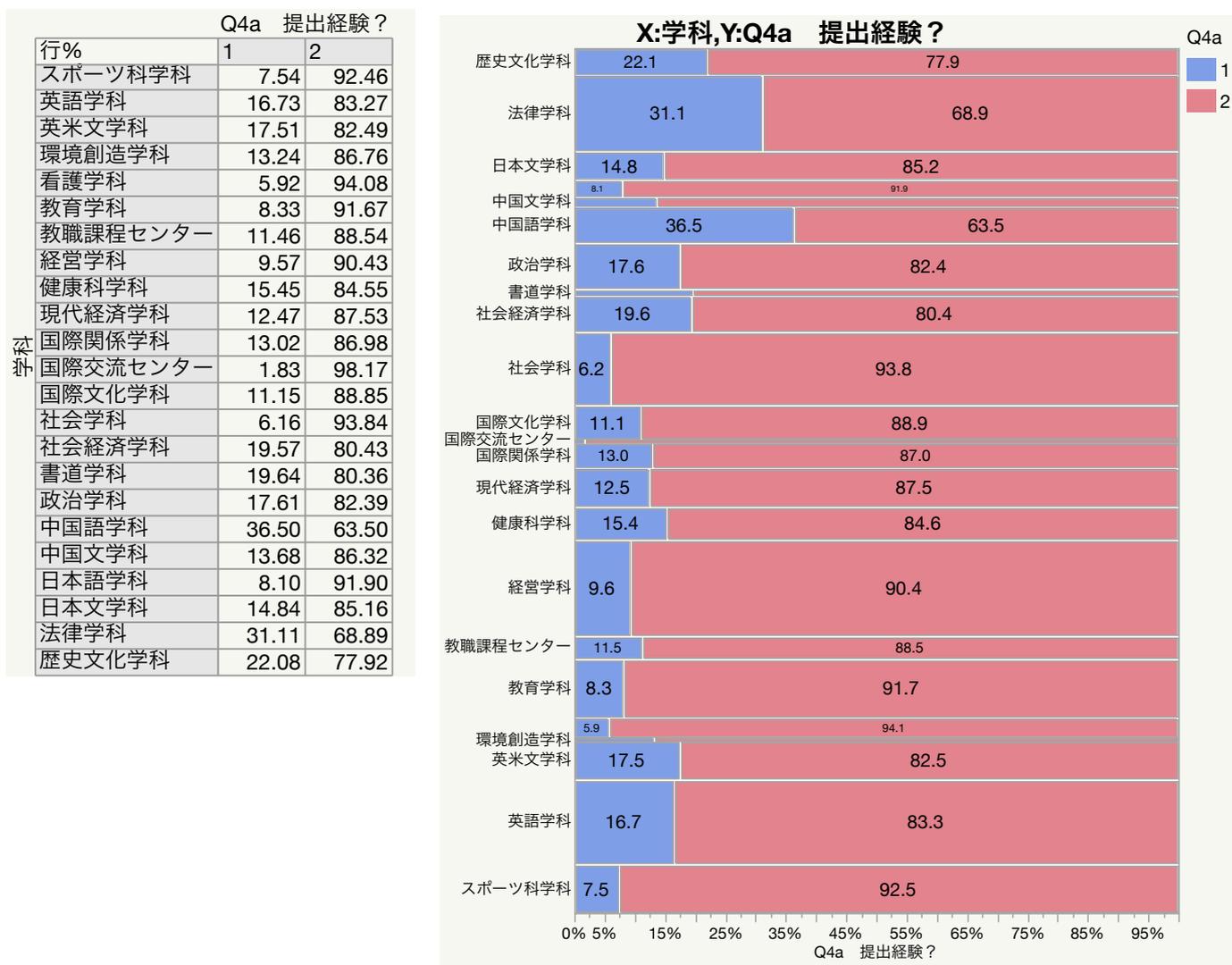


#### 4.3.6 【Q4a】この授業では提出物を出しましたか。[提出経験?]

全体では、1（出していない）が、15.1%、2（出した）が84.9%である。

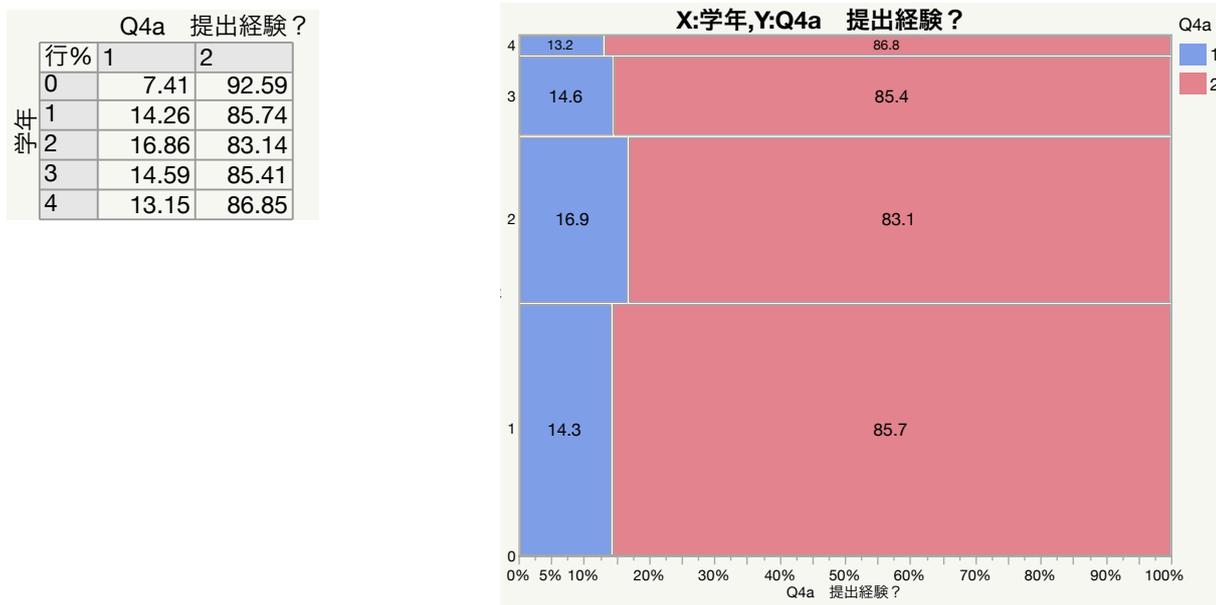
学科別の内訳を図表 18 に示す。2（出した）という回答が最も多い部局は国際交流センター（98.17%）で、最も多い学科は看護学科（94.08%）であった。提出物を課す度合いは学科によってかなり異なるようである。

図表 18 Q4a「提出経験？」の部局／学科別回答



学年ごとの分布の状況を図表 19 に示す。科目等履修生が突出して高いことを除くと、学年ごとの差はそれほどないようである。

図表 19 Q4a「提出経験？」の学年別回答



#### 4.3.7 【Q4b】 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧？]

この設問は Q4a で「提出したことがある」と回答した学生のみ回答してのものである。

全学の平均は 3.97 標準偏差は 0.98 なので概ね「丁寧である」と認識されていたといえる。部局／学科別および学年別の平均値を図表 20 に示す。

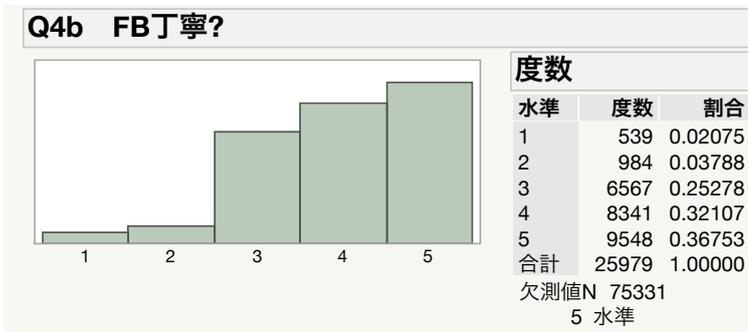
図表 20 Q4b「FB 丁寧？」の部局／学科別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科	数	平均	標準偏差	学年	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	1601	3.97	0.95	0	25	4.56	0.71
英語学科	2516	4.01	1.00	1	12674	4.03	0.94
英米文学科	1137	4.03	1.01	2	8162	3.90	1.01
環境創造学科	61	2.67	1.17	3	4034	3.95	1.02
看護学科	673	4.03	0.95	4	1084	4.00	0.96
教育学科	1891	3.92	1.02				
教職課程センター	746	3.99	1.11				
経営学科	3057	3.85	0.96				
健康科学科	975	4.06	0.89				
現代経済学科	1182	3.97	0.98				
国際関係学科	804	4.12	1.02				
国際交流センター	108	4.70	0.53				
国際文化学科	1057	3.97	0.96				
社会学科	2422	4.05	0.90				
社会経済学科	1009	3.89	1.00				
書道学科	232	4.20	1.03				
政治学科	1327	3.89	1.01				
中国語学科	820	4.05	1.01				
中国文学科	306	4.46	0.85				
日本語学科	564	4.17	0.86				
日本文学科	856	3.88	1.00				
法律学科	1890	3.91	0.93				
歴史文化学科	745	3.94	0.96				

部局で最も数値が高いのが国際交流センター(4.70)であり、学科で最も高いのが中国文学科(4.46)であった。学年による違いはほとんどなく、やはり科目等履修生の値が高い(4.67)。

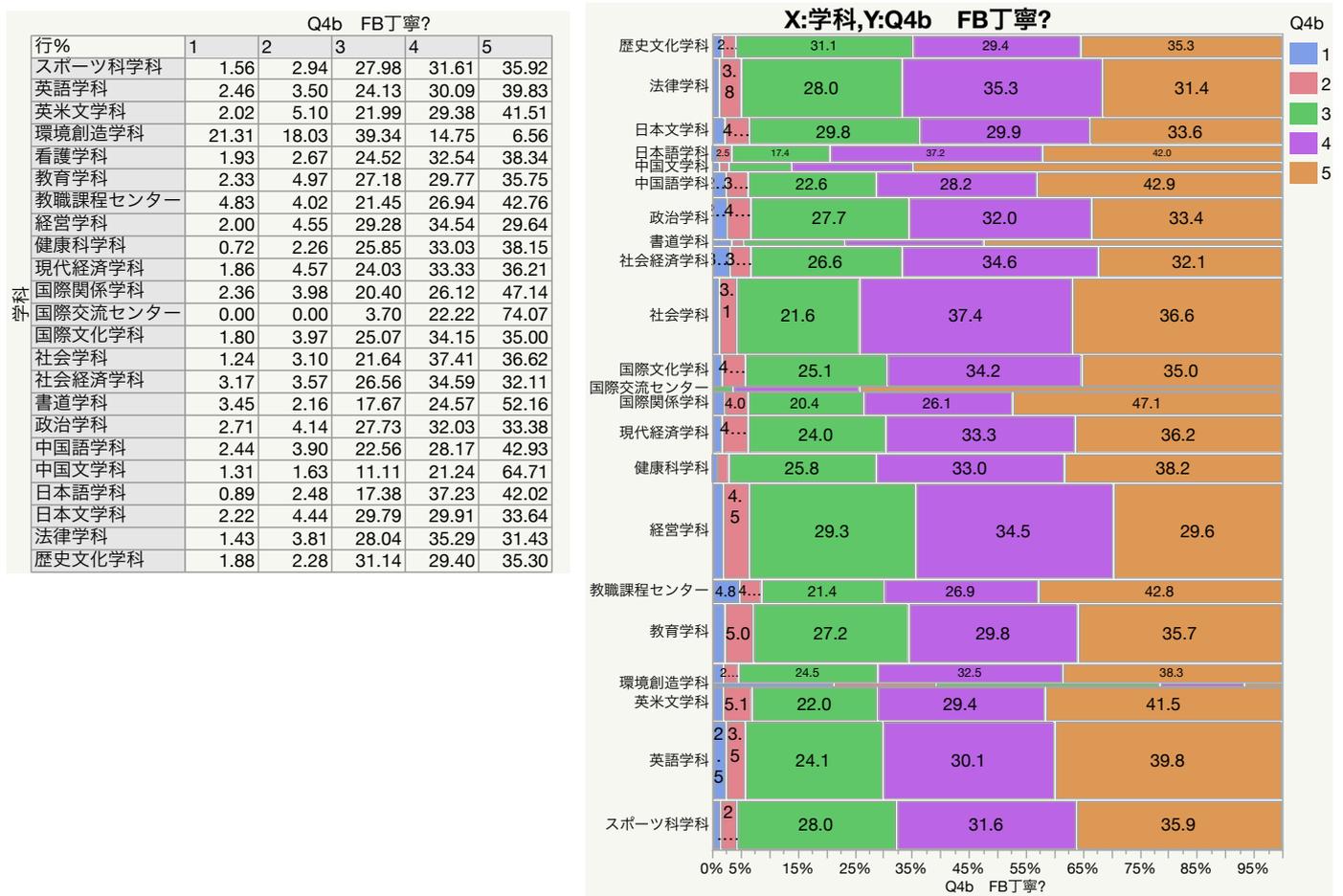
より詳細な様子を知るために水準別の分布を見てゆく。まず全学の分布を図表 21 に示す。上述のように平均値としては 3.97 だが、度数が最も高いのが 5 (強くそう思う) であることが見て取れる。これは望ましいことである。しかし合計で 5.7% の学生が 1 (まったくそう思わない) あるいは 2 (どちらかと言えばそう思わない) と回答していることは無視できない。理想的には 1 と 2 はゼロであるべきである。

図表 21 Q4b「FB 丁寧？」に対する全学の回答分布



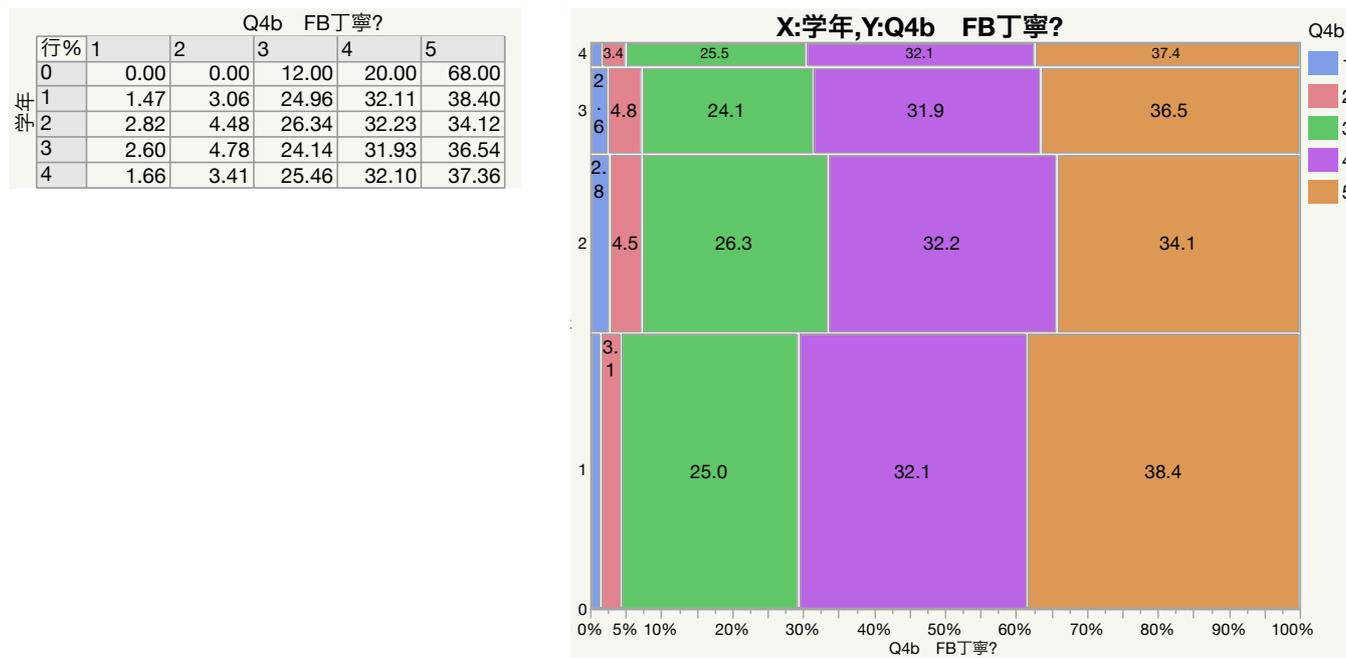
部局／学科ごとの分布を図表 22 に示す。5 (強くそう思う) の割合は、学科によってかなり異なっているのが見て取れる。国際交流センターは 5 と回答したのが 74.07% であり、中国文学科は 64.71% であった。

図表 22 Q4b「FB 丁寧？」に対する部局／学科別の回答分布



学年別の状況を図表 23 に示す。やはり科目等履修生の回答が格段に高い以外は、学年別の明確な傾向は読み取れない。2 年生がやや低いように見えるが、特段の意味があるかは不明である。

図表 23 Q4b 「FB 丁寧？」に対する学年別の回答分布



#### 4.3.8 【Q5】 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲?]

この設問に対する全学の平均は 4.18 で、標準偏差は 0.81 であった。4 「どちらかと言えばそう思う」と 5 「強くそう思う」の間であり、学生は平均的には意欲を持って授業に取り組んでいたと言えるだろう。部局／学科別および学年別の平均値を図表 24 に示す。

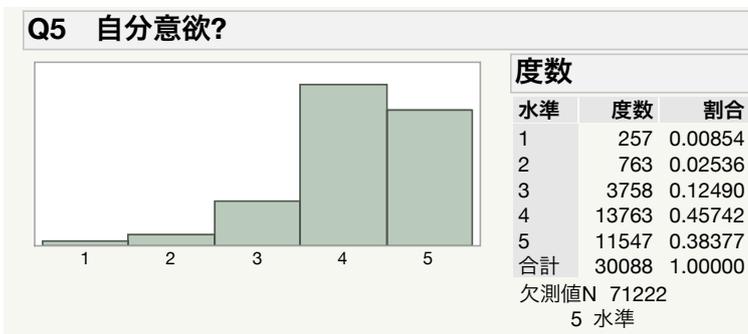
図表 24 Q5「自分意欲？」の部局／学科別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科	数	平均	標準偏差	学年	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	1716	4.45	0.73	0	26	4.62	0.64
英語学科	2958	4.20	0.85	1	14581	4.24	0.79
英米文学科	1353	4.27	0.78	2	9633	4.14	0.81
環境創造学科	68	3.79	0.76	3	4638	4.11	0.83
看護学科	712	4.26	0.72	4	1210	4.06	0.81
教育学科	2048	4.23	0.80				
教職課程センター	832	4.12	0.85				
経営学科	3348	4.08	0.81				
健康科学科	1137	4.24	0.76				
現代経済学科	1321	4.10	0.84				
国際関係学科	911	4.28	0.77				
国際交流センター	110	4.49	0.71				
国際文化学科	1167	4.23	0.76				
社会学科	2561	4.16	0.79				
社会経済学科	1224	3.99	0.88				
書道学科	281	4.37	0.76				
政治学科	1574	4.06	0.84				
中国語学科	1228	4.33	0.74				
中国文学科	354	4.28	0.73				
日本語学科	606	4.21	0.73				
日本文学科	998	4.14	0.82				
法律学科	2647	4.06	0.83				
歴史文化学科	934	4.27	0.77				

部局で最も値が高かったのは国際交流センター(4.49)で、学科で最も値が高かったのは、スポーツ科学科(4.45)であった。学年別で最も値が高かったのは、科目等履修生(4.62)を除くと1年生(4.62)で、1年→2年→3年→4年と学年を追うごとに、残念ながら数値が下がる傾向が見える。

水準別の分布を見てゆく。全学の分布は図表 25 のとおりである。最頻値は4である。

図表 25 Q5「自分意欲？」に対する全学の回答分布

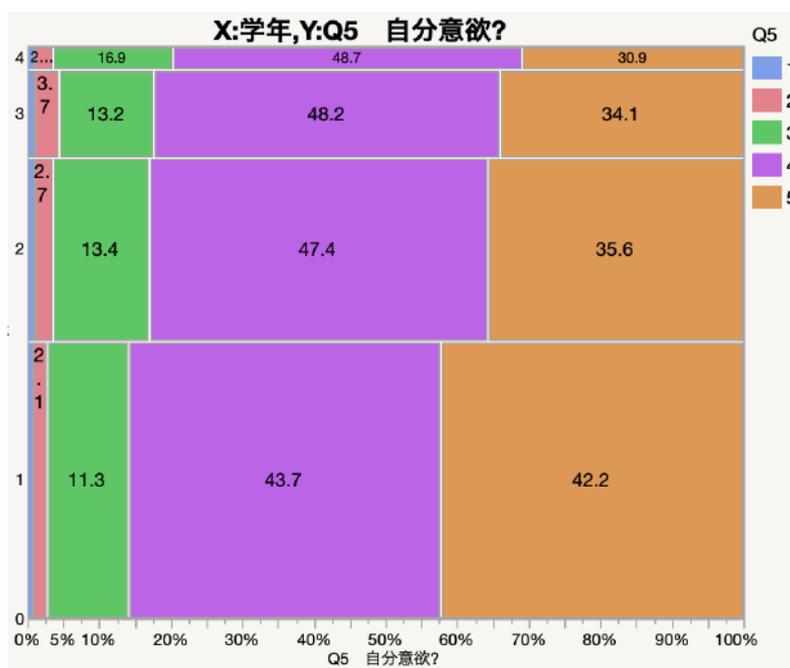


学科別には図表 26 のように分布していた。5(強くそう思う)の割合が最も大きかった部局は国際交流センター(58.18%)で、学科で最も大きかったのはスポーツ科学科(56.59%)である。5の割合でも、4と5を合計した割合でも、部局／学科による違いが顕著である。



図表 27 Q5「自分意欲？」に対する学年別の回答分布

		Q5 自分意欲?				
行%	1	2	3	4	5	
0	0.00	0.00	7.69	23.08	69.23	
1	0.81	2.08	11.30	43.67	42.15	
2	0.92	2.67	13.44	47.38	35.59	
3	0.86	3.67	13.15	48.23	34.09	
4	0.83	2.73	16.86	48.68	30.91	



#### 4.3.9 【Q6】 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意?]

この設問に対する回答の全学の平均は 4.39 で標準偏差は 0.78 であった。「どちらかと言えばそう思う」と「強くそう思う」のほぼ中間ということなので、まずまず満足すべき数値であろう。部局／学科別および学年別の平均値を図表 28 に示す。

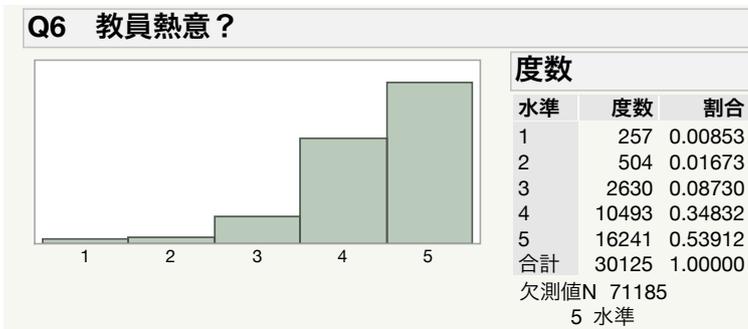
図表 28 Q6「教員熱意？」の部局／学科別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科	数	平均	標準偏差	学年	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	1716	4.55	0.71	0	27	4.70	0.47
英語学科	2960	4.38	0.81	1	14592	4.43	0.77
英米文学科	1354	4.48	0.78	2	9650	4.35	0.81
環境創造学科	68	3.62	1.01	3	4642	4.37	0.78
看護学科	711	4.44	0.71	4	1214	4.38	0.77
教育学科	2050	4.41	0.79				
教職課程センター	832	4.39	0.86				
経営学科	3352	4.25	0.82				
健康科学科	1138	4.43	0.72				
現代経済学科	1324	4.29	0.77				
国際関係学科	912	4.57	0.73				
国際交流センター	110	4.72	0.56				
国際文化学科	1167	4.41	0.74				
社会学科	2569	4.48	0.68				
社会経済学科	1228	4.25	0.88				
書道学科	281	4.51	0.68				
政治学科	1576	4.31	0.81				
中国語学科	1232	4.50	0.74				
中国文学科	354	4.61	0.66				
日本語学科	607	4.46	0.71				
日本文学科	997	4.33	0.81				
法律学科	2648	4.31	0.84				
歴史文化学科	939	4.46	0.70				

環境創造学科のみ 4.00 を下回ったが、ほかの部局／学科には大きな差はないように見える。部局で平均値が最も高かったのは国際交流センター(4.72)で、学科では中国文学科(4.61)の値が最も高い。学年別には科目等履修生の値が高いのを除くと、1年生の値が、2～4年生の値よりもやや高い。

水準別の回答分布を検討する。全学の回答分布を図表 29 に示す。最頻値は5「強くそう思う」であり、53.9%を占める。5と4の合計で約89%になり、「教員は熱意を持っている」という認識が圧倒的に多い。

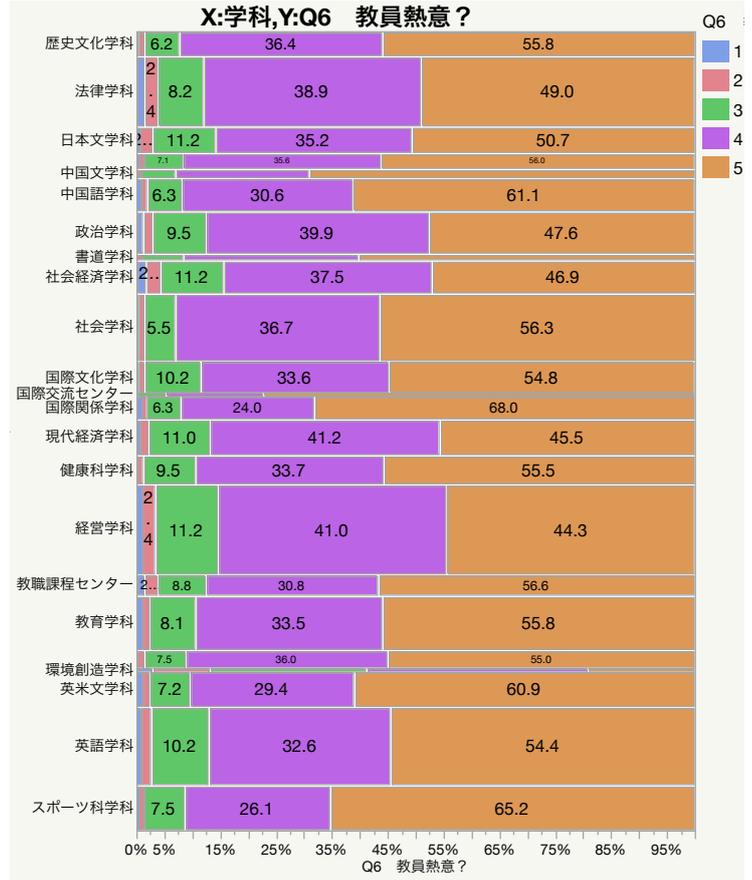
図表 29 Q6「教員熱意？」に対する全学の回答分布



部局／学科別の分布を図表 30 に示す。平均値にはそれほど差がなくとも、5「強くそう思う」の回答割合には学科によってかなりの違いが見られる。5の割合が最も大きい部局は国際交流センター(77.27%)で、学科では中国文学科(68.93%)が最も大きかった。

図表 30 設問 6「教員熱意？」に対する部局／学科別の回答分布

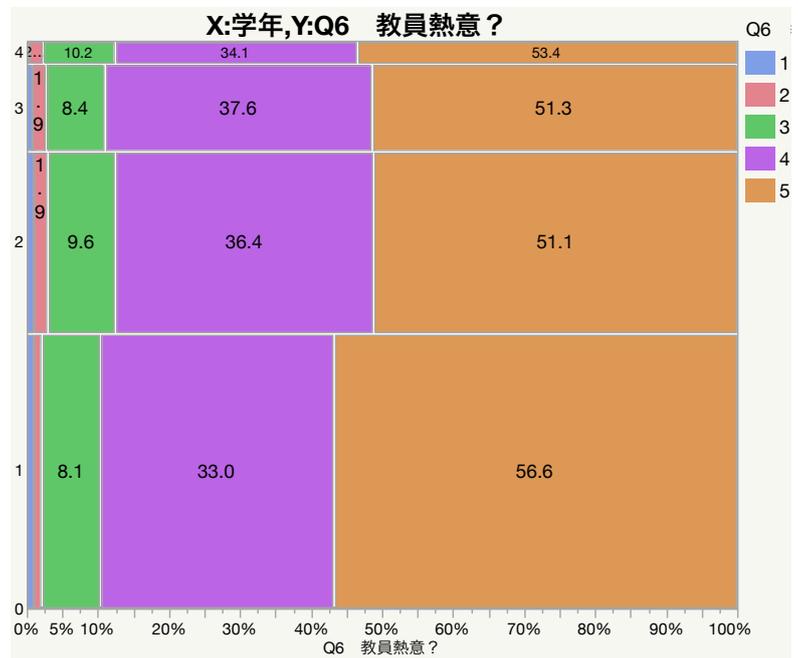
		Q6 教員熱意？				
行%		1	2	3	4	5
スポーツ科		0.52	0.70	7.46	26.11	65.21
英語学科		0.88	1.96	10.20	32.57	54.39
英米文学科		0.96	1.55	7.16	29.39	60.93
環境創造学科		2.94	10.29	27.94	39.71	19.12
看護学科		0.14	1.41	7.45	36.01	54.99
教育学科		1.07	1.51	8.15	33.51	55.76
教職課程センター		1.56	2.28	8.77	30.77	56.61
経営学科		0.98	2.45	11.25	40.99	44.33
健康科学科		0.18	1.05	9.49	33.74	55.54
現代経済学科		0.60	1.66	10.95	41.24	45.54
国際関係学科		0.99	0.77	6.25	24.01	67.98
国際交流センター		0.00	0.00	5.45	17.27	77.27
国際文化学科		0.26	1.20	10.20	33.59	54.76
社会学科		0.35	1.09	5.53	36.75	56.29
社会経済学科		1.71	2.69	11.16	37.54	46.91
書道学科		0.00	1.07	7.47	31.32	60.14
政治学科		1.27	1.78	9.45	39.91	47.59
中国語学科		0.89	1.06	6.33	30.60	61.12
中国文学科		0.28	0.56	6.21	24.01	68.93
日本語学科		0.66	0.66	7.08	35.58	56.01
日本文学科		0.70	2.21	11.23	35.21	50.65
法律学科		1.51	2.42	8.19	38.90	48.98
歴史文化学科		0.32	1.28	6.18	36.42	55.80



学年別の状況を図表 31 に示す。5「強くそう思う」の割当には、科目等履修生を除いて大差ないが、1年生が最も大きい。

図表 31 Q6「教員熱意？」に対する学年別回答分布

		Q6 教員熱意？				
行%		1	2	3	4	5
0		0.00	0.00	0.00	29.63	70.37
1		0.84	1.41	8.13	33.01	56.61
2		1.01	1.90	9.63	36.35	51.12
3		0.75	1.94	8.42	37.61	51.27
4		0.25	2.06	10.21	34.10	53.38

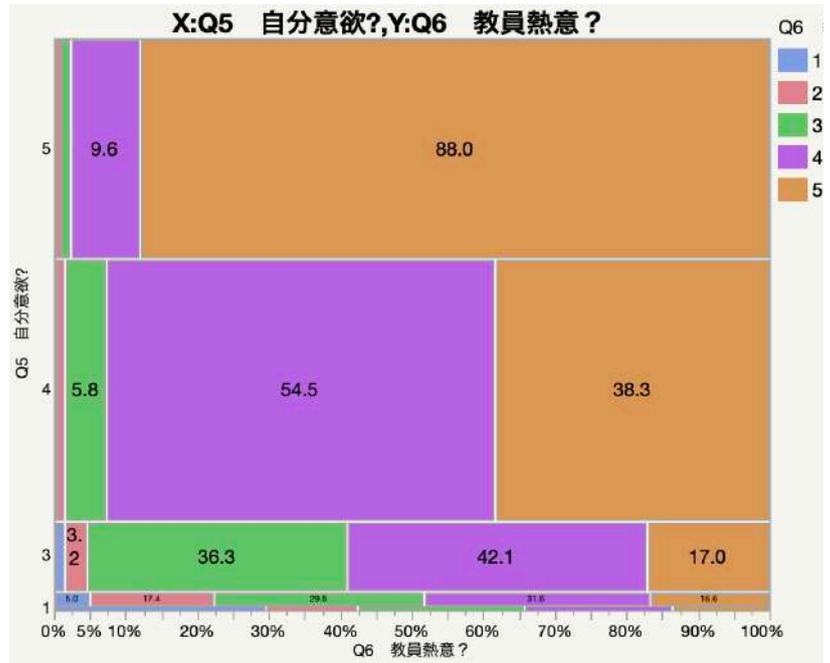


#### 4.3.10 学生の意欲と教員に熱意を感じる度合いの関係

Q5「自分意欲?」とQ6「教員熱意?」の全学のクロス集計をした結果を、図表32に示す。

図表32 「自分意欲?」の関数としての「教員熱意?」

		Q6 教員熱意?				
行%		1	2	3	4	5
Q5 自分意欲?	1	29.57	12.84	23.35	20.62	13.62
	2	5.00	17.37	29.47	31.58	16.58
	3	1.49	3.17	36.25	42.13	16.96
	4	0.37	1.08	5.83	54.47	38.25
	5	0.30	0.62	1.52	9.60	87.96



学生自身が自己申告するその授業に対する意欲の度合いと、その学生が教員に感じる熱意の度合いは、あきらかに強い関係が見られた(Pearson  $\chi^2 = 16766.44, p < .0001$ )。すなわち、自分は意欲を持っている、熱意を持っていると感じる学生は、教員からも熱意を感じる傾向があり、そうでない学生は教員からも熱意を感じる傾向が少ない。回答を連続尺度変数扱いしてピアソン相関係数を求めると  $r = .5565$  である。自分が強い熱意を持っていると回答した学生(5)の実に88%が教員にも熱意を強く感じると回答したが、そのパーセンテージは、(4)と回答した学生では38%、(3)と回答した学生では17%と、劇的に変化している。

ただし注意が必要なのは、これは相関関係であり、因果関係はどちらの方向に働いているかは不明であるという点である。「自分が意欲を持っている学生ほど、教員の熱意を感じやすい」のか、「教員の熱意を感じる学生ほど、自分でも意欲を持ちやすい」のか、あるいはその両方なのか、いずれも可能性はあるだろう。

#### 4.3.11 【Q7】 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長感覚?]

この設問に対する全学の平均値は4.28で標準偏差は0.80であった。全体の値としては悪くないと思われる。平均値を部局/学科別および学年別に整理して図表33として示す。

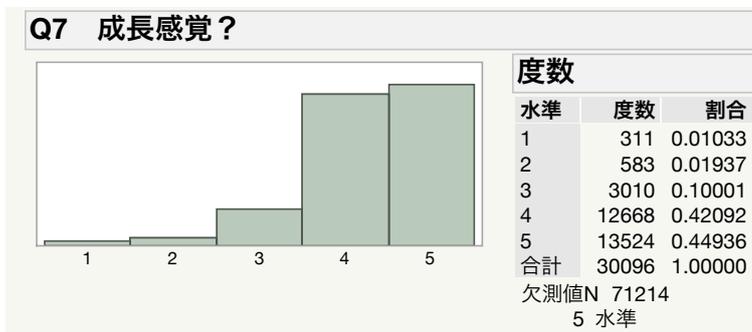
図表 33 Q7「成長感覚？」の部局／学科別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科	数	平均	標準偏差	学年	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	1716	4.35	0.78	0	27	4.81	0.40
英語学科	2962	4.24	0.86	1	14572	4.32	0.79
英米文学科	1354	4.25	0.83	2	9648	4.23	0.82
環境創造学科	68	3.82	1.01	3	4638	4.25	0.79
看護学科	712	4.37	0.69	4	1211	4.27	0.79
教育学科	2039	4.34	0.80				
教職課程センター	831	4.32	0.82				
経営学科	3345	4.20	0.80				
健康科学科	1138	4.37	0.71				
現代経済学科	1324	4.21	0.81				
国際関係学科	912	4.40	0.78				
国際交流センター	110	4.57	0.70				
国際文化学科	1165	4.38	0.72				
社会学科	2567	4.29	0.76				
社会経済学科	1225	4.17	0.85				
書道学科	280	4.39	0.74				
政治学科	1575	4.19	0.81				
中国語学科	1229	4.43	0.77				
中国文学科	353	4.52	0.67				
日本語学科	608	4.36	0.73				
日本文学科	998	4.25	0.79				
法律学科	2646	4.15	0.86				
歴史文化学科	939	4.38	0.73				

部局別で最も値が高いのは国際交流センター(4.57)であり、学科で最も高いのは中国文学科(4.52)であった。学年別には科目等履修生が突出して高い他、1年生の値が他の学年よりもやや高い傾向が見られる。

水準別の全学の分布を図表 34 に示す。

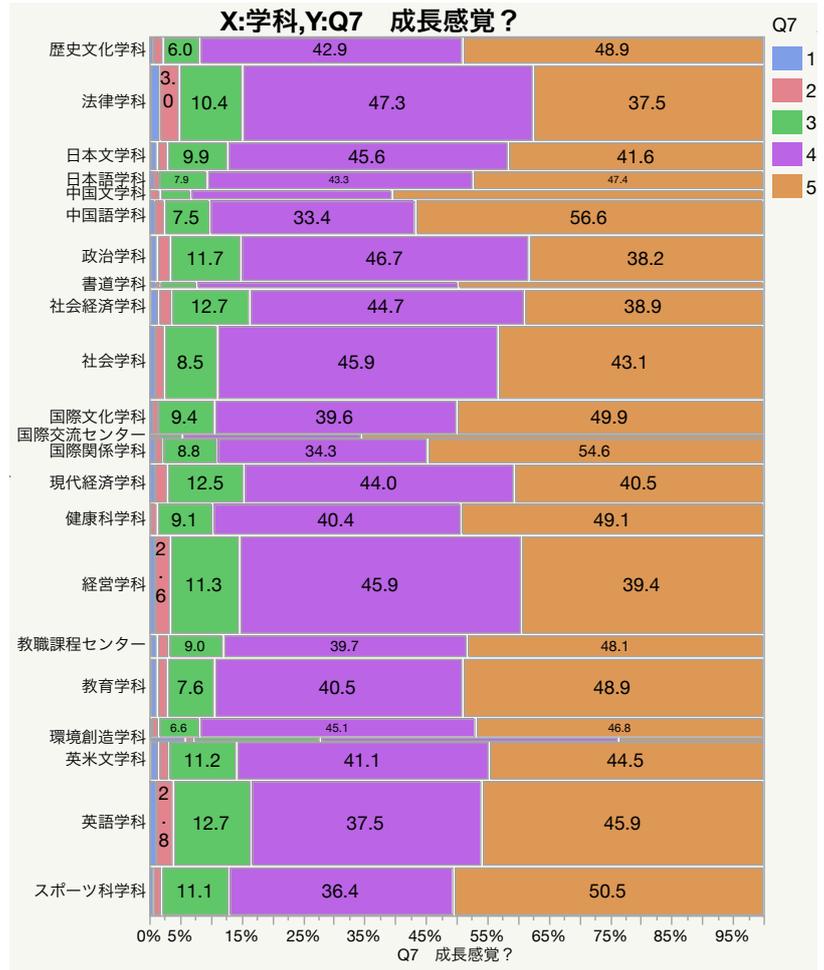
図表 34 Q7「成長感覚？」に対する全学の回答分布



水準別の分布を部局／学科別にまとめたものが図表 35 である。最頻値が5「強くそう思う」であり望ましいパターンとなっている。

図表 35 Q7「成長感覚？」に対する部局／学科別の回答分布

		Q7 成長感覚？				
行%		1	2	3	4	5
スポーツ科学科		0.70	1.34	11.07	36.42	50.47
英語学科		1.05	2.84	12.66	37.54	45.91
英米文学科		1.55	1.62	11.15	41.14	44.53
環境創造学科		5.88	1.47	20.59	48.53	23.53
看護学科		0.42	1.12	6.60	45.08	46.77
教育学科		1.28	1.77	7.55	40.51	48.90
教職課程センター		1.32	1.81	9.03	39.71	48.13
経営学科		0.81	2.60	11.30	45.92	39.37
健康科学科		0.18	1.14	9.14	40.42	49.12
現代経済学科		0.91	2.04	12.54	44.03	40.48
国際関係学科		0.88	1.43	8.77	34.32	54.61
国際交流センター		0.91	0.91	3.64	29.09	65.45
国際文化学科		0.52	0.69	9.36	39.57	49.87
社会学科		0.78	1.71	8.53	45.85	43.12
社会経済学科		1.63	2.04	12.73	44.73	38.86
書道学科		1.43	0.36	6.07	42.50	49.64
政治学科		1.27	2.10	11.68	46.73	38.22
中国語学科		0.81	1.71	7.49	33.44	56.55
中国文学科		0.00	1.70	5.10	32.86	60.34
日本語学科		0.82	0.66	7.89	43.26	47.37
日本文学科		1.20	1.70	9.92	45.59	41.58
法律学科		1.89	2.99	10.36	47.28	37.49
歴史文化学科		0.64	1.60	5.96	42.92	48.88

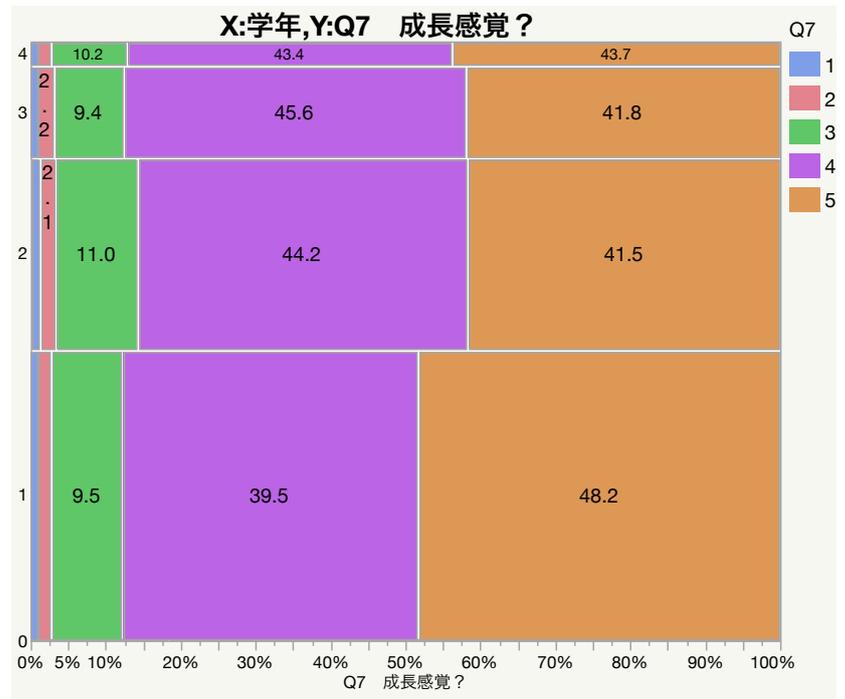


平均値からは読み取れなかった学科による違いも、水準ごとのパーセンテージを比べてみると読み取ることができる。5「強くそう思う」の割合が最も大きいのは部局では国際交流センター（65.45%）で、学科では中国文学科（60.34%）である。

学年別の違いをまとめたのが図表 36 である。

図表 36 Q7「成長感覚？」に対する学年別の回答分布

		Q7 成長感覚？				
行%	1	2	3	4	5	
0	0.00	0.00	0.00	18.52	81.48	
1	0.91	1.80	9.55	39.53	48.21	
2	1.24	2.06	10.99	44.17	41.53	
3	0.99	2.16	9.40	45.60	41.85	
4	0.99	1.82	10.16	43.35	43.68	



学年別には1年生が5「強くそう思う」の率が48.2%とほぼ半数近いが、2年、3年、4年になるとやや数値が落ちるのが分かる。

4.3.12 【Q8】 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。【総合満足?】

この設問に対する回答の全学の平均値は8.16、標準偏差は1.72である。平均値8.16は「81.6%満足である」と読み替えることができ、まずまずの結果だと思われる。図表 37 に部局／学科別および学年別の数値をまとめた。

図表 37 Q8「総合満足？」の部局／学科別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科	数	平均	標準偏差
スポーツ科学科	1716	8.59	1.56
英語学科	2959	8.14	1.82
英米文学科	1353	8.12	1.77
環境創造学科	68	6.94	2.09
看護学科	712	8.26	1.58
教育学科	2046	8.18	1.81
教職課程センター	830	8.01	1.93
経営学科	3349	7.95	1.69
健康科学科	1136	8.34	1.58
現代経済学科	1325	8.09	1.64
国際関係学科	912	8.44	1.69
国際交流センター	110	9.09	1.25
国際文化学科	1164	8.32	1.62
社会学科	2570	8.20	1.59
社会経済学科	1226	7.94	1.90
書道学科	281	8.57	1.55
政治学科	1572	7.96	1.81
中国語学科	1234	8.42	1.62
中国文学科	354	8.67	1.35
日本語学科	607	8.40	1.44
日本文学科	999	8.15	1.68
法律学科	2644	7.87	1.87
歴史文化学科	939	8.26	1.58

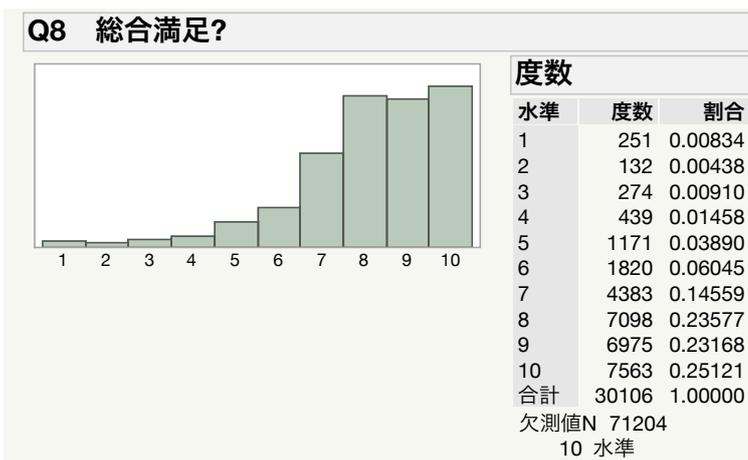
  

学年	数	平均	標準偏差
0	27	9.26	1.02
1	14588	8.19	1.69
2	9649	8.10	1.76
3	4632	8.16	1.77
4	1210	8.27	1.72

部局で最も平均値が高いのは国際交流センター(9.09)で、値のばらつき度合い(標準偏差)も1.25と小さい。学科としてはスポーツ科学科(8.59)が最も高く、ついで書道学科(8.57)が高い。学年別には、科目等履修生を除くと4年生(8.27)が最も高く、ついで1年生(8.19)が高い。

より詳しく分布を見てゆく。まず全学の水準別の分布は図表38の通りである。最頻値は10で、全体の25.1%である。9が23.2%、8が23.6%なので、10~8で、全体の71.7%を占める。まずまずの結果だと思われる。一方、全体のなかの割合は少ないにせよ、1~4という低い水準の回答も存在することは無視できない。1~4は合計して3.6%であるが、件数にすると1096件である。なぜこのような認識に至っているのかについては自由記述部分の慎重な検討が求められる。

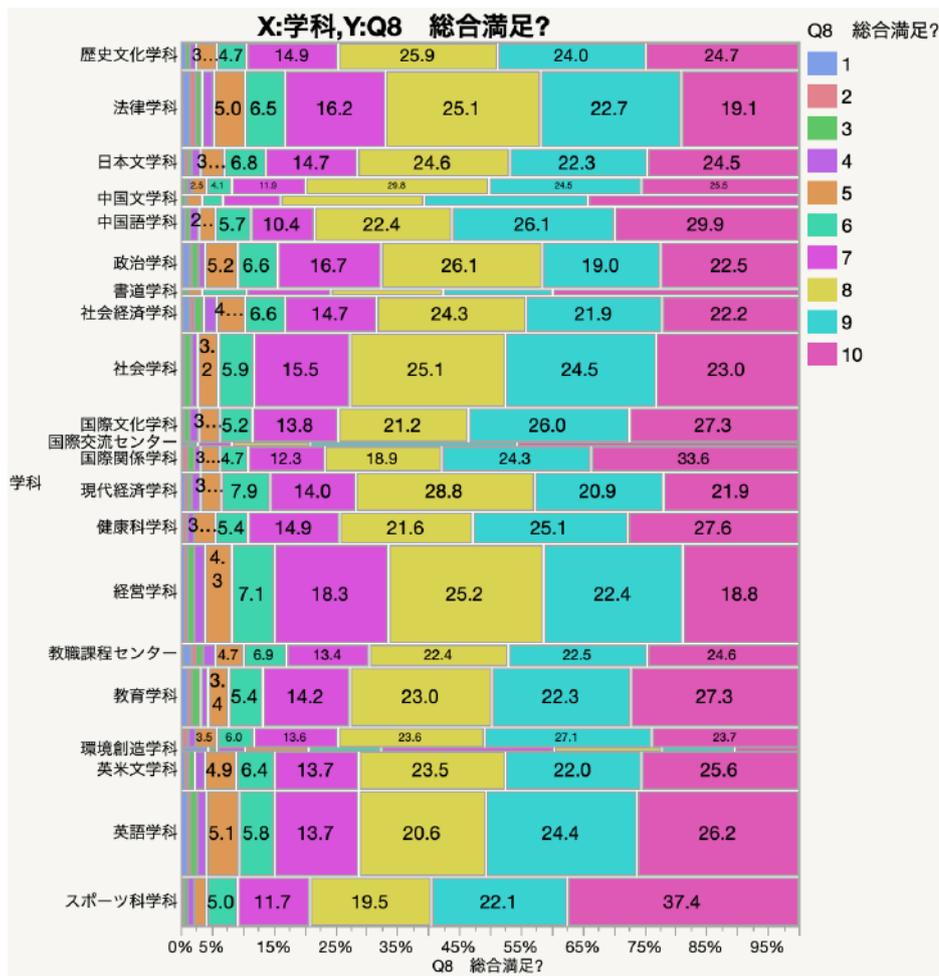
図表 38 Q8「総合満足？」の全学の回答分布



部局／学科別の分布を図表 39 に示す。10（100%満足）の割合を見ると、10.29%～45.45%と、大幅な違いが見られる。10 の割合が最も高かったのは部局では国際交流センター(45.45%)であった。学科では書道学科(39.86%)、スポーツ科学科(37.41%)、中国文学科(34.18%)、国際関係学科(33.55%)の4学科が30%を上回っている。

図表 39 Q8「総合満足？」に対する部局／学科別の回答分布

Q8 総合満足?		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
行%											
スポーツ科学科		0.41	0.12	0.64	0.76	2.27	5.01	11.71	19.52	22.14	37.41
英語学科		1.05	0.54	0.98	1.69	5.10	5.81	13.65	20.62	24.37	26.19
英米文学科		0.67	0.52	1.18	1.63	4.88	6.36	13.67	23.50	22.03	25.57
環境創造学科		4.41	0.00	1.47	4.41	10.29	11.76	27.94	17.65	11.76	10.29
看護学科		0.28	0.70	0.42	0.98	3.51	6.04	13.62	23.60	27.11	23.74
教育学科		1.08	0.59	1.56	1.22	3.37	5.43	14.22	22.97	22.29	27.27
教職課程センター		1.69	0.72	1.08	2.05	4.70	6.87	13.37	22.41	22.53	24.58
経営学科		0.57	0.60	0.99	1.73	4.30	7.08	18.33	25.20	22.39	18.81
健康科学科		0.44	0.35	0.26	1.06	3.43	5.37	14.88	21.57	25.09	27.55
現代経済学科		0.68	0.30	0.68	1.51	3.32	7.92	14.04	28.75	20.91	21.89
国際関係学科		0.44	0.66	0.99	1.21	2.96	4.71	12.28	18.86	24.34	33.55
国際交流センター		0.91	0.00	0.00	0.00	0.00	1.82	5.45	12.73	33.64	45.45
国際文化学科		0.43	0.17	0.77	1.55	3.44	5.24	13.83	21.22	26.03	27.32
社会学科		0.47	0.23	0.82	1.32	3.15	5.88	15.53	25.10	24.47	23.04
社会経済学科		1.47	0.57	1.71	2.04	4.57	6.61	14.68	24.31	21.86	22.19
書道学科		0.00	0.36	0.71	0.00	2.49	7.12	13.52	18.15	17.79	39.86
政治学科		1.59	0.32	0.76	1.27	5.22	6.62	16.67	26.15	18.96	22.46
中国語学科		0.49	0.32	0.57	1.70	2.51	5.67	10.37	22.37	26.09	29.90
中国文学科		0.00	0.00	0.56	0.28	2.54	3.39	9.32	23.16	26.55	34.18
日本語学科		0.33	0.16	0.66	0.49	2.47	4.12	11.86	29.82	24.55	25.54
日本文学科		0.70	0.40	0.50	1.60	3.80	6.81	14.71	24.62	22.32	24.52
法律学科		1.63	0.76	1.13	1.97	4.95	6.54	16.19	25.08	22.69	19.06
歴史文化学科		0.75	0.00	0.64	1.17	3.30	4.69	14.91	25.88	23.96	24.71

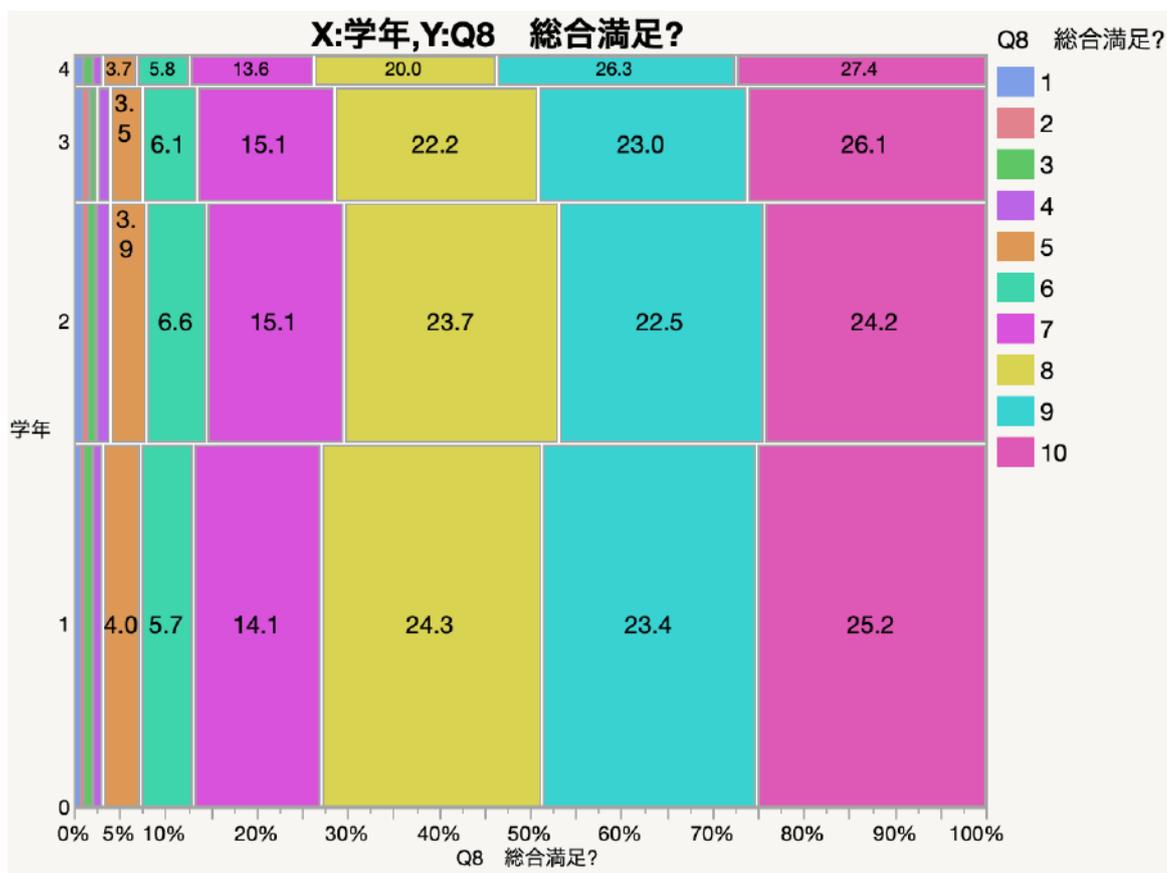


9 (90%満足) と 10 (100%満足) の合計で見ると、部局で最も高いのはやはり国際交流センター (79.09%) である。学科では中国文学科 (60.73%) が最も高く、次にスポーツ科学科 (59.55%)、国際関係学科 (57.89%) と続く。これら3学科を含んで、全学科のなかで10学科が、9と10の合計が50%を上回った。

学年別の分布を図表40に示す。

図表40 Q8「総合満足？」に対する学年別の回答分布

行%	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3.70	0.00	18.52	22.22	55.56
1	0.67	0.41	0.83	1.38	4.01	5.72	14.13	24.26	23.41	25.17
2	0.98	0.50	0.89	1.65	3.94	6.56	15.10	23.67	22.50	24.21
3	0.99	0.45	1.23	1.40	3.48	6.07	15.09	22.19	22.99	26.10
4	0.99	0.25	0.83	1.16	3.72	5.79	13.64	20.00	26.28	27.36



科目等履修生が格段に高いのを除くと、2年生がやや低いが、3年、4年と進むにつれて満足度は上がっている傾向が見える。ただし3年、4年と進むにつれて回答率も小さくなっており、この結果を鵜呑みにすることはできない。すなわち3年生、4年生でこのアンケートに回答した層は授業に対して熱意をもって取り組んだ層であることが推測されることから、全体としての学年進行に従って満足度が上がったというエビデンスとしては弱い。

#### 4.3.13 全体的満足度に貢献する要因

ある意味では「全体的満足度」を向上させることが授業の大きな目標であると考えられる。そこで Q8「全体満足？」を目標変数と考えたときに、他のどの変数がどの程度関連しているかを調べた。その際、Q2 に関して

は他の設問のように「数値が上がるほど望ましい」という水準構造になっていないので、以下のような変換を行い、この結果を「Q2 難易度[変換]」という新たな変数として使用した。

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5 (とても難しかった) → 1
- 4 (やや難しかった) → 3
- 3 (適切だった) → 5
- 2 (やや易しかった) → 3
- 1 (とても易しかった) → 1

まずすべての変数ペア間の相関係数を調べたところ図表 41 のようになった。セルの背景の濃さは相関係数の値の高さを表している。サンプルの多さもあり、すべての係数が  $p < .0001$  で有意である。Q8「総合満足？」との相関が最も強いのは「成長感覚」( $r = .6831$ )であり、「教員熱意」( $r = .6576$ )、「自分意欲」( $r = .5862$ )と続いている。「総合満足」との相関係数の値が最も低いのは「難易度[変換]」( $r = .2742$ )だが、すでに述べたようにこれも  $p < .0001$  で有意である。

図表 41 変数間の相関

	シラバス通り?	難易度[変換]	対応迅速?	FB丁寧?	自分意欲?	教員熱意?	成長感覚?	総合満足?
Q1b シラバス通り?	1	0.0707	0.4007	0.4038	0.3967	0.4716	0.4562	0.485
Q2 難易度[変換]	0.0707	1	0.0548	0.1006	0.1219	0.1269	0.1718	0.2742
Q3b 対応迅速?	0.4007	0.0548	1	0.5086	0.3698	0.4495	0.4151	0.4561
Q4b FB丁寧?	0.4038	0.1006	0.5086	1	0.4363	0.5314	0.4669	0.5282
Q5 自分意欲?	0.3967	0.1219	0.3698	0.4363	1	0.5565	0.6084	0.5862
Q6 教員熱意?	0.4716	0.1269	0.4495	0.5314	0.5565	1	0.6298	0.6576
Q7 成長感覚?	0.4562	0.1718	0.4151	0.4669	0.6084	0.6298	1	0.6831
Q8 総合満足?	0.4850	0.2742	0.4561	0.5282	0.5862	0.6576	0.6831	1

次に「総合満足」を目標変数、他のすべてを予測変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行ったところ、投入したすべての説明変数が保持され、最終的に図表 42 のモデルを得た。

図表 42 総合満足为目标変数としたステップワイズ回帰分析の最終モデル

あてはめの要約					パラメータ推定値				
R2乗	0.608342				項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob> t )
自由度調整R2乗	0.608003				切片	-0.819679	0.086043	-9.53	<.0001*
誤差の標準偏差(RMSE)	1.105417				Q1b シラバス通り?	0.2010437	0.019212	10.46	<.0001*
Yの平均	8.31959				Q2 難易度 [変換]	0.1625484	0.00838	19.40	<.0001*
オブザベーション(または重みの合計)	8101				Q3b 対応迅速?	0.1446877	0.014679	9.86	<.0001*
分散分析					Q4b FB丁寧?	0.233862	0.017239	13.57	<.0001*
要因	自由度	平方和	平均平方	F値	Q5 自分意欲?	0.2378928	0.020721	11.48	<.0001*
モデル	7	15360.375	2194.34	1795.775	Q6 教員熱意?	0.5007398	0.023078	21.70	<.0001*
誤差	8093	9889.206	1.22	p値(Prob>F)	Q7 成長感覚?	0.6741241	0.023144	29.13	<.0001*
全体(修正済み)	8100	25249.581		<.0001*					

「分散分析」表から、これは「総合満足」の説明として有効なモデルであることがわかる。「あてはめの要約」のなかの自由度調整 R2 乗の値を見ると、このモデルによって「総合満足」の 60.8%を説明していることがわかる。

「パラメータ推定値」を見ると、投入したすべての変数が有意であることがわかる。パラメータ推定値の大きさ（予測変数の単位は1～5に揃えてある）によって貢献度が高い順に列挙すると、最も高いのが「成長感覚」で、次に「教員熱意」「自分意欲」「FB 丁寧」「シラバス通り」「難易度」と続き、最後に「対応迅速」となった。これらの要素がすべて独自の貢献をなして、総合満足につながっていると解釈できる。具体的には次の式によって「総合満足が予測される。

$$\text{総合満足} = 0.674 * \text{成長感覚} + 0.501 * \text{教員熱意} + 0.238 * \text{自分意欲} + 0.234 * \text{FB 丁寧} + 0.201 * \text{シラバス通り} + 0.163 * \text{難易度[変換]} + 0.145 * \text{対応迅速} - 0.820$$

この式は最初の項の「成長感覚」については次のように読み取ることが可能である。

- 「成長感覚？」の回答が5段階尺度で1上昇する（例：3→4）時、他の回答が一定であれば、平均すると「総合満足？」の回答が10段階尺度で0.674上昇する。

同様に、その他の項についても以下のように読み取れる。

- 「教員熱意？」の回答が1上昇する（例：3→4）時、「総合満足？」の回答が0.501上昇する。
- 「自分意欲？」の回答が1上昇する（例：3→4）時、「総合満足？」の回答は0.238上昇する。
- 「FB 丁寧？」の回答が1上昇する（例：3→4）時、「総合満足？」の回答が0.234上昇する。
- 「シラバス通り？」の回答が1上昇する（例：3→4）時、「総合満足？」の回答が0.201上昇する。
- 「難易度適切？」の回答（変換したもの）が2上昇する（例：3→5）時、「総合満足？」の回答が $0.163 * 2 = 0.326$ 上昇する。
- 「対応迅速？」の回答が1上昇する（例：3→4）時、「総合満足？」の回答が0.145上昇する。

これらの係数の値は今回のデータでたまたま得られたものである。しかし今回アンケート項目で調べた、「学生がどの程度成長の感覚を持つか」「教えることに対する教員の熱意をどの程度感じるか」「学生自身がどの程度意欲的に取り組むか」「提出物に対するフィードバックがどの程度丁寧と感じられるか」「どの程度シラバス通りに授業が実施されるか」「難易度が適切だとどの程度感じられるか」「メールなどに対する対応がどの程度迅速だと感じられるか」などのすべての要素が、どれも学生の総合的な満足につながっているというのは、直観的にも納得のいく結果であろう。今後さらに授業を改善して学生の満足度を向上させていくための貴重な示唆が得られたものと考えられる<sup>1</sup>。

## 5. 結論

全学レベルでのおもな結果をまとめるならば、以下のようである。

1. シラバス内容を知っているのは約80%であった。さらにシラバスの熟読を呼びかけたい。
2. シラバス内容を知っている学生は、授業はシラバス通りに実施されたと概ね認識した。（最頻値=5、平均値=4.32）
3. 授業の難易度については「ちょうど良い」という認識が最も多く、次に「やや難しかった」という認識が多かった。全体としては概ね適切な難易度設定がなされていると考えられる。（最頻値=3、平均値=3.57）

---

<sup>1</sup>念の為、説明変数ごとに分散拡大係数(Variance Inflation Factor: VIF)を求めてみたところ最大値は2.28であったため、多重共線性の問題はないと判断された。なお、同一の学生が複数の授業について評定し、同一の授業が複数の学生によって評定された、というデータ構造になっているため、すべての観測値間の独立性が担保されているとは言えない。よって結果の解釈について慎重であるべきである。これらの点については教職課程センターの児玉佳一講師に貴重なアドバイスを頂いた。

4. 質問やメールをしたことのある学生は約 18%と、やや少ないかという印象である。
5. 質問やメールに対する対応は概ね「迅速である」と認識されていた。(最頻値=5 平均値=3.99)
6. 提出物を出した(授業で提出物が課された)学生は全学で約 85%であった。
7. 提出物に対するフィードバックは概ね「丁寧である」と認識されていた。(最頻値=5 平均値=3.97)
8. 学生は、自身は「熱意・意欲」をもって授業に取り組んだ、と概ね認識していた。(最頻値=4 平均値=4.18)  
ただし、学年を追うごとにわずかながら意欲が減少する傾向が見られるのが改善すべき課題である。
9. 担当教員は熱意を持っている、と学生は概ね認識していた。(最頻値=5 平均値=4.39)
10. 学生自身の意欲の自己認識と、学生が感じる教員の熱意には、強い正の関係が観察された。因果関係は不明ではあるものの、教員の側がコントロールできるのは「教えることに対する教員の熱意(の表現)」だけであるため、因果関係があるという前提で、より一層自らの熱意が学生に伝わるような授業実践が求められるだろう。
11. 授業を通じて何らかの成長を感じたという認識は多くの学生が持った。(最頻値=5 平均値=4.28)
12. すべてを総合して授業に(概ね)満足だと認識した学生(8~10を選んだ学生)は約 72%であった。別の表現をするならば全学的に学生の平均満足度は約 82%であった。(最頻値=10 平均値=8.16)

以上の結果は、全学平均としては概ね満足すべきものだと思われる。ただし部局/学科による違いが大きな項目もあったことから、改善の余地がある部分については部局/学科レベルでの、また教員個人レベルでの今まで以上の取り組みが求められよう。その際、「成長感覚」「教員熱意」「FB 丁寧」「シラバス通り」「難易度」「対応迅速」のそれぞれを改善してゆくことが総合的な満足度の向上につながるのではないか、という今回のアンケート調査から得られた示唆は具体的な指針を与えてくれるはずである。

以上

## 3.1.2 教員による授業認識アンケート【前期】

### 1. 目的

教員に自らの授業を振り返り内省する機会を提供し、かつ別に実施する『授業に関する学生の認識アンケート』との照合を可能にすることで、授業改善に資することを目的とした。

### 2. 実施対象科目

『授業に関する学生の認識アンケート』と同一とした。すなわち、

- (1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が5名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とした。
- (2) 実施対象科目を全学FD委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とした。

### 3. アンケート項目

基本的に『授業に関する学生の認識アンケート』と表裏をなす選択式項目とした。具体的には以下の通りであった。

Q1 この授業はシラバスの記述通りに行ったと思いますか。[シラバス通り]

- 5（強くそう思う）
- 4（どちらかと言えばそう思う）
- 3（どちらとも言えない）
- 2（どちらかと言えばそう思わない）
- 1（まったくそう思わない）

Q2 学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5（とても難しかった）
- 4（やや難しかった）
- 3（適切だった）
- 2（やや易しかった）
- 1（とても易しかった）

Q3 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

- 5（強くそう思う）
- 4（どちらかと言えばそう思う）
- 3（どちらとも言えない）
- 2（どちらかと言えばそう思わない）
- 1（まったくそう思わない）

Q4 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q5 学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[学生意欲]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q6 あなたは熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[自分熱意]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q7 この授業を通じて学生の「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

10 (100%) 9 (90%)... 2 (20%) 1 (10%)

## 4. 結果

### 4.1 対象科目数

対象科目数は 2159 科目である。すなわち対象のべ担当教員数も 2159 名である。

### 4.2 のべ回答者数と回答率

のべ回答者数は 1031 名であった。すなわち回答率は 47.7%である。部局／学科別回答率を図表 1 に示す。部局／学科で最も回答率が高かったのは国際関係学科 (81.54%) であった。部局／学科による回答率には大きな違いがあることがわかる。

図表 1 部局／学科別の回答率

部局	回答有無	
	回答	未回答
スポーツ科学科	42.86	57.14
英語学科	46.33	53.67
英米文学科	25.43	74.57
環境創造学科	14.29	85.71
看護学科	32.35	67.65
教育学科	42.41	57.59
教職課程センター	30.14	69.86
経営学科	45.07	54.93
健康科学科	50.00	50.00
現代経済学科	66.25	33.75
国際関係学科	81.54	18.46
国際交流センター	69.23	30.77
国際文化学科	78.13	21.88
社会学科	55.86	44.14
社会経済学科	71.67	28.33
書道学科	34.38	65.63
政治学科	48.00	52.00
中国語学科	50.36	49.64
中国文学科	72.22	27.78
日本語学科	47.92	52.08
日本文学科	54.55	45.45
法律学科	47.40	52.60
歴史文化学科	37.33	62.67

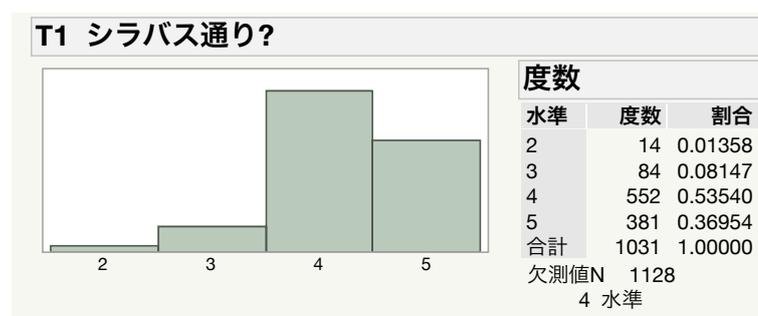
### 4.3 結果

Q1～Q8 までの質問項目ごとに結果を提示してゆく。

#### 4.3.1 【Q1】この授業はシラバスの記述通りに行なったと思いますか。[シラバス通り?]

この設問に対する全科目の平均は 4.26、標準偏差は 0.66 であった。全科目の回答分布を図表 2 に示す。最頻値は 4（どちらかと言えばそう思う）である。4 と 5（強くそう思う）の合計で、おおよそ 90%を占める。教員の認識としてはシラバス通りに行なったという認識は非常に強い。

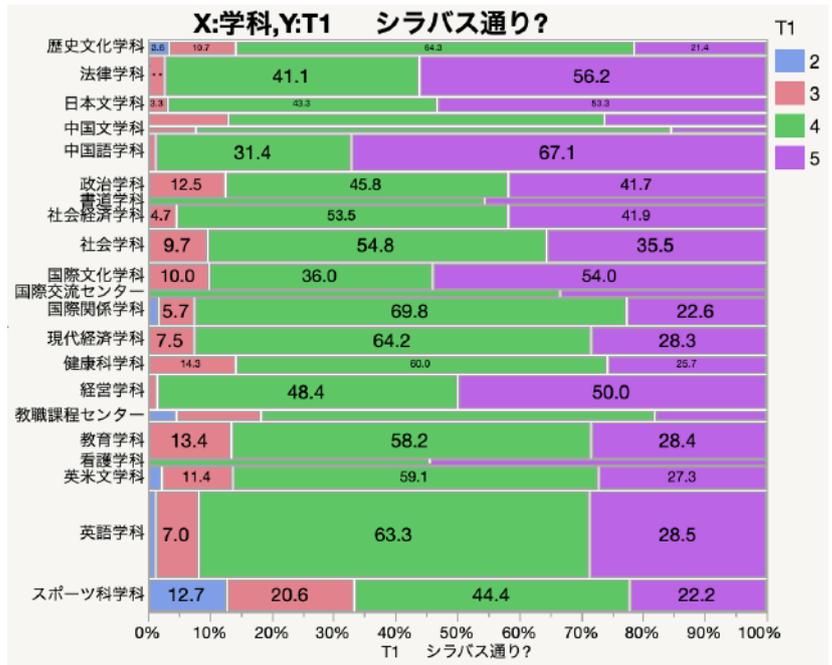
図表 2 Q1「シラバス通り？」に対する全科目の回答分布



部局／学科別の回答分布を図表 3 に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは中国語学科（67.14%）である。

図表3 Q1「シラバス通り？」に対する部局／学科別の回答分布

行%	T1 シラバス通り?			
	2	3	4	5
スポーツ科学科	12.70	20.63	44.44	22.22
英語学科	1.27	6.96	63.29	28.48
英米文学科	2.27	11.36	59.09	27.27
環境創造学科	0.00	0.00	100.00	0.00
看護学科	0.00	0.00	45.45	54.55
教育学科	0.00	13.43	58.21	28.36
教職課程センター	4.55	13.64	63.64	18.18
経営学科	0.00	1.56	48.44	50.00
健康科学科	0.00	14.29	60.00	25.71
現代経済学科	0.00	7.55	64.15	28.30
国際関係学科	1.89	5.66	69.81	22.64
国際交流センター	0.00	0.00	66.67	33.33
国際文化学科	0.00	10.00	36.00	54.00
社会学科	0.00	9.68	54.84	35.48
社会経済学科	0.00	4.65	53.49	41.86
書道学科	0.00	0.00	54.55	45.45
政治学科	0.00	12.50	45.83	41.67
中国語学科	0.00	1.43	31.43	67.14
中国文学科	0.00	7.69	76.92	15.38
日本語学科	0.00	13.04	60.87	26.09
日本文学科	0.00	3.33	43.33	53.33
法律学科	0.00	2.74	41.10	56.16
歴史文化学科	3.57	10.71	64.29	21.43

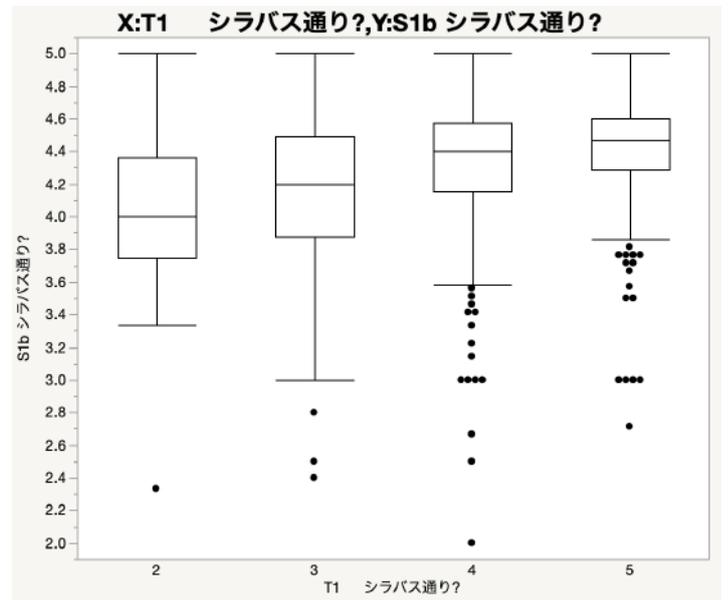


この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表4に示す。左の表の「水準」は教員の回答のことである。「数」はその水準で回答したのべ教員数である。「平均」はそれぞれの教員の回答水準に含まれる授業に関して「授業に関する学生の認識アンケート」で学生が回答した水準の平均値である。「標準偏差」「中央値」も同様に、学生の回答に関する値である。たとえば教員が2（どちらかと言えばそう思わない）と回答した13の授業科目に関して学生の回答の平均値は3.94、標準偏差は0.64、中央値は4.00であった。

右のグラフは教員が2、3、4、5と回答した授業ごとの学生の回答の分布を示す4つの箱ひげ図である。白い箱があり真ん中に横線が入っている。この横線の位置が中央値を表す。左の表内では数値で示してある中央値と等しい。白い箱の上側が第三四分位数（=上から25%の位置の値）で、白い箱の下側が第一四分位数（=下から25%の位置の値）を表す。すなわち白い箱は全体の真ん中に位置する50%を表している。白い箱の上下にそれぞれ「ひげ」が伸びていて、それより外側には黒いドット（・）がある。黒いドットは「外れ値」であり、例外的な値である。

図表4 「シラバス通り？」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差	中央値
2	13	3.94	0.64	4.00
3	80	4.12	0.50	4.20
4	544	4.35	0.38	4.40
5	374	4.44	0.34	4.67

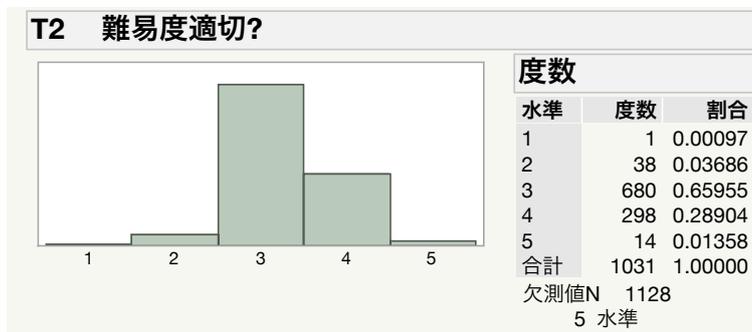


教員の認識が2→3→4→5と上がるに従って、学生の認識の平均値・中央値もゆるやかに上がっているのがわかる。ただし教員の認識が変化しているほどには学生の認識は変化していない。つまり、教員が3（どちらとも言えない）と認識している授業であっても、学生の回答平均値は4.35・中央値4.40である。学生は「シラバスに沿って授業は進む」という先入観が強いのかもしれない。仮にピアソン相関係数を求めてみると  $r = .02459$  である。

#### 4.3.2 【Q2】 学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切?]

この設問に対する全科目の平均は3.28、標準偏差は0.55であった。全科目の回答分布を図表5に示す。最頻値は3（適切だった）で約66%がこの認識である。次に多い4（やや難しかった）は約29%を占める。

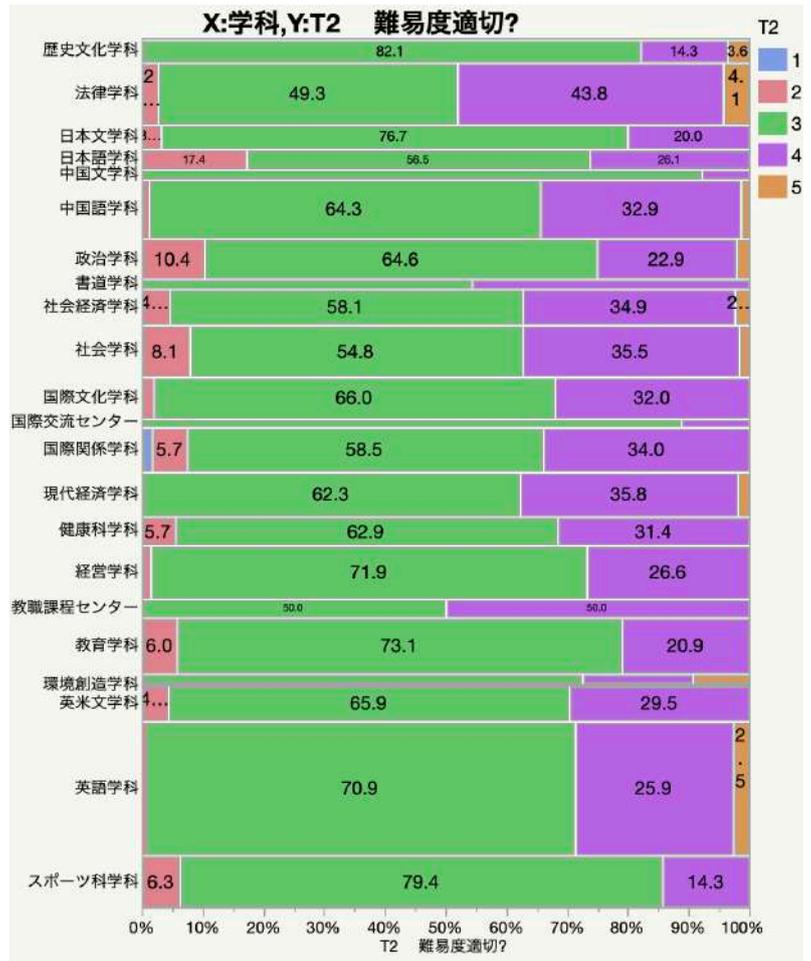
図表5 Q2「難易度適切？」に対する全科目の回答分布



部局／学科別の回答分布を図表6に示す。3（適切だった）という認識の割合が最も大きかったのは中国文学科（92.31%）である。次に大きかったのは歴史文化学科（82.14%）である。1、2といった「易しかった」水準の認識の有無・大きさ、5（とても難しかった）という認識の有無・大きさに関しては、学科別の違いがあることが分かる。

図表6 Q2「難易度適切？」に対する部局／学科別の回答分布

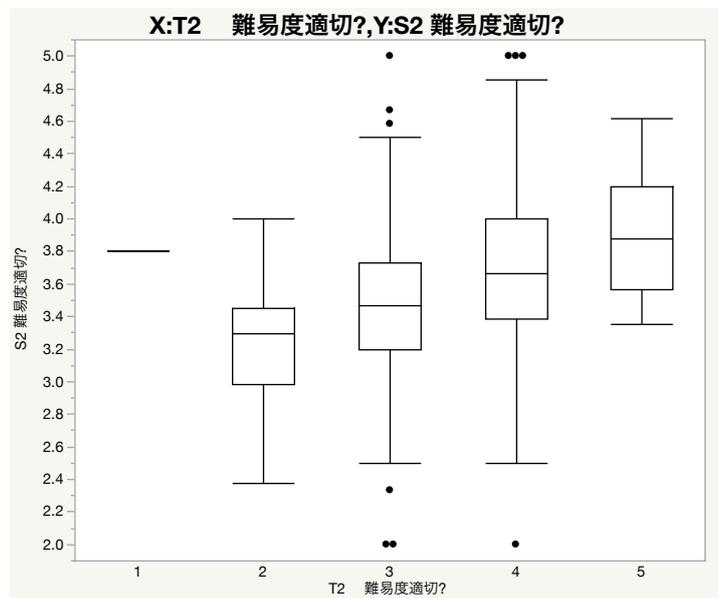
行%	T2 難易度適切?				
	1	2	3	4	5
スポーツ科学科	0.00	6.35	79.37	14.29	0.00
英語学科	0.00	0.63	70.89	25.95	2.53
英米文学科	0.00	4.55	65.91	29.55	0.00
環境創造学科	0.00	0.00	0.00	100.00	0.00
看護学科	0.00	0.00	72.73	18.18	9.09
教育学科	0.00	5.97	73.13	20.90	0.00
教職課程センター	0.00	0.00	50.00	50.00	0.00
経営学科	0.00	1.56	71.88	26.56	0.00
健康科学科	0.00	5.71	62.86	31.43	0.00
現代経済学科	0.00	0.00	62.26	35.85	1.89
国際関係学科	1.89	5.66	58.49	33.96	0.00
国際交流センター	0.00	0.00	88.89	11.11	0.00
国際文化学科	0.00	2.00	66.00	32.00	0.00
社会学科	0.00	8.06	54.84	35.48	1.61
社会経済学科	0.00	4.65	58.14	34.88	2.33
書道学科	0.00	0.00	54.55	45.45	0.00
政治学科	0.00	10.42	64.58	22.92	2.08
中国語学科	0.00	1.43	64.29	32.86	1.43
中国文学科	0.00	0.00	92.31	7.69	0.00
日本語学科	0.00	17.39	56.52	26.09	0.00
日本文学科	0.00	3.33	76.67	20.00	0.00
法律学科	0.00	2.74	49.32	43.84	4.11
歴史文化学科	0.00	0.00	82.14	14.29	3.57



この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表7に示す。

図表7 「難易度適切？」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差	中央値
1	1	3.80		3.80
2	38	3.24	0.38	3.29
3	671	3.47	0.40	3.47
4	294	3.67	0.45	3.67
5	13	3.91	0.40	4.19

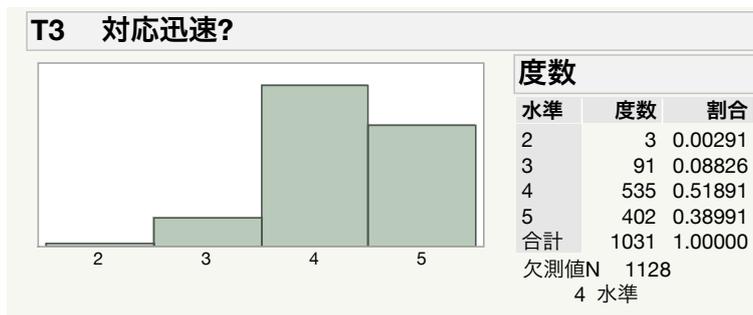


水準1（とても易しかった）という回答は1科目なのでとりあえず除外して考えると、教員の難易度の認識が2→3→4→5と上がるにつれて、学生の感じる難易度平均値も3.24→3.47→3.67→3.91とゆるやかに上がっている。つまり（1）教員の難易度認識と学生の難易度認識には正の相関がある（ $r = .2912$ ）、と同時に（2）教員が感じるほどには学生は難度も易度も敏感には感じない、と言える。たとえば、教員が5（とても難しかった）とする授業の学生の平均認識は3.91・中央値は4.19であり、逆に教員が2（やや易しかった）とする授業の学生認識の平均値は3.24・中央値は3.29であり、3よりも明らかに「難しい」側によった値である。逆の側から述べれば、教員は学生の感じる難易度を敏感に捉えきれてはいない、とも言えよう。

### 4.3.3 【Q3】 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速?]

この設問に対する全科目の平均は4.30、標準偏差は0.63であった。全科目の回答分布を図表8に示す。最頻値は4（どちらかと言えばそう思う）で、次に多いのは5（強くそう思う）である。4と5の合計で、おおよそ91%を占める。教員としては「迅速に対応した」という認識が圧倒的に多い。

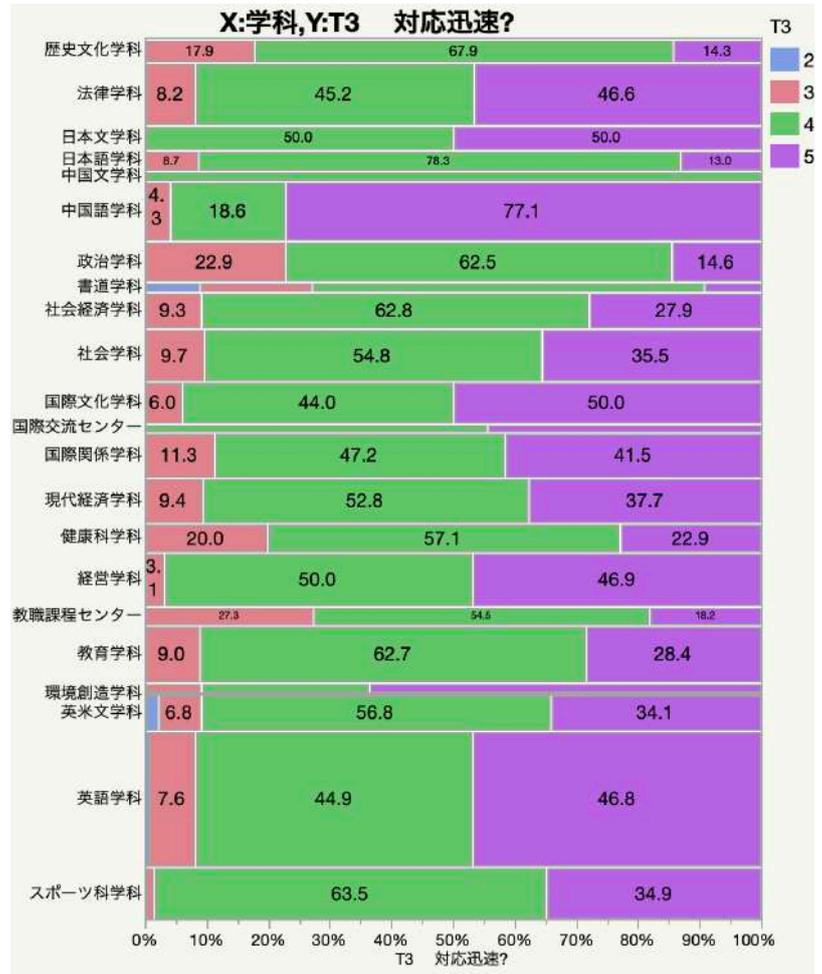
図表8 Q3「対応迅速？」に対する全科目の回答分布



部局／学科別の回答分布を図表9に示す。5（強くそう思う）の割合が学科によってかなり異なるのが見て取れる。最も大きかったのは中国語学科（77.14%）である。またごく少数ではあるが、2（どちらかと言えばそう思わない）という回答がある学科もあった。これに関しては、本来、対応は迅速であるべきであるという点を確認しておきたい。

図表9 Q3「対応迅速？」に対する部局／学科別の回答分布

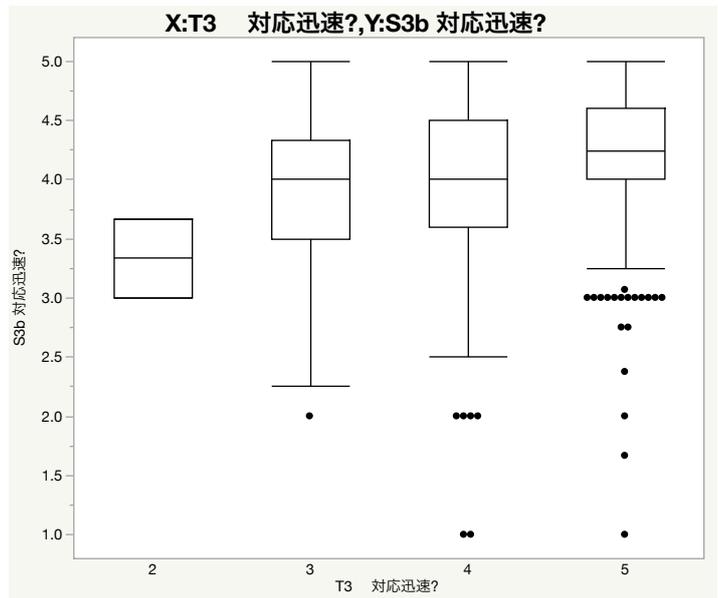
行%	T3 対応迅速?			
	2	3	4	5
スポーツ科学科	0.00	1.59	63.49	34.92
英語学科	0.63	7.59	44.94	46.84
英米文学科	2.27	6.82	56.82	34.09
環境創造学科	0.00	0.00	100.00	0.00
看護学科	0.00	9.09	27.27	63.64
教育学科	0.00	8.96	62.69	28.36
教職課程センター	0.00	27.27	54.55	18.18
経営学科	0.00	3.13	50.00	46.88
健康科学科	0.00	20.00	57.14	22.86
現代経済学科	0.00	9.43	52.83	37.74
国際関係学科	0.00	11.32	47.17	41.51
国際交流センター	0.00	0.00	55.56	44.44
国際文化学科	0.00	6.00	44.00	50.00
社会学科	0.00	9.68	54.84	35.48
社会経済学科	0.00	9.30	62.79	27.91
書道学科	9.09	18.18	63.64	9.09
政治学科	0.00	22.92	62.50	14.58
中国語学科	0.00	4.29	18.57	77.14
中国文学科	0.00	0.00	100.00	0.00
日本語学科	0.00	8.70	78.26	13.04
日本文学科	0.00	0.00	50.00	50.00
法律学科	0.00	8.22	45.21	46.58
歴史文化学科	0.00	17.86	67.86	14.29



この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 10 に示す。教員の認識と学生の認識の関係については、前項で述べた傾向がここでも見られる。すなわち (1) 教員の認識と学生の認識は基本的には正の相関がある ( $r = .1931, p < .0001$ ) が、(2) 教員が感じるほどの迅速さの変化を学生は感じていない、ということである。教員が 5 (強くそう思う) と認識した授業であっても学生の認識の平均値は 4.21・中央値は 4.24 に過ぎない。また 5 にあたる箱ひげ図 (一番右の箱) を見ると、下に伸びたひげより更に下方に、かなりの数の外れ値が見える。すなわち教員は「迅速だ」と強く思っていたケースでも学生は例外的ではあるが「迅速でない」と思っていたケースもあるということである。

図表 10 「対応迅速？」に関する教員の認識に対応する学生の認識

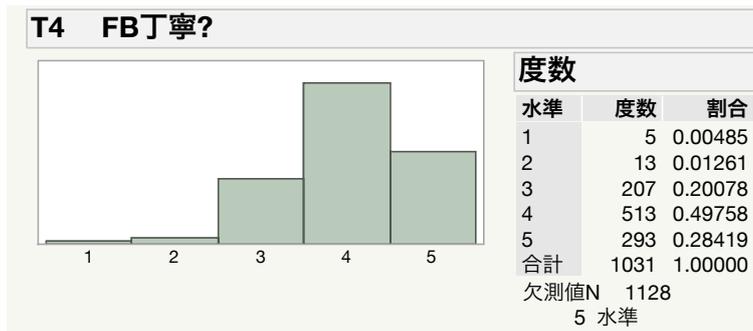
水準	数	平均	標準偏差	中央値
2	2	3.33	0.47	3.33
3	81	3.86	0.68	4.00
4	486	4.04	0.68	4.00
5	368	4.21	0.58	4.24



#### 4.3.4 【Q4】 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧?]

この設問に対する全科目の平均は 4.04、標準偏差は 0.76 であった。全科目の回答分布を図表 11 に示す。最頻値は 4（どちらかと言えばそう思う）で約 50%を占める。4 と 5 の合計で、おおよそ 78%を占める。メールに対する対応が迅速だったという認識に比べれば、丁寧だったという認識はやや弱かったようである。

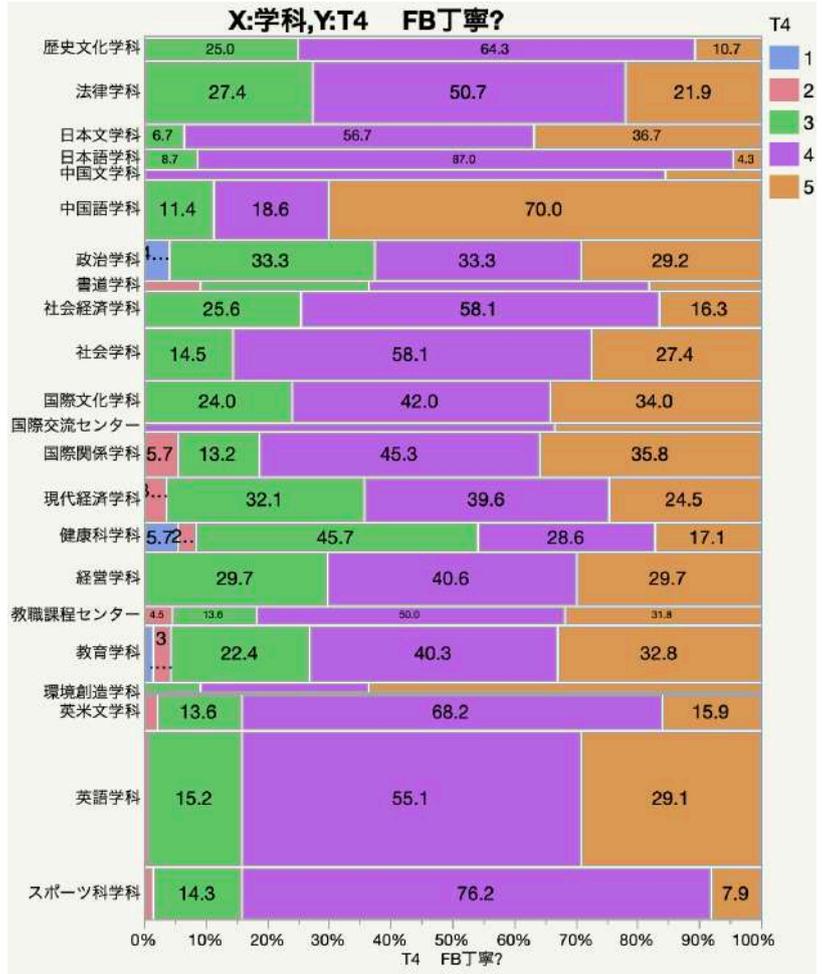
図表 11 Q4 「FB 丁寧？」に対する全科目の回答分布



部局／学科別の回答分布を図表 12 に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは中国語学科(70.00%)である。

図表 12 Q4 「FB 丁寧？」に対する部局／学科別の回答分布

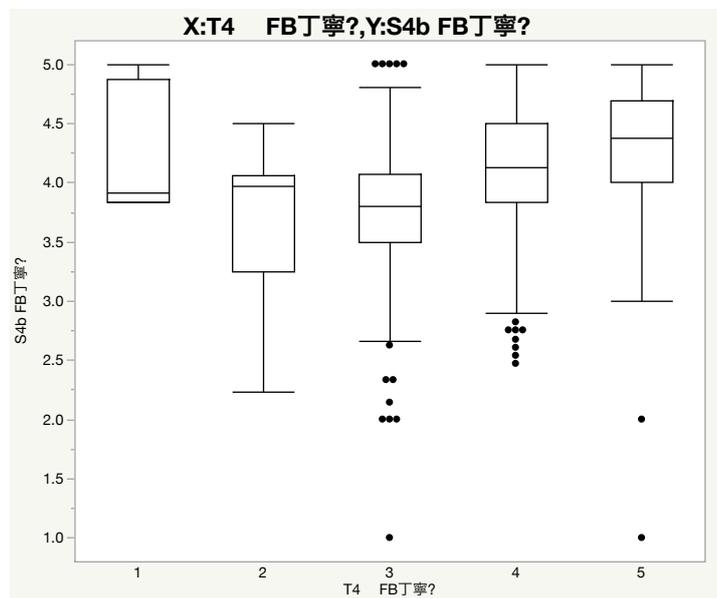
行%	T4 FB丁寧?				
	1	2	3	4	5
スポーツ科学科	0.00	1.59	14.29	76.19	7.94
英語学科	0.00	0.63	15.19	55.06	29.11
英米文学科	0.00	2.27	13.64	68.18	15.91
環境創造学科	0.00	0.00	0.00	100.00	0.00
看護学科	0.00	0.00	9.09	27.27	63.64
教育学科	1.49	2.99	22.39	40.30	32.84
教職課程センター	0.00	4.55	13.64	50.00	31.82
経営学科	0.00	0.00	29.69	40.63	29.69
健康科学科	5.71	2.86	45.71	28.57	17.14
現代経済学科	0.00	3.77	32.08	39.62	24.53
国際関係学科	0.00	5.66	13.21	45.28	35.85
国際交流センター	0.00	0.00	0.00	66.67	33.33
国際文化学科	0.00	0.00	24.00	42.00	34.00
社会学科	0.00	0.00	14.52	58.06	27.42
社会経済学科	0.00	0.00	25.58	58.14	16.28
書道学科	0.00	9.09	27.27	45.45	18.18
政治学科	4.17	0.00	33.33	33.33	29.17
中国語学科	0.00	0.00	11.43	18.57	70.00
中国文学科	0.00	0.00	0.00	84.62	15.38
日本語学科	0.00	0.00	8.70	86.96	4.35
日本文学科	0.00	0.00	6.67	56.67	36.67
法律学科	0.00	0.00	27.40	50.68	21.92
歴史文化学科	0.00	0.00	25.00	64.29	10.71



この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 13 に示す。

図表 13 「FB 丁寧？」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差	中央値
1	5	4.27	0.56	3.92
2	13	3.67	0.66	3.97
3	204	3.74	0.57	3.80
4	501	4.12	0.50	4.13
5	284	4.32	0.52	4.38

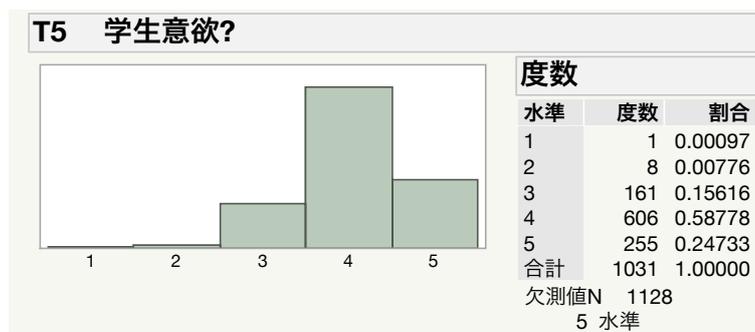


やはりこの項目についても他の項目と似た傾向が読み取れる。(1) 教員が認識する「フィードバックの丁寧さ」と学生が認識する「フィードバックの丁寧さ」にはゆるやかな正の相関( $r = .3539, p < .0001$ )があるが、(2) 教員が感じるほどの丁寧さ、あるいは丁寧さの欠如を学生が敏感に感じているとは言えない。

#### 4.3.5 【Q5】 学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[学生意欲?]

この設問に対する全科目の平均は 4.07、標準偏差は 0.66 であった。全科目の回答分布を図表 14 に示す。最頻値は 4 である。4 と 5 の合計で、おおよそ 83% を占める。概ね学生は意欲・熱意を持っていたと教員は認識していた。

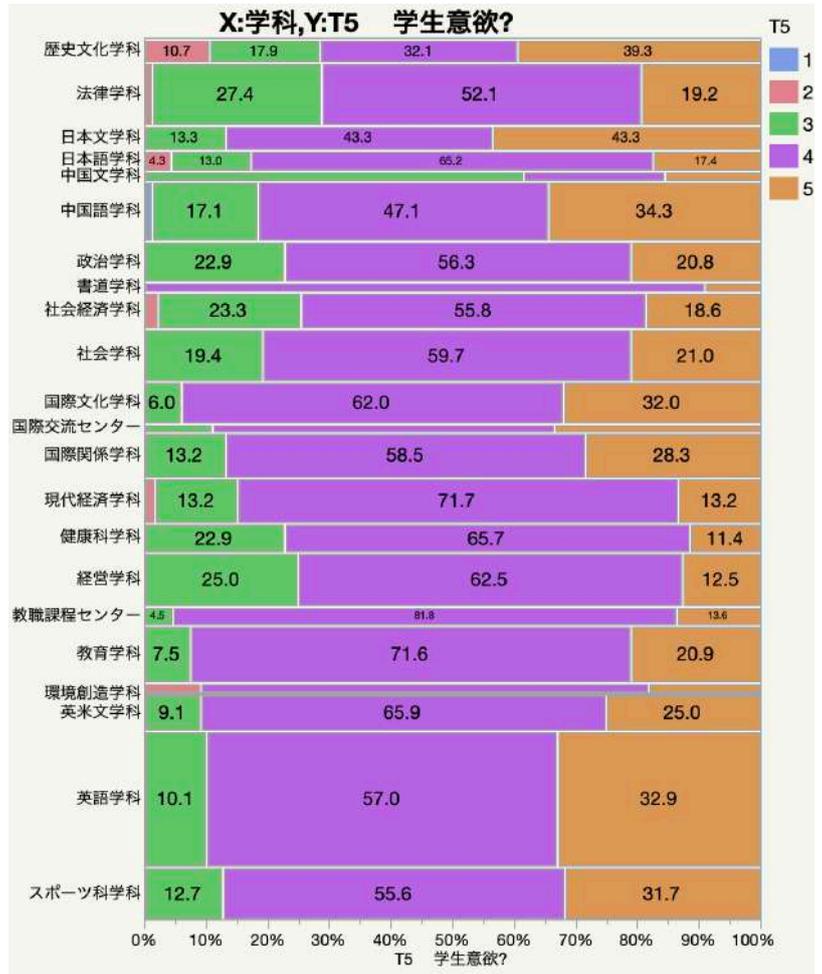
図表 14 Q5 「学生意欲?」に対する全科目の回答分布



部局／学科別の回答分布を図表 15 に示す。5 (強くそう思う) の割合が最も大きかったのは日本文学科(43.33%)である。

図表 15 Q5 「学生意欲？」に対する部局／学科別の回答分布

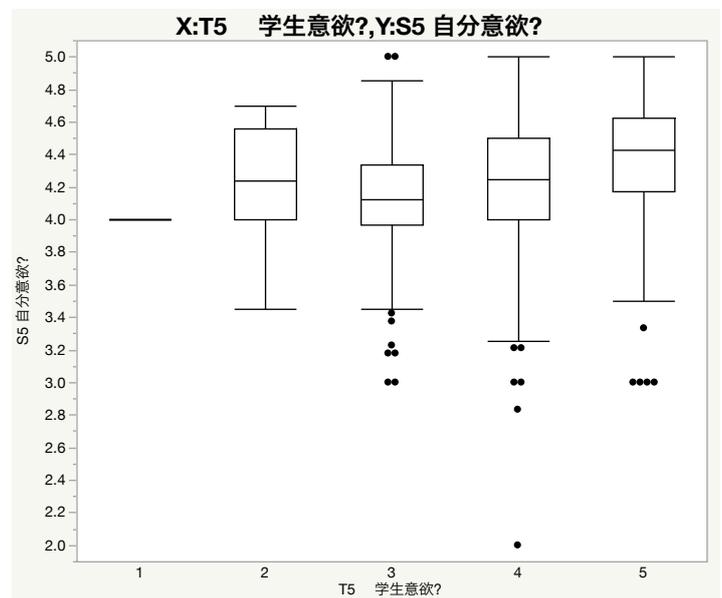
行%	T5 学生意欲?				
	1	2	3	4	5
スポーツ科学科	0.00	0.00	12.70	55.56	31.75
英語学科	0.00	0.00	10.13	56.96	32.91
英米文学科	0.00	0.00	9.09	65.91	25.00
環境創造学科	0.00	0.00	0.00	100.00	0.00
看護学科	0.00	9.09	0.00	72.73	18.18
教育学科	0.00	0.00	7.46	71.64	20.90
教職課程センター	0.00	0.00	4.55	81.82	13.64
経営学科	0.00	0.00	25.00	62.50	12.50
健康科学科	0.00	0.00	22.86	65.71	11.43
現代経済学科	0.00	1.89	13.21	71.70	13.21
国際関係学科	0.00	0.00	13.21	58.49	28.30
国際交流センター	0.00	0.00	11.11	55.56	33.33
国際文化学科	0.00	0.00	6.00	62.00	32.00
社会学科	0.00	0.00	19.35	59.68	20.97
社会経済学科	0.00	2.33	23.26	55.81	18.60
書道学科	0.00	0.00	0.00	90.91	9.09
政治学科	0.00	0.00	22.92	56.25	20.83
中国語学科	1.43	0.00	17.14	47.14	34.29
中国文学科	0.00	0.00	61.54	23.08	15.38
日本語学科	0.00	4.35	13.04	65.22	17.39
日本文学科	0.00	0.00	13.33	43.33	43.33
法律学科	0.00	1.37	27.40	52.05	19.18
歴史文化学科	0.00	10.71	17.86	32.14	39.29



この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 16 に示す。

図表 16 「学生意欲？」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差	中央値
1	1	4.00		4.00
2	8	4.20	0.40	4.24
3	158	4.13	0.36	4.12
4	596	4.24	0.38	4.25
5	253	4.39	0.39	4.43

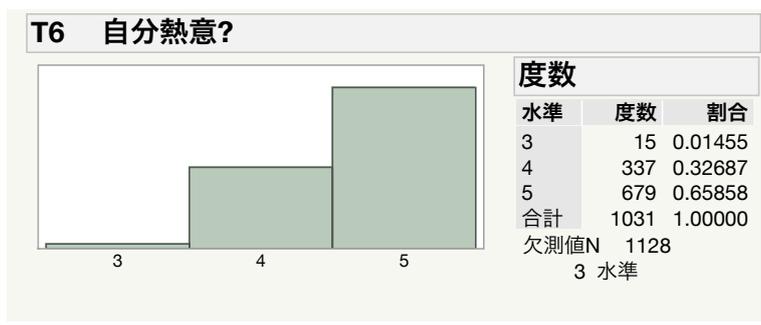


やはりこの設問についても、(1) 教員の認識と学生の認識にはゆるやかな正の相関( $r = .2178, p < .0001$ )が見られるが、(2) 学生の自己認識の意欲・熱意は、教員が感じるほど極端に強くもないし、弱くもない。教員が3だと認識している授業の平均値は4.13であり、教員が5だと認識している授業の平均値の4.39とそれほど大きな違いはない。

#### 4.3.6 【Q6】あなたは熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[自分熱意?]

この設問に対する全科目の平均は4.64、標準偏差は0.51であった。全科目の回答分布を図表17に示す。最頻値は5である。4と5の合計で、おおよそ99%を占める。さすがにほぼすべての教員が自分は熱意をもって授業していると認識している。しかしながら3（どちらともいえない）が度数は15ではあるが存在する。

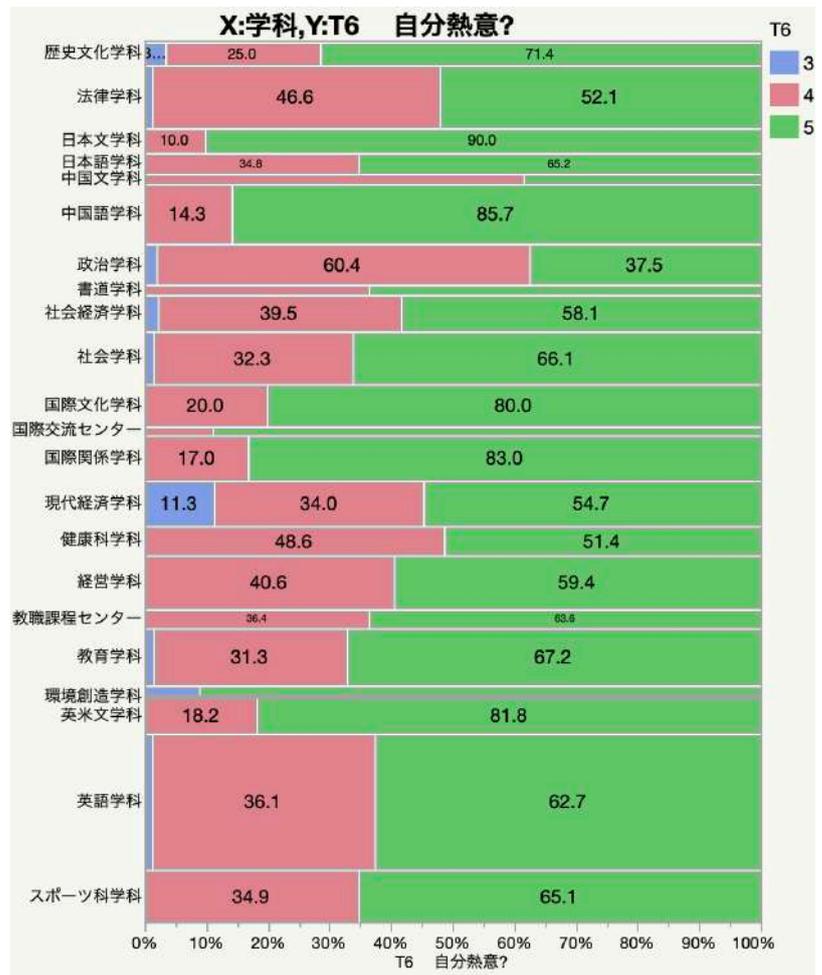
図表17 Q6「自分熱意?」に対する全科目の回答分布



部局／学科別の回答分布を図表18に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは環境創造学科（100.00%）で、次に大きかったのは日本文学科（90.00%）であった。他の学科にはあまりない3（どちらともいえない）の割合が目立つ学科もある。

図表 18 Q6「自分熱意？」に対する部局／学科別の回答分布

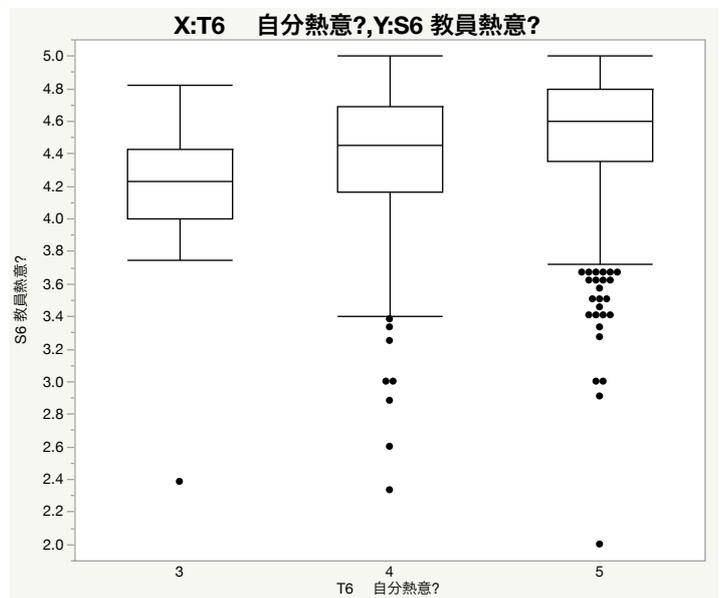
行%	T6 自分熱意?		
	3	4	5
スポーツ科学科	0.00	34.92	65.08
英語学科	1.27	36.08	62.66
英米文学科	0.00	18.18	81.82
環境創造学科	0.00	0.00	100.00
看護学科	9.09	0.00	90.91
教育学科	1.49	31.34	67.16
教職課程センター	0.00	36.36	63.64
経営学科	0.00	40.63	59.38
健康科学科	0.00	48.57	51.43
現代経済学科	11.32	33.96	54.72
国際関係学科	0.00	16.98	83.02
国際交流センター	0.00	11.11	88.89
国際文化学科	0.00	20.00	80.00
社会学科	1.61	32.26	66.13
社会経済学科	2.33	39.53	58.14
書道学科	0.00	36.36	63.64
政治学科	2.08	60.42	37.50
中国語学科	0.00	14.29	85.71
中国文学科	0.00	61.54	38.46
日本語学科	0.00	34.78	65.22
日本文学科	0.00	10.00	90.00
法律学科	1.37	46.58	52.05
歴史文化学科	3.57	25.00	71.43



この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 19 に示す。

図表 19 「自分熱意？」に関する教員の認識に対応する「教員熱意？」に関する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差	中央値
3	15	4.16	0.58	4.23
4	331	4.39	0.42	4.45
5	671	4.54	0.37	4.60

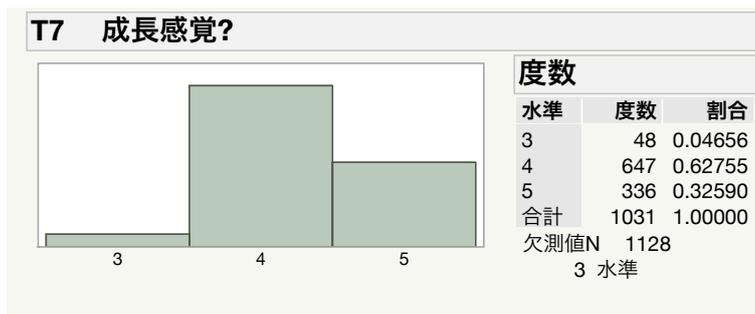


やはりこの項目に関しても他の項目と類似の傾向がある。(1) 教員の自己認識と学生の認識にはある程度の正の相関( $r = .2178, p < .0001$ )がある。その一方(2) 教員が認識するほどには熱意の多寡は学生には伝わっていない。教員が5と認識している授業の平均は4.54であり、かつ3.7未満の外れ値も多い。一方教員が3(どちらとも言えない)と認識している授業でも学生は平均4.16(どちらかと言えば熱意がある)と感じてくれている。

#### 4.3.7 【Q7】 この授業を通じて学生の「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長感覚?]

この設問に対する全科目の平均は4.28、標準偏差は0.54であった。全科目の回答分布を図表20に示す。最頻値は4である。4と5の合計で、おおよそ95%を占める。

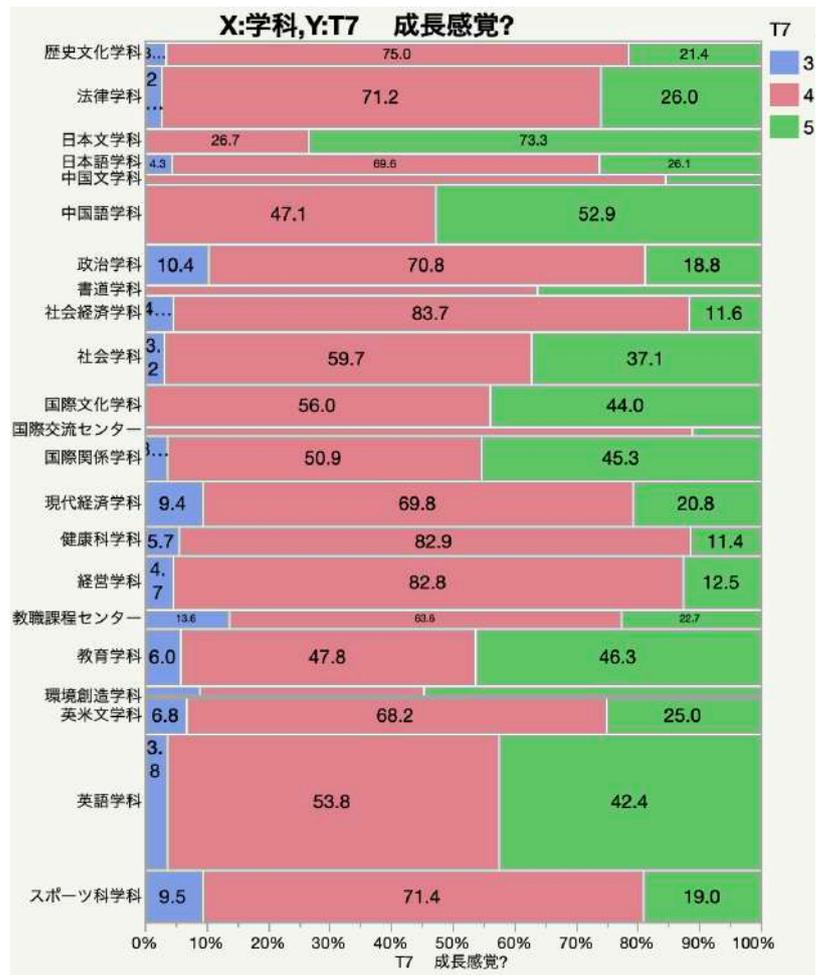
図表20 Q7「成長感覚?」に対する全科目の回答分布



部局/学科別の回答分布を図表21に示す。5(強くそう思う)の割合が最も大きかったのは環境創造学科(100.00%)であり、ついで大きかったのは日本文学科(73.33%)であった。

図表 21 Q7「成長感覚？」に対する部局／学科別の回答分布

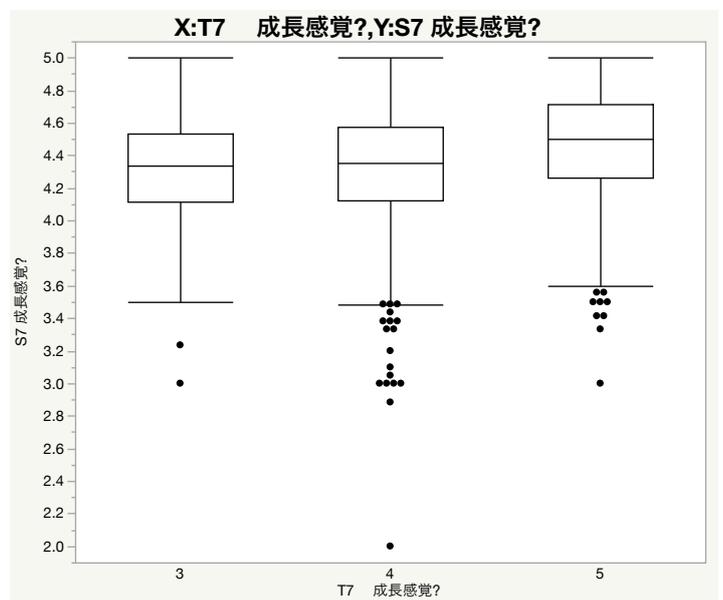
行%	T7 成長感覚?		
	3	4	5
スポーツ科学科	9.52	71.43	19.05
英語学科	3.80	53.80	42.41
英米文学科	6.82	68.18	25.00
環境創造学科	0.00	0.00	100.00
看護学科	9.09	36.36	54.55
教育学科	5.97	47.76	46.27
教職課程センター	13.64	63.64	22.73
経営学科	4.69	82.81	12.50
健康科学科	5.71	82.86	11.43
現代経済学科	9.43	69.81	20.75
国際関係学科	3.77	50.94	45.28
国際交流センター	0.00	88.89	11.11
国際文化学科	0.00	56.00	44.00
社会学科	3.23	59.68	37.10
社会経済学科	4.65	83.72	11.63
書道学科	0.00	63.64	36.36
政治学科	10.42	70.83	18.75
中国語学科	0.00	47.14	52.86
中国文学科	0.00	84.62	15.38
日本語学科	4.35	69.57	26.09
日本文学科	0.00	26.67	73.33
法律学科	2.74	71.23	26.03
歴史文化学科	3.57	75.00	21.43



この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 22 に示す。

図表 22 「成長感覚？」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差	中央値
3	48	4.29	0.38	4.33
4	637	4.33	0.38	4.36
5	332	4.46	0.36	4.50

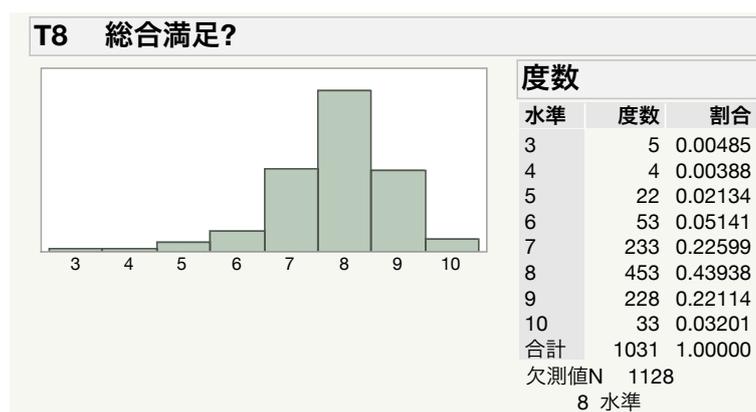


この設問でも他の設問と類似の関係はあるのだが、教員認識と学生認識の関係は、他の設問以上に弱い( $r=.1856$ ,  $p < .0001$ )。教員認識が3→4→5と上がっても、学生認識は、4.29→4.33→4.46とごくわずかしか上がらない。

#### 4.3.8 【Q8】すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。【総合満足?】

この設問に対する全科目の平均は7.85、標準偏差は1.07であった。全科目の回答分布を図表23に示す。最頻値は8であり、約44%を占める。8という水準は「80%満足である」と読み替えることができるので、「80%満足だと認識していた教員が最も多かった」と解釈できる。ちなみにこの設問に対する学生の平均値は8.16で、最頻値は10、すなわち「100%満足である」という回答が最も多かった(約25%)。授業に関する満足度に関して教員と学生を比較するならば、学生の方がやや「甘く」、教員のほうがやや「辛い」、ということになる。

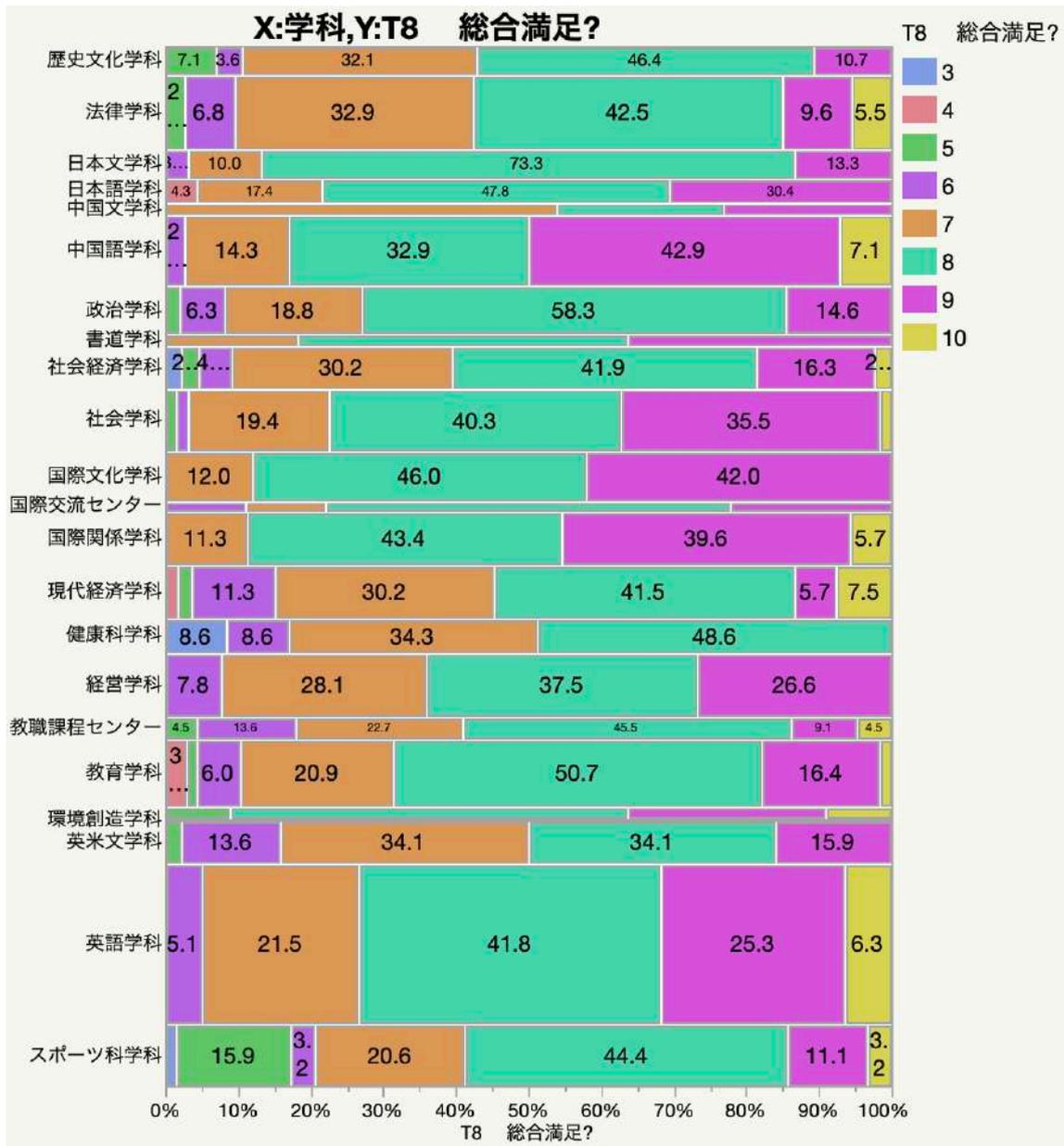
図表23 Q8「総合満足?」に対する全科目の回答分布



部局／学科別の回答分布を図表24に示す。10(100%満足)の割合が最も大きかったのは看護学科(9.09%)である。9と10を合計して割合(90%以上満足した割合)が最も大きかったのは中国語学科(50.00%)であった。学科ごとによりばらつきが見られる。この項目は「自分の授業に対して自分でどの程度満足したか」という教員の主観を問うていることを再度確認しておきたい。

図表 24 Q8 「総合満足？」に対する部局／学科別の回答分布

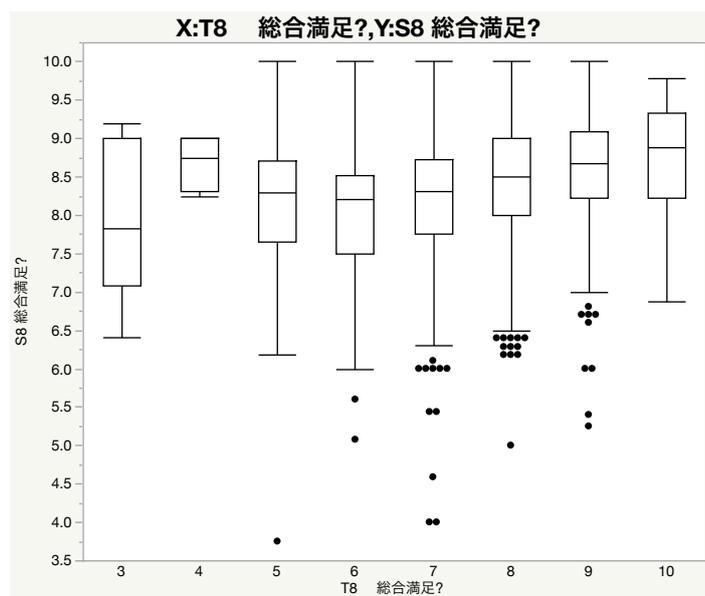
T8 総合満足?								
行%	3	4	5	6	7	8	9	10
スポーツ科学科	1.59	0.00	15.87	3.17	20.63	44.44	11.11	3.17
英語学科	0.00	0.00	0.00	5.06	21.52	41.77	25.32	6.33
英米文学科	0.00	0.00	2.27	13.64	34.09	34.09	15.91	0.00
環境創造学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	0.00	0.00
看護学科	0.00	0.00	9.09	0.00	0.00	54.55	27.27	9.09
教育学科	0.00	2.99	1.49	5.97	20.90	50.75	16.42	1.49
教職課程センター	0.00	0.00	4.55	13.64	22.73	45.45	9.09	4.55
経営学科	0.00	0.00	0.00	7.81	28.13	37.50	26.56	0.00
健康科学科	8.57	0.00	0.00	8.57	34.29	48.57	0.00	0.00
現代経済学科	0.00	1.89	1.89	11.32	30.19	41.51	5.66	7.55
国際関係学科	0.00	0.00	0.00	0.00	11.32	43.40	39.62	5.66
国際交流センター	0.00	0.00	0.00	11.11	11.11	55.56	22.22	0.00
国際文化学科	0.00	0.00	0.00	0.00	12.00	46.00	42.00	0.00
社会学科	0.00	0.00	1.61	1.61	19.35	40.32	35.48	1.61
社会経済学科	2.33	0.00	2.33	4.65	30.23	41.86	16.28	2.33
書道学科	0.00	0.00	0.00	0.00	18.18	45.45	36.36	0.00
政治学科	0.00	0.00	2.08	6.25	18.75	58.33	14.58	0.00
中国語学科	0.00	0.00	0.00	2.86	14.29	32.86	42.86	7.14
中国文学科	0.00	0.00	0.00	0.00	53.85	23.08	23.08	0.00
日本語学科	0.00	4.35	0.00	0.00	17.39	47.83	30.43	0.00
日本文学科	0.00	0.00	0.00	3.33	10.00	73.33	13.33	0.00
法律学科	0.00	0.00	2.74	6.85	32.88	42.47	9.59	5.48
歴史文化学科	0.00	0.00	7.14	3.57	32.14	46.43	10.71	0.00



この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 25 に示す。

図表 25 「総合満足？」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差	中央値
3	5	8.00	1.09	7.83
4	4	8.68	0.38	8.74
5	22	8.09	1.34	8.30
6	52	7.98	0.97	8.20
7	229	8.15	0.98	8.31
8	446	8.42	0.82	8.50
9	226	8.60	0.78	8.67
10	33	8.74	0.72	8.88



総合満足度についても以下のことが言える。(1) 教員認識が6～10 (60%満足～100%満足) のゾーンに関しては、学生認識との間にゆるやかな正の相関がある。しかし7～9など教員が認識する満足度が高いゾーンでも、学生認識には下方の外れ値が存在する、つまり満足度の低い学生も存在する。(3) 教員の満足度がかなり低い(3～5)の場合でも、学生の満足度はかなり高いことがある。(ただし水準3と4は度数が少ないため参考程度にしかならない。) 全体の相関係数は  $r = .2200$ ,  $p < .0001$  である。

## 5. 結論

教員の認識に関して全学レベルでまとめるならば以下のようなものである。

1. シラバス通りに授業は実施した、という認識は非常に強かった。これは学生の認識とも一致した。
2. 授業の難易度については「適切だった」という認識が最も多く、ついで「やや難しかった」という認識が多かった。これは学生の認識とも一致した。
3. 質問やメールに対する対応は迅速だったという認識が非常に多く、これは学生の認識とも一致した。
4. 提出物に対するフィードバックは「どちらかと言えば丁寧だった」という認識が最も多かった。学生の認識は「丁寧だったと強く思う」というものが最も多かった。
5. 学生の意欲に関する認識は、「どちらかと言えば意欲的だった」という認識が最も多かった。これは学生の認識と一致した。
6. 教員としての自分は授業に熱意を持っていたかに関しては「強くそう思う」という認識が最も多く、この点は学生の教員についての認識と一致した。ただし、教員側からは1と2という認識は皆無だったが、学生からみると1(まったくそう思わない)、2(どちらかと言えばそう思わない)という回答が割合は少ないものの無視できない度数があったことは留意せねばならない。
7. 学生が成長したかについての認識は、「どちらかと言えばそう思う」が最も多かった。一方学生は「強くそう

思う」が最も多かった。この点について教員の認識は学生よりもやや厳し目であることが判明した。

8. 総合的な満足度については教員の最頻値は8であったが、一方学生の最頻値は10であった。すなわちこれについても教員の認識は学生のそれよりもやや厳し目であったと言える。

以上全学的には、概ね望ましい結果が得られたと考えられる。一方、部局／学科別に大きな違いが見られた設問もあり、さらには個々の授業に関しては、改善の余地も十分にあると思われる。「学生による授業認識アンケート」の結果からは、「学生が成長の実感を持つこと」や「授業に対する教員の熱意を感じる」が、総合的な満足度を上げるために重要である、という示唆も得られている。教員は高い満足度を感じていても、学生の満足度は例外的に低いという「外れ値」の存在も本報告で明らかになった。これらの「外れ値」の存在の理由については、個々の教員が当該授業内での自由記述などにヒントを求めつつ、「外れ値」をなくす方策を模索することが求められよう。

以上

# 3.1.3 学生による評価認識アンケート【前期】

## 1. 目的

授業を履修した学生が、与えられた評価をどう認識するかを調査することで、次の学期以降の授業運営および評価の参考にするために実施した。

## 2. 実施の対象

『授業に関する学生の認識アンケート』と同一科目とした。

## 3. アンケート項目

Q1. あなたがこの授業で得た評価はどれでしたか？ S/A/B/C/D/E

Q2. 授業目標や自分の学修努力の程度に照らして、この評価についてあなたの認識は次のどれに近いですか？

①低/厳しすぎる ②やや低い/厳しい ③概ね妥当である ④やや高い/甘い ⑤高/甘過ぎる

※この回答如何によって評価が変わるものではないことを明記した。

## 4. 結果

### 4.1 対象科目数

対象科目数は 2,159 科目、対象のべ学生人数（各対象科目内の履修者数の合計）は 101,314 名であった。

### 4.2 のべ回答者数と回答率

全学ののべ回答者数は 12,264 名で、回答率は 12.1%であった（図表 1）。授業科目別にみると 2,159 科目中、ひとり以上回答された科目が、1,968 科目(91.2%)、ひとりも回答のなかった科目が 191 科目あった。

図表 1 全学の回答率

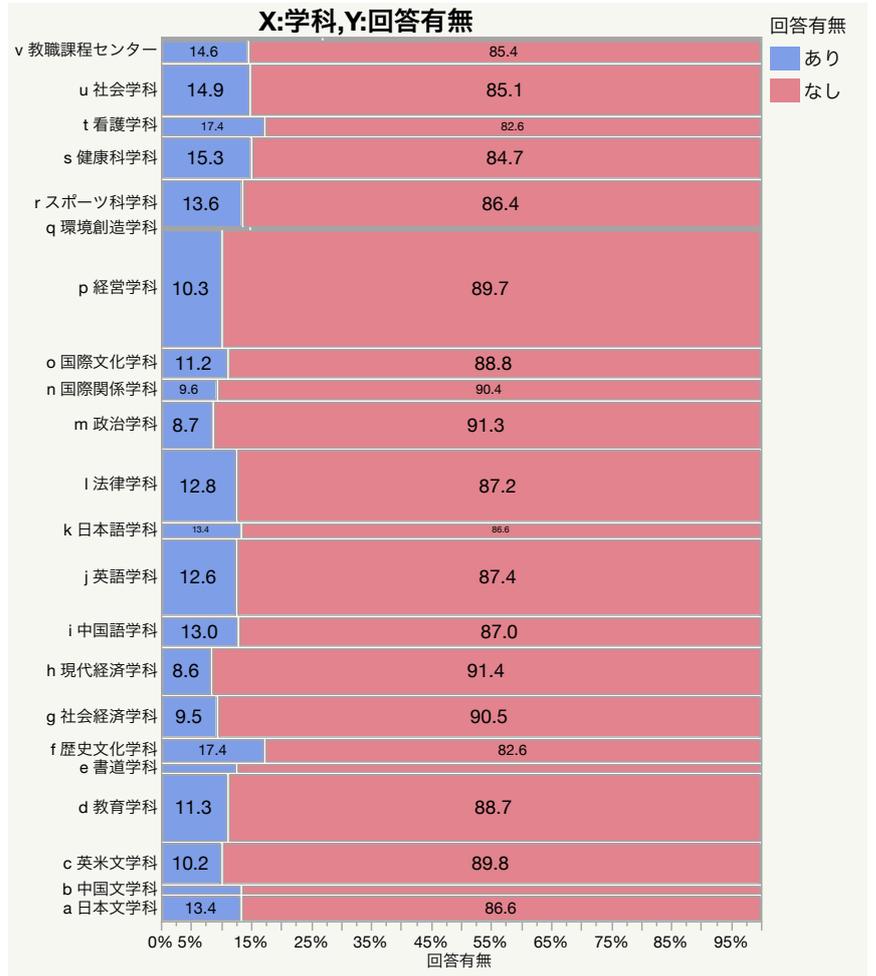


このように回答率が非常に低いため、以下で提示する結果の解釈の妥当性は、すべて非常に限定的なものとなることをまず認識する必要がある。

部局／学科別の回答率の状況を図表 2 に示す。右方のバーグラフは太さが部局／学科の在籍人数に比例しており、場合によって非常に細くなっている。回答率が最も高かったのは部局では国際交流センター(26.9%)、学科では歴史文化学科と看護学科（いずれも 17.4%）であった。なおバーグラフ内では度数の小ささのために国際交流センターは不可視となっている。

図表2 学科別の回答率

行%	回答有無	
	あり	なし
a 日本文学科	13.44	86.56
b 中国文学科	13.39	86.61
c 英米文学科	10.24	89.76
d 教育学科	11.27	88.73
e 書道学科	12.64	87.36
f 歴史文化学科	17.40	82.60
g 社会経済学科	9.54	90.46
h 現代経済学科	8.62	91.38
i 中国語学科	12.97	87.03
j 英語学科	12.60	87.40
k 日本語学科	13.36	86.64
l 法律学科	12.78	87.22
m 政治学科	8.65	91.35
n 国際関係学科	9.59	90.41
o 国際文化学科	11.16	88.84
p 経営学科	10.31	89.69
q 環境創造学科	15.00	85.00
r スポーツ科学科	13.57	86.43
s 健康科学科	15.27	84.73
t 看護学科	17.40	82.60
u 社会学科	14.87	85.13
v 教職課程センター	14.63	85.37
w 国際交流センター	26.87	73.13



学年別の回答率を図表3に示す。1年、2年、3年、4年と学年が進行するにつれて回答率が17.7、12.7、7.0、3.6と減少しているのが観察できる。なお学年の「0」は科目等履修生を指す。

図表3 学年別の回答率

度数 行%	回答有無		合計
	あり	なし	
0	7	54	61
	11.48	88.52	
1	6094	28259	34353
	17.74	82.26	
2	4079	27993	32072
	12.72	87.28	
3	1690	22310	24000
	7.04	92.96	
4	394	10434	10828
	3.64	96.36	
合計	12264	89050	101314



### 4.3 回答者に与えられた評価

今回のアンケートでは Q1 として、自分に与えられた評価が何であったかを問うた。2021 年度前期の評価分布は例外科目を除き、全体としては基本的に図表 4 に示す評価付与内規の割合に概ね従っているはずである。

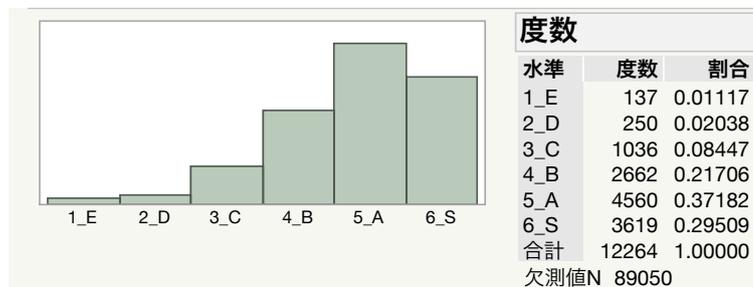
図表 4 今回の評価での付与内規（修正版）における各評価の割合目安

評価	S	A	B	C	D	E
%目安	10～20%程度	20～25%程度	20～25%程度	10～20%程度	なし	なし

評価付与内規で規定している分布は A と B が最も多く、次に S と C が同程度に多いというものだが、今回の評価の認識アンケートに回答した学生は、その全学の母集団分布と明らかに異なっていた。アンケートに回答した学生に付与された評価の分布を図表 5 に示す。A が突出して 37.1% を占め、次いで S が 29.5% を占めている。C はわずか 8.5% に過ぎない。

すなわち今回のアンケートは全体の回答率が 12.1% と低かったが、学生たちは付与された評価に関わらずその内の 12.1% が満遍なく回答したのではなく、S や A などの高い評価を付与された学生が中心となって回答した、ということがわかる。母集団の中には同じ程度いるはずの A を付与された学生群と B を付与された学生群では前者のほうが、S を付与された学生群と C を付与された学生群でも前者のほうが、それぞれ回答率が格段に高かったということである。

図表 5 アンケート回答者に付与された評価の分布

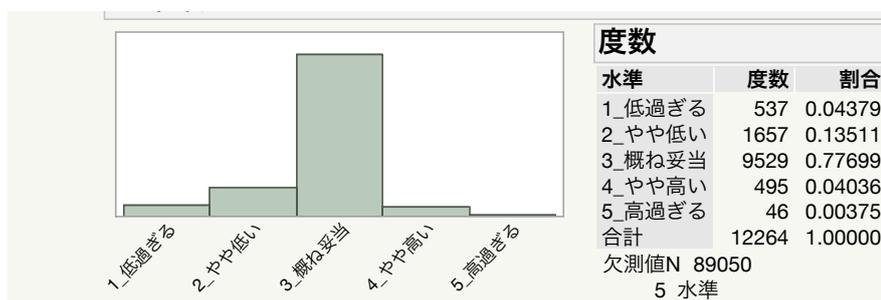


なお、この回答者の評価分布を部局／学科別、学年別に集計することはもちろん可能であり実際に行ってもみた。部局／学科別にも学年別にもそれぞれ微妙に異なっていることを確認したが、それぞれのセルの度数も小さくなりかつ特段の意味があるとは考えられないため、具体的な数値や図表をここで示すことはしない。

### 4.4 与えられた評価に対する認識

Q2 では、与えられた評価に対する認識を 5 段階尺度で問うた。全学の分布を図表 6 に示す。

図表 6 与えられた評価に対する認識の分布：全学

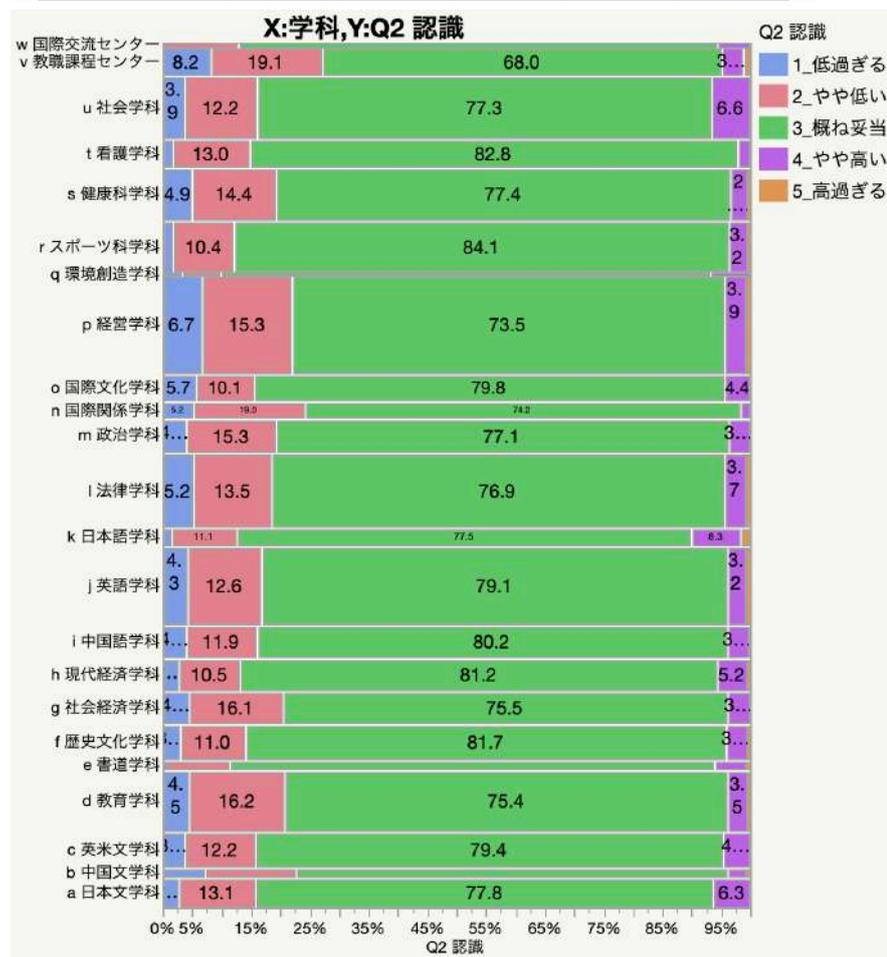


圧倒的に「3 概ね妥当である」という認識が多く、77.7%を占める。次いで多いのは「2 やや低い」であるが割合は急激に下がって13.5%である。「2 やや低い」「3 概ね妥当である」「4 やや高い」の3つのレベルを合計すると95.2%である。つまり95.2%の学生は自分に付与された評価が「低過ぎる」とも「高過ぎる」とも認識していないということであり、これは妥当な状況であると言えるのではないだろうか。なお、5段階尺度を連続変数として扱って平均値を求めると2.83である。「概ね妥当」と「やや低い」の間に位置している。

次に部局／学科別の分布を図表7に示す。

図表7 与えられた評価に対する認識の分布：部局／学科別

行%	Q2 認識				
	1_低過ぎる	2_やや低い	3_概ね妥当	4_やや高い	5_高過ぎる
a 日本文学科	2.80	13.08	77.80	6.31	0.00
b 中国文学科	7.19	15.69	73.20	3.27	0.65
c 英米文学科	3.79	12.18	79.44	4.59	0.00
d 教育学科	4.46	16.25	75.40	3.55	0.34
e 書道学科	0.67	10.74	82.55	5.37	0.67
f 歴史文化学科	3.14	11.00	81.73	3.73	0.39
g 社会経済学科	4.56	16.05	75.49	3.90	0.00
h 現代経済学科	2.72	10.46	81.17	5.23	0.42
i 中国語学科	4.19	11.89	80.18	3.52	0.22
j 英語学科	4.33	12.64	79.13	3.18	0.71
k 日本語学科	1.58	11.07	77.47	8.30	1.58
l 法律学科	5.21	13.49	76.93	3.72	0.65
m 政治学科	4.03	15.29	77.07	3.61	0.00
n 国際関係学科	5.24	18.95	74.19	1.61	0.00
o 国際文化学科	5.68	10.08	79.84	4.39	0.00
p 経営学科	6.75	15.34	73.51	3.91	0.50
q 環境創造学科	3.33	6.67	83.33	6.67	0.00
r スポーツ科学科	1.88	10.36	84.12	3.23	0.40
s 健康科学科	4.94	14.42	77.44	2.80	0.40
t 看護学科	1.97	13.02	82.80	2.21	0.00
u 社会学科	3.90	12.25	77.28	6.57	0.00
v 教職課程センター	8.19	19.11	67.99	3.72	0.99
w 国際交流センター	0.00	12.96	81.48	5.56	0.00



「3 概ね妥当である」の数値は学科別に多少異なっているが、ほとんどの部局／学科で70～80%を占めている。「3 概ね妥当である」の割合が最も大きいのはスポーツ科学科(84.1%)であり、最も小さいのは教職課程センター(68.0%)であった。逆に「1 低過ぎる」の数値が最も大きいのは教職課程センター(8.2%)であり、最も小さいのは国際交流センター(0.0%)である。すなわち教職課程センターが「概ね妥当である」の割合が中では最も小さくかつ「低過ぎる」が最も大きいという結果になった。

教職課程の学生群は卒業単位にならない授業科目も履修するため学修時間もその他の学生群よりも一般的には長いと推察されるが、その努力に比して「評価が厳しい」という認識を持つことが多いためこの結果につながったのだろうか。あるいは教職課程科目の授業担当者が、資格や免許取得者の質保証の観点から、評価付与基準の一定の範囲の中でやや厳し目に評価する傾向があるのかも知れない。今回のアンケートではQ2の認識についての理由までは回答を求めなかったため、これ以上の探究は不可能である。今後は認識の理由について自由記述を求めたほうがよいのかも知れない。

学年別の分布を図表8に示す。科目等履修生を除くと、「3 概ね妥当である」の割合が最も大きいのは4年生(81.5%)であり、次に1年生(79.3%)、2年生(76.7%)と続き、最も小さいのが3年生(73.5%)である。逆に「1 低過ぎる」が最も大きいのは3年生(6.5%)であり、最も小さいのが4年生(1.8%)である。1・2年生を真ん中にはさんで3年生と4年生が両極端に位置するという結果になっているのだが、これが回答率の低かった今回に限った結果(ある意味でのノイズ)なのか、何らかの意味がある再現性のあるパターンなのかは今回のデータからは不明である。今後このアンケートを実施してゆくなかで同様のパターンが観察されるのかに注意しつつ、上で述べたように自由記述設問の増設も視野に入れて検討する必要があるだろう。

図表8 与えられた評価に対する認識の分布：学年別



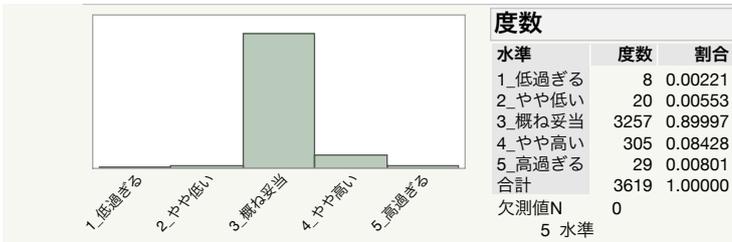
#### 4.5 与えられた評価と認識の関係

付与された評価のレベルとその評価に対する認識には何らかの関係はあるだろうか。すなわち例えば、評価のレベル（A～E）によって「3 概ね妥当である」と認識する率に違いがある、などの現象は見られるだろうか。この点を検証するため、Q1 と Q2 の結果を全学でクロス集計したのが図表9である。パーセンテージの数値を見ると、評価のレベルによって明らかに認識の分布のパターンは異なっている。より視認しやすくするために、認識分布のヒストグラムとして評価レベルごとに図表10～図表15として示す。

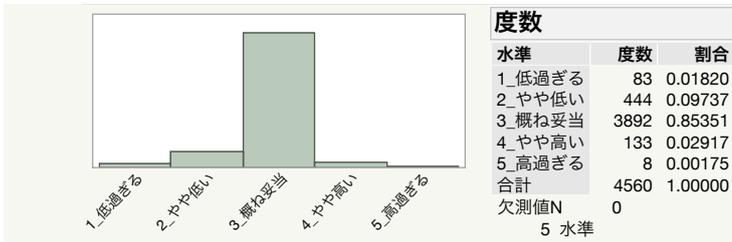
図表9 付与された評価とその評価に対する認識の関係（全学）

Q1 評価	Q2 認識					合計
	1_低過ぎる	2_やや低い	3_概ね妥当	4_やや高い	5_高過ぎる	
1_E	20 14.60	30 21.90	86 62.77	1 0.73	0 0.00	137
2_D	93 37.20	76 30.40	77 30.80	2 0.80	2 0.80	250
3_C	177 17.08	331 31.95	512 49.42	12 1.16	4 0.39	1036
4_B	156 5.86	756 28.40	1705 64.05	42 1.58	3 0.11	2662
5_A	83 1.82	444 9.74	3892 85.35	133 2.92	8 0.18	4560
6_S	8 0.22	20 0.55	3257 90.00	305 8.43	29 0.80	3619
合計	537	1657	9529	495	46	12264

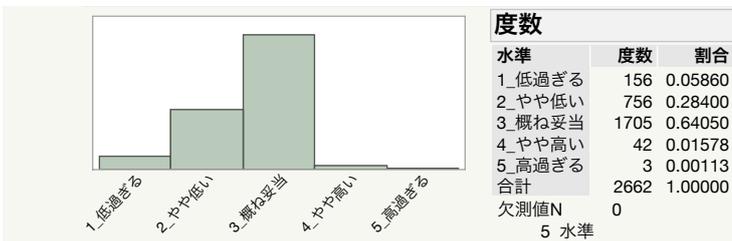
図表10 評価がSの場合の認識の分布



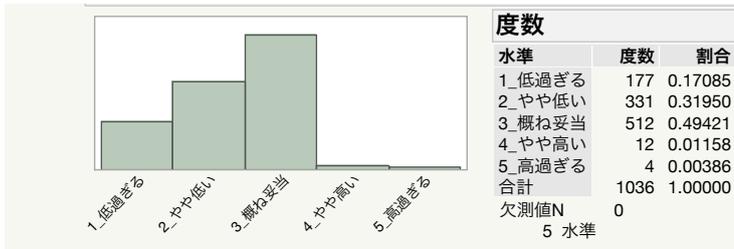
図表11 評価がAの場合の認識の分布



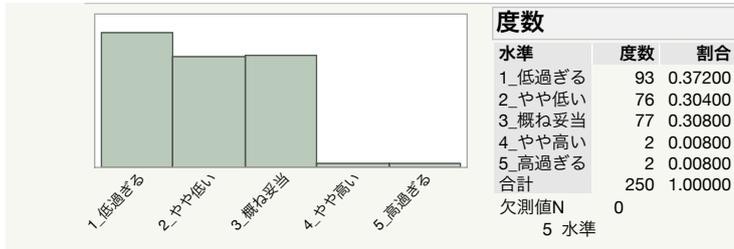
図表12 評価がBの場合の認識の分布



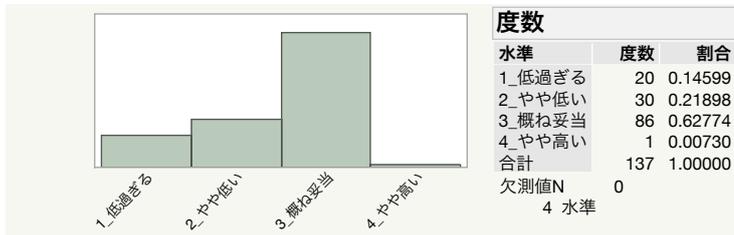
図表 13 評価が C の場合の認識の分布



図表 14 評価が D の場合の認識の分布



図表 15 評価が E の場合の認識の分布



図表 9～15 から、少なくとも以下のことが観察できる。

- 「概ね妥当である」という認識は、S の場合が最も高く（90%）、以下評価レベルが下がるごとに、 $S > A > B > C > D$  とその認識の割合も下がってゆくのだが、E だけは別で、62.8%と、B とほぼ同じ水準にある。E が与えられるは出席回数が足りないなどの、そもそも評価が付与される要件を満たしていない場合であるが、そのような客観的な状況は当該の学生も承知しているため、「概ね妥当である」という認識が強くなると考えられる。
- S の場合には、「やや高い」「高過ぎる」と感じる学生も割合は少ないながらも存在し、その数値は他の評価レベルの場合よりも高い。
- S の場合に、「やや低い」と「低過ぎる」と回答した学生が少数存在しているが、S が最高の評価であることに照らして妥当／有効な回答とは言えない。単純な回答ミスなのか何らかの意図があるのかは不明である。
- 「やや低い」も「低過ぎる」もそれぞれ、 $S < A < B < C < D$  と、評価レベルが下がるに従って割合が「順当に」増えている。（ただしやはり E は別で、「やや低い」「低過ぎる」ともにそれほど多くはない。）「順当に」と書いたのは、評価レベルが下がるに従って「この評価は低いではないか」と感じる割合が増えるのはある意味で当然だからであり、今回のアンケート調査の回答の信頼性のひとつのエビデンスとも解釈できる。
- D の場合には、「低過ぎる」が 37.2%と最も高い。「低過ぎる」という回答は付与された評価が相当ではないという認識の表明であり、このまま放置されてはなるまい。

6. 一方 D の場合には、「やや高い」「高過ぎる」という回答も存在し、その部分は回答の信頼性が疑われる。

## 5 考察

与えられた評価について学生がどう感じているのかを調査するアンケートは今回初めて実施されたものである。従来この部分については全く手つかずであったため、今回実施されたことの意義は大きいと言えよう。

ただし全学の回答率は 12.1%と低かったため、結果の解釈には慎重であるべきである。どのような学生が回答しどのような学生が回答しなかったのかに関して我々は推測することしかできない。一般論として、人はものごとに対して何らかの強い意見を持っている場合のほうが、特段の意見をもっていない場合よりも、その意見を表明したくなる傾向があると言えるだろう。それを今回のアンケートに当てはめるならば、回答してくれた 12.1%の学生たちは比較的強い意見を持っていた学生たちであり、一方、回答のなかった 87.9%の学生たちは敢えて表明するほどの強い意見を持っていなかったから回答しなかったのではないか、という一つの推論は不可能ではない。もしその推論が基本的には妥当であるならば、今回の回答率の低さは見かけほどの大きな問題ではないということになる。つまり回答しなかった 87.9%の学生たちの少なくとも大多数は、当該の評価に対して特段の不満がなかったからこそ、敢えて「面倒な」回答をする意欲がわかかなかったのであり、仮に回答していたならば多くが「概ね妥当である」を選択してははずである、という推論が可能ではある。

しかしながら回答した 12.1%の学生たちが付与された評価の分布を見ると、以上の希望的推論の妥当性に疑問を抱かざるを得ない。つまり評価に対する満足度が比較的低い学生たちのほうが、満足度が比較的高い学生たちよりもアンケートに積極的に回答して意見表明しようとする傾向があるとするならば、不合格である D や合格最低レベルである C を得た学生たちのほうが、最高レベルを得た S や A を得た学生たちよりも、回答率が高くなはずである。しかし現実には多く回答したのは A、そして S を得た学生たちであり、D や C を得た学生たちで回答したケースは合わせて 15%ほどに過ぎない。つまり回答しなかった学生たちはみな「満足」であったからこそ回答しなかったのだという想像は当を得ていないことになる。むしろ回答した学生たちは比較的「満足」であったからその「満足」をいわばさらに味わうために回答し、評価に「不満足」であった学生たちは不満であるがゆえにその時点で本アンケートに対して背を向けてしまったのかも知れない。

以上、正反対の 2 つの推論を試みた。しかしどのような推論を重ねたにしても、データの得られなかった 87.9%の学生たちの実態に関しては結局のところ不可知と言わざるを得ない。以下はあくまでデータのある 12.1%の学生たちの回答からに限り得られる限定的な示唆である。

(1) 全学的に見ると評価は概ね妥当だと認識されている。

全学的に見て、成績評価に対する学生の認識は「概ね妥当である」が 80%近くを占め、「低すぎる」あるいは「高過ぎる」は合計で 5%に満たなかった。「やや低い」「概ね妥当である」「やや高い」の 3 つを合わせた割合は 95%である。これはとりあえず安堵してよい状況ではないだろうか。

2021 年度は評価付与内規（修正版）に基本的には準拠した評価がなされた事実上の初年度と言える。各教員がそれぞれの基準のみで評価を付与していた過年度には今回のようなアンケートは実施していないので比較はできないのだが、評価付与の分布に対してゆるやかな形でガイドラインを設けたことによって、評価に対して「不当である」という感覚をもつ学生が減ったということは理屈の上では十分にあり得ることである。

(2) 評価が妥当でないという認識は評価レベルが下がるほど高くなる。

S よりも A、A よりも B、B よりも C、C よりも D になると「この評価は低過ぎる」という認識が強くなる、あるいは少なくともそのような回答の割合が大きくなる。これは一定の時間と努力を当該授業に注ぎ込んだ学生の感情としてある意味で自然なものであり、とくに不合格である D 評価を付与された学生がある程度以

上の落胆やフラストレーションを感じるのは避けることはできません。この意味でこのようないわば予想通りのパターンが明らかになったことは、本アンケートの回答の信頼性を示唆するものでもあるだろう。

そうではあっても、例えばD評価を得た学生の37%がそれは（妥当である範囲を超えて）「低過ぎる」と認識しているのであれば、その状況は決して放置されてよいとは言えないだろう。当該授業で求められる到達目標を十分に理解し、評価の基準と方法を正確に理解し、学期末に自らが到達したレベルと到達すべきだったレベルの異同を適切に把握していたならば、結果的にD評価が付与されたとしても、「確かに妥当である」と認識することは十分に有り得るはずだ。現にD評価を得た中の31%の学生たちは「概ね妥当である」と回答している。

もちろんD評価を付与せざるを得ない学生を出さないのが理想ではあるが、不幸にしてD評価となった場合にもその評価に対して「納得」する学生の割合を増やしてゆくことが、今後目指すべきひとつの方向と言えるだろう。そのためには学生から見るとブラックボックスになりがちである評価の観点や方法や内容について、可能な限り学生の視点から見た場合の透明性を担保してゆく努力が求められよう。いわゆるルーブリックの考え方を参考にして、評価の観点と基準を言語化したものを教員と学生であらかじめ共有しておくことなども有効だと考えられる。

## 6. おわりに

本アンケートの目的は学生の認識の実態を可視化することで中長期的な視点で我々の授業運営や成績評価に活かすことであった。より精密な可視化を達成するためには今回よりもずっと多くの学生たちの認識データを得ることがどうしても不可欠である。

次回以降に実施する際には学生に対してアンケート目的をより良く周知し、回答率の向上を目指したい。この点に関して各授業担当者の一層のご協力をお願いする次第である。

さらに、付与された評価に対する認識を選択式で尋ねるだけでなく、そのような認識を持った理由を自由記述で回答してもらうことが学生の認識のより正確な可視化につながるという示唆も得られたため、この点についても検討してゆきたい。

以上

## 3.1.4 各学部・学科による考察【前期】

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 日本文学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

●「シラバス」「難易度」「参加意欲」「教員の熱意」「成長実感」「総合満足」等、すべてにおいて全学平均値付近であり、総合的にバランスの取れた授業展開をしている。

●その反面、学科の特色や魅力が反映していないとも言えて、全体的に底上げが必要である。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

●「1」同様に、教員サイドでも、すべての設問において全学の平均値付近をマークしている。

●各教員が、無難に授業を遂行しているが、やはり学科の個性が埋没している感が否めない。

---

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 中国文学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

中国文学科の場合、他学科と比較すると全体で高数値なことが伺える。国際交流センターを除き、学科別では殆どが1位となった。

回答形式で、「おおむね満足をしている」以上の数値でカウント（四捨五入）をすると、学生の行動、そして学生からみえる教員の行動は8割超える満足感であったといえる。また、メールでの連絡をしたことがある学生は他と比べると低数値であるが、それに対する教員の反応からみると、非常に手厚く指導をしていると伺える。

学生の行動		教員の行動	
シラバスを読んでいるか	82%	シラバス通りで授業進行をしているか	91%
メールで連絡をしたことがある	25%	メールの対応が迅速	80%

提出物を出したことがある	86%	提出物の対応が迅速	86%
自分の熱意	87%	教員の熱意を感じる	93%
成長した感覚がある	93%		
総合的に満足をしている	84%		
難易度（ちょうど良い、やや難しい）	90%		

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

中国文学科の場合、他学科と比較すると全体で高数値なことが伺える。そして、「1.」と比較しても、学生が思ったことと、教員が思っていることの数値の一致が読み取れた。

回答形式で、「おおむね満足をしている」以上の数値でカウント（四捨五入）をすると、教員自身の行動はほぼ10割を超える満足感であったといえる。

教員の行動		学生の行動	
シラバス通りで授業進行をしているか	92%	熱意をもって取り組んでいると思うか	100%
難易度は適切だと思いますか	100%	成長を促せたと思うか	100%
質問やメールに対する対応は迅速か	100%		
フィードバックは丁寧だったか	100%		
熱意をもって授業に取り組んだか	100%		

2021年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 英米文学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

まず、全体的な結果を見ると、突出して低い平均値は出ていないことに気が付く。その上で、すべての項目について、平均値が上昇する余地は十分があるので、その実現を念頭に置き、学科が提供する教育の現状について議論を行っていくことが望まれる。

個々の質問で気になったものとしては、まず授業の難易度に関わる【Q2】がある。全学平均値が3.57であるのに対し、英米文学科の平均値は3.45と若干低い。回答分布を見ると、「やや難しい」と答えた学生の割合は33.75%であり、3割を超えている。他学科と比較すると、これは平均的、あるいは若干低めの数値であり、難易度においては適正に学生の期待に見合った、あるいは学生の期待を超えて少し難解な内容の授業が提供できていると考える。仮に大学の教育の目的を、学生の現在の能力と、それを越える水準の能力を架橋するための「足場を提供する(scaffolding)」ことと捉えるのであれば、現状でも問題がないとは言えるが、むしろ「4や

難しい」の割合がより増加する傾向が望ましいとも言える。

【Q4a】【Q4b】【Q6】【Q7】【Q8】については、授業に対する教員側の取り組みと、その結果、学生側に生じた学習成果の実感が、総合的に測定される選択肢であると考えられるが、おおむね高めの数値が結果として出ており、学科が提供する教育に一定の質が保たれていると解釈することがひとまず可能である。それと同時に、特にフィードバックに関わる【Q4b】の間においては、現状の4.03という平均値がさらに高くなるに越したことはない。特に、2020年から21年にかけての、オンライン授業の経験を通して、課題に対するフィードバックが授業の中心のひとつと、学生にも教員にも認識されるようになった現在の状況を考えると、それはいっそう強く望まれる改善点である。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

こちらも、全体的な結果を見ると、突出して低い平均値は出ていない。その上でまた、すべての項目について、平均値が上昇する余地は十分にあるので、その実現を念頭に置き、学科が提供する教育の現状について議論を行っていくことが望まれる。

ここの質問で気になったものとしてはシラバス通りの授業実施に関わる【Q1】がある。回答として「どちらともいえない」が担当教員によって選択された授業の割合が11.36であり、これは他学科と比較して少し高い数値である。各担当教員がシラバスを執筆するタイミングは、前年度の12月ごろであることが一般的であり、その段階で翌年度の授業を実現可能な形で計画をしているか否か、という授業計画についての教員の取り組みのありようが、この間によって可視化されるのだと考えられる。この観点で言えば、当然、選択肢5と4に回答が集中することが望ましい。強く改善が望まれる点であろう。ただ、一方で、シラバスを厳密に実現しつつ、授業開始後に、実際の学生の現状に合わせて柔軟な対応が模索される余地は残すべきだ（つまりシラバスの柔軟な実現の必要性）とも言える。この点も付記しておく。

また【Q4】の教員側のフィードバックに関わる問いでは、6割を超える教員が「どちらかと言えば丁寧」を選択した。この項目に関しては、理想的には当然、選択肢5に回答が集中するべきであるので、フィードバックに焦点を当てた教育の実践の必要性を大々的に、学科の教員全体に共有する機会があるべきであると考えられる。同時に、選択肢にある「丁寧」という言葉も、フィードバックについて詳細に考える際にはかなりあやふやな用語なので、①どのような授業において②どのようなフィードバックが③どのような観点から効果的か、という点について学科全体、そして教員個人が、より細分化した問を立て、追求していく必要性も感じる。

---

2021年度前期「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 教育学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

①高数値だったのは、授業提出物の提出経験91.7%（学科別順位は5位）であり、これは学科生が真面目に授業に取り組んでいた事を表わしているとも言えるかもしれない。ただ、提出物を「出した」という回答については、毎回のレスポンスやレポート課題を100%提出したことを指すのか、時々なのか、1回でも良いのかは回答者判断に任されているので、必ずしも真剣・誠実な学習実態の指標であるとは限らない。

②低数値側では、アンケートそのものの回答率が平均（29.7%）より低い（26.4%）ことが目立つ。学内通知・連絡のチェック習慣の甘さ、コンプライアンス（規範意識）の問題等が現われていると解釈するならば、学科としての課題となるかもしれない。

また、シラバス内容を「知っている」とする比率の相対的低さ（75.6%、最下位）が目にとまる。ただ、「知っている」と回答した学生が、ウェブシラバスを事前に精読して理解しているのか、授業での教員の説明等から大まかにつかんでいる程度なのかは不明である。そのため、この項目の相対的高低が持つ意味については判断としない。

③総合満足度は、100%と90%の選択が49.6%を占め、全学平均値をわずかに上回り、21学科中11位と相対的に中位であった。総合満足度と連関すると想定される学生の「成長感覚」「教師熱意」は、いずれも全学平均値をわずかに上回り12位、10位という中位であった。

## 2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

①高数値項目の一つは、授業難易度が「適切だった」との判断（73.1%）であり、学科別の相対順位5位レベルであった。ただ、学科の学生側が難易度「適切」と答えた割合は46.7%に留まっており、むしろ「難しい」とした割合は50%であった。ここにはギャップがあるように思われる。

また、学生の受講意欲については92.5%が高評価をしており、学科順位は3位レベルであった。学生の受講意欲の自己評価でも86.4%が意欲を持って取り組んだと回答しており、ここではズレがほとんど無かった。

さらに、学生が成長した（知識、思考、技能）との評価については46.3%が「強くそう思う」と答えており、これは学科順位5位であった。他方、学生側において「成長があった」と強く思う割合は48.9%であり、この項目でもズレは少なかった。

なお、授業についての自分の熱意については98.5%がある（そう思う・強くそう思う）という高率であったが、他学科も同様であり差はほとんど無かった。

②低数値側については、アンケートの回答率の低さ（42.4%）が挙げられる。学科により1割台から8割台までバラツキがあるが、42%は相対的に低位であり、学生の回答率の低さと共通する課題があるかもしれない。

③教員の総合的な「授業満足度」については、100%と90%の選択は17.9%に留まり、学生側の授業満足度（9,10段階で49.6%）に比して、厳し目の評価といえるかもしれない。これは「結果報告」に記されている全体的傾向の指摘と同様である。このズレの意味については今後考察の必要がある。

---

### 2021年度前期 「学生による授業認識アンケート」および 「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 書道学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

Q8満足度が10の学生が高数値にある。各授業での個人への対応とともに課題に対する問題提起を適切に行ってきたことが評価されたと思われる。

Q2難易度については易しいと感じている学生の割合がやや高い。これは実技など個人差が大きいことによるものと思われる。よりきめ細やかな指導を課題として取り組むことが必要と思われる。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

Q5 学生の意欲・熱意を強く持つて取り組む姿勢は、Q6 学生一人ひとりに対するきめ細かな取り組みが評価された結果と思われる。

Q4 F Dに関しては実技を伴う学科のため文字による指示が学生にとっては伝わりにくいことがあるため、対面時にそのフォローを適切に行うよう取り組む必要があると思われる。

---

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 歴史文化学科

1 「学生による授業認識アンケート」に対する分析

殆どの設問に対する学生の回答は、他学部・他学科のそれと概ね大差はないが、相対的に概観すれば、他学部・他学科の学生の回答より高い評価を得ている印象がある。そのような中、Q3 b「対応迅速」に対する回答5（とてもそう思う）の割合が50.7%と、学科で言えば、中国文学科の61.11%、看護学科の51.72%に次いで高い数値を得ていた。こうした数値は学生対応の上では大変重要な評価であり、今後もこうした数値を維持出来るよう取り組んでいきたい。

2 「教員による授業認識アンケート」に対する分析

殆どの設問に対する教員の回答は、他学部・他学科のそれと概ね大差はない。そのような中、歴史文化学科所属の教員によるQ5の「学生意欲」に対する回答は、5（とてもそう思う）・4（そう思う）の割合がそれぞれ30%台であり、中国文学科、法律学科に次いで低い数値となっている。このように、私たち教員の多くが、学生たちの意欲が物足りないという認識を強く持っていることが明らかになったので、今後、学科協議会等で学生たちの意欲を高めるためにはどのような取り組みを増やしていけばよいのかについて議論を重ねていきたい。

3 「学生による授業認識アンケート自由記述回答部分」に対する分析

様々な記述があり、これを総合した所見は述べ難い。各教員がそれぞれに受けとめて、対策を講じるべきものについては、早急に対応する旨を確認しあった。

4 上記以外

本学科所属教員の中には、独自に自身が担当する授業についてのアンケートを適宜実施しており、全学的なアンケートの目的とはまた別に、こうした取り組みも重要である。

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

経済学部 社会経済学科・現代経済学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

10 点満点で評価した「Q8 総合満足度」について、社会経済学科の平均は 7.94、現代経済学科の平均は 8.09 であり、全体平均の 8.16 と比べるとやや低い。原因を考察するうえで、「Q2 難易度適切?」「Q4b FB 丁寧?」「Q5 自分意欲?」の回答が重要かもしれない。

授業の難易度を尋ねた「Q3 難易度適切?」の結果を見ると、社会経済学科 (3.69)・現代経済学科 (3.67) とともに平均 (3.57) と比べてやや高い (数値が高いほど「難しい」)。授業を難しいと感じた学生が授業に不満を覚えることはあるだろう。ただし授業の難易度が高くても、教員が良質な「サービス」を提供すれば学生の満足度は高くなり得る。その点で興味深いのは、提出物に対するフィードバックが丁寧だったかどうかを尋ねた「Q4b FB 丁寧?」の結果である。現代経済学科は全体平均と同じ 3.97 (数値が高いほど「丁寧」) だったが、社会経済学科 (3.89) は平均を下回った。学生に対するフィードバックの丁寧さが、授業に対する満足度を左右している可能性はある。

他方で、経済学部生の満足度が低いのは、そもそも学生のやる気が低いからだという議論も成り立つかもしれない。授業に対して意欲・熱意を持って取り組んだかどうかを尋ねた「Q5 自分意欲?」の回答からは、経済学部生の意欲 (社会経済学科 4.16、現代経済学科 4.10) が全体平均 (4.18) よりも低いことを見て取れる。もっとも意欲が低いから満足度が下がったのか、あるいはその逆なのかは分からない。また学科の数値と全体平均の差が統計的に意味のある大きさなのかも不明であり、分析上、この点には留意が必要である。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

オンライン授業が始まった昨年は試行錯誤の一年だったが、そこでの経験が本年度の講義に活かされていることがアンケート結果から読み取れる。全学 FD 委員会が作成した「前期・教員による授業認識アンケート：結果報告」(19—20 頁)によれば、教員の多くは「授業の難易度は適切だった」「学生からの質問に対して迅速に対応した」「提出物に対して丁寧にフィードバックした」「熱意を持って授業を行なった」と認識している。この認識は教員の独りよがりではなく、学生の認識とも一致していた。

経済学部 (社会経済学科、現代経済学科) のアンケート結果は大学全体の傾向とほとんど同じである。全体平均と比べて異なる点を敢えて探せば、以下を指摘できる。

10 点満点で評価した「Q8 総合満足度」について、社会経済学科では「3 点」、現代経済学科では「4 点」という低い満足度が回答に見られた。22 の学科・部局の中で 4 点以下の満足度が回答に見られるのは経済学部の 2 学科を含めて 6 学科・部局しかない。経済学部は総合満足度そのものが全体平均をやや下回る。原因をあれこれと推測することは可能だが、授業に満足しなかったと答えた教員が担当した講義の性質 (ゼミや講義の別、履修者数など) が不明なため、詳しい分析は難しい。学生によるアンケート結果から読み取れた関連性も、教員によるアンケート結果からは分かりづらいことも、分析が難しい理由の 1 つである。

とは言え「学生による認識」に対する分析を踏まえると、次のような推測が成り立ちうる。授業が難しいために学生の勉学意欲が下がり、低い学生満足度の一因となった。そして学生の勉学意欲の低さは教員の授業満足度も低下させた。オンライン方式では学生の反応を確かめながら授業を進めることが難しく、ともすれば「理解度の低い学生」を置き去りにする懸念がある。数式などを用いる授業ではとりわけその懸念が現実になってしまっているのかもしれない。

---

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

外国語学部 中国語学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

高数値：Q5「あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか」について、平均値は 4.33 であり、部局（国際交流センター）を除き、全学科の中では 2 番目に高く、選択肢 4 「どちらかと言えばそう思う」 5 「強くそう思う」を選択した学生の比率の合計は 89.09 であった。また、Q6 「教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか」に対する回答平均値は 4.50 であり、全学平均値 4.39 を上回っていた。選択肢 4 と 5 の合計は 91.72 であった。このことは、学生は授業に対して高い意欲や熱意を持って取り組み、授業に対する教員の熱意も学生に伝わっていることの現れであり、望ましいことであると考えられる。

Q7 「知識が増えた、ものごとの捉えかたが深くなった」への回答平均値は 4.43 であり、部局（国際交流センター）を除き、全学科の中では 2 番目に高く、選択肢 4 と 5 の合計は 89.99 であった。

低数値：Q3b 「質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか」について、平均値は 3.98 であり全学平均値 3.99 とほぼ変わらないが、回答分布を見てみると 1 「まったくそう思わない」の回答率が 4.68 と全学で最も高い。従って特定の科目で学生と教員間のやり取りがうまく機能していなかった可能性がある。2020 年度においては、学生から「教員と連絡が取れない」という申し出があり、学科が介入し解決した事例があったが 2021 年度前期においてはそのような申し出はなかった。今後もし学生から申し出があれば、速やかに対応していきたい。

まとめ：Q8 「すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか」に対する回答平均値は 8.42 であり全学平均値 8.16 を上回っている。10 段階評価で 9 と 10 を選択した学生の合計の比率は 55.99 であり、半数以上の学生が強い満足度を感じていることがうかがえる。今回低数値であった「質問やメールに対する対応」を改善することで、更なる学生の満足度の向上につながる可能性がある。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

高数値：Q1 「この授業はシラバスの記述通りに行ったと思いますか」について選択肢 5 「強くそう思う」と回答した教員の割合が全学で最も高く 67.14 だった。中国語学科では複数の科目において統一教科書を用いており、これらの科目では同一のシラバス内容に基づいて授業を進めている。遅れが生じることは学習の積み残しを生み、学生の次年度学習の妨げとなることから、シラバス通りに授業を進めることを各教員が

強く意識した結果だと思われる。

Q3「質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか」について選択肢5「強くそう思う」を選択した教員の割合が全学で最も高く77.14だった。ただ、上記「学生による認識」で言及したように、「まったくそう思わない」と回答した学生もいるということは認識し、状況把握に努めたい。

Q4「提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか」、Q8「すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか」についても選択肢5を選択した教員の割合が全学で最も高く、それぞれ70.00、50.00であった。

低数値：Q5「学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか」に対し、選択肢1「まったくそう思わない」の回答率が1.43であった。全学の中でこの選択肢を選んだ教員がいたのは中国語学科だけである。具体的にどのような学生がいたのか、状況把握に努めたい。

まとめ：教員の認識としては、シラバス通りに授業を進め、質問への対応も迅速であり、提出物へのフィードバックも丁寧に行っており総合的な自己満足度は高い。一方で、学生の認識とのずれや、熱意のない学生の存在も確認された。現時点では、学科に対して個別の申し出や相談はないが、問題が発生していると感じた時点で情報を共有し、迅速に対応に当たれるよう引き続き連携を密にしていきたい。

### 3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

中国語学科における学生のアンケート回答率は35.2%であり、部局（国際交流センター）を除き、全学科の中では3番目に高かった。とはいえ約3割の学生しか回答に参加していないため、結果の一般化については限界がある。今後もより学生の実情に即した状況を把握するため、一人でも多くの学生に回答してもらえよう引き続き努力していきたい。

---

## 2021年度前期「学生による授業認識アンケート」および 「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

外国語学部 英語学科

### 1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

英語学科はすべての項目において全学平均前後の数値を獲得している。バランスがとれている学科といえる。

#### <高数値>

Q3a「メール連絡?」：メールで教員と連絡を取ったことがあると答えた学生は22.09%である。外国語部部の中国語学科と日本語学科よりも高数値である。高数値であること＝よいことであるかどうかはわからない。コロナ禍でオンデマンドの授業が多いので、教員側の不備が多く、学生が連絡してきた可能性も排除できない。数値の解釈については注意が必要である。

#### <低数値>

Q1a「シラバスの既知?」：教職課程センターを除く学科では環境創造学科、教育学科について3番目に

低い結果であった。これが、英語学科では必修科目が多いため、自分で選択する授業の幅が少ないためにシラバスを読まない学生のかもしれない。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

<低数値>

Q3「対応迅速?」: 教員は全体的に迅速に学生からの連絡に対応したかどうかについて2（どちらかといえばそう思わない）の回答が0.63あった。回答があった学科が3つ（それ以外の学科は0.00）あり、その中の一つであることについては反省する余地がある。非常勤講師にそのような回答をした教員への意識改革を求めたい。

Q6「自分熱意?」: 3（どちらともいえない）という回答が1.27あった。多くの学科が4（どちらかといえばそう思う）、5（強くそう思う）と回答する中、3の回答については非常に重く受け止める。授業担当者の熱意は学生に伝わる可能性もあり、学科で対応について検討したい。

3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

学生の総合満足度（Q8）について、10段階で8以上の割合を見てみると、英語学科は外国語学部の中国語学科や日本語学科よりも顕著に低い。また、他学部で語学を学習する、英米文学科、中国文学科、国際化関係学部の2学科などと比較しても低い。総合満足度の第一要因が「成長感覚」であることを鑑みると、他学科の高数値は語学学習において自分がどれだけできるようになったかを感じられたかどうかが反映されていると考えるのが妥当である。この点について英語学科内で検討を行いたい。

教員アンケートのQ5「学生意欲?」では5段階評価で3以上となり、教員は学生が意欲的に授業に取り組んでいると考えている。しかしながら、学生アンケート（Q5「自分意欲?」）では1（まったくそうは思わない）が0.85、2（どちらかといえばそう思わない）が3.04の回答がある。教員の認識の違いが学力不振などの学生のケアが行き届いていない可能性がある。英語学科内でどのようにすれば学生が意欲をもって学修に取り組めるかを検討していきたい。

教員アンケートのQ8「総合満足?」の4と5の回答が50%と学内1の中国語学科は学生アンケートと教員アンケートで高数値を獲得している項目が多い。同じ学部としてそのノウハウについてFD活動などを通じて英語学科教員も共有していきたい。

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」 および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

外国語学部 日本語学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

相対的に高い値となったのは、Q1b「シラバス通り?」、Q3b「対応迅速?」、Q4b「FB 丁寧?」であった。これらの点は、教員側の対応が適切で、それが学生にも伝わったように思われる。

他の項目については、ランキングとしては高位であっても低位であっても、平均値からの誤差の範囲にとどまっているので、他学科と比べてどうであるかという考察を加えるまでもなく、全学的な考察に準ずる。したがって、普通のことが普通に認識されたと推測し、学生と教員間の関係は良好であると言える。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

相対的に高い値となったのは、Q3「対応迅速?」と Q6「自分熱意?」であった。Q3 については、教員の対応が学生に認識されたものとして相関性があったと言えよう。一方で、Q1 の教員と学生間の若干のずれについては、教員側の満足度が影響しているものだと考えられる。ただし、教員の自己評価がそれほど高くないということは、特段非難されるものではない。Q4 についても、教員側は概ね 4 の評価としており、教員の自己評価は突出していないものの、学生には伝わっていると考えられる。

Q6 については、教員側の熱意が学生にどれほど伝わったかということになるが、学生側は 4.46 の値となっており、ある程度は伝わっていることが窺知される。

他の項目については、ランキングとしては高位であっても低位であっても、平均値からの誤差の範囲にとどまっているので、他学科と比べてどうであるかという考察を加えるまでもなく、一喜一憂する必要もない。

3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

全学的に、学生が甘い評価で、教員が辛い評価であるという全学的な所見は、概ね妥当であると考えられる。学生の認識と教員の認識に関する相関性が分析されたことについては、いい試みであったと言え、考察するにあたって参考になった。

---

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」 および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察(案)

法学部 法律学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

- ・学生がメールなどで教員に対して質問等をあまりしていない(Q3a.全学平均 18.4%に対して法律学科 11.48%)。難易度の適正さ(Q2)については、3.69 と適正であると思われるので、「何がわからないかが分からず質問できない」という状態ではないものと推測する。再度メールで質問が可能であることを周知するなど、質問しやすい環境づくりのための工夫が必要である。
- ・提出物の提出については、全体からみると低い値となっている(Q4 提出していない 31.11% 提出した 68.89%)。小テストやレポートを課す講義は多いものと思われることから、学生に課題提出の重要性を呼びかけると同時に、フィードバックの丁寧さについては、3.91 と比較的高い値にあるが、この数値をさらに挙げることも提出率の上昇に寄与するのではないかと思われる。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

- ・難易度については、学生の認識とほぼ一致しており、適正な難易度が保たれているといえる(Q2)。ただ、質問等に対する対応の迅速性については、学生の認識とやや乖離があり、教員が思うほど、学生は迅速には感じていない。
- ・また、フィードバックの丁寧さについても、教員が思うほど学生は丁寧さを感じていない。個々の講義において改善点を見出し、改めていく必要がある。

3. 「学生による認識」の Q9a（良かった点）、Q9b（改善すべき点）の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

- ・動画資料・音声資料については、分からないところを繰り返し視聴することができるので良いとの感想が見られた。

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

法学部 政治学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

本学科では、全体的に見て、全学の平均値から大きく乖離している学生からの評価項目はない。

Q1a では 83.3%がシラバス既知、Q1b のシラバス通りの授業だったかの問いに 90%が肯定的に答えており、評価が高い。Q2 授業の難易度は、全学平均 3.57 に対し本学科は 3.67 で、やや難しいと受け止められているが、政治学の諸分野の多様性や特殊専門性に鑑みれば妥当な数字である。Q3b メール連絡とその回答速度は、全学平均 3.99 に対し本学科は 3.79 でやや低いが、否定的な評価ではない。Q5 学生自身の意欲については 80.05%の学生が積極的に（評価 4 と 5 で）答えている。Q4b 提出物のフィードバック丁寧度

は全学平均 3.97 に対し本学科は 3.89、Q6 教員の熱意については全学平均 4.39 に対し本学科は 4.31 だが、平均値から大きく乖離した数値ではない。Q7 自分自身の成長実感についての質問では、84.95%の学生が肯定的に（評価 4 と 5 で）答えている。Q8 総合満足度は 10 段階評価で 7.96 だが、3 分の 2 以上（67.57%）の学生が評価 8 以上と答えている。

本学科では、大教室講義も一定数ある中で、学生は教員の熱意を身近に感得していると思われる。しかし、学生が授業内容をすべて消化しているとは言えない。このため、学生の学問分野への関心は高いが、自己発想や自分で考える姿勢へのつながりはやや控えめかも知れない。教員一人当たりの学生数が多いことや、対面式授業の実施が限定的であった前期の実状に鑑みれば、本学科は健闘している。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

回答率は全学平均 47.7%に対し本学科は 48%で、ほぼ平均値である。教員へのアンケートの浸透は今一つだが、教員の意識調査としての意義はあるかも知れない。Q1 シラバスと授業進行の相関については、87.5%が肯定的に（評価 4 と 5 で）答えている。Q2 授業の難易度は、全学平均 3.28 のところ本学科教員は 64.6%が適切（評価 3）と答えているので、教員側は授業の多くが難しいとは考えていない。Q3 メール連絡と回答速度は、大規模授業では対応が遅れがちなものだが、全学平均 4.30 のところ本学科教員は 62.5%が比較的迅速（評価 4）と答えている。Q4 提出物のフィードバック丁寧度についても、全学平均 4.04 のところ本学科教員は 96%が並（評価 3）以上の丁寧な対応と答えている。Q6 熱意の自己評価は、全学平均 4.64 のところ本学科教員は 97.92%が肯定的に（評価 4 と 5 で）答えている。Q8 総合満足度は 10 段階評価で全学平均は 7.85 だが、本学科教員は 91.66%が評価 7 以上と答えている。

3. 「学生による認識」の Q9a（良かった点）、Q9b（改善すべき点）の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

COVID-19 感染（再）拡大に際し、対面式講義を速やかにオンデマンド式講義に切り替えた対応について肯定的評価が見られた。

オンライン授業においては、何度も復習できる、他の学生が気にならないので集中して勉強できる、といった肯定的意見が見られた。

---

## 2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および 「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

国際関係学部

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

### （1）高数値

まず、学生の回答率では国際関係学科が 35.3%（2 位）、国際文化学科が 33.6%（5 位）と、他学科（セ

ンターを除く) に比して高数値であったといえる。しかし、数値自体は決して満足すべきものではないので、引き続き学生に対し回答を促していきたい。

Q1a「シラバス既知」、Q1b「シラバス通り」、Q5「自分意欲」、Q7「成長感覚」、Q8「総合満足」に対する回答では、国際関係学科、国際文化学科ともに全学平均値を上回り、他学科との比較でも上位に位置する数値であった。特に、「自分意欲」、「成長感覚」、「総合満足」は教育の効果や成果につながるものであり、本学部のカリキュラムとその授業内容に意を強くしている。

昨年までの「授業評価アンケート」でも、「学生の授業への取り組み」、「新しい考え方や発想」、「自分で考える姿勢」および「総合評価」にかかわる回答は、他学科に比して高いレベルの数値を維持していた。

「学生の主体的な取り組み」を学部教育の柱の一つとして位置付けているので、今後もこのような数値が維持できるよう、努力していきたい。

## (2) 低数値

残りの設問に対する回答の数値は、決して低いわけではない。他学科との比較では、ほぼ中間に位置したり、数値の差がなかったりしているため、ここに記すこととした。

「難易度適切」や「教員熱意」などにかかわる回答は、学科間でほぼほぼ同じ数値となっているため、全学として良好な数値と考えてよいと思う。

## 2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

### (1) 高数値

まず、教員の回答率では国際関係学科が81.54%（1位）、国際文化学科が78.13%（2位）と特に高い数値となった。教授会で強く要請したこともあったが、過去に学部独自の学生アンケートなどを長く続けた経験などがあり、もともと本学部の教員にはアンケートへの意識や関心が備わっているのかもしれない。しかしながら、回答率は100%ではない。全体の傾向などではなく、個別の授業に対する調査であれば、教員の回答がない科目では分析ができなくなるので、引き続き回答への要請を行いたい。

Q6「自分熱意」、Q7「成長感覚」、Q8「総合満足」において、国際関係学科、国際文化学科ともに、他学科に比して高い数値を得ている。「自分熱意」と「成長感覚」では、「4（どちらかといえばそう思う）」と「5（強くそう思う）」の合計値が高いが、そのなかでも特に「5」の数値が高くなっていることに本学部の特徴があろう。これは、教員の授業にかかわる満足感や達成感の表れであろうが、学生の回答数値と相関性があることから、教員だけの認識ではなく、教員と学生の間で相通ずる認識と考えられる。「総合満足」も、「8」と「9」の合計値が他学部に比して高く（または「7」が他学部にして低く）、この結果も学生の回答数値と相関性を見せている。

### (2) 低数値

残りの設問に対する回答の数値は、決して低いわけではない。他学科との比較では、ほぼ中間に位置したり、数値の差がなかったりしているため、ここに記すこととした。

学科間でほぼ同じ数値となっているものは、全学としての傾向と考えるべきものと思う。

## 3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

同じ設問における学生の回答数値と教員の回答数値が、ほぼ同様なものであったことに、ひとまず安心した。両者の数値に大きな差がみられる場合には、難しい対応を迫られるものと思う。

本学部としては、特に「成長感覚」や「総合満足」などへの回答が、ともに高い数値であったことをうれしく思っている。今後とも、このような傾向を続けられるよう、励みたい。

---

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

経営学部 経営学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値「高数値と低数値に分けたうえで」を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。
    - Q1a「シラバス既知」、Q1b「シラバス通り?」、Q2「難易度適切?」、Q4a「提出経験?」、Q4b「FB 丁寧?」、Q5「自分意欲?」、Q6「教員熱意」、Q7「成長感覚?」については他学科とも同等の水準とみられ、総じては望ましい授業認識が得られていると考える。
    - しかし、Q3a「メール連絡?」については他学科と比べてやや少なく、教員への問い合わせ等をした学生への対応についても遅さを感じた学生がやや多い (Q3b「対応迅速?」1+2: 5.9%)。
    - Q8「総合満足?」は平均 7.95 と 7 点台であるために他学科と比べてやや低く見えるが、得点分布を見ると 8-9 点台が 47.6% を占める。10 点台 (18.8%) がやや少ないという特徴がある。
    - 経営学科は学科定員やカリキュラム等の特徴上、大人数での講義形式授業が多い。このことがアンケートにおいてトップボックスへの回答が得られにくいことにつながっているだろう。21 年度前期はオンライン対応にも迫られた。各教員は学生個々にきめ細やかな対応をするよう積極的に工夫しており一定の成果は得られていると考えるが、課題も残る。本アンケートの全体分析によって、成長感覚の実感や FB の丁寧さが学生の総合満足に影響すると示唆されたことも参考にしたい。
  2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値「高数値と低数値に分けたうえで」を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。
    - Q2「難易度適切?」、Q4「FB 丁寧?」、Q6「自分熱意」については他学科と同等水準とみられ、教員は熱心に授業運営に取り組んでいる。また、Q1「シラバス通り?」の運営は他学科以上に心がけられているとみられ、Q3b「対応迅速?」についても高い水準で心がけられている。しかし、学生アンケートのシラバス理解程度や対応迅速さの認識との乖離があるとみられる。
    - Q5「学生意欲?」、Q7「成長感覚?」についてトップボックスの回答が他学科よりも低い様子がみられる。
    - Q8「総合満足?」ではトップボックスの回答はなかった (0.0%)。授業担当教員は現状よりもよい授業ができることを目指しているという認識がうかがえる。2つのアンケートからは、シラバス理解や授業への参加の仕方に関する学生・教員間の認識のすり合わせ、FB を通じた学生の成長感覚の実感、が要点になりそうなことが示唆される。具体的な方法については科目特性等を踏まえて授業ごとに検討するべき課題となろう。
-

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」 および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

スポーツ・健康科学部

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

・「Q1a あなたはこの授業のシラバス内容を知っているか？」について

シラバスの内容を知っていると回答したのは全学で 79.8%、本学部スポーツ科学科が 81.6%、健康科学科が 78.8%、及び看護学科が 89.6%であった。スポーツ科学科と健康科学科の学生約 2 割が、シラバスの内容を把握していないということは授業の概要、到達目標、及び計画等について理解せずに授業を受けているということであり、各授業のガイダンスでシラバスの内容を理解することを伝える等の工夫をしていく必要がある。

・「Q3a あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか？」について

質問やメール連絡をしたことがあると回答したのは全学で 18.2%、本学部スポーツ科学科が 19.7%、健康科学科が 17.3%、及び看護学科が 20.8%であった。この値が低いということは双方向型の授業が成り立っていないことにもなるため、学生が教員に対して質問やメール連絡をしやすくする工夫を行うことにより、学生の主体的・能動的な学びを引き出していくことに繋げていきたい。

・「Q6 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか？」について

熱意を持って授業を行っていたと回答したのは全学で  $4.39 \pm 0.78$ 、本学部スポーツ科学科が  $4.55 \pm 0.71$ 、健康科学科が  $4.43 \pm 0.72$ 、及び看護学科が  $4.44 \pm 0.71$  であった。本学部の 3 学科とも全学の平均値よりも高い値を示し、教員は熱意を持っているという認識を学生がしていることから、この値を引き続き維持、あるいはさらに向上させていきたい。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

・「Q1 この授業はシラバスの記述通りに行ったと思いますか？」について

シラバスの記述通りに授業を行っていたことについて、4（どちらかと言えばそう思う）と 5（強くそう思う）の合計からみると、本学部スポーツ科学科が 66.7%、健康科学科が 85.7%、及び看護学科が 100%であった。本学部の 3 学科の中でスポーツ科学科が 66.7%と最も低い値を示したが、この点については主にスポーツ実技が対面授業からオンライン授業に移行した影響ではないかと考えられる。

・「Q8：すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか？」について

授業の総合満足度について、8（80%満足）、9（90%満足）、10（100%満足）の占める割合を学科ごとに算出

したところ、本学部スポーツ科学科が 58.7%、健康科学科が 48.6%、及び看護学科が 90.9%であった。本学部の 3 学科の中で看護学科が 90.9%と最も高い値を示したが、この点については看護学科の授業が様々な工夫をして展開されていたことが影響したのではないかと考えられる。

3. 「学生による認識」の Q9a (良かった点)、Q9b (改善すべき点) の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

「学生による認識」の良かった点と改善すべき点については、今後開催する各学科の FD 研修会で取り上げ、教員間でこれらに関する情報を共有して、少しでも今後の授業改善に向けて進めていきたい。

4. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

今回の「学生による授業認識アンケート」の回答率が全学で 29.7%、本学部スポーツ科学科が 31.3%、健康科学科が 23.2%、及び看護学科が 30.4%であった。また、「教員による授業認識アンケート」の回答率が全学で 47.7%、本学部スポーツ科学科が 42.9%、健康科学科が 50.0%、及び看護学科が 32.4%であった。

このような結果に対し、両アンケートの回答率がともに 60%以上になるよう進めていく必要があると考えられる。回収率が低いということは未回収である学生の声が反映されず、データに偏りが生じてアンケート結果の信頼性が損なわれる可能性があると考えられる。そのためにも、DB ポータルや manaba を通して、学生と教員のアンケート実施に関するアナウンスを行っていく必要がある。

---

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および  
「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

社会学部 社会学科

1. 「学生による認識」について、Q1a~Q8 の中で貴学科において気になった数値 (高数値と低数値に分けたうえで) を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

【総括】本学科として特徴ある回答は、この授業では提出物を出しましたか(Q4a)に対する回答である。本学科は、看護学科に次いで教員から学生に対して提出物を課す度合いが多い (93.84%) 学科とであったが、これはオンライン授業においても対面授業と同様の効果を得るために、教員が理解度確認に留意し双方向となるよう工夫したためと考えられる。その証拠に、提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか(Q4b)という問いに対して、本学科の教員は、全学の平均値を上回る(4.05 ポイント)であり、教員が課した課題に対して丁寧なフィードバックを心掛けている姿勢が見受けられる。

【Q1a】あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか？

全学では「知っている」と回答したのは79.84%であったと報告されている。図表2を見ても、全ての部局(学科)・学年でオンライン授業において、問題なくシラバス内容を認識していた傾向が強いようである。

社会学科では、「知っている」と回答したのは78.4%である。よって、おおむね平均通りである。しかし、裏を返せば、21.6%はシラバス内容を認識していなく、約5人に1人はシラバス内容を知らないということを示している。この回答結果から、学生が履修科目を選択する際にシラバス内容を確認していないという問題も示唆されるため、シラバス内容を周知することは課題の1つであるともいえる。

**【Q1b】** この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。

この設問にはQ1aで「知っている」と回答した学生のみが回答した。全学での平均値は4.32と報告されている。図表6を見ても、全ての部局(学科)・学年において、授業がシラバス通りに行われたと認識していたようである。

社会学科での平均値は約4.26%であり、「そう思う」もしくは「強くそう思う」と回答した人の割合は88.38%である。全学での標準偏差が0.75であったことを考えると、おおむね平均通りである。よって、社会学部でも授業がシラバス通りに行われたと認識していたようである。

**【Q2】** 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。

全学での平均は3.57であり、「ちょうどよい」と「やや難しい」の間に平均があることを示しているため、図表10を見ても、全ての部局(学科)・学年において、同様の傾向が観られる。全体の傾向としては適切と言える」と報告されている。

社会学科での平均値は約3.60%である。全学での標準偏差が0.79であったことを考えると、平均通りであるといえる。また、「とても易しかった」と回答した人が全学では1.13%であるのに対し、社会学部では0.43%である。よって、社会学部の授業の難易度は適切であると言える。

**【Q3a】** あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。

全学では「したことがある」と回答したのは18.24%であり、その数値は部局(学科)によってかなり異なっていたと報告されている。図表12,13を見ても、この報告通りの結果であるといえる。

社会学部では、「したことがある」と回答したのは19.6%であり、おおむね平均通りである。

**【Q3b】** 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか

この設問にはQ3aで「メールで連絡をしたことがある」と回答した学生のみが回答した。全学での平均は3.99%であり、ほぼ4(そう思う)という平均値なので、概ね「迅速である」と認識されていたと報告されている。ただし、図表16を見ると、部局(学科)間の分散がやや大きいように見受けられる。これはQ3aと同様の傾向である。

社会学科での平均値は約3.97%である。全学での標準偏差が1.04であったことを考えると、平均通りであるといえる。しかし、「まったくそう思わない」もしくは「どちらかと言えばそう思わない」と回答した人は7.69%であり、約13人に1人という割合で存在している。よって、少数ながら、迅速でなかったと回答した人は存在しており、課題の1つであるともいえる。

**【Q4a】** この授業では提出物を出しましたか。

図表18を見ると、いずれも学科の学生も全体として課題等の提出経験が多いことがわかる。また、図表19では学年別の分布が示されているが、各学年ともに80%を超える高い水準にある。これは裏を返せば、全ての学

科・学年で基本的にはオンライン授業において、教員が学生に対して課題を課していることでもある。

社会学科では、看護学科に次いで教員から学生に対して提出物を課す度合いが多い学科となっている(93.84%)。これはオンライン授業においてでも対面授業と同様の効果を得るために、教員が相当な工夫をし、努力したことの証左であると考えられる。

**【Q4b】** 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。

課題を提出した学生は当然、自分の回答について教員のフィードバックを期待している。これを踏まえて図表 20 を見ると、全学の平均は 3.97 標準偏差は 0.98 であることから、学生は教員のフィードバックに対して概ね「丁寧である」と認識している。これはオンライン授業に対する学生の満足度を一定水準維持するためには必要な傾向である。

社会学科の教員は、全学の平均値を上回る 4.05 であり、教員が課した課題に対して丁寧なフィードバックを心掛けている姿勢が見受けられる。同様に図表 22 においても、社会学科は 5 (強くそう思う) 36.62%、4 (どちらかといえばそう思う) 37.41%と合わせれば、74.03%となっており、全学と比較した場合にも高水準にある。

**【Q5】** あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。

この質問は例えば「授業でわからなかったことは、自分で調べる」、「授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する」、「自分の意思で継続的に勉強する」、「授業の復習をする」、「授業の予習をする」というような授業への取り組みに関する多くの要素が混在しているため、この結果をどのように判断するかは極めて難しい。学年別に考察している図表 24 では高学年になるにしたがって、取り組む意欲が低くなっている点についても、卒業に近づくにつれ、履修科目も少なくなっていることを考慮すれば、当然の結果とも考えられる。しかし、着目すべきは 1 年生から 2 年生にかけての数値の下落幅であり、全体的には 1 年次の意欲をいかに 2 年次も維持できるかではなだろうか。

社会学科は 4 と 5 を合計した割合は 84.38%であり全学と比較しても標準的な水準である。社会学科も他学科と同様の課題を抱えていることが伺える。

**【Q6】** 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。

図表 28 を考察すると、全体的に教員の熱意は高く、それが学生にも伝わっていることが伺える。オンライン授業が継続されている状況において、各先生方は相当な工夫をし、学生に一定水準の授業を提供しようと努力している姿勢が感じられる。

社会学科においては全学の平均が 4.39 であるのに対して、4.48 であり高水準である。また図表 30 では、5 と 4 を合計した値は 93.04%であり、他学科と比較しても高水準である。教員の授業に対する工夫、授業運営の手法に対する努力が学生に伝わっていることは、今後も継続すべきであると思われる。

**【Q7】** この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。

図表 33 を考察すると、全学的に学生は授業を通じて知識が増えたと感じていることが伺える。これは授業の難易度、進捗度とも関連すると考えられ、大東文化大学の学生にとって適切な授業水準が維持されているものと考えられる。

社会学科においても、平均値 (4.28) よりも上回る水準であり (4.29)、授業の水準 (難易度、進捗度等) に満足している傾向が伺える。同様に図表 35 においても 5 と 4 を合わせた割合も 88.97%となっており、他学科の水準と比較しても高い水準にある。今後も、引き続き教員の研究水準を維持することを土台とし、学生に対して

は最新の研究を難易度に配慮しながら教示することが求められる。

【Q8】すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。

この質問については報告書ではこの質問に対する貢献度の順として「成長感覚」、次に「教員熱意」「自分意欲」「FB丁寧」「シラバス通り」「難易度」と続き、最後に「対応迅速」という要素がこの数値に反映されていると分析している。おそらく、学生の感覚としてはこれらに加えて、「教員の専門性の高さや教員からよい影響を受ける」、「授業・教育システム（教育内容やカリキュラム、指導方法、PC保有等）」も要因として加味されていると思われる。

このような点を踏まえて、社会科学の場合、全学の平均値（8.16）を上回る（8.20）水準である。これはオンライン授業中心の授業体制においては社会科学がPC必携であることを背景として、学生にとっては新たな設備投資（PC購入など）の手間が無い点や、他の学生とのPCスペックの違いをさほど気にせず授業を受けられる点が好影響を与えていると思われる。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

【総括】本学科として特徴のある回答は、この授業に対してどの程度満足しましたか(Q8)に対する回答である。本学科の教員は概ね80%以上の満足を認識していた。特に、満足度が高い9と10と回答した教員は37.09%であり、他学科と比較すると4番目に高い数値であったことから、本学科の教員は相対的には他学科に比しても授業に対して高い総合満足度を示している。

【Q1】この授業はシラバスの記述通りに行ったと思いますか。

図表2、4を見ると、教員も学生も4（どちらかと言えばそうである）、5（強くそう思う）を選んだ者が多いことがわかる。しかし、図表4の考察では、「シラバス通りに授業は進む」という学生の先入観の可能性が指摘されており、これは社会科学にもあてはまるのかもしれない。ただし、図表4に示された、4と5の外れ値の多さは気になる。社会科学も4と5で9割を超えるが（90.32%）が、外れ値がどれくらいあるのかはデータがないのでわからない。

社会科学では、学外活動を組み込んだ授業が比較的多い。コロナ禍という外的な要因によってさまざまな変更を余儀なくされ授業も多いはずである。そのなかで、教員が相当な工夫をし、シラバス内容に近づくように努力したことが伺える。

【Q2】学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。

図表7の考察に、教員は学生の感じる難易度を敏感に捉えきれていない、特に2（やや易しかった）に関しては、教員が考える以上に学生は難しく感じているとある。

社会科学の教員は、この2を選んだ割合（8.06%）が、日本語学科（17.39%）、政治学科（10.42%）に次いで、3番目に高い。コロナ禍で大半の授業がオンラインになるなかで、例年に比べるとより説明に時間をかけ、学生への負担を考慮した教員もいたことは推測できる。その結果、2を選んだことが考えられる。

しかし、図表7の結果と合わせて考えるならば、それでも学生にとっては難しく感じていることになる。これまで教員が「やや易しかった」と感じている場合は、来年度以降に難易度をあげることが考えられる。その

場合、学生が感じる難易度の認識とさらにずれる可能性が出てくる。この点は注意すべき点かもしれない。だが、学科ごとの教員と学生の認識の関係データがないので詳細はわからない。

Q3 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。

図表 10 の考察にあるように、教員が「迅速だ」と思っているにもかかわらず学生の認識はそこまで高くない。加えて、5 は外れ値の多さが目立つ。

社会科学の教員が選んだ結果を全学科のなかに位置づけてみると、5（強くそう思う）を選んだ教員は、全 22 学科中 11 番目（35.48%）である。4 と 5 を合わせると 9 割を少し超える（90.32%）。とはいえ、図表 10 の結果から推測するなら、これらに対して学生の認識は低いのもかもしれないが、学科のデータがないので詳細はわからない。

さらに、3（どちらともいえない）は全学科中 7 番目（9.68%）である。3（どちらともいえない）を選ぶからには、ケースバイケースということかもしれない。社会学部は学生が PC 必携で、教員も PC の扱いには慣れていることから考えると技術的な問題ではないだろう。やはり迅速な対応を促す必要があるだろう。

Q4 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。

図表 13 の考察でも、教員が感じる丁寧さ、丁寧さの欠如を、学生がそれほど敏感には感じていないとあり、他の項目と似たような傾向にあると書かれている。

社会科学の教員が選んだ結果を全学科のなかに位置付けてみると、4（どちらかと言えばそうである）と 5（強くそう思う）を選んだ教員は、合計で 85.48% となる。これは 22 学科（国際交流センターを含む）中、6 番目である。3（どちらともいえない）は 12 番目（14.32%）である。これは、順位で見ると Q3 の結果と逆転する。Q3 でも触れたように教員が PC の扱いに慣れていることに加え、manaba を活用しているからだと思われる。逆にいえば、4 と 5 で合計 85.48% というのは、社会学部としては低いともいえる。

Q5 学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。「学生意欲？」

本学科において「5（強くそう思う）」と回答した教員は 20.97% であり、他学科と比較すると、ほぼ中間に位置している。学生の「自分意欲？」も平均 4.16、「5（強くそう思う）」との回答も 35.73% と全学科のなかでも中間に位置している。

教員と学生の認識を比較した場合、「5（強くそう思う）」に対する回答には約 15% の開きがあるため、学生の自己認識としては積極的な意欲がより強く表れており、教員の学生に対する意欲の評価はやや厳しく表れていることがわかる。教員は学生の意欲をより積極的に認識する必要があるが、同時に学生が安易に自己評価しないよう、各授業での学習の基準や達成度をわかりやすく伝える必要もある。

Q6 あなたは熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。「自分熱意？」

本学科において「5（強くそう思う）」と回答した教員は 66.13% であり、他学科と比較すると、ほぼ中間に位置している。学生の「教員熱意？」も平均 4.48、「5（強くそう思う）」との回答も 56.29% と全学科のなかでも中間に位置している。

教員と学生の認識を比較した場合、「5（強くそう思う）」に対する回答には約 10% の開きがあるため、教員の自己認識としては熱意をもって授業に取り組んでいると評価している反面、学生の教員に対する意欲の評価は少し厳しく表れていることがわかる。教員は自身の熱意をより客観的に認識する必要があるのと同時に、熱意が空回りしないよう学生の反応や学習の達成度を確かめながら、双方向のコミュニケーションに努める必要がある。ただし、本年度前期の授業は大部分がオンラインという制約下で行われたため、双方向のコミュニケー

ションは必ずしも十分に行えたわけではないと思われる。教員が授業準備に相当な熱意と労力を要し、高い「自分熱意」を認識していたのに比べて、学生としては教員の熱意は認識しにくかった可能性がある。

Q7 この授業を通じて学生の「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。「成長実感？」

本学科において「5（強く思う）」と回答した教員は37.10%と、他学科と比較すると中の上程度に位置しているものの、「4（どちらかと言えば思う）」と回答した教員も多く59.68%であった。他方、学生自身の「成長感覚？」は平均4.29、「5（強く思う）」との回答は43.12%であり、全学科のなかでは中の下程度に位置しているが、「4（どちらかと言えば思う）」との回答も45.85%と同程度の回答が得られており、学生の認識としては、全体的には緩やかな成長感覚を得ているものと思われる。

「5」と「4」を総合し比較してみると、全体としては教員・学生双方とも成長実感・成長感覚を共通して認識しているといえる。ただし、「5」に関しては、教員はやや厳しく、学生はやや甘く成長に対する認識をもっていることがわかる。よって、学生としてはおおむね成長しているという認識をもちながらも、教員は必ずしもその成長を認識できていない可能性がある。

社会科学の授業の場合、外国語や特別な技能の習得などとは異なり、日常生活の批判、基礎概念の習得、多様性への理解など、成長が表面的に目に見えにくい科目も少なくない。そのため、教員が学生の成長をすぐには判断できない場合も考えられ、学生自身も自己の成長実感を得にくい場合も考えられる。これは、専門性や科目の特性上ある程度やむを得ないところもあり、また、必ずしも教員の成長実感も学生の成長感覚も低いわけでもないので、大きな改善策を講じる必要はないかもしれない。ただし、教員が授業の開始前後、または学期の開始前後などに、知識が増えたかどうか、あるいはものごとの捉えかたが深くなったかどうかを、学生自身にチェックさせるなど、成長実感を確認する指導を導入することで改善が見込める可能性もある。

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。「総合満足？」

本学科の教員の約77%が8～10と回答しており、教員の主観としては概ね80%以上の満足を認識していた。また、9と10と回答した教員は37.09%であり、他学科と比較すると4番目に高い数値である。この質問に対する回答は、学科ごとによりばらつきが見られるが、本学科の教員は相対的には高い総合満足度を示している。Q5～7の質問に対しては、突出した高数値や低数値は見られなかったものの、総じて見れば満足度は高いと教員が認識していたことがわかる。

## 3.2 後期

### 3.2.1 学生による授業認識アンケート【後期】

#### 1. 目的

履修学生の授業に対する認識を調査することで授業の内容や方法の改善に役立てるために実施した。

#### 2. 実施の対象

(1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が5名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とした。

(2) 実施対象科目を全学FD委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とした。

#### 3. アンケート項目

2021年度後期の授業に関する学生の認識アンケートの項目は以下の通りであった（前期と同一）。

Q1a あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか。[シラバス既知]

2（はい、（おおよそ）知っています）

1（いいえ、知りません）

Q1b この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。[シラバス通り]

5（強くそう思う）

4（どちらかと言えばそう思う）

3（どちらとも言えない）

2（どちらかと言えばそう思わない）

1（まったくそう思わない）

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

5（とても難しかった）

4（やや難しかった）

3（適切だった）

2（やや易しかった）

1（とても易しかった）

Q3a あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。[メール連絡]

2（はい、あります）

1（いいえ、したことはありません）

Q3b 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q4a この授業では提出物を出しましたか。[提出経験]

- 2 (はい、出しました)
- 1 (いいえ、出していません)

Q4b 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q5 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q6 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q7 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」とし

て10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

10 (100%) 9 (90%)... 2 (20%) 1 (10%)

Q9a 授業について良かった点があれば具体的に書いて下さい (授業担当教員が直接読みます)。

Q9b 授業について改善すべき点があれば具体的に書いて下さい (授業担当教員が直接読みます)。

## 4. 結果

### 4.1 対象科目数

対象科目数は 2,555 科目、対象のべ学生数 (各対象科目内の履修者数の合計) は 102,372 名であった。このうち非正規学生 (科目等履修生) のべ 33 名と留年等をしていた 4 年生のべ 59 名を除いた 102,235 名を本報告の集計・分析対象とする。

### 4.2 のべ回答者数と回答率

回答者数は設問によって異なる。最も包括的な設問である Q8 に回答したのべ学生数は、17,373 名である。よって回答率は  $(17,373/102,235 = 0.1699)$  16.99% である。この数値は Web 方式のアンケートとしてもやや低いと言えるだろう (前期の回答率は 29.70%)。学科/部局別回答率および学年別回答率を図表 1 に示す。学科については結果の数値によって降順にソートして提示している (以下すべての設問で同様)。

図表 1 学科/部局別 (左) および学年別 (右) 回答率

学科/部局	回答有り	未回答	合計	回答率
u_社会学科	1499	4329	5828	25.72%
t_看護学科	421	1233	1654	25.45%
o_国際文化学科	675	2356	3031	22.27%
a_日本文学科	1079	3848	4927	21.90%
f_歴史文化学科	499	2014	2513	19.86%
b_中国文学科	424	1890	2314	18.32%
k_日本語学科	409	1910	2319	17.64%
l_法律学科	1425	6750	8175	17.43%
r_スポーツ科学科	1034	4913	5947	17.39%
n_国際関係学科	445	2153	2598	17.13%
i_中国語学科	648	3182	3830	16.92%
q_環境創造学科	47	233	280	16.79%
c_英米文学科	780	3998	4778	16.32%
e_書道学科	339	1764	2103	16.12%
g_社会経済学科	1060	5583	6643	15.96%
d_教育学科	1089	5750	6839	15.92%
j_英語学科	1332	7129	8461	15.74%
m_政治学科	770	4169	4939	15.59%
s_健康科学科	635	3888	4523	14.04%
h_現代経済学科	777	4835	5612	13.85%
p_経営学科	1583	11337	12920	12.25%
X_教職課程センター	327	1475	1802	18.15%
Y_国際交流センター	76	123	199	38.19%
合計	17373	84862	102235	16.99%

学年	回答有り	未回答	合計	回答率
1	8754	28320	37074	23.61%
2	5609	27100	32709	17.15%
3	2452	21485	23937	10.24%
4	558	7957	8515	6.55%
合計	17373	84862	102235	16.99%

最も回答率が高かった学科は社会学科で 25.72% であった (前期は同じく社会学科で 42.60%)。部局では国際

交流センターの 38.19%が高かった（前期は同じく国際交流センターの 54.7%）。学年別に見ると 1年>2年>3年>4年と回答率が漸減したのが分かる。これも前期と同様の傾向である。

### 4.3 結果

Q1a～Q8 までの質問項目ごとに結果を提示してゆく。分析の単位は個別授業に関して回答した個々の学生の回答である。すなわち個別授業ごとに学生の回答をまとめることはしていない。例えば「A 学科の平均値」とは「A 学科で開講していた複数科目に関して回答したすべての学生の回答を平均した値」を指す。授業によっては回答学生数が極めて少ないため個別授業ごとの平均値を出してからそれをさらに平均するという手順は避けた。

なお Q9a と Q9b（自由記述）については別に報告する。

#### 4.3.1 【Q1a】 あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか。 [シラバス既知]

全学では 2「知っている」と回答したのは 78.86%（前期 79.84%）であった。2割ほどがシラバスを承知していない。学科／部局別および学年別の内訳を図表 2 に示す。「知っている」と回答した比率が最も高かった学科は国際文化学科で 85.48%であった（前期は看護学科で 89.61%）。部局で高かったのは国際交流センターの 89.47%であった（前期は同じく国際交流センターの 91.82%）。学年別には 2年と 3年がほぼ同じ程度（約 81%）で、それよりも 1年の数値が明らかに低く、4年が明らかに高い。

図表 2 Q1a 「シラバス既知」 の学科／部局別（左）および学年別（右）回答

学科／部局	1	2
o_国際文化学科	14.52	85.48
t_看護学科	15.91	84.09
g_社会経済学科	16.38	83.62
h_現代経済学科	16.58	83.42
f_歴史文化学科	18.24	81.76
a_日本文学科	18.80	81.20
p_経営学科	18.90	81.10
n_国際関係学科	18.92	81.08
m_政治学科	19.38	80.62
b_中国文学科	20.00	80.00
c_英米文学科	20.61	79.39
s_健康科学科	21.38	78.62
l_法律学科	22.21	77.79
j_英語学科	22.58	77.42
r_スポーツ科学科	23.20	76.80
k_日本語学科	23.41	76.59
u_社会学科	24.43	75.57
e_書道学科	26.02	73.98
d_教育学科	27.47	72.53
i_中国語学科	28.42	71.58
q_環境創造学科	29.79	70.21
X_教職課程センター	25.99	74.01
Y_国際交流センター	10.53	89.47

学年	1	2
1	23.78	76.22
2	18.71	81.29
3	19.22	80.78
4	12.81	87.19

注：2「知っている」 1「知らない」

### 4.3.2 【Q1b】 この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。[シラバス通り]

この設問は Q1a で 2 「はい（おおよそ）知っています」と回答した学生（のべ 13,720 名）のみが回答した。全学の平均は 4.35（前期は 4.32）で標準偏差は 0.72（前期は 0.75）であった。学科／部局別および学年別の数値を図表 3 に示す。学科で平均値が最も高かったのは日本語学科の 4.48（前期は日本語学科と国際関係学科がいずれも 4.49）であった。部局では国際交流センターが 4.72（前期は 4.76）と高い値であった。また学年による違いは観察されない。

表3 Q1b「シラバス通り」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科/部局	のべ人数	平均	標準偏差
k_日本語学科	330	4.48	0.61
e_書道学科	257	4.47	0.77
a_日本文学科	900	4.45	0.64
o_国際文化学科	597	4.44	0.66
n_国際関係学科	374	4.43	0.77
t_看護学科	368	4.40	0.69
b_中国文学科	346	4.39	0.73
l_法律学科	1140	4.38	0.62
i_中国語学科	490	4.36	0.79
h_現代経済学科	665	4.35	0.69
r_スポーツ科学科	879	4.35	0.74
s_健康科学科	536	4.35	0.71
c_英米文学科	647	4.35	0.77
g_社会経済学科	922	4.33	0.68
j_英語学科	1089	4.33	0.80
d_教育学科	826	4.33	0.77
p_経営学科	1366	4.32	0.73
m_政治学科	654	4.29	0.67
u_社会学科	1205	4.26	0.73
q_環境創造学科	36	4.22	0.76
f_歴史文化学科	414	4.15	0.79
X_教職課程センター	256	4.26	0.67
Y_国際交流センター	69	4.72	0.51

学年	のべ人数	平均	標準偏差
1	7051	4.37	0.73
2	4723	4.34	0.71
3	2079	4.31	0.71
4	513	4.33	0.72

より詳細なデータとして 5～1 の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表 4 の通りである。5 が、強くそう思う、4 が「どちらかと言えばそう思う」なので、4 と 5 の合計で、90.38%（前期は 88.82%）の学生が「シラバスは記述どおりに行われた」と認識したことになる。概ね満足できる結果であると言ってよいだろう。

図表 4 Q1b「シラバス通り」に対する全学の回答分布



学科/部局別回答分布を図表5に示す。学科/部局ごとの、1「まったくそう思わない」～5「強くそう思う」のそれぞれを回答した学生のパーセンテージを示している。5と回答した割合で降順にソートした。

平均値上では明確ではなかった違いが、5を選んだパーセンテージには見られるようだ。5「強くそう思う」の割合が最も大きかったのは書道学科で60.31%であった（前期は国際関係学科の57.7%）。5と4「そう思う」を合わせた割合が最も大きかったのは日本語学科で94.25%であった（前期は同じく日本語学科の94.21%）。部局では国際交流センターが高く、5が75.36%（前期は79.21%）、5と4を合わせると97.10%（前期は99.01%）であった。

図表5 Q1b「シラバス通り」に対する学科/部局別回答分布

学科/部局	1	2	3	4	5
e_書道学科	0.78	1.17	8.56	29.18	60.31
n_国際関係学科	1.60	0.80	5.61	37.17	54.81
k_日本語学科	0.00	0.30	5.45	39.70	54.55
o_国際文化学科	0.17	0.00	8.54	38.53	52.76
a_日本文学科	0.22	0.56	5.33	41.89	52.00
b_中国文学科	0.58	1.16	8.09	39.31	50.87
i_中国語学科	1.22	1.43	8.16	38.78	50.41
t_看護学科	0.27	0.82	7.34	41.85	49.73
r_スポーツ科学科	0.34	0.80	11.26	38.34	49.26
j_英語学科	1.38	0.73	10.19	38.75	48.94
c_英米文学科	1.24	1.08	7.26	42.50	47.91
s_健康科学科	0.19	0.75	10.26	41.23	47.57
d_教育学科	1.21	1.09	7.75	43.58	46.37
h_現代経済学科	0.45	1.35	5.86	46.92	45.41
p_経営学科	0.73	0.95	8.71	45.24	44.36
l_法律学科	0.18	0.44	5.26	49.91	44.21
g_社会経済学科	0.33	0.76	7.59	48.05	43.28
u_社会学科	0.41	1.66	9.54	48.30	40.08
q_環境創造学科	0.00	2.78	11.11	47.22	38.89
m_政治学科	0.46	0.46	7.95	52.29	38.84
f_歴史文化学科	0.97	2.90	10.39	51.69	34.06
X_教職課程センター	0.39	0.00	10.55	51.56	37.50
Y_国際交流センター	0.00	0.00	2.90	21.74	75.36

学年別回答を図表6に示す。1年生の5の割合が他の学年より高いように見える。前期も同様の傾向があった。しかし5と4の数値の合計は、1年生が90.25、2年生が90.70、3年生が90.53、4年生が88.88なので、やはり違いはないと考えてよいと思われる。

図表6 Q1b「シラバス通り」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.61	0.94	8.21	41.53	48.72
2	0.59	0.95	7.75	45.56	45.14
3	0.77	0.67	8.03	47.67	42.86
4	0.19	1.17	9.75	42.88	46.00

### 4.3.3 【Q2】 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

この設問の回答は、5「とても難しい」～1「とても易しい」であり、真ん中が3「ちょうどよい」であるので、数値が高いほど良いわけではないことに再度留意したい。全学の平均は3.58（前期は3.57）、標準偏差は0.75（前期は0.79）であった。すなわち前期に引き続き、「ちょうどよい」と「やや難しい」の間に平均があるということであり、全体の傾向としては適切と言えるだろう。

学科／部局別および学年別の平均値を図表7に示す。学科でもっとも数値が高かった（＝難しく感じられていた）のは看護学科の3.95（前期は環境創造学科の4.07）であった。平均値が最も3に近かったのはスポーツ科学科の3.27（前期はやはりスポーツ科学科の3.22）であった。学年別の違いはほとんど見られないが、強いて言うならば1年→2年→3年→4年と学年が進行するにしたがって「難易度がちょうどいい」と感じる傾向がわずかに強まっている、逆に言えば学年が下であるほどやや難しいと感じる傾向があると言える。

図表7 Q2「難易度適切」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
t_看護学科	419	3.95	0.75
h_現代経済学科	777	3.72	0.71
n_国際関係学科	445	3.71	0.80
s_健康科学科	633	3.68	0.80
i_中国語学科	648	3.67	0.74
p_経営学科	1581	3.65	0.76
l_法律学科	1423	3.63	0.74
u_社会学科	1496	3.62	0.73
q_環境創造学科	47	3.62	0.64
j_英語学科	1324	3.60	0.78
b_中国文学科	423	3.59	0.77
m_政治学科	773	3.57	0.74
g_社会経済学科	1057	3.56	0.77
a_日本文学科	1077	3.55	0.70
o_国際文化学科	674	3.54	0.74
f_歴史文化学科	499	3.53	0.67
k_日本語学科	408	3.53	0.75
d_教育学科	1090	3.52	0.70
c_英米文学科	780	3.49	0.73
e_書道学科	342	3.40	0.65
r_スポーツ科学科	1038	3.27	0.78
X_教職課程センター	326	3.38	0.65
Y_国際交流センター	76	3.51	0.72

学年	数	平均	標準偏差
1	8748	3.63	0.77
2	5595	3.53	0.74
3	2453	3.52	0.70
4	560	3.51	0.73

1～5の全学の分布は図表8の通りである。3「適切だった」が約48%（前期は約47%）で、4「やや難しかった」が約38%（前期は約36%）、5「とても難しかった」が約12%（前期は約13%）である。1「とても易しい」と2「すこし易しかった」は合わせて約3%（前期は約4%）である。つまり「ちょうど良い」と思っている学生と、「難しい」と思っている学生が約半々であり、「易しい」と思っている学生はごく少数しかいない。前期とほぼ同一と言って良い結果となった。

図表8 Q2「難易度適切」に対する全学の回答分布

参考：前期



学科／部局別の分布を図表 9a と図表 9b に示す。同一のデータであるが 9a では 3「適切だった」でソートし、9b では 5「とても難しかった」でソートした。3「適切だった」の割合が最も大きい学科はスポーツ科学科で 62.62%（前期は同じくスポーツ科学科で 58.27%）であった。部局では国際交流センターで 62.58%（前期は 66.36%）であった。スポーツ科学科は 1（とても易しい）と回答した割合が 3.37%（前期は 5.90%）と最も大きかった。5「とても難しかった」の割合が最も大きかったのは看護学科の 25.30%で突出して高い数値となっている。同学科の前期の数値は 15.66%だったので、後期になって前期とは異なるレベルの難しさを学生が感じたということが読み取れる。同学科は 3「適切だった」の割合も 27.92%と、前期の 41.89%から格段に下がっている。学問分野の特性によるチャレンジを学生が認識したということだろうか。

図表 9a Q2「難易度適切」に対する学科／部局別回答分布（3「適切だった」で降順ソート）

学科／部局	1	2	3	4	5
r_スポーツ科学科	3.37	3.56	62.62	23.89	6.55
e_書道学科	0.29	3.51	57.02	34.50	4.68
f_歴史文化学科	0.20	0.80	53.71	36.67	8.62
d_教育学科	0.55	1.19	52.84	36.61	8.81
k_日本語学科	0.49	2.45	52.45	33.09	11.52
o_国際文化学科	1.04	0.89	51.93	35.01	11.13
a_日本文学科	0.28	1.49	51.16	37.23	9.84
c_英米文学科	0.64	4.23	48.33	39.10	7.69
u_社会学科	0.13	1.34	48.06	37.37	13.10
m_政治学科	0.78	2.33	46.96	39.46	10.48
l_法律学科	0.21	1.69	46.38	38.16	13.56
g_社会経済学科	1.23	2.65	46.36	38.69	11.07
b_中国文学科	0.71	3.07	45.39	38.53	12.29
j_英語学科	0.98	2.87	44.49	38.90	12.76
s_健康科学科	0.32	2.37	44.23	35.39	17.69
p_経営学科	0.44	1.83	43.96	39.78	13.98
q_環境創造学科	0.00	2.13	40.43	51.06	6.38
h_現代経済学科	0.00	1.03	40.15	44.53	14.29
i_中国語学科	0.46	2.47	39.35	44.91	12.81
n_国際関係学科	1.12	1.80	38.43	41.80	16.85
t_看護学科	0.00	0.95	27.92	45.82	25.30
X_教職課程センター	0.31	2.15	62.58	28.83	6.13
Y_国際交流センター	0.00	1.32	57.89	28.95	11.84

図表 9b Q2「難易度適切」に対する学科／部局別回答分布（5「とても難しかった」で降順ソート）

学科／部局	1	2	3	4	5
t_看護学科	0.00	0.95	27.92	45.82	25.30
s_健康科学科	0.32	2.37	44.23	35.39	17.69
n_国際関係学科	1.12	1.80	38.43	41.80	16.85
h_現代経済学科	0.00	1.03	40.15	44.53	14.29
p_経営学科	0.44	1.83	43.96	39.78	13.98
l_法律学科	0.21	1.69	46.38	38.16	13.56
u_社会学科	0.13	1.34	48.06	37.37	13.10
i_中国語学科	0.46	2.47	39.35	44.91	12.81
j_英語学科	0.98	2.87	44.49	38.90	12.76
b_中国文学科	0.71	3.07	45.39	38.53	12.29
k_日本語学科	0.49	2.45	52.45	33.09	11.52
o_国際文化学科	1.04	0.89	51.93	35.01	11.13
g_社会経済学科	1.23	2.65	46.36	38.69	11.07
m_政治学科	0.78	2.33	46.96	39.46	10.48
a_日本文学科	0.28	1.49	51.16	37.23	9.84
d_教育学科	0.55	1.19	52.84	36.61	8.81
f_歴史文化学科	0.20	0.80	53.71	36.67	8.62
c_英米文学科	0.64	4.23	48.33	39.10	7.69
r_スポーツ科学科	3.37	3.56	62.62	23.89	6.55
q_環境創造学科	0.00	2.13	40.43	51.06	6.38
e_書道学科	0.29	3.51	57.02	34.50	4.68
X_教職課程センター	0.31	2.15	62.58	28.83	6.13
Y_国際交流センター	0.00	1.32	57.89	28.95	11.84

学年別には、図表 10 の通りである。学年が進行するにつれて「適切である」と認識する割合が高くなる傾向が見える。5「とても難しかった」の回答は1年生(13.77%)、2年生(10.26%)、3年生(9.34%)、4年生(9.11%)と徐々に少なくなり、3「適切だった」と回答する割合が1年生(44.06%)、2年生(51.08%)、3年生(52.59%)と大きくなっている。4年生は51.61%と3年生よりわずかに低かったが回答人数も少ないためのノイズである可能性もある。

図表 10 Q2「難易度適切」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.71	2.06	44.06	39.40	13.77
2	0.77	2.16	51.08	35.73	10.26
3	0.24	2.16	52.59	35.67	9.34
4	1.25	1.25	51.61	36.79	9.11

#### 4.3.4 【Q3a】 あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。【メール連絡】

全学では、2「したことがある」と回答したのは20.98%（前期は18.24%）であった。学科別および学年別の内訳を図表 11 に示す。2の数値で降順にソートしているが、質問やメール連絡をしたことがあるほうが一概に望ましいということではないのは言うまでもない。

図表 11 Q3a 「メール連絡」の学科／部局別（左）と学年別（右）回答

学科／部局	1	2
c_英米文学科	67.31	32.69
k_日本語学科	68.06	31.94
e_書道学科	69.14	30.86
i_中国語学科	69.40	30.60
r_スポーツ科学科	71.32	28.68
j_英語学科	72.49	27.51
n_国際関係学科	73.68	26.32
b_中国文学科	76.26	23.74
f_歴史文化学科	77.13	22.87
a_日本文学科	77.43	22.57
o_国際文化学科	78.42	21.58
d_教育学科	80.78	19.22
h_現代経済学科	81.57	18.43
u_社会学科	82.06	17.94
t_看護学科	82.30	17.70
g_社会経済学科	82.88	17.12
q_環境創造学科	82.98	17.02
p_経営学科	84.19	15.81
s_健康科学科	85.85	14.15
m_政治学科	86.10	13.90
l_法律学科	90.75	9.25
X_教職課程センター	81.93	18.07
Y_国際交流センター	35.14	64.86

学年	1	2
1	78.43	21.57
2	81.01	18.99
3	79.31	20.69
4	66.85	33.15

学科のなかで、質問やメールで連絡したことがある割合がもっとも高いのは英米文学科の 32.69%（前期は国際関係学科の 26.16%）であった。学科によって結構な違いがあることがわかる。部局では前期に引き続き国際交流センターが 64.86%と格段に高い（前期は 45.87%）。

学年別には 4 年生が 33.15%と 1～3 年生よりも格段に高かった。前期も同様の傾向（4 年生は 23.65%）があったが、後期には数値がさらに高くなった。卒業が近づいてきて様々な連絡や質問をする頻度が多くなったのではないかと解釈できる。

#### 4.3.5 【Q3b】 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。【対応迅速】

この設問には Q3a で「メールで連絡をしたことがある」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 4.05（前期は 3.99）で標準偏差は 1.02（前期は 1.04）であった。わずかだが前期を上回った。ほぼ 4「そう思う」という平均値なので、概ね迅速であると認識されていたと言える。

学科／部局別および学年別の数値を図表 12 に示す。最も数値が高い学科は前期と同じく中国文学科で 4.39（前期は 4.37）であった。部局では国際交流センターが 4.78 と前期の 4.58 よりさらに高かった。学年による違いはごくわずかであるが、4 年が最も高かった。これは前期も同様に観察された傾向である。これは 4 年生の授業担当者に対応が迅速である教員個人が多かったのか、同一の教員でも 4 年生に対しては迅速に対応する傾向があったのかは、あるいは同じ対応であっても 4 年生の学生は迅速だと感じる傾向があったのかはわからない。

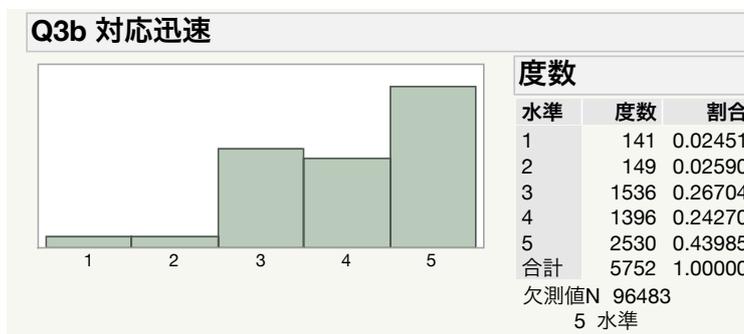
図表 12 Q3b「対応迅速」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
b_中国文学科	137	4.39	0.89
e_書道学科	124	4.28	1.02
k_日本語学科	172	4.26	0.82
a_日本文学科	367	4.18	0.94
t_看護学科	127	4.17	0.88
i_中国語学科	251	4.15	1.13
n_国際関係学科	176	4.12	1.00
c_英米文学科	334	4.12	1.05
f_歴史文化学科	170	4.11	0.99
r_スポーツ科学科	431	4.08	1.04
u_社会学科	391	4.08	1.02
h_現代経済学科	228	4.07	0.96
j_英語学科	529	4.05	1.07
d_教育学科	340	4.01	1.08
g_社会経済学科	312	4.01	0.95
o_国際文化学科	254	3.93	1.02
m_政治学科	236	3.89	0.95
l_法律学科	292	3.88	0.97
s_健康科学科	173	3.87	1.04
p_経営学科	559	3.78	1.01
q_環境創造学科	12	3.75	0.97
X_教職課程センター	88	4.14	0.96
Y_国際交流センター	49	4.78	0.42

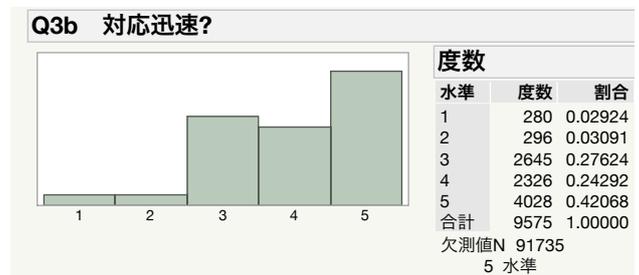
学年	数	平均	標準偏差
1	2984	4.07	1.00
2	1678	4.03	1.03
3	825	3.92	1.06
4	265	4.25	0.94

より詳細な状況を示すデータとして5～1の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表 13 の通りである。上に述べたように平均値は 4.05 とほとんど 4 に近かったが、最頻値は 5「とてもそう思う」で、約 44%（前期は 42%）の学生が質問やメールに対する対応は迅速であったと強く認識した、ということであり、前期よりさらに望ましい結果であると言える。

図表 13 Q3b「対応迅速」に対する全学の回答分布



参考：前期



学科／部局別回答分布を図表 14 に示す。5 の数値が最も高かった学科は中国文学科の 58.39%（前期は同じく中国文学科の 61.11%）であった。学科によってかなり数値に差があることがわかる。部局では国際交流センターの数値が 77.55%と前期の 72.31%より更に高くなった。

図表 14 Q3b「対応迅速」に対する学科／部局別回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
b_中国文学科	2.19	1.46	10.22	27.74	58.39
e_書道学科	3.23	1.61	16.94	20.16	58.06
i_中国語学科	5.18	3.59	15.94	21.91	53.39
a_日本文学科	0.82	2.45	24.52	22.07	50.14
t_看護学科	0.00	0.00	31.50	19.69	48.82
k_日本語学科	0.00	1.16	20.35	30.23	48.26
f_歴史文化学科	1.18	2.35	29.41	18.82	48.24
c_英米文学科	2.99	4.49	18.56	25.75	48.20
j_英語学科	2.84	3.97	25.71	20.42	47.07
r_スポーツ科学科	3.02	3.02	23.43	23.67	46.87
n_国際関係学科	2.84	1.70	22.73	26.14	46.59
u_社会学科	2.81	2.81	23.02	26.34	45.01
d_教育学科	3.82	2.65	27.06	21.47	45.00
h_現代経済学科	1.32	2.63	27.19	25.88	42.98
g_社会経済学科	0.96	2.24	32.37	23.72	40.71
o_国際文化学科	2.76	3.54	28.35	28.74	36.61
s_健康科学科	2.89	3.47	33.53	23.70	36.42
l_法律学科	1.71	3.08	34.25	27.40	33.56
m_政治学科	1.69	1.27	36.44	27.12	33.47
q_環境創造学科	0.00	0.00	58.33	8.33	33.33
p_経営学科	3.58	1.43	39.18	25.40	30.41
X_教職課程センター	2.27	1.14	22.73	28.41	45.45
Y_国際交流センター	0.00	0.00	0.00	22.45	77.55

学年別の分布を図表 15 に示す。やはり 4 年生の、5 と回答した割合が 51.32% と格段に高いのがわかる。前期は 44.42% だったのだが更に高くなった。

図表 15 Q3b「対応迅速」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	2.04	2.18	27.41	23.36	45.01
2	2.62	3.16	26.16	24.26	43.80
3	3.76	3.03	28.61	26.30	38.30
4	1.89	2.26	16.23	28.30	51.32

#### 4.3.6 【Q4a】この授業では提出物を出しましたか。[提出経験]

全体では、1「出していない」が、11.81%（前期は 15.1%）、2「出した」が 88.19%（前期は 84.9%）である。提出物を課される場合が前期よりやや多くなったことが伺える。

学科別および学年別の内訳を図表 16 に示す。2「出した」という回答が最も多い学科は書道学科の 95.88%（前期は看護学科の 94.08%）であった。提出物を課す割合は学科によって多少は異なっているが、60%台の学科もいくつかあった前期ほどの違いはなくなった。部局は国際交流センターの 94.74%が、前期（98.17%）に引き続いて多かった。

図表 16 Q4a「提出経験」の学科／部局別（左）および学年別（右）回答

学科／部局	1	2
e_書道学科	4.12	95.88
k_日本語学科	5.13	94.87
r_スポーツ科学科	5.90	94.10
d_教育学科	7.63	92.37
m_政治学科	8.06	91.94
h_現代経済学科	8.25	91.75
c_英米文学科	9.14	90.86
a_日本文学科	10.15	89.85
u_社会学科	10.92	89.08
p_経営学科	11.75	88.25
n_国際関係学科	11.79	88.21
s_健康科学科	11.85	88.15
j_英語学科	12.35	87.65
q_環境創造学科	12.77	87.23
o_国際文化学科	12.97	87.03
t_看護学科	13.25	86.75
f_歴史文化学科	14.69	85.31
b_中国文学科	14.86	85.14
i_中国語学科	17.13	82.87
l_法律学科	18.62	81.38
g_社会経済学科	21.66	78.34
X_教職課程センター	8.59	91.41
Y_国際交流センター	5.26	94.74

学年	1	2
1	11.06	88.94
2	13.29	86.71
3	11.10	88.90
4	11.83	88.17

#### 4.3.7 【Q4b】 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

この設問は Q4a で「提出したことがある」と回答した学生のみ回答してものである。

全学の平均は 4.01（前期は 3.97）標準偏差は 0.98（前期も 0.98）なので概ね「丁寧である」と認識されていたといえる。学科／部局別および学年別の平均値を図表 17 に示す。

学科で最も高いのが書道学科の 4.22 であった（前期は中国文学科の 4.46）。部局で数値が高いのは国際交流センターの 7.74（前期は 4.70）であった。学年による違いはほとんどないが、4 年生の値が最も高い。わずかな差ではあるが Q3B「対応迅速」と同じ結果なので、ノイズではないかも知れない。

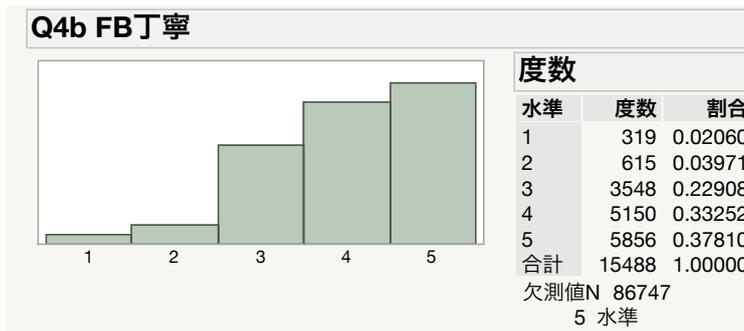
より詳細な様子を知るために水準別の分布を見てゆく。まず全学の分布を図表 18 に示す。上述のように平均値としては 4.01 だが、度数が最も高いのが 5「強くそう思う」であることが見て取れる。これは望ましいことである。全体の分布は前期とほぼ同一であった。しかし合計で 6.0%（前期は 5.7%）の学生が 1「まったくそう思わない」あるいは 2「どちらかと言えばそう思わない」と回答していることを無視してはなるまい。理想的には 1 と 2 はゼロであるべきである。

図表 17 Q4b「FB 丁寧」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

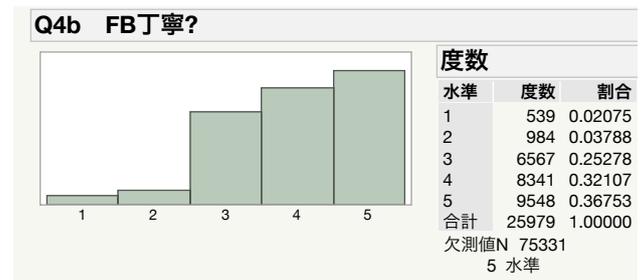
学科／部局	数	平均	標準偏差
e_書道学科	330	4.22	1.01
k_日本語学科	388	4.19	0.85
b_中国文学科	365	4.16	1.00
a_日本文学科	978	4.12	0.96
j_英語学科	1179	4.11	1.01
c_英米文学科	707	4.09	0.97
s_健康科学科	570	4.06	0.87
h_現代経済学科	719	4.03	1.01
n_国際関係学科	398	4.02	1.07
g_社会経済学科	853	4.02	0.96
i_中国語学科	545	4.01	1.12
u_社会学科	1336	4.00	0.93
t_看護学科	371	4.00	1.00
m_政治学科	716	3.97	0.95
o_国際文化学科	601	3.95	0.98
l_法律学科	1179	3.95	0.92
r_スポーツ科学科	979	3.93	0.93
p_経営学科	1413	3.90	0.97
d_教育学科	1013	3.87	1.00
f_歴史文化学科	432	3.85	0.95
q_環境創造学科	42	3.33	1.12
X_教職課程センター	301	4.06	1.03
Y_国際交流センター	73	4.74	0.60

学年	数	平均	標準偏差
1	7854	4.07	0.95
2	4916	3.93	1.00
3	2211	3.92	1.02
4	507	4.14	0.93

図表 18 Q4b「FB 丁寧」に対する全学の回答分布



参考：前期



学科／部局ごとの分布を図表 19 に示す。5「強くそう思う」の割合は、学科によってかなり異なっているのが見て取れる。これは前期にも見られた傾向である。学科で5と回答したのが最も多かったのは書道学科で53.03%(前期は中国文学科の64.71%)であった。国際交流センターは5と回答したのが80.82%と、前期の74.07%よりさらに高かった。

図表 19 Q4b「FB 丁寧」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
e_書道学科	2.42	4.24	15.15	25.15	53.03
b_中国文学科	1.64	4.66	19.73	24.11	49.86
i_中国語学科	4.77	4.22	21.47	24.59	44.95
j_英語学科	2.97	3.48	17.90	30.87	44.78
a_日本文学科	1.43	3.78	20.55	30.06	44.17
k_日本語学科	0.77	2.06	17.27	37.63	42.27
c_英米文学科	1.84	4.53	18.25	33.95	41.44
n_国際関係学	4.02	4.77	17.09	33.17	40.95
h_現代経済学	2.64	4.45	19.89	32.96	40.06
t_看護学科	2.70	3.23	23.72	32.08	38.27
g_社会経済学	1.99	3.63	22.16	34.70	37.51
s_健康科学科	1.05	1.23	24.91	36.14	36.67
u_社会学科	0.97	4.49	24.18	33.98	36.38
o_国際文化学	2.00	4.83	24.46	33.61	35.11
m_政治学科	2.23	3.49	22.63	38.55	33.10
r_スポーツ科	1.02	3.98	29.11	32.99	32.89
l_法律学科	1.53	3.56	25.53	37.57	31.81
d_教育学科	2.27	5.23	27.84	32.97	31.69
p_経営学科	2.48	4.10	25.05	37.44	30.93
f_歴史文化学	1.62	3.70	32.87	31.25	30.56
q_環境創造学	7.14	11.90	38.10	26.19	16.67
X_教職課程	2.99	4.65	18.60	31.23	42.52
Y_国際交流	0.00	1.37	4.11	13.70	80.82

学年別の状況を図表 20 に示す。5 と回答した割合が 4 年生で最も高く、ついで 1 年生であり、2 年生と 3 年生がやや低かった。2 年生と 3 年生の数値が、1 年生と 4 年生よりも低いという傾向は前期も観察されていた。

図表 20 Q4b「FB 丁寧」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.66	3.30	21.72	32.99	40.34
2	2.46	4.19	25.69	32.79	34.87
3	2.71	5.97	22.16	35.01	34.15
4	1.58	3.55	17.55	34.12	43.20

#### 4.3.8 【Q5】 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲]

この設問に対する全学の平均は 4.23（前期は 4.18）で、標準偏差は 0.77（前期は 0.81）であった。4「どちらかと言えばそう思う」と 5「強くそう思う」の間であり、学生は平均的には意欲を持って授業に取り組んでいたと言えるだろう。わずかながら前期よりもさらに数値が高くなったのは喜ばしいことである。学科／部局別および学年別の平均値を図表 21 に示す。

図表 21 Q5「自分意欲」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

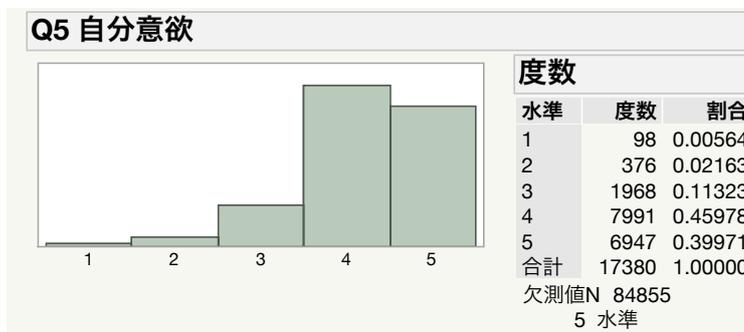
学科／部局	数	平均	標準偏差
r_スポーツ科学科	1038	4.48	0.69
e_書道学科	342	4.47	0.70
i_中国語学科	650	4.34	0.75
j_英語学科	1332	4.29	0.80
s_健康科学科	635	4.28	0.73
f_歴史文化学科	499	4.27	0.72
c_英米文学科	781	4.27	0.72
k_日本語学科	409	4.26	0.71
a_日本文学科	1080	4.26	0.71
d_教育学科	1092	4.23	0.76
t_看護学科	420	4.23	0.74
b_中国文学科	423	4.22	0.81
n_国際関係学科	443	4.20	0.81
o_国際文化学科	673	4.20	0.77
h_現代経済学科	776	4.19	0.82
u_社会学科	1495	4.18	0.78
g_社会経済学科	1061	4.17	0.81
p_経営学科	1584	4.14	0.78
l_法律学科	1424	4.11	0.81
m_政治学科	774	4.08	0.79
q_環境創造学科	47	3.96	0.86
X_教職課程センター	326	4.13	0.78
Y_国際交流センター	76	4.55	0.68

学年	数	平均	標準偏差
1	8758	4.29	0.76
2	5610	4.18	0.76
3	2454	4.11	0.82
4	558	4.20	0.83

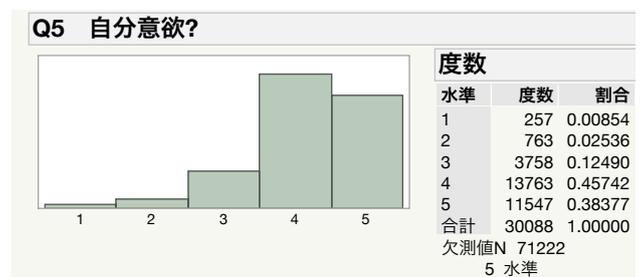
学科で最も値が高かったのは、スポーツ科学科の 4.48（前期もスポーツ科学科の 4.45）であった。部局で高かったのは国際交流センターの 4.55（前期は 4.49）であった。学年別には前期には 1 年 > 2 年 > 3 年 > 4 年と学年を追うごとに、残念ながら数値が下がる傾向が見えたが、後期は 4 年生が 2 年生よりも数値が高くなった。

水準別の分布を見てゆく。全学の分布は図表 22 のとおりである。最頻値は 4 であり、分布も前期とほとんど同じと言える。

図表 22 Q5「自分意欲」に対する全学の回答分布



参考：前期



学科別には図表 23 のように分布していた。5「強くそう思う」の割合が最も大きかった学科はスポーツ科学科で 57.51%（前期は 56.59%）であった。学科による違いが顕著であるように見える。国際交流センターは前期の 58.18%よりも更に高く、64.47%であった。

図表 23 Q5「自分意欲」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
r_スポーツ科学科	0.39	0.77	6.84	34.49	57.51
e_書道学科	0.58	0.88	5.85	36.26	56.43
i_中国語学科	0.77	1.23	8.31	42.15	47.54
j_英語学科	0.45	2.48	11.41	39.19	46.47
s_健康科学科	0.16	1.42	11.50	44.25	42.68
f_歴史文化学科	0.40	1.20	9.82	47.90	40.68
c_英米文学科	0.13	1.79	9.99	47.50	40.59
k_日本語学科	0.00	0.98	12.47	45.97	40.59
b_中国文学科	0.71	3.55	9.22	46.34	40.19
d_教育学科	0.46	2.11	10.71	47.44	39.29
n_国際関係学科	0.90	3.16	10.16	46.73	39.05
t_看護学科	0.00	1.90	12.62	46.43	39.05
h_現代経済学科	0.90	2.71	12.11	45.23	39.05
a_日本文学科	0.65	1.20	8.15	51.85	38.15
o_国際文化学科	0.30	2.23	12.93	46.51	38.04
g_社会経済学科	0.47	3.58	12.25	46.18	37.51
u_社会学科	0.47	3.08	10.97	48.83	36.66
p_経営学科	0.57	2.46	14.14	48.55	34.28
l_法律学科	1.26	2.25	14.12	49.37	33.01
m_政治学科	1.16	1.81	14.99	51.81	30.23
q_環境創造学科	0.00	6.38	19.15	46.81	27.66
X_教職課程センター	0.31	2.76	14.72	48.47	33.74
Y_国際交流センター	0.00	1.32	6.58	27.63	64.47

学年別の分布を図表 24 に示す。5 の割合は 1 年生が 44.18% と最も高く、それが 2 年生(36.01%)、3 年生(33.78%) と学年が上がるにつれて下がるが、4 年生になると 41.04% とすこし持ち直している。同じ学生集団で調査した前期では 4 年生が 30.91% と最も低かったのだが、後期になって意欲が持ち直したのであれば喜ばしいことであろう(厳密には学年が同じであっても前期と後期では回答率も回答集団も同一ではないのでなんとも言えないが)。いずれにしても 1 年生の数値が最も高いのは前期と同じである。2 年生以上での学修意欲の喚起と持続は引き続きの課題であろう。

図表 24 Q5「自分意欲」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.55	1.86	9.77	43.64	44.18
2	0.45	1.98	12.73	48.84	36.01
3	0.77	3.59	13.41	48.45	33.78
4	1.08	2.51	12.37	43.01	41.04

#### 4.3.9 【Q6】 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

この設問に対する回答の全学の平均は 4.41 (前期は 4.39) で標準偏差は 0.77 (前期は 0.78) であった。4.41 とは「どちらかと言えばそう思う」と「強くそう思う」のほぼ中間ということなので、前期に引き続きまずまず満足すべき数値であろう。学科／部局別および学年別の平均値を図表 25 に示す。

数値が最も高かったのは学科では、スポーツ科学科の 4.54 (前期は中国文学科の 4.61) であった。他の学科も大きな差はないように見える。国際交流センターの数値はやはり高く 4.82 (前期は 4.72) であった。学年では 1 年生が最も高く、それが 2 年生、3 年生と下がっていき、4 年生でまた上がる、という Q5「自分意欲」とま

まったく同じパターンになっているのが興味深い。Q5 と違ってこの Q6 は、「学生から見て教員の熱意がどのように映っているか」を問うており、Q5 と Q6 は必ずしも連動する必然性はないと考えられるのだが、連動しているとすれば、Q6 で測定している要素すなわち「学生が認識する教員の熱意」が Q5 で測定している要素すなわち「学生が認識する自分の意欲」に影響を及ぼしている可能性のほうが、Q5 の測定要素が Q6 の測定要素に影響している可能性よりも高いように思われる。

図表 25 Q6「教員熱意」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
r_スポーツ学科	1036	4.54	0.68
b_中国文学科	425	4.52	0.77
e_書道学科	342	4.52	0.74
a_日本文学科	1079	4.52	0.70
c_英米文学科	781	4.50	0.77
k_日本語学科	409	4.46	0.70
f_歴史文化学科	499	4.46	0.72
i_中国語学科	650	4.45	0.80
u_社会学科	1498	4.44	0.70
d_教育学科	1090	4.44	0.80
s_健康科学科	634	4.42	0.73
o_国際文化学科	675	4.41	0.76
n_国際関係学科	445	4.38	0.86
j_英語学科	1333	4.38	0.86
h_現代経済学科	777	4.37	0.76
g_社会経済学科	1061	4.34	0.81
m_政治学科	774	4.33	0.76
l_法律学科	1426	4.32	0.80
p_経営学科	1583	4.30	0.81
t_看護学科	421	4.28	0.79
q_環境創造学科	47	3.94	1.15
X_教職課程センター	327	4.37	0.80
Y_国際交流センター	76	4.82	0.42

学年	数	平均	標準偏差
1	8759	4.45	0.76
2	5615	4.38	0.78
3	2453	4.35	0.81
4	561	4.43	0.75

水準別の回答分布を検討する。全学の回答分布を図表 26 に示す。最頻値は 5「強くそう思う」であり、54.76%（前期は 53.9%）を占める。5 と 4 の合計で約 90%（前期は約 89%）になり、「教員は熱意をもって授業を行っている」という認識が圧倒的に多いと言って良い。分布の形も前期と事実上同一である。

図表 26 Q6「教員熱意」に対する全学の回答分布



学科／部局別の分布を図表 27 に示す。平均値にはそれほど差がなくとも、5「強くそう思う」の回答割合には学科によってかなりの違いが見られる。5 の割合が最も大きい学科は中国文学科で 64.00%（前期も同じく中国文学科で 68.93%）であった。国際交流センターの数値は 82.89%で、前期の 77.27%よりも更に高くなった。

図表 27 設問 6「教員熱意」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
b_中国文学科	1.41	1.65	4.00	28.94	64.00
e_書道学科	0.00	3.51	4.09	28.95	63.45
r_スポーツ科学科	0.39	0.77	6.18	29.54	63.13
c_英米文学科	0.90	1.66	6.40	28.94	62.10
a_日本文学科	0.46	1.02	5.93	31.05	61.54
i_中国語学科	0.77	2.62	6.92	29.85	59.85
d_教育学科	1.19	1.93	6.33	32.94	57.61
n_国際関係学科	1.80	1.12	11.24	28.54	57.30
j_英語学科	1.35	2.18	10.50	28.73	57.24
f_歴史文化学科	0.60	1.60	5.01	36.47	56.31
k_日本語学科	0.49	0.98	6.36	35.94	56.23
o_国際文化学科	0.44	1.33	10.22	32.74	55.26
s_健康科学科	0.32	1.10	9.15	34.86	54.57
u_社会学科	0.33	1.40	5.87	38.58	53.81
h_現代経済学科	0.64	1.80	7.98	38.61	50.97
g_社会経済学科	0.94	2.83	6.97	39.49	49.76
l_法律学科	1.33	1.05	9.82	40.11	47.69
p_経営学科	1.01	1.71	10.99	39.10	47.19
m_政治学科	0.90	1.55	8.01	42.76	46.77
t_看護学科	0.48	2.85	9.98	41.33	45.37
q_環境創造学科	4.26	8.51	17.02	29.79	40.43
X_教職課程センター	0.61	2.75	8.26	35.78	52.60
Y_国際交流センター	0.00	0.00	1.32	15.79	82.89

学年別の状況を図表 28 に示す。5「強くそう思う」の割合は1年生が最も大きく、2年生、3年生と減って行き、4年生でまた大きくなっている。このパターンは前期にも見られた。この数値の変化の原因が、各学年を担当する教員集団にあるのか、学生集団にあるのかは、今回のデータでは切り分けることが困難である。

図表 28 Q6「教員熱意」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.74	1.66	7.16	33.22	57.22
2	0.89	1.62	8.48	36.83	52.18
3	1.02	2.16	8.93	36.28	51.61
4	0.71	1.07	8.38	34.05	55.79

#### 4.3.10 学生の意欲と教員に熱意を感じる度合いの関係

Q5「自分意欲」とQ6「教員熱意」の全学のクロス集計をした結果を、図表 29a と 29b に示す。いずれも行を「教員熱意」、列を「自分意欲」とした。29a は度数（回答数）を、29b は行ごとのパーセンテージを示している。セルの値の大きさに応じて背景色が濃くなるよう設定した。図表 29a からはセルごとの人数がどの程度いたかがひと目で分かる。図表 29b からは、教員熱意の回答ごとに、自分意欲の回答がどのように分布していたかがわか

りやすい。図表 29a でも 29b でも、濃度の濃いセルが右肩下がりに分布している。これは教員熱意の数値が高いほど、自分意欲の数値が高くなる傾向があることを示している。教員熱意が 5 のとき自分意欲の最頻値セルは自分意欲 = 5 (6,120、64.37%)、教員熱意が 4 のときの最頻値セルは自分意欲 = 4 (4,442、73.40%)、教員熱意が 3 のときの最頻値セルは自分意欲 = 3 (688、50.26%)、ときれいに連動している。2 つの変数を連続尺度とみなしてピアソン相関係数を求めると、 $r = .5460$  ( $p < .001$ ) であった (前期の値は  $r = .5565$ )。

図表 29a 自分意欲の回答と教員熱意の回答のクロス集計 [度数]

度数	自分意欲 = 1	自分意欲 = 2	自分意欲 = 3	自分意欲 = 4	自分意欲 = 5	合計
教員熱意 = 1	34	18	30	33	29	144
教員熱意 = 2	16	64	74	106	34	294
教員熱意 = 3	20	104	688	441	116	1369
教員熱意 = 4	14	131	823	4442	642	6052
教員熱意 = 5	14	59	351	2964	6120	9508
合計	98	376	1966	7986	6941	17367

図表 29b 自分意欲の回答と教員熱意の回答のクロス集計 [行のパーセンテージ]

行%	自分意欲 = 1	自分意欲 = 2	自分意欲 = 3	自分意欲 = 4	自分意欲 = 5	合計
教員熱意 = 1	23.61	12.50	20.83	22.92	20.14	100.00
教員熱意 = 2	5.44	21.77	25.17	36.05	11.56	100.00
教員熱意 = 3	1.46	7.60	50.26	32.21	8.47	100.00
教員熱意 = 4	0.23	2.16	13.60	73.40	10.61	100.00
教員熱意 = 5	0.15	0.62	3.69	31.17	64.37	100.00

#### 4.3.11 【Q7】 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長感覚]

この設問に対する全学の平均値は 4.31 (前期は 4.28) で標準偏差は 0.77 (0.80) であった。前期とほとんど同一の数値であり、全体の値としては悪くないと思われる。平均値を学科/部局別および学年別に整理して図表 30 として示す。

学科で最も高い平均値は書道学科の 4.47 であった (前期は中国文学科の 4.52)。部局では国際交流センター (4.61) の値が高い (前期は 4.57)。学年別では、僅かな差ではあるが、1 年生が高く、2 年生、3 年生がやや低くなり、それがまた 4 年生で上昇する、という傾向が見られる。前期にも同様の傾向があった。

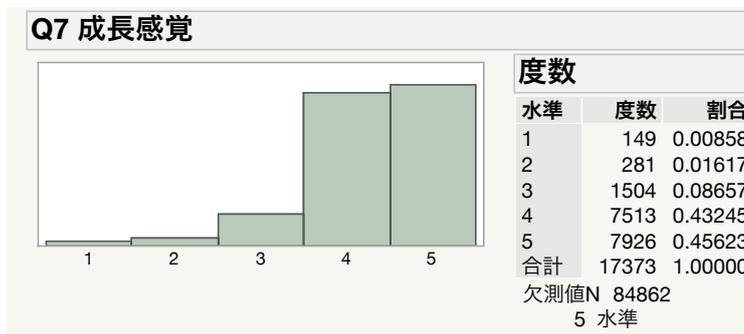
図表 30 Q7「成長感覚」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
e_書道学科	341	4.47	0.68
a_日本文学科	1080	4.42	0.69
f_歴史文化学科	499	4.42	0.70
r_スポーツ科学科	1036	4.40	0.73
s_健康科学科	633	4.35	0.71
i_中国語学科	650	4.35	0.79
d_教育学科	1091	4.35	0.78
h_現代経済学科	776	4.35	0.70
k_日本語学科	410	4.34	0.66
b_中国文学科	425	4.33	0.77
c_英米文学科	781	4.30	0.79
j_英語学科	1331	4.30	0.84
o_国際文化学科	675	4.30	0.80
t_看護学科	419	4.30	0.71
n_国際関係学科	445	4.29	0.83
u_社会学科	1497	4.27	0.75
g_社会経済学科	1060	4.26	0.77
p_経営学科	1580	4.25	0.79
l_法律学科	1421	4.23	0.82
m_政治学科	773	4.19	0.78
q_環境創造学科	47	3.94	0.94
X_教職課程センター	327	4.36	0.67
Y_国際交流センター	76	4.61	0.63

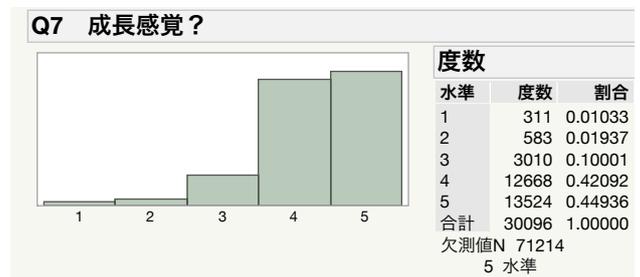
学年	数	平均	標準偏差
1	8748	4.34	0.77
2	5614	4.28	0.76
3	2452	4.28	0.78
4	559	4.33	0.76

水準別の全学の分布を図表 31 に示す。前期に引き続き、最頻値は5「強くそう思う」であり、満足できる結果であろう。分布も前期とほとんど同一と言って良い。

図表 31 Q7「成長感覚」に対する全学の回答分布



参考：前期



水準別の分布を学科／部局別にまとめたものが図表 32 である。平均値からは読み取れなかった学科による違いも、水準ごとのパーセンテージを比べてみると読み取ることができるようだ。5「強くそう思う」の割合が最も大きかったのは書道学科で 56.01%（前期は中国文学科の 60.34%）であった。部局では国際交流センターの 68.42%で、前期の 65.45%よりもさらに数値が上がっていた。

学年別の違いをまとめたのが図表 33 である。5「強くそう思う」が1年生で高く、2年、3年でやや下がり、また4年で上がっている。前期も同様の傾向があった。

図表 32 Q7「成長感覚」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
e_書道学科	0.29	0.88	6.45	36.36	56.01
f_歴史文化学科	0.40	1.00	7.21	39.08	52.30
r_スポーツ科学科	0.48	1.35	7.72	38.32	52.12
a_日本文学科	0.37	1.48	5.09	41.76	51.30
i_中国語学科	1.08	2.15	7.23	39.85	49.69
d_教育学科	1.01	1.56	8.16	40.05	49.22
j_英語学科	1.28	2.40	9.84	37.87	48.61
s_健康科学科	0.32	0.47	10.58	40.92	47.71
b_中国文学科	0.94	1.41	8.24	42.12	47.29
n_国際関係学科	2.02	0.45	11.01	40.00	46.52
o_国際文化学科	1.19	1.93	8.44	42.67	45.78
h_現代経済学科	0.39	0.77	8.51	44.59	45.75
c_英米文学科	1.15	1.66	8.45	43.28	45.45
k_日本語学科	0.24	0.73	6.59	49.27	43.17
t_看護学科	0.48	1.19	8.59	47.73	42.00
u_社会学科	0.27	2.47	9.08	46.83	41.35
p_経営学科	1.20	1.90	9.05	46.52	41.33
g_社会経済学科	0.94	1.60	9.34	47.08	41.04
l_法律学科	1.48	1.90	9.78	45.81	41.03
m_政治学科	1.03	1.55	11.64	48.64	37.13
q_環境創造学科	4.26	2.13	14.89	53.19	25.53
X_教職課程センター	0.00	1.53	6.42	46.18	45.87
Y_国際交流センター	0.00	0.00	7.89	23.68	68.42

図表 33 Q7「成長感覚」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.85	1.63	8.30	41.21	48.01
2	0.75	1.59	9.39	45.33	42.95
3	1.18	1.63	8.24	46.17	42.78
4	0.72	1.61	8.77	41.32	47.58

4.3.12 【Q8】 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。【総合満足】

この設問に対する回答の全学の平均値は8.28（前期は8.16）、標準偏差は1.66（前期は1.72）である。前期より平均値が僅かだが上昇し、標準偏差が僅かだが減少したのは喜ばしいことである。8.28は「82.8%満足である」と読み替えることができ、まずまずの結果だと思われる。図表34に学科／部局別および学年別の数値をまとめた。

学科で最も平均値が高いのは書道学科の8.77（前期はスポーツ科学科の8.59）、ついでスポーツ科学科の8.69（前期は書道学科の8.77）であった。書道学科は値のばらつき（標準偏差）も1.37と学科のなかでもっとも小さく、学生がおしなべて高い満足度を持っている傾向が伺える。部局では国際交流センターの9.13（前期は9.09）が高かった。

学年では4年生が8.37と最も高く（前期は8.27）、ついで1年生が8.30と高い（前期は8.19）。4年生も満足度が最も高いというパターンは前期と共通しているが、数値的にはいずれの学年も後期が前期を上回ったのは喜

ばしいことである。

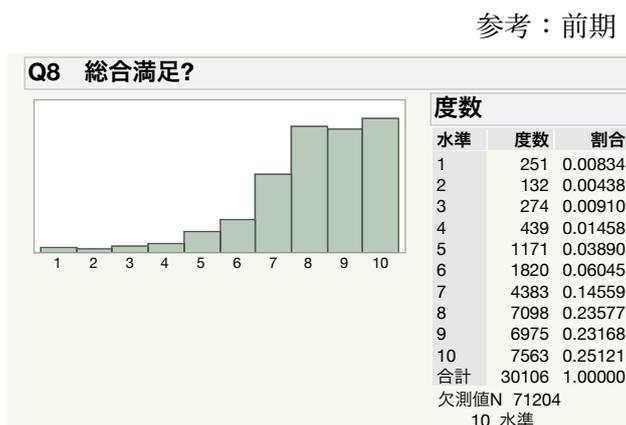
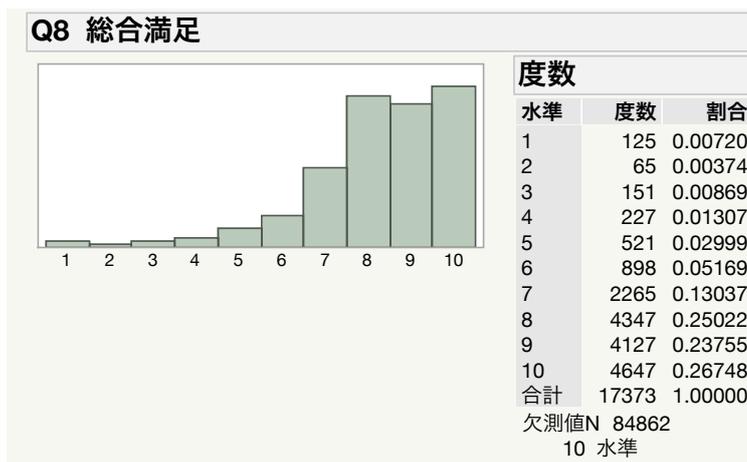
図表 34 Q8「総合満足」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
e_書道学科	339	8.77	1.37
r_スポーツ科学科	1034	8.69	1.43
a_日本文学科	1079	8.57	1.39
k_日本語学科	409	8.49	1.46
s_健康科学科	635	8.41	1.43
f_歴史文化学科	499	8.38	1.52
h_現代経済学科	777	8.36	1.58
c_英米文学科	780	8.29	1.61
j_英語学科	1332	8.25	1.90
i_中国語学科	648	8.25	1.75
d_教育学科	1089	8.24	1.71
g_社会経済学科	1060	8.24	1.69
n_国際関係学科	445	8.23	1.93
o_国際文化学科	675	8.20	1.79
u_社会学科	1499	8.20	1.62
b_中国文学科	424	8.16	1.86
p_経営学科	1583	8.12	1.65
t_看護学科	421	8.10	1.78
m_政治学科	770	8.06	1.64
l_法律学科	1425	8.05	1.70
q_環境創造学科	47	7.49	1.99
X_教職課程センター	327	8.27	1.52
Y_国際交流センター	76	9.13	1.16

学年	数	平均	標準偏差
1	8754	8.30	1.67
2	5609	8.27	1.59
3	2452	8.23	1.75
4	558	8.37	1.67

より詳しく分布を見てゆく。まず全学の水準別の分布は図表 35 の通りである。最頻値は 10 で、全体の 26.7%（前期は 25.1%）である。9 が 23.8%（前期は 23.2%）、8 が 25.0%（前期は 23.6%）なので、10～8 で、全体の 75.5%（前期は 71.7%）を占める。前期よりさらに良い結果であった。一方、1～4 という低い水準の回答も存在することは無視できないが、1～4 は合計して 2.5%と、前期の 3.6%より減少したのは良い傾向である。

図表 35 Q8「総合満足」の全学の回答分布



学科／部局別の分布を図表 36 に示す。10（100%満足）の割合を見ると、学科では 14.89%～38.94%と大きな違いが見られる。10 の割合が最も高かった学科は書道学科の 38.94%（前期は同じく書道学科 39.86%）であった。30%を上回ったのが前期は 4 学科だったが、後期は 5 学科に増えた（書道学科、スポーツ科学科、国際関係学科、日本文学科、英語学科）。部局では国際交流センターは 10 の割合が 50.00%（前期は 45.45%）と圧倒的に高かった。

図表 36 Q8「総合満足」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
e_書道学科	0.00	0.00	0.59	0.88	2.36	1.18	10.03	20.94	25.07	38.94
r_スポーツ科学科	0.10	0.29	0.39	0.97	2.03	3.48	8.32	22.05	26.11	36.27
n_国際関係学科	1.35	0.45	1.57	2.02	4.27	6.29	9.21	20.90	22.47	31.46
a_日本文学科	0.28	0.00	0.46	0.74	1.39	3.06	13.62	23.17	26.04	31.23
j_英語学科	1.20	1.13	1.35	1.13	3.98	5.18	11.41	20.35	23.35	30.93
o_国際文化学科	0.74	1.04	0.89	1.04	4.30	5.33	14.37	23.11	20.15	29.04
k_日本語学科	0.49	0.00	0.24	1.47	1.47	4.65	10.76	25.92	26.41	28.61
b_中国文学科	1.89	0.47	1.18	1.65	2.12	4.25	16.04	24.29	20.75	27.36
i_中国語学科	1.23	0.46	0.93	1.08	2.47	6.94	12.50	22.69	24.54	27.16
g_社会経済学科	0.85	0.47	0.85	1.13	3.58	4.15	14.62	26.23	21.13	26.98
h_現代経済学科	0.77	0.00	0.90	0.90	2.45	4.89	12.23	25.87	25.23	26.77
s_健康科学科	0.16	0.00	0.31	0.94	2.20	6.46	12.28	24.88	25.98	26.77
f_歴史文化学科	0.20	0.60	0.40	1.40	2.61	4.01	10.82	28.86	24.85	26.25
d_教育学科	0.83	0.37	1.19	1.56	2.94	4.87	13.22	24.79	24.06	26.17
t_看護学科	0.24	0.00	1.90	3.56	4.04	6.65	11.64	25.65	20.19	26.13
c_英米文学科	0.90	0.38	0.51	0.64	2.56	5.51	14.36	25.64	23.59	25.90
u_社会学科	0.33	0.27	1.00	1.60	3.27	6.80	13.21	25.48	24.02	24.02
p_経営学科	0.88	0.32	0.88	1.52	3.22	5.12	14.59	29.56	22.93	20.97
l_法律学科	0.91	0.35	1.19	1.54	3.51	6.25	15.51	26.88	23.09	20.77
m_政治学科	0.91	0.52	0.52	1.69	3.12	6.49	14.68	28.31	25.84	17.92
q_環境創造学科	4.26	0.00	0.00	0.00	10.64	4.26	21.28	34.04	10.64	14.89
X_教職課程センター	0.31	0.00	0.61	0.92	3.36	5.81	14.98	26.91	21.71	25.38
Y_国際交流センター	0.00	0.00	0.00	0.00	2.63	0.00	7.89	10.53	28.95	50.00

学年別の分布を図表 37 に示す。10 と回答した割合は 4 年生が最も多く、ついで 2 年生であった。ただし回答率、とくに 4 年生の回答率が 6.6%（前期は 11.2%）と非常に低かったことから結果の一般化には注意が必要である。

図表 37 Q8「総合満足」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	0.72	0.38	0.98	1.44	2.73	5.01	12.95	24.78	23.19	27.82
2	0.59	0.32	0.61	1.16	3.26	5.05	13.48	26.40	24.26	24.87
3	0.94	0.53	1.14	1.18	3.38	5.95	12.89	23.00	24.23	26.75
4	1.08	0.18	0.54	1.25	2.87	5.38	10.57	23.84	25.45	28.85

#### 4.3.13 全体的満足度に貢献する要因

授業の大きな目標のひとつは「全体的満足度」を向上させることであると考えられる（もちろん唯一の目標であるという意味ではない）。そこで前期に引き続き、Q8「全体満足」を目標変数と考えたときに、他のどの変数がどの程度関連しているかを調べた。前期同様、Q2 に関しては以下のような変換を行い、この結果を「Q2 難

易度[変換]」という新たな変数として使用した。

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5 (とても難しかった) → 1
- 4 (やや難しかった) → 3
- 3 (適切だった) → 5
- 2 (やや易しかった) → 3
- 1 (とても易しかった) → 1

まずすべての変数ペア間の相関係数を調べたところ図表 38 のようになった。セルの背景の濃さは相関係数の値の高さを表している。相関係数の一般的解釈に従うならば、.20~.40 は「弱い相関がある」、.40~.70 は「かなり（比較的強い）相関がある」ということなので、ほとんどの組み合わせにおいて「弱い」あるいは「比較的強い」相関があると言える。（サンプルの多さもあり、すべての係数が  $p < .0001$  で有意である。）Q8「総合満足」との相関が最も強いのは「成長感覚」( $r = .692$ )であり、次に「教員熱意」( $r = .661$ )、「自分意欲」( $r = .575$ )、「FB 丁寧」( $r = .544$ )「シラバス通り」( $r = .517$ )「対応迅速」( $r = .481$ )「難易度(変換)」( $r = .258$ )と続いている。この相関の強さの変数間の相対的順位は、前期のデータから観察されたものとまったく同じである。

図表 38 変数間の相関

	シラバス通り	難易度[変換]	対応迅速	FB丁寧	自分意欲	教員熱意	成長感覚	総合満足
Q1b シラバス通り	1.000	0.068	0.418	0.422	0.426	0.509	0.485	0.517
Q2 難易度[変換]	0.068	1.000	0.105	0.096	0.101	0.114	0.148	0.258
Q3b 対応迅速	0.418	0.105	1.000	0.498	0.392	0.458	0.422	0.481
Q4b FB丁寧	0.422	0.096	0.498	1.000	0.440	0.545	0.477	0.544
Q5 自分意欲	0.426	0.101	0.392	0.440	1.000	0.546	0.597	0.575
Q6 教員熱意	0.509	0.114	0.458	0.545	0.546	1.000	0.643	0.661
Q7 成長感覚	0.485	0.148	0.422	0.477	0.597	0.643	1.000	0.692
Q8 総合満足	0.517	0.258	0.481	0.544	0.575	0.661	0.692	1.000

次に「総合満足」を目標変数、他のすべてを予測変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った<sup>2</sup>ところ、投入したすべての説明変数が保持され、最終的に図表 39 のモデルを得た。（保持された変数は前期と同一である。）

図表 39 総合満足为目标変数としたステップワイズ回帰分析の最終モデル

あてはめの要約				パラメータ推定値					
R2乗	0.653769			項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob> t )	
自由度調整R2乗	0.653267			切片	-0.826858	0.10448	-7.91	<.0001*	
誤差の標準偏差(RMSE)	1.022071			Q1b シラバス通り	0.2675096	0.024268	11.02	<.0001*	
Yの平均	8.442351			Q2 難易度[変換]	0.1483786	0.010475	14.16	<.0001*	
オブザベーション(または重みの合計)	4831			Q3b 対応迅速	0.1345636	0.017807	7.56	<.0001*	
分散分析				Q4b FB丁寧	0.2575526	0.020438	12.60	<.0001*	
要因	自由度	平方和	平均平方	F値	Q5 自分意欲	0.15679	0.025344	6.19	<.0001*
モデル	7	9513.449	1359.06	1301.002	Q6 教員熱意	0.4717395	0.02836	16.63	<.0001*
誤差	4823	5038.245	1.04	p値(Prob>F)	Q7 成長感覚	0.7290061	0.027863	26.16	<.0001*
全体(修正済み)	4830	14551.695		<.0001*					

<sup>2</sup> 各変数の分布は正規分布からかけ離れているため、厳密には重回帰分析の前提を満たしていない。

「分散分析」表から、これは「総合満足」の説明として有効なモデルであることがわかる。「あてはめの要約」のなかの自由度調整 R2 乗の値を見ると、このモデルによって「総合満足」の 65.4%（前期は 60.8%）を説明していることがわかる。「パラメータ推定値」を見ると、投入したすべての変数が有意であり、「総合満足」の変化量に対して最も大きな貢献をしているのが「成長感覚」であり、次に「教員熱意」である。他の変数もすべて独自の貢献をしながら、総合満足につながっている、と解釈できる。具体的には次の式によって「総合満足」が予測される。

$$\text{総合満足} = 0.729 \times \text{成長感覚} + 0.472 \times \text{教員熱意} + 0.148 \times \text{難易度[変換]} + 0.268 \times \text{シラバス通り} + 0.258 \times \text{FB 丁寧} + 0.157 \times \text{自分意欲} + 0.135 \times \text{対応迅速} - 0.827$$

この式は最初の項の「成長感覚」については次のように読み取ることが可能である。

- 「成長感覚」の回答が 5 段階尺度で 1 上昇する（例：3→4）時、他の回答が一定であれば、平均すると「総合満足」の回答が 10 段階尺度で 0.729 上昇する。

同様に、その他の項についても以下のように読み取れる（「他の回答が一定であれば」は省略している）。

- 「教員熱意」の回答が 1 上昇する（例：3→4）時、「総合満足」の回答が 0.472 上昇する。
- 「難易度適切」の回答（変換したもの）が 2 上昇する（例：3→5）時、「総合満足」の回答が  $0.148 \times 2 = 0.296$  上昇する。
- 「シラバス通り」の回答が 1 上昇する（例：3→4）時、「総合満足」の回答が 0.268 上昇する。
- 「FB 丁寧」の回答が 1 上昇する（例：3→4）時、「総合満足」の回答が 0.258 上昇する。
- 「自分意欲」の回答が 1 上昇する（例：3→4）時、「総合満足」の回答は 0.158 上昇する。
- 「対応迅速」の回答が 1 上昇する（例：3→4）時、「総合満足」の回答が 0.135 上昇する。

つぎに、この重回帰モデルにおける各変数の寄与率を求めた<sup>3</sup>。全 7 変数を投入した場合の分散説明率（自由度調整 R2 乗）と、変数 A を除いた残りの 6 変数のみを投入した場合の分散説明率の差分を変数 A の寄与率とした。7 変数の寄与率は図表 40 の通りである。寄与率が最も大きいのはやはり「成長感覚」であるが、次に大きいのは「対応迅速」である。「対応迅速」の寄与率が大きいのはこの変数が他の変数との相関が比較的小さいため、独自性が強いことの結果だと考えられる。そして 3 番目に寄与率が大きいのは「教員熱意」である。

図表 40 各予測変数の寄与率

	分散説明率	差分
7変数モデル	0.653267	
Q1「シラバス通り」を除いた6変数モデル	0.651888	0.001379
Q2「難易度（変換）」を除いた6変数モデル	0.638619	0.014648
Q3「対応迅速」を除いた6変数モデル	0.606714	0.046553
Q4「FB丁寧」を除いた6変数モデル	0.642692	0.010575
Q5「自分意欲」を除いた6変数モデル	0.648705	0.004562
Q6「教員熱意」を除いた6変数モデル	0.633511	0.019756
Q7「成長感覚」を除いた6変数モデル	0.604528	0.048739

これらの係数の値は今回のデータに限って得られたものである。しかし総合満足に与える影響は「成長感覚」が最も大きく、かつ他のすべての変数もそれぞれ影響がある、というパターンは前期とまったく同じものであり

<sup>3</sup> この部分の分析方法および結果の解釈については、児玉佳一・教職課程センター講師から貴重な助言を頂いた。

単なる偶然であるとは考えられない。「学生がどの程度成長の感覚を持つか」「教えることに対する教員の熱意をどの程度感じるか」「学生自身がどの程度意欲的に取り組むか」「提出物に対するフィードバックがどの程度丁寧と感じられるか」「どの程度シラバス通りに授業が実施されるか」「難易度が適切だとどの程度感じられるか」「メールなどに対する対応がどの程度迅速だと感じられるか」などのすべての要素が、どれも学生の総合的な満足につながっているというのは、直観的にも納得のいく結果である。

## 5. まとめと結論

全学レベルでのおもな結果をまとめるならば、以下のようである。

1. シラバス内容を知っているのは約 80%であった。さらにシラバスの熟読を呼びかけたい。
2. シラバス内容を知っている学生は、授業はシラバス通りに実施されたと概ね認識した。(最頻値=5、平均値=4.35)
3. 授業の難易度については「ちょうど良い」という認識が最も多く、次に「やや難しかった」という認識が多かった。全体としては概ね適切な難易度設定がなされていると考えられる。(最頻値=3、平均値=3.58)
4. 質問やメールをしたことのある学生は約 21%と、前期よりも約 3 ポイント上昇した。
5. 質問やメールに対する対応は概ね「迅速である」と認識されていた。(最頻値=5 平均値=4.05、前期よりわずかに上昇)
6. 提出物を出した(授業で提出物が課された)学生は全学で約 88%であった(前期より約 3 ポイント上昇)。
7. 提出物に対するフィードバックは概ね「丁寧である」と認識されていた。(最頻値=5 平均値=4.01)
8. 学生は、自身は「熱意・意欲」をもって授業に取り組んだ、と概ね認識していた。(最頻値=4 平均値=4.23)ただし、2 年次、3 年次にはやや意欲が減退する傾向が確認されている。
9. 担当教員は熱意を持っている、と学生は概ね認識していた。(最頻値=5 平均値=4.41)
10. 学生自身の意欲の自己認識と、学生が感じる教員の熱意には、強い正の関係が存在する。因果関係は不明ではあるものの、教員の側がコントロールできるのは「教えることに対する教員の熱意(の表現)」だけであるため、因果関係があるという前提で、教員としては授業に熱意を持っているのは当然として、そのことが学生に伝わるよう一層心を砕く必要がある。
11. 授業を通じて何らかの成長を感じたという認識は多くの学生が持った。(最頻値=5 平均値=4.47、前期よりも上昇)
12. すべてを総合して授業に(概ね)満足だと認識した学生(8~10を選んだ学生)は約 76%(前期よりも約 4 ポイント上昇)であった。別の表現をするならば全学的に学生の平均満足度は約 83%(前期よりも約 1 ポイント上昇)であった。(最頻値=10 平均値=8.28)
13. 「総合満足」に最も影響があるのは「成長感覚」であり、他の要因もすべてそれぞれ影響があることが、前期に引き続き確認された。

以上のすべての項目において数値が前期と同等またはわずかながら上昇していた。これは喜ばしいことであろう。ただし前期にひきつづき、多くの項目(総合満足、成長感覚、自分意欲)において、1 年次の数値が最も高く、2 年次と 3 年次にやや低くなり、4 年次にまた上昇する、という傾向が確認された。これは振り返ってみれば前期も存在していた傾向ではあるが、前期はおしなべて数値の高い科目等履修生も分析対象に含めていたため、顕在化していなかったものである。本調査は同一学年集団の 1 年次から 4 年次までの経年変化を追ったものではなく、異なる集団(1 年生集団、2 年生集団、3 年生集団、4 年生集団)のある時点での状態を探ったものである。数値が 1 年次と 4 年次が高く 2 年次、3 年次が低いというのは、経年的な傾向ではなく、単に 2021 年度

時点での1年生・4年生集団のほうが2年生・3年生集団よりも学修意欲などが平均的にやや高い、という可能性もある。どちらの解釈が妥当であるからは、本年度の調査結果を2022年度以降の調査結果と比較することによって明らかになってゆくことが期待される。最後に、全学の傾向は以上の通りであるが、学科／部局による違いが大きな項目もある。改善の余地がある部分については学科／部局レベルでの、また教員個人レベルでの今まで以上の取り組みが求められよう。

以上

## 3.2.2 履修者数と総合満足度

～ 2021 年度後期・学生による授業認識アンケート分析補足～

### 1. 分析のきっかけと目的

2021 年度後期・学生による授業認識アンケートの報告に対して、「履修者数の極端に異なる授業を単一の尺度で測るのは果たして妥当か（すなわち、履修者数の多い授業の担当者は総合満足度に関して「不利」なのではないか）」という疑問および「もし授業の履修者数によって学生の授業満足度が異なるという結果が明らかになるのであれば、それによって将来的に履修者数を調整するための根拠になるのではないか」などの意見が出された。そこで補足として、同アンケートのデータを以下のリサーチクエスチョンに絞って再分析することとした。

**リサーチクエスチョン：** 授業ごとの Q8「総合満足」平均値は、その授業を履修していた学生数（クラスサイズ）によって影響されているか？

### 2. 分析データの範囲

2021 年度後期の学生による授業認識アンケートで、Q8「総合満足」に対して一定の人数以上の回答があったすべての授業を分析対象とした。「一定の人数」として今回は、（1）10 名以上、（2）5 名以上、の 2 種類の範囲を設定した。

### 3. 回答者数と履修者数の分布の確認

分析結果を示す前に、回答者数の分布の現状を確認しておく。全対象授業（2,555）に関して、学生の回答者数の分布は図 1 の通りである。一見して回答者数の少なさが見て取れる。中央値は 4、平均値は 6.83 である。つまり平均するとひとつの授業につき 4～7 名程度しか回答していない。

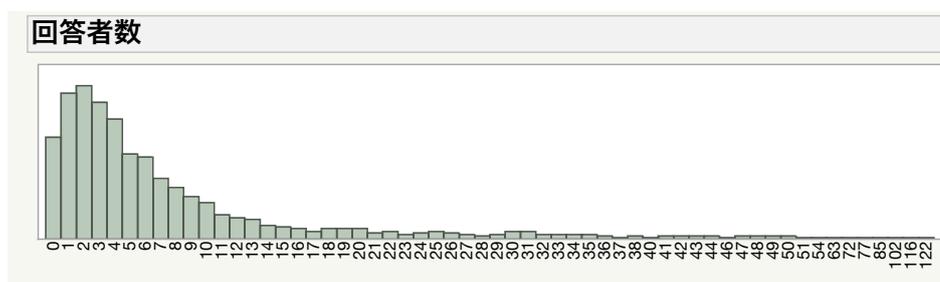


図 1 全対象授業の学生回答者数の分布

今回のアンケートは履修者数 5 名以上の授業を対象としていたが、そのうち、回答者 0 名～4 名だった授業が 53.8%を、回答者 0 名～9 名だった授業が実に 80%を占めた。すなわち、（1）10 名以上の回答者がいた授業を対象とする場合には全授業のうちの 80%のデータを使用せず「捨て」、残りの 20%のみを分析する、（2）5 名以上の回答者がいた授業を対象とした場合には全授業のうち 54%を使用せず「捨て」、残りの 46%のみを分析することになる。本分析の結果はそのような限られた範囲の授業に関するデータに基づいていることにまず留意したい。参考までに履修者数自体の分布は図 2 のようになっている。中央値は 25、平均値は 40.07 である。

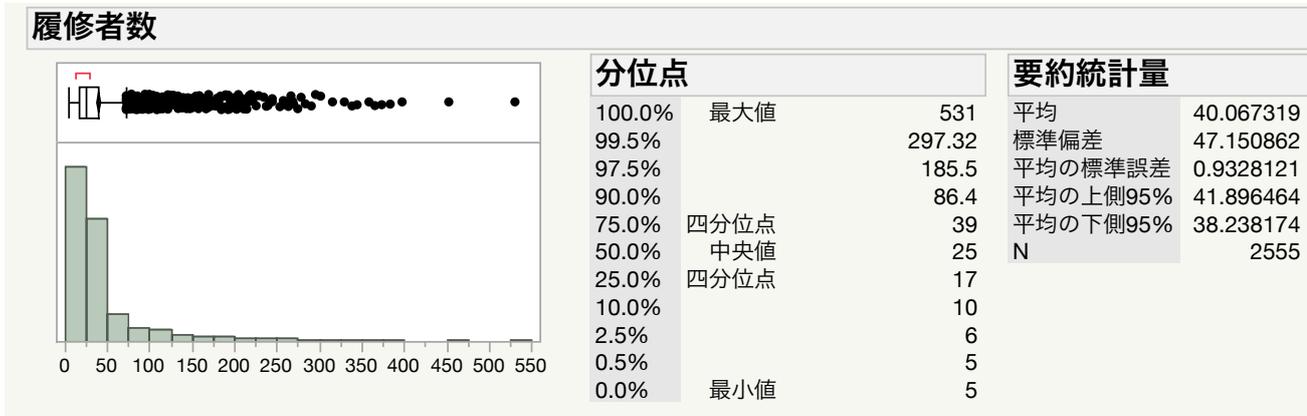


図2 全対象授業の学生回答者数の履修者数の分布

すなわち、平均クラスサイズは約 40 名なのだが、平均回答者数は約 6.8 名だということである。念の為、履修者数と回答者数の関係を確認してみたのが図3である。予想通り、履修者数が多ければ回答者数も多くなる傾向は観察される ( $r = .7805, p < .001$ )。赤い線は当てはめた直線である。

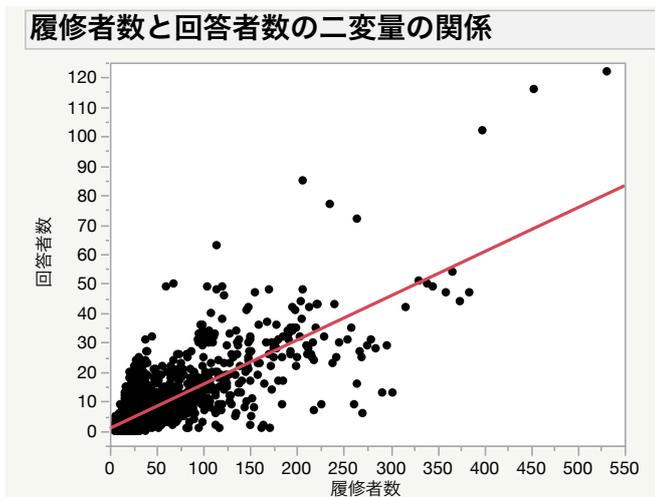


図3 履修者数と回答者数の関係

#### 4. 履修者数と総合満足の関係

では以上の限界をわきまえた上で、いよいよ履修者数と総合満足平均値の関係を探ってみる。

##### 4.1 回答者数 10 名以上の場合

回答者数 10 名以上に限定すると、対象授業数は 511 である。これらに関して、履修者数と総合満足の散布図および直線の当てはめの結果を図4に示した。

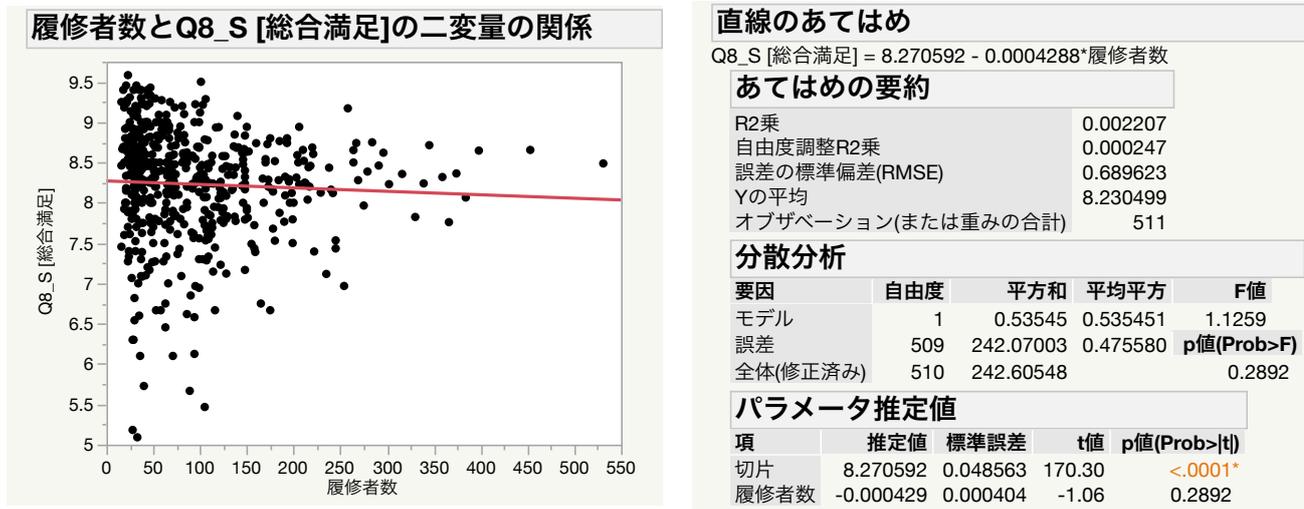


図4 履修者数と総合満足の関係：回答者数10名以上の511授業

直線の傾きは、-0.0004288 でわずかに負の値ではあるが、自由度調整 R2 乗は、0.002207 に過ぎず、有意ではない。(総合満足度のばらつきのうち 0.22% を履修者数が説明するに過ぎず、残りの 99.78% を他の要因によっている。) すなわち、全体として履修者数と総合満足の値に関係があるとまでは言えない。

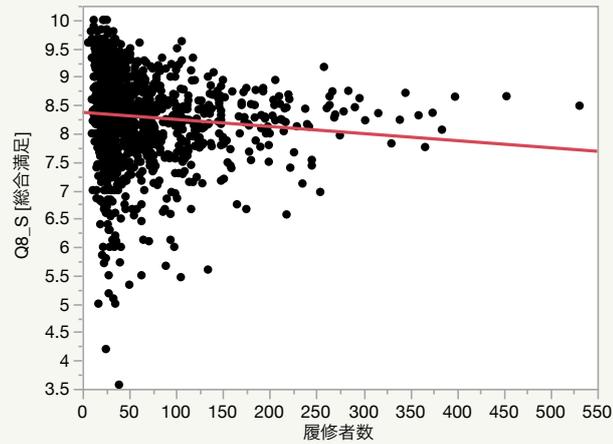
目視によっても、履修者数が平均 (40.07 名) よりも少ないクラスであっても総合満足の値には大きなばらつきがあることが確認できる。履修者数が多いエリアに目を転じてみる。履修者数が 258 名の授業で、総合満足が 9.17 の授業がひとつある。300 を超えると確かに総合満足の値が 9.00 に達している授業はなくなるが、それでもほとんどが 8.50 以上になっている。

#### 4.2 回答者数5名以上の場合

回答者数限定を 5 名以上にまで広げると、対象授業数は 1,178 に増える。これらに関して、履修者数と総合満足の散布図と直線の当てはめの結果を図 5 に示した。直線の傾きは、-0.0012475 で 10 名以上に場合よりも負の値の絶対値が大きくなっており、目視によっても赤線の右肩下がりの度合いが大きくなっていることはわかる。自由度調整 R2 乗は、0.007776 である (すなわち、満足度の 0.77% を、履修者数が説明し、残りの 99.23% を履修者数以外の要因が説明している)。このモデルは有意 ( $p = .0014$ ) ではあるのだが、説明できるのが満足度の 1% 未満である履修者数という要因が、実質的に重要であるとは言い難い。

回答者数 10 以上の場合と同様、目視によっても、履修者数が平均 (40.07 名) よりも少ないクラスであっても総合満足の値には極めて大きなばらつきがあることが確認できる。履修者数が多いエリアに関しては回答者 10 名以上についてとほぼ同じ傾向が観察できる。

履修者数とQ8\_S [総合満足]の二変量の関係



直線のあてはめ

$$Q8\_S [総合満足] = 8.3709846 - 0.0012475 \times \text{履修者数}$$

あてはめの要約

R2乗	0.008619
自由度調整R2乗	0.007776
誤差の標準偏差(RMSE)	0.813414
Yの平均	8.293648
オブザベーション(または重みの合計)	1178

分散分析

要因	自由度	平方和	平均平方	F値
モデル	1	6.76474	6.76474	10.2242
誤差	1176	778.09057	0.66164	<b>p値(Prob&gt;F)</b>
全体(修正済み)	1177	784.85531		<b>0.0014*</b>

パラメータ推定値

項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob> t )
切片	8.3709846	0.033862	247.21	<b>&lt;.0001*</b>
履修者数	-0.001247	0.00039	-3.20	<b>0.0014*</b>

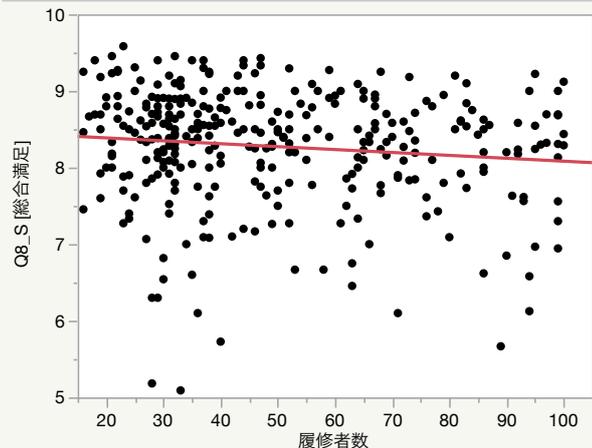
図5 履修者数と総合満足の関係：回答者数5名以上の1,178授業

4.3 回答者数10名以上で、履修者数が100名以内の場合

上の分析では、履修者数が最少の5名から最大の531名まで一括して分析した。しかし5名と500名ではあまりにも状況が異なり過ぎているとも言えよう。そこで、履修者数を5名~100名に限定して、この範囲において、「履修者数が少ないほど授業満足度が高い」という傾向が見いだせるかを検証した。この条件に当てはまったのは329授業である。

散布図と直線のあてはめを図6に示す。相関は  $r = -0.118$  と僅かに負の値であり、有意である ( $p < 0.001$ )。たしかに僅かに右肩下りの傾向が見られるが、自由度調整 R2 乗は、0.019 である。すなわち総合満足のばらつきの1.9%を履修者数が説明し、残りの98.1%は履修者数以外の要因によっている。目視によっても、履修者数の大小に関わりなく、総合満足はおおきくばらついていることが見て取れる。

履修者数とQ8\_S [総合満足]の二変量の関係



直線のあてはめ

$$Q8\_S [総合満足] = 8.4630478 - 0.0038026 \times \text{履修者数}$$

あてはめの要約

R2乗	0.013914
自由度調整R2乗	0.010898
誤差の標準偏差(RMSE)	0.751825
Yの平均	8.272673
オブザベーション(または重みの合計)	329

分散分析

要因	自由度	平方和	平均平方	F値
モデル	1	2.60798	2.60798	4.6139
誤差	327	184.83370	0.56524	<b>p値(Prob&gt;F)</b>
全体(修正済み)	328	187.44168		<b>0.0324*</b>

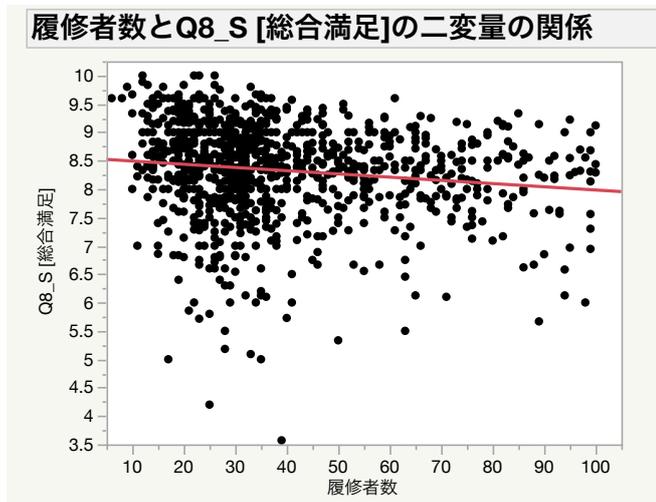
パラメータ推定値

項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob> t )
切片	8.4630478	0.097842	86.50	<b>&lt;.0001*</b>
履修者数	-0.003803	0.00177	-2.15	<b>0.0324*</b>

図6 履修者数と総合満足の関係：回答者数10以上、履修者数100以下の329授業

4.4 回答者数5名以上で、履修者数が100名以内の場合

同様の分析を、回答者数5名以上に範囲を広げ、971授業について履修者数と総合満足の関係を確認した(図7)。



**直線のあてはめ**  
 $Q8\_S [総合満足] = 8.5492224 - 0.0056723 \times \text{履修者数}$

**あてはめの要約**

R2乗	0.019624
自由度調整R2乗	0.018612
誤差の標準偏差(RMSE)	0.84481
Yの平均	8.326392
オブザベーション(または重みの合計)	971

**分散分析**

要因	自由度	平方和	平均平方	F値
モデル	1	13.84315	13.8431	19.3962
誤差	969	691.57977	0.7137	<b>p値(Prob&gt;F)</b>
全体(修正済み)	970	705.42292		<.0001*

**パラメータ推定値**

項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob> t )
切片	8.5492224	0.057402	148.94	<.0001*
履修者数	-0.005672	0.001288	-4.40	<.0001*

図7 履修者数と総合満足の関係：回答者数5以上、履修者数100以下の971授業

やはり傾向は変わらない。当てはめた直線はやや右肩下がりで、履修者数が多くなれば総合満足が減少する傾向は全体としては確かにはないとは言えない。相関は  $r = -0.1401$ ,  $p < .0001$  である。ただしモデルの実質的な意味の指標とも言える自由度調整 R2 乗は、0.0186 に過ぎない。すなわち、総合満足度のばらつきのうち履修者数で説明できるのは 1.9% に過ぎず、残りの 98.1% は他の要因によっている。

## 5. 結論

今回の分析の結果は以下の通りである。

- (1) 履修者数が少ない授業ほど履修者の総合満足が高くなるという傾向は、全くないと言えない。
- (2) しかし履修者数要因が総合満足に及ぼす影響は極めて小さく、どんなに大きく見積もっても 1~2% 程度であり、他の 98~99% は履修者数以外の要因による。

この結果が示唆するところは、「他の条件を一定にした場合には、クラスサイズを小さくすれば全体として総合満足はわずかに高まると期待されるが、その高まる程度は極めて小さいものであり、実質的に意味があるほどではない」ということである。

言うまでもなくクラスサイズの縮小にはコストが伴う。そのコストに見合うだけの効果がクラスサイズの縮小によってもたらされるであろう、という見通しは今回の分析からは得られなかった。ただし 3 で述べたように、今回の分析は全対象授業のうちごく一部に基づいたものである。より多くの回答に基づいた分析は、今後の課題としたい。

以上

## 3.2.3 教員による授業認識アンケート【後期】

### 1. アンケートの目的

教員に自らの授業を振り返り内省する機会を提供し、かつ別に実施する『授業に関する学生の認識アンケート』との照合を可能にすることで、授業改善に資することを目的とした。

### 2. 実施対象科目

『授業に関する学生の認識アンケート』と同一とした。すなわち、

- (1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が5名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とした。
- (2) 実施対象科目を全学FD委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とした。

### 3. アンケート項目

基本的に『授業に関する学生の認識アンケート』と表裏をなす選択式項目とした。具体的には以下の通りであった。

Q1 この授業はシラバスの記述通りに行ったと思いますか。[シラバス通り]

- 5（強くそう思う）
- 4（どちらかと言えばそう思う）
- 3（どちらとも言えない）
- 2（どちらかと言えばそう思わない）
- 1（まったくそう思わない）

Q2 学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5（とても難しかった）
- 4（やや難しかった）
- 3（適切だった）
- 2（やや易しかった）
- 1（とても易しかった）

Q3 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

- 5（強くそう思う）
- 4（どちらかと言えばそう思う）
- 3（どちらとも言えない）
- 2（どちらかと言えばそう思わない）
- 1（まったくそう思わない）

Q4 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

- 5（強くそう思う）
- 4（どちらかと言えばそう思う）

- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q5 学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[学生意欲]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q6 あなたは熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[自分熱意]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q7 この授業を通じて学生の「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

10 (100%) 9 (90%)... 2 (20%) 1 (10%)

## 4. 結果

### 4.1 対象科目数

対象科目数は 2,555 科目である。すなわち対象のべ担当教員数も 2,555 名である。

### 4.2 回答率および分析対象

のべ回答者数は 1,328 名であった。すなわち回答率は 52.0% (前期は 47.7%) である。学科／部局別回答率を図表 1 に示す。学科で最も回答率が高かったのは中国文学科の 77.42% (前期は国際関係学科の 81.54%) であった。学科／部局による回答率には大きな違いがあることがわかる。

図表 1 学科／部局別の回答率

学科	回答	未回答
b 中国文学科	77.42	22.58
n 国際関係学科	72.46	27.54
h 現代経済学科	67.69	32.31
k 日本語学科	63.51	36.49
o 国際文化学科	62.30	37.70
l 法律学科	60.13	39.87
a 日本文学科	57.85	42.15
m 政治学科	57.14	42.86
t 看護学科	54.05	45.95
d 教育学科	53.29	46.71
g 社会経済学科	52.98	47.02
u 社会学科	52.50	47.50
j 英語学科	52.00	48.00
s 健康科学科	50.70	49.30
i 中国語学科	50.32	49.68
p 経営学科	50.00	50.00
f 歴史文化学科	48.65	51.35
r スポーツ科学科	42.21	57.79
q 環境創造学科	40.00	60.00
e 書道学科	26.67	73.33
c 英米文学科	26.37	73.63
v 教職課程センター	40.32	59.68
w 国際交流センター	71.43	28.57

本アンケートの目的は、教員に対して振り返りの機会を提供するとともに、教員の認識を先に実施している「学生による授業認識アンケート」から伺える学生の認識と照合してみることである。そこで、教員の認識を単独で分析する部分では、全 2555 科目中、教員から回答のあった科目（のべ 1,328 名による 1,328 科目）を対象とする。一方、学生の認識と照合する部分では、教員から回答があった科目のなかで、「学生による授業認識アンケート」で 5 名以上の学生が回答した 636 科目のみを分析対象とすることとする。学生の回答が 5 名未満の場合には、当該科目についての学生の認識が安定的に測定できるとは言い難いと考えられるためである。（なお、前期の分析では回答した学生の人数に関わらず、回答のあったすべての科目を分析対象にしていた。）

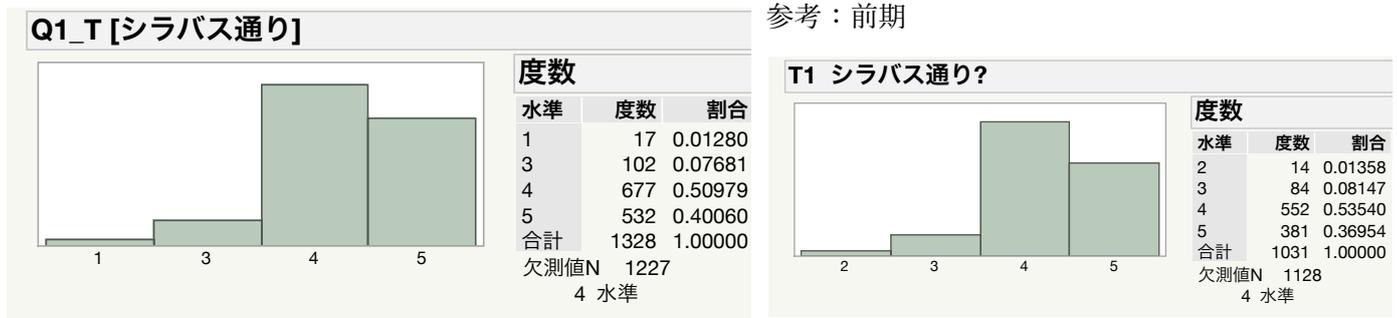
### 4.3 項目別結果

Q1～Q8 までの質問項目ごとに結果を提示してゆく。

#### 4.3.1 【Q1】この授業はシラバスの記述通りに行なったと思いますか。[シラバス通り]

この設問に対する全科目の平均は 4.29（前期は 4.26）、標準偏差は 0.72（前期は 0.66）であった。全科目の回答分布を図表 2 に示す。最頻値は 4（どちらかと言えばそう思う）である。4 と 5（強くそう思う）の合計で、おおよそ 91% を占める。教員の認識としてはシラバス通りに行ったという認識は非常に強い。

図表2 Q1「シラバス通り」に対する全科目の回答分布



参考：前期

学科／部局別の回答分布を図表3に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは環境創造学科（100.00%）で、次に大きかったのは中国語学科（69.62%）であった。

図表3 Q1「シラバス通り？」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
q 環境創造学科	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
i 中国語学科	0.00	0.00	1.27	29.11	69.62
c 英米文学科	2.08	0.00	8.33	31.25	58.33
h 現代経済学科	2.27	0.00	11.36	35.23	51.14
o 国際文化学科	0.00	0.00	13.16	39.47	47.37
k 日本語学科	2.13	0.00	0.00	51.06	46.81
t 看護学科	0.00	0.00	0.00	55.00	45.00
a 日本文学科	2.86	0.00	10.00	42.86	44.29
g 社会経済学科	0.00	0.00	7.50	48.75	43.75
l 法律学科	1.09	0.00	7.61	48.91	42.39
p 経営学科	1.19	0.00	4.76	52.38	41.67
e 書道学科	10.00	0.00	0.00	50.00	40.00
f 歴史文化学科	5.56	0.00	5.56	50.00	38.89
j 英語学科	0.00	0.00	12.09	49.45	38.46
m 政治学科	0.00	0.00	7.14	60.71	32.14
u 社会学科	1.59	0.00	4.76	61.90	31.75
r スポーツ科学科	1.54	0.00	15.38	53.85	29.23
n 国際関係学科	0.00	0.00	0.00	74.00	26.00
s 健康科学科	5.56	0.00	19.44	50.00	25.00
d 教育学科	1.12	0.00	6.74	69.66	22.47
b 中国文学科	0.00	0.00	4.17	75.00	20.83
v 教職課程センター	0.00	0.00	8.00	60.00	32.00
w 国際交流センター	0.00	0.00	0.00	60.00	40.00

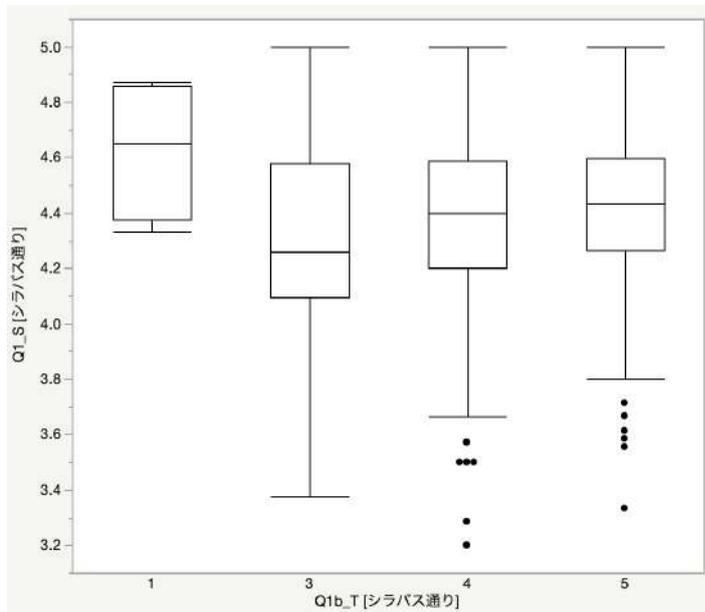
この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表4に示す。左の表の「水準」は教員の回答のことである。「数」はその水準で回答したのべ教員数である。「平均」はそれぞれの教員の回答水準に含まれる授業に関して「授業に関する学生の認識アンケート」で学生が回答した水準の平均値である。「標準偏差」も同様に、学生の回答に関する値である。たとえば教員が1（まったくそう思わない）と回答した4の授業科目に関して学生の回答の平均値は4.63、標準偏差は0.25であった。上述したように、学生の回答データは当該科目で5名以上の回答があった科目のみを使用している。

右のグラフは教員が1、3、4、5と回答した授業ごとの学生の回答の分布を示す4つの箱ひげ図である。白い

箱があり真ん中に横線が入っている。この横線の位置が中央値を表す。白い箱の上側が第三四分位数（=上から25%の位置の値）で、白い箱の下側が第一四分位数（=下から25%の位置の値）を表す。すなわち白い箱は全体の真ん中に位置する50%を表している。白い箱の上下にそれぞれ「ひげ」が伸びていて、それより外側には黒いドット（・）がある。黒いドットは「外れ値」であり、例外的な値である。

図表4 「シラバス通り」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
1	4	4.63	0.25
3	44	4.29	0.38
4	311	4.37	0.32
5	277	4.43	0.28

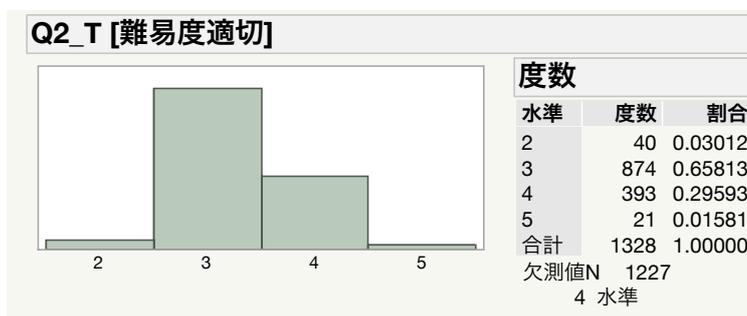


1は度数が少ないので無視するならば、教員の認識が3→4→5と上がるに従って、学生の認識の平均値もゆるやかに上がっているのがわかる。ただし教員の認識が変化しているほどには学生の認識は変化していない。つまり、教員が3（どちらとも言えない）と認識している授業であっても、学生の回答平均値は4.29である。学生は「シラバスに沿って授業は進む」という先入観が強いのかもしれない。仮にピアソン相関係数を求めてみると  $r = .0991, p < .0001$  である。

#### 4.3.2 【Q2】学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

この設問に対する全科目の平均は3.30（前期は3.28）、標準偏差は0.72（前期は0.55）であった。全科目の回答分布を図表5に示す。最頻値は3（適切だった）で約66%がこの認識である。次に多い4（やや難しかった）は約30%を占める。

図表5 Q2「難易度適切」に対する全科目の回答分布



参考：前期



学科／部局別の回答分布を図表 6 に示す。3（適切だった）という認識の割合が最も大きかったのは看護学科の 85.00%（前期は中国文学科 92.31%）である。次に大きかったのは中国文学科の 81.25%（前期は歴史文化学科 82.14%）である。学科によってかなり違いがあることが分かる。

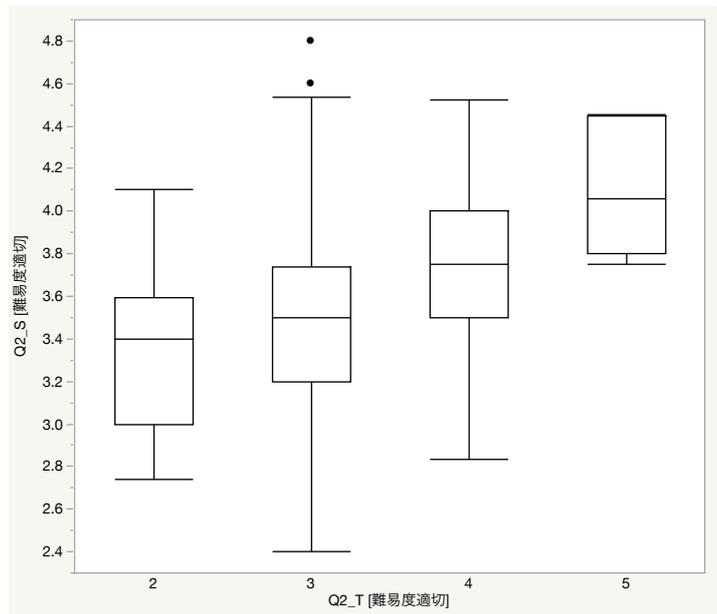
図表 6 Q2「難易度適切」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	2	3	4	5
t 看護学科	0.00	85.00	15.00	0.00
b 中国文学科	4.17	81.25	14.58	0.00
r スポーツ科学科	7.69	80.00	12.31	0.00
m 政治学科	3.57	76.79	17.86	1.79
g 社会経済学科	6.25	76.25	17.50	0.00
f 歴史文化学科	0.00	75.00	25.00	0.00
o 国際文化学科	0.00	73.68	23.68	2.63
a 日本文学科	1.43	72.86	24.29	1.43
d 教育学科	0.00	67.42	31.46	1.12
p 経営学科	2.38	66.67	30.95	0.00
s 健康科学科	5.56	66.67	25.00	2.78
i 中国語学科	0.00	65.82	32.91	1.27
l 法律学科	0.00	63.04	33.70	3.26
c 英米文学科	2.08	60.42	37.50	0.00
u 社会学科	3.17	60.32	34.92	1.59
e 書道学科	10.00	60.00	30.00	0.00
j 英語学科	3.30	58.24	35.16	3.30
n 国際関係学科	6.00	58.00	36.00	0.00
h 現代経済学科	3.41	56.82	37.50	2.27
k 日本語学科	6.38	46.81	42.55	4.26
q 環境創造学科	0.00	0.00	100.00	0.00
v 教職課程センター	4.00	56.00	40.00	0.00
w 国際交流センター	0.00	60.00	30.00	10.00

この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 7 に示す。教員の難易度の認識が 2 → 3 → 4 → 5 と上がるにつれて、学生の感じる難易度平均値も 3.34 → 3.49 → 3.73 → 4.05 とゆるやかに上がっている。つまり（1）教員の難易度認識と学生の難易度認識には正の相関がある（ $r = .3145, p < .0001$ ）、と同時に（2）教員が感じるほどには学生は難度も易度も敏感には感じない、と言える。たとえば、教員が 5（とても難しかった）とする授業の学生の平均認識は 4.05 であり、逆に教員が 2（やや易しかった）とする授業の学生認識の平均値は 3.34 であり、3 よりも明らかに「難しい」側によった値である。逆の側から述べれば、教員は学生の感じる難易度を敏感に捉えきれてはいない、とも言えよう。

図表7 「難易度適切」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
2	21	3.34	0.38
3	419	3.49	0.38
4	189	3.73	0.36
5	7	4.05	0.30



### 4.3.3 【Q3】 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

この設問に対する全科目の平均は 4.28（前期は 4.30）、標準偏差は 0.79（前期は 0.63）であった。全科目の回答分布を図表 8 に示す。最頻値は 4（どちらかと言えばそう思う）で、次に多いのは 5（強くそう思う）である。4 と 5 の合計で、おおよそ 90%（前期は約 89%）を占める。教員としては「迅速に対応した」という認識が圧倒的に多い。

図表 8 Q3 「対応迅速」に対する全科目の回答分布



学科／部局別の回答分布を図表 9 に示す。5（強くそう思う）の割合が学科によってかなり異なるのが見て取れる。最も大きかったのは環境創造学科 100.00%（前期は中国語学科の 77.14%）である。また割合は小さいものの、1（まったくそう思わない）という回答がある。これに関しては、前期に引き続き、対応は迅速であるべきであるという点を確認しておきたい。

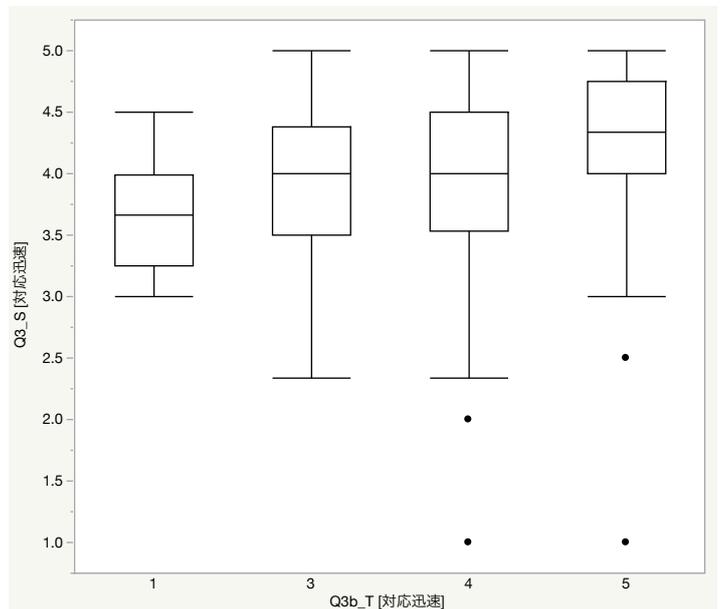
図表9 Q3「対応迅速」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	3	4	5
q 環境創造学科	0.00	0.00	0.00	100.00
i 中国語学科	1.27	1.27	35.44	62.03
g 社会経済学科	0.00	3.75	37.50	58.75
t 看護学科	0.00	5.00	40.00	55.00
p 経営学科	3.57	2.38	41.67	52.38
h 現代経済学科	1.14	4.55	42.05	52.27
b 中国文学科	4.17	6.25	37.50	52.08
o 国際文化学科	0.00	0.00	52.63	47.37
a 日本文学科	2.86	20.00	31.43	45.71
u 社会学科	1.59	4.76	49.21	44.44
n 国際関係学科	0.00	6.00	50.00	44.00
k 日本語学科	0.00	10.64	46.81	42.55
j 英語学科	3.85	8.79	45.05	42.31
r スポーツ科学科	3.08	6.15	53.85	36.92
s 健康科学科	5.56	8.33	50.00	36.11
c 英米文学科	4.17	12.50	47.92	35.42
l 法律学科	2.17	9.78	53.26	34.78
f 歴史文化学科	0.00	19.44	47.22	33.33
d 教育学科	1.12	11.24	59.55	28.09
m 政治学科	0.00	14.29	67.86	17.86
e 書道学科	0.00	5.00	80.00	15.00
v 教職課程センター	12.00	16.00	40.00	32.00
w 国際交流センター	0.00	10.00	40.00	50.00

この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表10に示す。教員の認識と学生の認識の関係については、前項で述べた傾向がここでも見られる。すなわち(1)教員の認識と学生の認識は基本的には正の相関がある( $r = .2146, p < .0001$ )が、(2)教員が感じるほどの迅速さの変化を学生は感じていない、ということである。教員が5(強くそう思う)と認識した授業であっても学生の認識の平均値は4.26に過ぎない。

図表10 「対応迅速」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
1	13	3.66	0.47
3	49	3.96	0.62
4	270	3.99	0.66
5	252	4.26	0.61



#### 4.3.4 【Q4】 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

この設問に対する全科目の平均は 4.08（前期は 4.04）、標準偏差は 0.84(前期は 0.76)であった。全科目の回答分布を図表 11 に示す。最頻値は 4（どちらかと言えばそう思う）で約 49%（前期は約 50%）を占める。4 と 5 の合計で、約 81%（前期は約 78%）を占める。メールに対する対応が迅速だったという認識に比べれば、フィードバックが丁寧だったという認識はやや弱かったようである。

図表 11 Q4 「FB 丁寧」に対する全科目の回答分布



参考：前期

学科／部局別の回答分布を図表 12 に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは環境創造学科（100.00%）であった。前期は中国語学科（70.00%）であった。

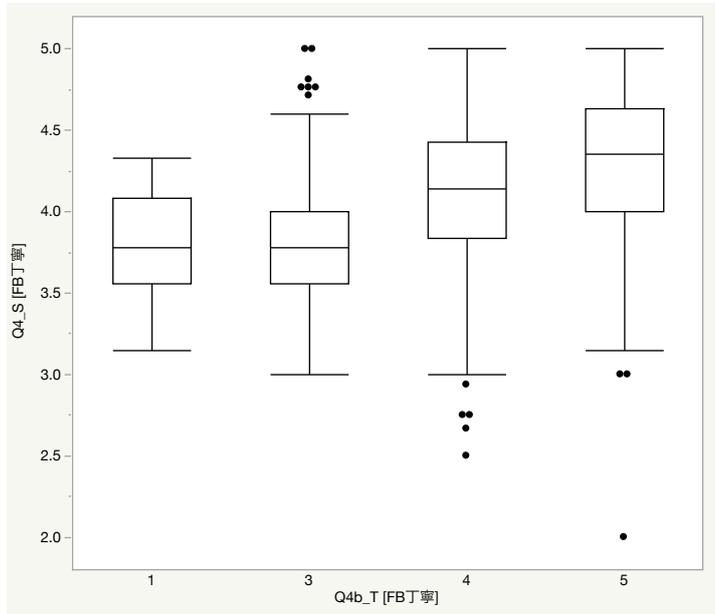
図表 12 Q4 「FB 丁寧」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	3	4	5
q 環境創造学科	0.00	0.00	0.00	100.00
i 中国語学科	0.00	1.27	40.51	58.23
a 日本文学科	2.86	21.43	25.71	50.00
b 中国文学科	0.00	12.50	39.58	47.92
g 社会経済学科	0.00	6.25	47.50	46.25
t 看護学科	0.00	5.00	50.00	45.00
o 国際文化学科	0.00	10.53	44.74	44.74
j 英語学科	1.10	13.19	46.70	39.01
h 現代経済学科	0.00	15.91	48.86	35.23
u 社会学科	1.59	11.11	55.56	31.75
n 国際関係学科	0.00	18.00	52.00	30.00
l 法律学科	2.17	29.35	42.39	26.09
k 日本語学科	0.00	14.89	59.57	25.53
c 英米文学科	0.00	18.75	56.25	25.00
e 書道学科	0.00	25.00	50.00	25.00
m 政治学科	8.93	12.50	53.57	25.00
r スポーツ科学科	9.23	18.46	52.31	20.00
s 健康科学科	13.89	11.11	55.56	19.44
p 経営学科	3.57	25.00	57.14	14.29
f 歴史文化学科	0.00	36.11	50.00	13.89
d 教育学科	3.37	24.72	61.80	10.11
v 教職課程センター	16.00	12.00	48.00	24.00
w 国際交流センター	0.00	10.00	60.00	30.00

この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 13 に示す。

図表 13 「FB 丁寧」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
1	23	3.78	0.36
3	113	3.83	0.43
4	302	4.11	0.46
5	195	4.30	0.48

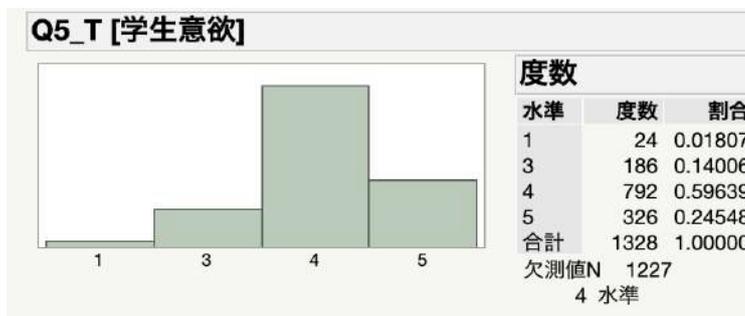


やはりこの項目についても他の項目と似た傾向が読み取れる。(1) 教員が認識する「フィードバックの丁寧さ」と学生が認識する「フィードバックの丁寧さ」にはゆるやかな正の相関( $r = .3261, p < .0001$ )があるが、(2) 教員が感じるほどの丁寧さ、あるいは丁寧さの欠如を学生が敏感に感じているとは言えない。

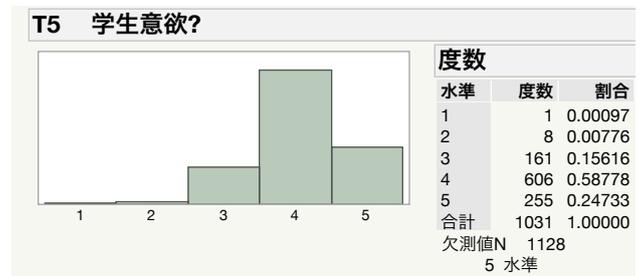
#### 4.3.5 【Q5】 学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。【学生意欲】

この設問に対する全科目の平均は 4.05 (前期は 4.07)、標準偏差は 0.74 (前期は 0.66)であった。全科目の回答分布を図表 14 に示す。最頻値は 4 である。4 と 5 の合計で、約 84% (前期は約 83%) を占める。概ね学生は意欲・熱意を持っていたと教員は認識していた。

図表 14 Q5 「学生意欲」に対する全科目の回答分布



参考：前期



学科／部局別の回答分布を図表 15 に示す。5 (強くそう思う) の割合が最も大きかったのはスポーツ科学科の 41.54% (前期は日本文学科の 43.33%) である。

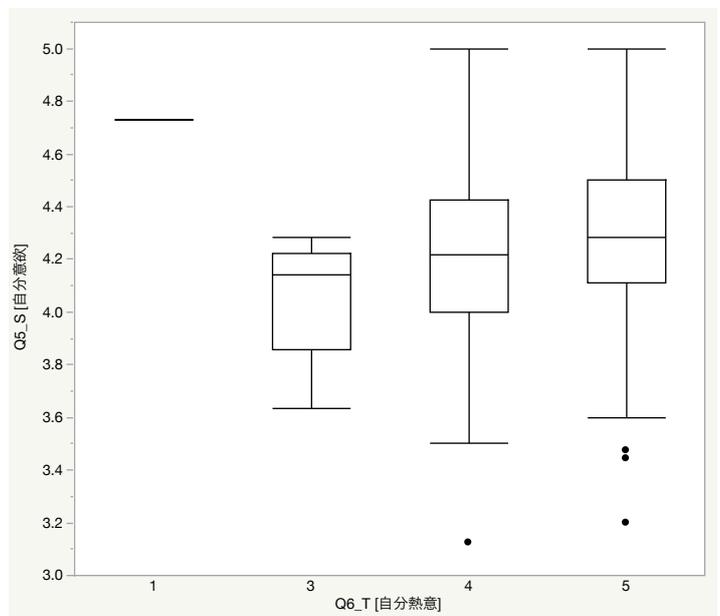
図表 15 Q5 「学生意欲」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	3	4	5
r スポーツ科学科	0.00	9.23	49.23	41.54
o 国際文化学科	0.00	5.26	55.26	39.47
i 中国語学科	5.06	6.33	54.43	34.18
c 英米文学科	2.08	4.17	60.42	33.33
u 社会学科	1.59	12.70	52.38	33.33
j 英語学科	1.65	11.54	55.49	31.32
e 書道学科	0.00	10.00	60.00	30.00
f 歴史文化学科	0.00	25.00	47.22	27.78
g 社会経済学科	0.00	17.50	55.00	27.50
n 国際関係学科	0.00	8.00	66.00	26.00
d 教育学科	1.12	13.48	61.80	23.60
k 日本語学科	2.13	12.77	61.70	23.40
b 中国文学科	0.00	10.42	66.67	22.92
a 日本文学科	0.00	14.29	62.86	22.86
l 法律学科	3.26	22.83	55.43	18.48
h 現代経済学科	3.41	14.77	67.05	14.77
m 政治学科	0.00	33.93	55.36	10.71
t 看護学科	0.00	15.00	75.00	10.00
s 健康科学科	2.78	19.44	69.44	8.33
p 経営学科	5.95	15.48	75.00	3.57
q 環境創造学科	0.00	0.00	100.00	0.00
v 教職課程センター	4.00	8.00	60.00	28.00
w 国際交流センター	0.00	20.00	60.00	20.00

この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 16 に示す。

図表 16 「学生意欲」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
1	10	4.36	0.19
3	94	4.16	0.28
4	383	4.24	0.31
5	149	4.38	0.29



やはりこの設問についても、(1) 教員の認識と学生の認識にはゆるやかな正の相関( $r = .1671, p < .0001$ )が見られるが、(2) 学生の自己認識の意欲・熱意は、教員が感じるほど極端に強くもないし、弱くもない。教員が3

だと認識している授業の平均値は 4.163 であり、教員が 5 だと認識している授業の平均値の 4.38 とそれほど大きな違いはない。

#### 4.3.6 【Q6】あなたは熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[自分熱意]

この設問に対する全科目の平均は 4.62（前期は 4.64）、標準偏差は 0.51（前期も 0.51）であった。全科目の回答分布を図表 17 に示す。最頻値は 5 である。4 と 5 の合計で、おおよそ 99%（前期も同じ）を占める。さすがにほぼすべての教員が自分は熱意をもって授業していると認識している。しかしながら 3（どちらともいえない）が 13 件、1（まったくそう思わない）が 1 件ではあるが存在する。

図表 17 Q6 「自分熱意」に対する全科目の回答分布



学科／部局別の回答分布を図表 18 に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは中国語学科の 88.61%であった（前期は環境創造学科の 100.00%）。他の学科にはあまりない 3（どちらとも言えない）や、1（まったくそう思わない）がある学科も存在する。

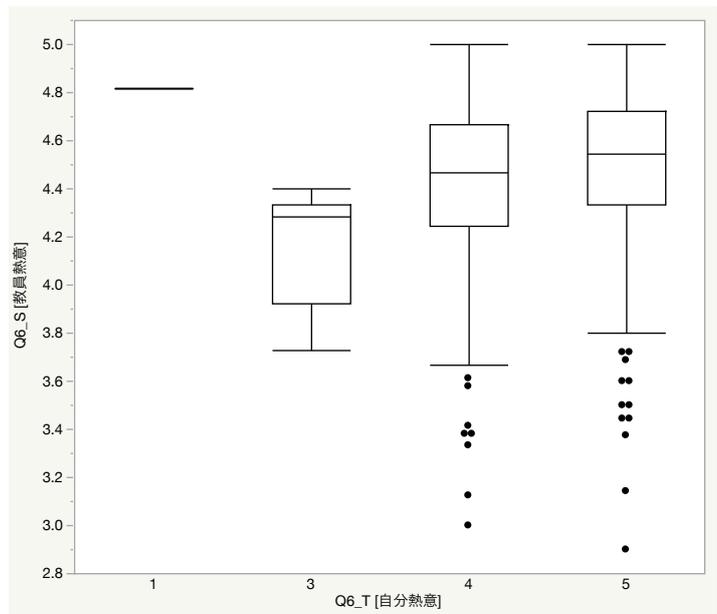
この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 19 に示す。やはりこの項目に関しても他の項目と類似の傾向がある。（1）教員の自己認識と学生の認識にはある程度の正の相関( $r = .1300, p < .0010$ )がある。その一方（2）教員が認識するほどには熱意の多寡は学生には伝わっていない。教員が 5 と認識している授業の平均は 4.50 であり、かつ 3.7 未満の外れ値も多い。一方教員が 3（どちらとも言えない）と認識している授業でも学生は平均 4.16（どちらかと言えば熱意がある）と感じてくれている。

図表 18 Q6「自分熱意」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	3	4	5
i 中国語学科	0.00	0.00	11.39	88.61
c 英米文学科	0.00	2.08	10.42	87.50
o 国際文化学科	0.00	0.00	23.68	76.32
a 日本文学科	0.00	0.00	25.71	74.29
g 社会経済学科	0.00	1.25	26.25	72.50
d 教育学科	0.00	0.00	32.58	67.42
k 日本語学科	0.00	0.00	34.04	65.96
j 英語学科	0.00	0.00	34.62	65.38
t 看護学科	0.00	0.00	35.00	65.00
b 中国文学科	0.00	0.00	37.50	62.50
e 書道学科	0.00	0.00	40.00	60.00
r スポーツ科学科	0.00	0.00	40.00	60.00
p 経営学科	0.00	0.00	40.48	59.52
u 社会学科	0.00	3.17	38.10	58.73
n 国際関係学科	0.00	2.00	40.00	58.00
h 現代経済学科	1.14	3.41	38.64	56.82
l 法律学科	0.00	5.43	39.13	55.43
f 歴史文化学科	0.00	0.00	50.00	50.00
s 健康科学科	0.00	0.00	55.56	44.44
m 政治学科	0.00	0.00	64.29	35.71
q 環境創造学科	0.00	0.00	100.00	0.00
v 教職課程センター	0.00	0.00	64.00	36.00
w 国際交流センター	0.00	0.00	10.00	90.00

図表 19 「自分熱意」に関する教員の認識に対応する「教員熱意」に関する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
1	1	4.82	
3	9	4.16	0.24
4	222	4.41	0.35
5	404	4.50	0.34



4.3.7 【Q7】 この授業を通じて学生の「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

この設問に対する全科目の平均は 4.30（前期は 4.28）、標準偏差は 0.57（前期は 0.54）であった。全科目の回答分布を図表 20 に示す。最頻値は 4 である。4 と 5 の合計で、約 96%（前期は約 95%）を占める。

図表 20 Q7「成長実感」に対する全科目の回答分布



参考：前期

学科／部局別の回答分布を図表 21 に示す。5（強くそう思う）の割合が最も大きかったのは環境創造学科 100.00%（前期も同じ）であり、ついで大きかったのは看護学科の 65.00%（前期は日本文学科 73.33%）であった。

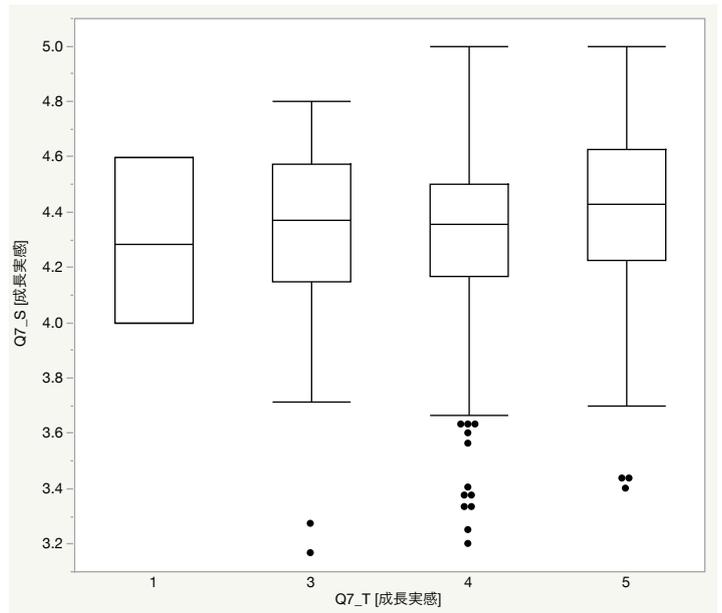
図表 21 Q7「成長実感」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	3	4	5
q 環境創造学科	0.00	0.00	0.00	100.00
t 看護学科	0.00	0.00	35.00	65.00
o 国際文化学科	0.00	0.00	44.74	55.26
c 英米文学科	0.00	2.08	43.75	54.17
i 中国語学科	3.80	2.53	46.84	46.84
j 英語学科	0.00	3.30	50.00	46.70
g 社会経済学科	0.00	3.75	50.00	46.25
b 中国文学科	0.00	2.08	56.25	41.67
a 日本文学科	0.00	0.00	62.86	37.14
u 社会学科	0.00	6.35	57.14	36.51
n 国際関係学科	0.00	4.00	60.00	36.00
e 書道学科	0.00	0.00	65.00	35.00
k 日本語学科	0.00	0.00	68.09	31.91
h 現代経済学科	0.00	7.95	61.36	30.68
m 政治学科	0.00	12.50	62.50	25.00
r スポーツ科学科	0.00	4.62	70.77	24.62
p 経営学科	1.19	4.76	70.24	23.81
d 教育学科	0.00	0.00	77.53	22.47
f 歴史文化学科	0.00	5.56	72.22	22.22
l 法律学科	0.00	5.43	72.83	21.74
s 健康科学科	0.00	5.56	77.78	16.67
v 教職課程センター	0.00	8.00	64.00	28.00
w 国際交流センター	0.00	20.00	60.00	20.00

この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 22 に示す。

図表 22 「成長実感」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
1	3	4.30	0.30
3	32	4.31	0.38
4	409	4.33	0.31
5	192	4.41	0.31

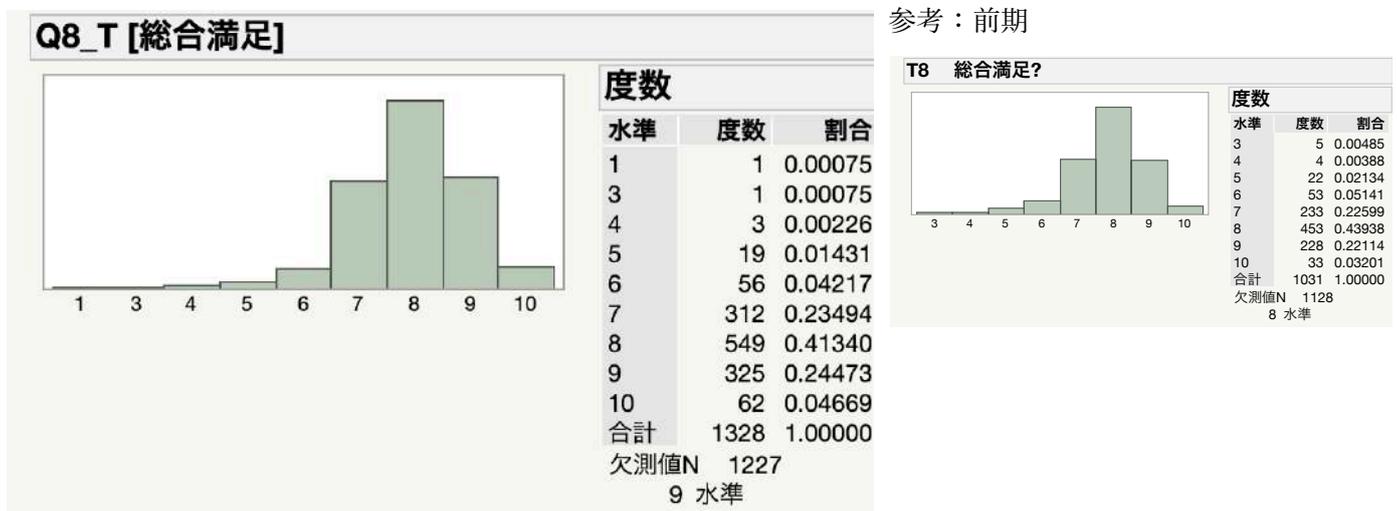


この設問でも他の設問と類似の関係はあるのだが、教員認識と学生認識の関係は、他の設問以上に弱い ( $r=.1114$ ,  $p=.0049$ )。教員認識が 3→4→5 と上がっても、学生認識は、4.31→4.33→4.41 とごくわずかしか上がらない。

**4.3.8 【Q8】すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10 を「100%満足」、1 を「10%満足」として 10 段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。【総合満足】**

この設問に対する全科目の平均は 7.96（前期は 7.85）、標準偏差は 1.03（前期は 1.07）であった。全科目の回答分布を図表 23 に示す。

図表 23 Q8 「総合満足」に対する全科目の回答分布



最頻値は 8 であり、約 41%（前期は約 44%）を占める。8 という水準は「80%満足である」と読み替えることができるので、「80%満足だと認識していた教員が最も多かった」と解釈できる。ちなみにこの設問に対する

学生の平均値は 8.28 で、最頻値は 10、すなわち「100%満足である」という回答が最も多かった（約 25%）。授業に関する満足度に関して教員と学生を比較するならば、学生の方がやや「甘く」、教員のほうがやや「辛い」、ということになる。これは前期と同様の傾向であった。

学科／部局別の回答分布を図表 24a に示す。10（100%満足）の割合が最も大きかったのは社会経済学科の 15.00%（前期は看護学科の 9.09%）である。最頻値は 8 なので、8 と 9 と 10 の合計によってソートしたものを図表 24b として示す。10 の割合、8～10 の割合のいずれにおいても、学科による違いがある。ただしこの項目は「自分の授業に対して自分でどの程度満足したか」という教員の主観を問うていることを再度確認しておきたい。

図表 24a Q8「総合満足」に対する学科／部局別の回答分布（10の割合で降順ソート）

学科／部局	1	3	4	5	6	7	8	9	10
g 社会経済学科	0.00	0.00	0.00	3.75	5.00	13.75	25.00	37.50	15.00
i 中国語学科	0.00	0.00	0.00	0.00	1.27	18.99	39.24	30.38	10.13
o 国際文化学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	7.89	42.11	42.11	7.89
r スポーツ科学科	0.00	0.00	0.00	4.62	0.00	24.62	35.38	27.69	7.69
h 現代経済学科	1.14	0.00	0.00	2.27	6.82	20.45	40.91	21.59	6.82
l 法律学科	0.00	0.00	0.00	2.17	10.87	27.17	40.22	13.04	6.52
c 英米文学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	27.08	33.33	33.33	6.25
a 日本文学科	0.00	0.00	0.00	0.00	2.86	14.29	42.86	34.29	5.71
f 歴史文化学科	0.00	0.00	2.78	0.00	5.56	22.22	47.22	16.67	5.56
e 書道学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	30.00	40.00	25.00	5.00
d 教育学科	0.00	0.00	0.00	2.25	6.74	25.84	43.82	19.10	2.25
j 英語学科	0.00	0.00	0.00	0.00	3.85	24.18	46.70	23.08	2.20
k 日本語学科	0.00	0.00	0.00	4.26	2.13	31.91	48.94	10.64	2.13
b 中国文学科	0.00	0.00	0.00	2.08	2.08	29.17	39.58	25.00	2.08
m 政治学科	0.00	0.00	0.00	0.00	8.93	23.21	46.43	19.64	1.79
u 社会学科	0.00	0.00	0.00	1.59	3.17	19.05	50.79	23.81	1.59
n 国際関係学科	0.00	0.00	0.00	0.00	2.00	18.00	52.00	28.00	0.00
p 経営学科	0.00	0.00	0.00	0.00	5.95	36.90	33.33	23.81	0.00
q 環境創造学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	0.00
s 健康科学科	0.00	2.78	5.56	0.00	2.78	38.89	41.67	8.33	0.00
t 看護学科	0.00	0.00	0.00	10.00	0.00	15.00	55.00	20.00	0.00
v 教職課程センター	0.00	0.00	0.00	4.00	4.00	32.00	32.00	24.00	4.00
w 国際交流センター	0.00	0.00	0.00	0.00	10.00	10.00	30.00	40.00	10.00

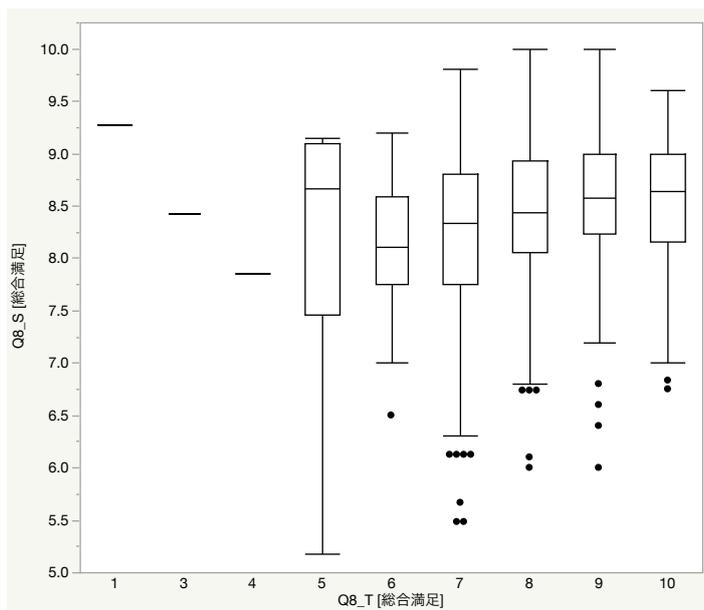
図表 24b Q8「総合満足」に対する学科／部局別の回答分布（8+9+10の割合で降順ソート）

学科／部局	1	3	4	5	6	7	8+9+10
q 環境創造学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
o 国際文化学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	7.89	92.11
a 日本文学科	0.00	0.00	0.00	0.00	2.86	14.29	82.86
n 国際関係学科	0.00	0.00	0.00	0.00	2.00	18.00	80.00
i 中国語学科	0.00	0.00	0.00	0.00	1.27	18.99	79.75
g 社会経済学科	0.00	0.00	0.00	3.75	5.00	13.75	77.50
u 社会学科	0.00	0.00	0.00	1.59	3.17	19.05	76.19
t 看護学科	0.00	0.00	0.00	10.00	0.00	15.00	75.00
c 英米文学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	27.08	72.91
j 英語学科	0.00	0.00	0.00	0.00	3.85	24.18	71.98
r スポーツ科学科	0.00	0.00	0.00	4.62	0.00	24.62	70.76
e 書道学科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	30.00	70.00
f 歴史文化学科	0.00	0.00	2.78	0.00	5.56	22.22	69.45
h 現代経済学科	1.14	0.00	0.00	2.27	6.82	20.45	69.32
m 政治学科	0.00	0.00	0.00	0.00	8.93	23.21	67.86
b 中国文学科	0.00	0.00	0.00	2.08	2.08	29.17	66.66
d 教育学科	0.00	0.00	0.00	2.25	6.74	25.84	65.17
k 日本語学科	0.00	0.00	0.00	4.26	2.13	31.91	61.71
l 法律学科	0.00	0.00	0.00	2.17	10.87	27.17	59.78
p 経営学科	0.00	0.00	0.00	0.00	5.95	36.90	57.14
s 健康科学科	0.00	2.78	5.56	0.00	2.78	38.89	50.00
v 教職課程センター	0.00	0.00	0.00	4.00	4.00	32.00	60.00
w 国際交流センター	0.00	0.00	0.00	0.00	10.00	10.00	80.00

この設問に対する教員の認識と学生の認識の関係を、図表 25 に示す。

図表 25 「総合満足」に関する教員の認識に対応する学生の認識

水準	数	平均	標準偏差
1	1	9.27	
3	1	8.43	
4	1	7.86	
5	8	8.18	1.37
6	30	8.11	0.64
7	152	8.20	0.88
8	262	8.44	0.67
9	151	8.55	0.70
10	30	8.51	0.75



総合満足度についても以下のことが言える。(1) 教員認識が6～10 (60%満足～100%満足) のゾーンに関しては、学生認識との間にゆるやかな正の相関がある。しかし7～9など教員が認識する満足度が高いゾーンでも、学生認識には下方の外れ値が存在する、つまり学生の満足度が低いケースもある。(3) 教員の満足度が比較的低い(6)場合でも、学生の満足度はまずまず高い。全体の相関係数は  $r = .1545, p < .0001$  である。

## 5. 結論

教員の認識に関して全学レベルでまとめるならば以下のようなものである。

9. シラバス通りに授業は実施した、という認識は非常に強かった。これは学生の認識とも一致した。
10. 授業の難易度については「適切だった」という認識が最も多く、ついで「やや難しかった」という認識が多かった。これは学生の認識とも一致した。
11. 質問やメールに対する対応は迅速だったという認識が非常に多く、これは学生の認識とも一致した。
12. 提出物に対するフィードバックは「どちらかと言えば丁寧だった」という認識が最も多かった。学生の認識は「丁寧だったと強く思う」というものが最も多かった。
13. 学生の意欲に関する認識は、「どちらかと言えば意欲的だった」という認識が最も多かった。これは学生の認識と一致した。
14. 教員としての自分は授業に熱意を持っていたかに関しては「強くそう思う」という認識が最も多く、この点は学生の教員についての認識と一致した。ただし、ごく少数ではあるが、1「まったくそう思わない」、3「どちらとも言えない」という回答があったことは留意せねばなるまい。
15. 学生が成長したかについての認識は、「どちらかと言えばそう思う」が最も多かった。一方学生は「強くそう思う」が最も多かった。この点について教員の認識は学生よりもやや厳し目であることが判明した。
16. 総合的な満足度については教員の最頻値は8であったが、一方学生の最頻値は10であった。すなわちこれについても教員の認識は学生のそれよりもやや厳し目であったと言える。

以上の示唆は、前期の結果から得られたものとはほぼ同一であり、これらは安定的な傾向であると考えられるだろう。前期に引き続、全学的には、概ね望ましい結果であると言ってよさそうだ。一方、学科／部局別に大きな違いが見られた設問もあり、さらには個々の授業に関しては、改善の余地も十分にあると思われる。別に報告している「後期・学生による授業認識アンケート自由記述部分の結果報告」なども参照しながら、個々の教員が授業の質をさらに向上させるための不断の努力が求められよう。

最後に、教員による授業認識アンケートは、回答率を大幅に上げる必要があるということを指摘しておきたい。前期より多少は上昇したものの、いまだに約半数もの教員から回答が得られないのは残念なことである。それはすなわち約半数の授業に関しては、教員の認識と学生の認識の照合が不可能だということを意味する。照合相手としての学生側の回答データを無駄にしないためにも、すべての教員に本アンケートへの回答をお願いしたい。

以上

## 3.2.4 学生による評価認識アンケート【後期】

### 1. 目的

授業を履修した学生が、与えられた評価をどう認識するかを調査することで、次の学期以降の授業運営および評価の参考にするために実施した。

### 2. 実施の対象

『授業に関する学生の認識アンケート』と同一科目とした。

### 3. アンケート項目

Q1. あなたがこの授業で得た評価はどれでしたか？ S/A/B/C/D/E

Q2. 授業目標や自分の学修努力の程度に照らして、この評価についてあなたの認識は次のどれに近いですか？

①低/厳しすぎる ②やや低い/厳しい ③概ね妥当である ④やや高い/甘い ⑤高/甘過ぎる

※この回答如何によって評価が変わるものではないことを明記した。

Q3 Q2 で回答した理由を具体的にご記入ください。※Q3 は前期実施時にはなかったものである。

### 4. 結果

#### 4.1 対象科目数

対象科目数は 2,555 科目、対象のべ学生数（各対象科目内の履修者数の合計）は 102,235 名であった。

#### 4.2 のべ回答者数と回答率

全学ののべ回答者数は 2,895 名で、回答率は 2.8%であった。学科/部局別ののべ回答者数および回答率を図表 1 に示す。学科で回答率が最も高かったのは歴史文化学科であった。部局では国際交流センターが高かった。

しかしいずれにしても極めて低い回答率と言わざるを得ない。

学年別の回答率を図表 2 に示す。1 年生が最も高く、2 年生は低くなり、3 年生と 4 年生はさらに低くなっている。

図表 1 回答率(学科/部局別)

学科/部局	のべ回答者数	のべ履修者数	回答率
f 歴史文化学科	128	2513	5.1%
u 社会学科	238	5828	4.1%
a 日本文学科	194	4927	3.9%
t 看護学科	61	1654	3.7%
b 中国文学科	82	2314	3.5%
e 書道学科	68	2103	3.2%
j 英語学科	271	8461	3.2%
o 国際文化学科	88	3031	2.9%
i 中国語学科	110	3830	2.9%
p 経営学科	362	12920	2.8%
s 健康科学科	126	4523	2.8%
d 教育学科	179	6839	2.6%
c 英米文学科	121	4778	2.5%
g 社会経済学科	162	6643	2.4%
m 政治学科	118	4939	2.4%
l 法律学科	192	8175	2.3%
h 現代経済学科	126	5612	2.2%
n 国際関係学科	53	2598	2.0%
r スポーツ科学科	113	5947	1.9%
q 環境創造学科	5	280	1.8%
k 日本語学科	38	2319	1.6%
X 教職課程センター	46	1802	2.6%
Y 国際交流センター	14	199	7.0%
合計	2895	102235	2.8%

学年	のべ回答者数	のべ履修者数	回答率
1	1650	37074	4.5%
2	955	32709	2.9%
3	204	23937	0.9%
4	86	8515	1.0%
合計	2895	102235	2.8%

このように回答率が極めて低いため、以下で提示する結果の解釈の妥当性は極めて限定的なものである。

### 4.3 回答者に与えられた評価

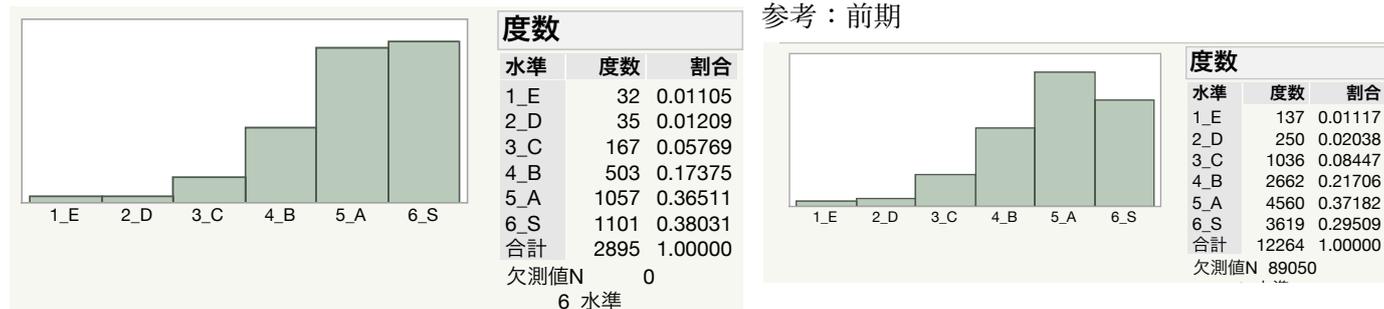
Q1として、自分に与えられた評価が何であったかを問うた。2021年度後期の評価分布は例外科目を除き、全体としては基本的に図表3に示す評価付与内規の割合に概ね従っているはずである。

図表3 今回の評価での付与内規(修正版)における各評価の割合目安

評価	S	A	B	C	D	E
%目安	10~20%程度	20~25%程度	20~25%程度	10~20%程度	なし	なし

評価付与内規で規定している分布はAとBが最も多く、次にSとCが同程度に多いというものだが、今回の評価の認識アンケートに回答した学生は、その全学の母集団分布と明らかに異なっていた。アンケートに回答した学生に付与された評価の分布を図表4に示す。

図表4 アンケート回答者に付与された評価の分布



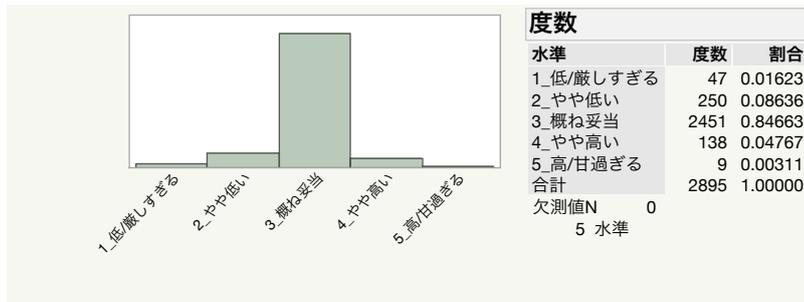
Sが最も多く38.0%を占め、次いでAが36.5%を占めている。SとAを合わせると74.5%である。Cはわずか5.8%に過ぎない。前期はAが最も多く、次いでSが多かった。順番は逆転したが、最も良い評価カテゴリーである2つを付与された学生の回答が最も多いというパターンは前期と共通である。

すなわち今回のアンケートは全体の回答率が2.8%と極めて低かったのだが、学生たちは付与された評価に関わらずその内の2.8%が満遍なく回答したのではなく、SやAなどの高い評価を付与された学生が中心となって回答した、ということがわかる。前期に引き続き、母集団の中には同じ程度いるはずのAを付与された学生群とBを付与された学生群では前者のほうが、Sを付与された学生群とCを付与された学生群でも前者のほうが、それぞれ回答率が格段に高かったということである。

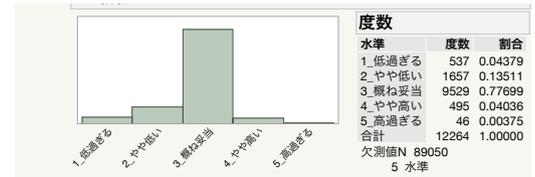
### 4.4 与えられた評価に対する認識

Q2では、与えられた評価に対する認識を5段階尺度で問うた。全学の分布を図表5に示す。

図表5 与えられた評価に対する認識の分布：全学



参考：前期



圧倒的に「3 概ね妥当である」という認識が多く、84.6%を占める（前期は77.7%）。次いで多いのは「2 やや低い」であるが割合は急激に下がって8.6%（前期は13.5%）である。「2 やや低い」「3 概ね妥当である」「4 やや高い」の3つのレベルを合計すると94.0%（前期は95.2%）である。つまり回答したうちの94.0%の学生は自分に付与された評価が「低過ぎる」とも「高過ぎる」とも認識していないということであり、これは今回の回答自体に関しては、妥当な状況であると言えるのではないだろうか。なお、5段階尺度を連続変数として扱って平均値を求めると2.93（前期は2.83）である。つまりほぼ「3\_概ね妥当」に近い位置に平均値がある。しかし、この結果は、そもそも回答したのがAやSを付与された学生が圧倒的に多いことからすると、ある意味で当然のことかもしれない。

次に学科/部局別の分布を図表6に示す。

図表6 与えられた評価に対する認識の分布：学科/部局別

学科/部局	1_低すぎる	2_やや低い	3_概ね妥当	4_やや高い	5_高すぎる
q 環境創造学科	0.00	0.00	100.00	0.00	0.00
o 国際文化学科	0.00	4.55	94.32	1.14	0.00
c 英米文学科	1.65	5.79	90.91	1.65	0.00
f 歴史文化学科	2.34	7.81	88.28	1.56	0.00
h 現代経済学科	2.38	7.14	88.10	2.38	0.00
s 健康科学科	0.79	6.35	88.10	4.76	0.00
r スポーツ科学科	0.00	7.08	87.61	4.42	0.88
g 社会経済学科	1.23	6.79	87.04	4.94	0.00
d 教育学科	1.12	8.38	86.03	3.91	0.56
u 社会学科	1.26	7.14	85.71	5.88	0.00
j 英語学科	0.74	8.49	84.87	5.17	0.74
n 国際関係学科	0.00	11.32	83.02	5.66	0.00
p 経営学科	1.38	9.67	82.87	5.25	0.83
a 日本文学科	0.52	10.82	81.96	6.70	0.00
k 日本語学科	0.00	2.63	81.58	15.79	0.00
m 政治学科	5.08	10.17	81.36	3.39	0.00
l 法律学科	5.21	6.77	80.73	6.25	1.04
e 書道学科	1.47	13.24	79.41	5.88	0.00
b 中国文学科	2.44	15.85	79.27	2.44	0.00
t 看護学科	0.00	16.39	78.69	4.92	0.00
i 中国語学科	2.73	13.64	78.18	5.45	0.00
X 教職課程センター	2.17	4.35	86.96	6.52	0.00
Y 国際交流センター	0.00	7.14	85.71	7.14	0.00

度数が小さい（のべ5名）環境創造学科を除くと、最も「概ね妥当」の割合が大きかったのは国際文化学科であった。以下、数値は漸減するが最も数値の低い中国語学科でも78.18%と十分に高いと感じられる。

前期は「1 低過ぎる」の数値が最も高いのは教職課程センター（8.2%）であったが、今回は法律学科

(5.08%)であった。次いで高いのが政治学科(5.08%)であることを考えると、法学部の扱う学問領域は学生にとって難度が高いと感じられるケースが多いということを示しているのだろうか。

学年別の分布を図表8に示す。前期には「3 概ね妥当である」の割合が4年生(81.5%)と3年生(73.5%)でやや差があったのだが、今回はすべての学年で80%を超えており、その他のカテゴリーの分布にも明確な違いは見られない。前期の報告時には、「1・2年生を真ん中にはさんで3年生と4年生が両極端に位置するという結果になっているのだが、これが回答率の低かった今回に限った結果(ある意味でのノイズ)なのか、何らかの意味がある再現性のあるパターンなのかは今回のデータからは不明である」としたのだが、今回の後期の結果を見る限り、前期での学年差はノイズであった可能性が高まったように思われる。

図表8 与えられた評価に対する認識の分布：学年別

学年	1_低すぎる	2_やや低い	3_概ね妥当	4_やや高い	5_高すぎる
1	1.03	8.06	85.88	4.67	0.36
2	2.72	10.05	81.99	4.92	0.31
3	1.47	6.37	86.27	5.88	0.00
4	1.16	9.30	87.21	2.33	0.00

#### 4.6 与えられた評価と認識の関係

付与された評価のレベルとその評価に対する認識の間関係を探った。Q1とQ2の結果を全学でクロス集計したのが図表8である。行が付与された評価で、列がそれに対する認識である。数値は行ごとのパーセンテージである。前期とまったく同じ傾向が観察される。すなわち評価がS→A→B→C→Dと下がるに従って、「概ね妥当である」という認識が漸減し、「低すぎる」という認識が漸増する。ところがEだけは「概ね妥当である」の数値がまた高まり、「低すぎる」が減る。

図表8 付与された評価とその評価に対する認識の関係(全学)

	1_低すぎる	2_やや低い	3_概ね妥当	4_やや高い	5_高すぎる
1_E	12.50	9.38	78.13	0.00	0.00
2_D	31.43	20.00	48.57	0.00	0.00
3_C	8.38	29.94	59.28	1.80	0.60
4_B	2.58	20.28	75.55	1.59	0.00
5_A	0.47	8.14	87.13	4.16	0.09
6_S	0.00	0.18	91.64	7.54	0.64

#### 4.5 「低すぎる／厳しすぎる」と感じた理由

では学生はどのような理由で「1\_低すぎる／厳しすぎる」と感じたのであろうか。その点を探るため自由記述を確認した(図表7)。「1\_低すぎる／厳しすぎる」と回答したのは全学で47件である。そのうち26件は自由記述がなく、21件が理由を回答していた。図表7としてその21件を示す。学科／部局は合体させた上で、付与された評価で降順に、次いで学年で昇順にソートしてある。(基本的に原文のままだが、主旨を損ねない範囲で表現を簡略化した場合がある。)

付与された評価別の数はAとBが3件、Cが6件、9件と、評価が低くなればコメントの数も増えているのは予想通りであるが、Aでもそれなりに「低すぎる」という認識を持たれるケースがあることはやや意外であるといえよう。内容的には、「評価の基準がよく理解できない」「なぜその評価なのか理解できない」(#1、#2、#12、#14、#15、#16、#17、#19)という認識と、「授業やテストが難しい」(#3、#6、#7、#10、#11、#13、#20、#21)という認識が同程度に多いようだ。

図表7 「低すぎる／厳しすぎる」と感じた理由

	学年	評価	理由
1	1	A	どのような点の評価から成績をつけたのか理解できない。
2	2	A	無遅刻・無欠席、提出物は全て提出・全て満点だったのになぜAなのかわからない。
3	2	A	授業がわかりにくかった。
4	1	B	課題を頑張ってもB評価で、もともと作文が苦手な私にとってはモチベーションの上げようがない授業だった。
5	1	B	質問に対し対応が丁寧でない。
6	2	B	理解が追いつかなかった。
7	1	C	難しかった。
8	2	C	何度も課題をアップし忘れてたり、補講動画を出すと言って期日に出さない。それなのに、補講の問題がテストに出た。
9	2	C	自分は精一杯、レポートや毎回のリアクションペーパーに取り組んだと感じたから。
10	2	C	授業への理解が難しく判定も厳しい。
11	2	C	授業内容、試験で聞かれてる内容が理解できない。
12	2	C	毎回期限内に課題を出していたにも関わらずこの評価だったため。
13	1	D	シンプルに授業が難しい。
14	1	D	ほぼ出席していてレポートも提出したのに単位を落とされてしまった。
15	1	D	最終試験の手応えから少なくともC以上ではあると感じていたため。
16	2	D	しっかりと授業を受けていたのに評価が低いと感じました。
17	2	D	期末テストでの評価が80%とあり、テストにはしっかりと学習をし臨みましたが判定はDでした。自分がどのような間違いをして不合格となったのかを示していただきたいです。
18	2	D	授業とレポートに関連性がない。
19	2	D	授業中の発言がそこそこ評価のウエイトを占めているのに指名にかなり偏りがあってほぼ指名されたことがない。毎回授業で提出する感想用紙も評価の基準がよく分からない。
20	2	D	成績評価を行う試験回答時間が短い
21	4	D	テストの時間が短すぎる。

## 5 考察

今回の結果は以下のようにまとめることができる。

- (1) 回答率は2.8%と極めて低かった。
- (2) 回答したのはSあるいはA、すなわち一般に「良い」と考えられる評価を付与された学生が75%近くを占めた。
- (3) 回答した学生の付与された評価に関する認識は、「概ね妥当である」が85%近かった。
- (4) 「低すぎる／厳しすぎる」と回答した割合はSの場合はゼロで、AからはA<B<C<Dとある意味では予想通り上昇した。しかしEを付与された学生で「低すぎる」と回答した学生はDの場合よりもずっと少ない。
- (5) 「低すぎる／厳しすぎる」という認識の理由としては、「なぜその評価になるのか基準が理解できない、納得できない」というものと、単純に「授業やテストが難解である」というものがおおよそ同数であった。

回答率に関しては前期に12.1%であったものがさらに下がって今回2.8%となったという事実は、2021年度に初めて実施した本アンケートの意義について深刻な疑問を呈するものである。97.2%の学生が本アンケートに回答しないということは、ほとんどの学生が、すでに確定した成績評価について教員の今後の成績評価の参

考に供するためにわざわざ時間を使ってコメントすることに意味を見出していない、ということに他ならないからである。ランダム抽出でもないわずか 2.8%の回答から導き出せる結論は、その一般化可能性に深刻な限界があるは言うまでもない。

このため、「概ね妥当である」という認識が 85%近かったという結果も、S や A を付与された学生はそれが妥当であると認識することが多いという、ある意味で至極当然の現象を裏付けしたに過ぎないであろう。今回の 85%という数値を持って、本学のほとんどの学生が評価を妥当だと受け止めているエビデンスとすることはできない。もっと多いはずの B や C の学生たちが回答したならば数字が大きく変わる可能性があるからである。

回答率の低さにも関わらず、「低過ぎる／厳し過ぎる」という認識は S を得た学生にはなく、 $A < B < C < D$  と評価が下がるにつれて多くなり、E を付与された学生になるとまた少なくなる、というパターンの存在は直観的にも納得できるところであり、回答率が仮に上昇しても再現される可能性が高いだろう。

また「低過ぎる／厳し過ぎる」という認識は評価基準が学生にとっては不明瞭である場合や授業やテストが難解過ぎると感じられる場合に多いという事実を、学生の回答から再確認できたことには一定の意義はある。可能な限り授業やテストを理解しやすいものとし、その上で評価基準を明確にすることの重要性を、教員の側では改めて確認しておきたい。

以上

## 3.2.5 各学部・学科による考察【後期】

2021年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 日本文学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。  
「成長感覚」「総合満足」等で高い評価を得ており、必修の卒業論文と連年のゼミナールを根幹に据えた教育の成果が、ある程度達成できていると思われる。
2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。  
ほぼすべての設問において平均値をマークしており、気になった点は無い。教員の「熱意」に関するQ6は、当然のことで、問う意味が見出せない。
3. 「学生による認識」のQ9a（良かった点）、Q9b（改善すべき点）の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】  
オンライン授業に関する不満が目立っている印象を受けた。特に、ゼミでの討論が主体となる日本文学科の授業では、対面不可は致命的である。来年度は、感染対策を徹底したうえで、「原則対面」で授業を進める予定である。

---

2021年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 中国文学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。  
<高数値>
  - ・ 対応迅速（5.強くそう思う 58.39%）  
前期同様、一番高い数値を得ることができた。クラスやゼミが少人数のため、手厚いフォローができたのだと考える。
  - ・ 教員熱意（5.強くそう思う 64.00%）  
平均値にそれほど差はなかったが、「5.強くそう思う」と回答した割合が、前期同様一番高い数値であった。

オンライン授業であっても、専任・非常勤問わず、熱意を持って授業を行ったことが分かる。

<低数値>

- ・成長感覚（5.強く思う 47.29%）

上記の通り対応迅速や教員熱意は高いが、成長感覚はさほど得られてないように思える。（前期：5.強く思う 60.34%）

成長感覚は、総合満足との相関が最も強いとの調査結果が出ているため、成長感覚の数値が高くなると、総合満足も高くなるであろう。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

中国文学科の場合、他学科と比較すると回答率も含め、全体的に高数値であることが読み取れる。そして、「1. 学生による認識」と比較しても、学生と教員の数値がおおむね一致していることが分かる。

<高数値>

- ・難易度適切（3.適切だった 81.25%）

教員にとっての難易度は適切であったが、学生にとってはやや難しいと感じるようだ。難易度数値は、教員と学生の間で大きな差があった。（学生：3.適切であった 45.39%）

<低数値>

- ・学生の成長実感（5.強く思う 41.67%）

学生同様、成長実感はさほど高くないことが分かる。オンライン授業のため、直接実感する機会が少なかったと考えられる。

3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

今後の課題としては、成績不振学生の対応である。主任を中心に、クラス担当やゼミ担当教員が、以下の取得単位数の基準にて、個別面談や履修指導を行う計画である。

2 年生：取得単位数 22 単位以下・3 年次進級できない者

3 年生：取得単位数 60 単位以下

4 年生：取得単位数 80 単位未満

---

2021 年度前期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 英米文学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

なによりもまず、回答率の低さ（英米文学科：16.32%）が気にかかる。このアンケートの実施意義にも関わる点なので、特に全面的に対面授業が再開される来年度において改善が望まれる。

個別の質問について見ていくと、英米文学科で特に数値が高かったものは「Q3a あなたはこの授業で教

員に質問やメール連絡をしたことがありますか」への回答であった。これは、当然のことながら、オンライン授業において、授業内容や課題に関わる連絡をメールで行う頻度が例年に比べより高かったことによるものであると考えられるが、学生が授業内容や課題に高い関心を示していたことの証拠としても解釈できる。つづく「Q3b 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか」への回答も、比較的高い数値であると言えるので、教員側でも適切に学生に応答をできていたのではないかと考えられる。重要なのは、この状況を、全面的な対面授業が再開される来年度以降においても、望ましい形で維持していくことである。つまり、学生が授業時間以外でも、manabaのような、教員に過度な時間側労働を強いることなく、学生が授業内容や課題についての質問ができるシステムを継続的に対面授業に導入していくことなどを通して、過去2年のオンライン授業を通しての経験を活用していくことであると考えられる。

回答率の低さを除いて、突出して低数値の項目はないが、比較的低い数値の質問は「Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか」である（平均3.49）。学科の特質上、日常会話レベルでの英語の運用能力を育成するのみならず、文学や文化、言語学に関わる英語を用いて深く学ぶ／英語自体について深く学ぶ機会を学生に提供することがカリキュラムの核にある理想であるが、その理想と、実際の学生の学力との間にあるギャップが、この数値に表れているのではないかと考えられる。過去、同様の議論は学科でたびたびおこなわれてきているものであるが、根本的な解決方法を見いだせずにいるというのが実情である。今後、英米文学科が取り組むべき最大の課題であると言える。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

特に高数値であった項目として、相互に関連する「Q5 学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか」と「Q6 あなたは熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか」が挙げられる。学生も教員も授業に熱意を持って取り組むというのは、当然と言えばそれまでだが、その基盤の上に高度な教育は成り立つべきなので、肯定的にとらえたい。

これに関連して、問題視せねばならないのは、「Q2 学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか」への回答の数値の低さである。また、これは学生によるアンケートのQ2とも関連する。つまり、本報告書の1で述べた内容と類似する形で、教員側でも難易度が適切でないことを感じているということが示されている。実際に教壇に立つ教員のひとりとして実感をすることでもあるが、学生のレベルに合わせて授業内容の難易度を下げるのはたやすい。しかし、担当授業で達成すべき本来の目標から、現実の目標が乖離してしまうことも避けなければならない。英米文学科の教員の多くが、このジレンマを抱えているのではないかと推測することが可能である。この点についても継続して、最適な解決方法を模索していかなければならない。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の  
結果についての考察

文学部 教育学科

1. 「学生による認識」について、Q1a~Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

①高数値だったのは、授業提出物の提出経験 92.4%（学科別順位は 4 位）であり、これは学科生が真面目に授業に取り組んでいた事を表わしていると言えるかもしれない。ただ、前期にも述べたが、提出物を「出した」という回答については、毎回のレスポンスやレポート課題を 100%提出したことを指すのか、時々なのか、1 回であっても「出した」とするのかは回答者判断に任されているので、必ずしも真剣・誠実な学習実態の指標であるとはいえないのではないかと。

また、難易度が「適切」という回答の割合が 52.8%で学科別順位が 4 位であり、そのように受け止められるということは、授業内容の設定が成功しているとも考えられるが、教員評価では 67.2%が適切だったという自己評価であるので、ズレがあることは認識しておく必要がある。

②低数値側では、アンケートそのものの回答率が平均（16.99%）より低い（15.92%）ことが目立つ。学内通知・連絡のチェック習慣の甘さ、コンプライアンス（規範意識）の問題等が現われているとするならば、学科としての課題があるといえる。

次に、シラバス内容を「知っている」とする比率の相対的低さ（72.53%, 19 位）が目にとまる。ただ、「知っている」と回答した学生が、ウェブシラバスを事前に精読して理解しているのか、授業での教員の説明等から大まかにつかんでいる程度なのかは不明である。いずれにせよ、シラバスの徹底に課題があることは否めない。

③総合満足度は、21 学科中 11 位と相対的に中位であった。総合満足度と連関が強いとされている学生の「成長感覚」「教師熱意」「自分意欲」は、いずれも学科別順位で 7 位、10 位（回答分布表においては、評価 4+5 割合では 7 位）、10 位であり、概ね対応していると考えられる。ただ学生の「成長感覚」「教師熱意」の実感が必ずしも総合的な満足度に結びついていないようにも見られるため、さらに分析が必要であろう。

2. 「教員による認識」について、Q1~Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

①高数値項目の一つは、「自分意欲」であり、評価 5（強くそう思う）の割合において相対 6 位（67.2%）であった。コロナ禍の困難の中で授業を充実させようとして取り組んでいた姿が想像される。学生評価の「教員熱意」の実感が 90%（高評価 4・5 の合計）を超えて 6 位であることもとも対応している。

②低数値側について気になるのは、質問・メールへの対応の丁寧さ、迅速さが十分であったと言い切れておらず、「丁寧さ」の評価 5 のソートでは最下位だった点である。学生側の評価も「丁寧さ」については、評価 5 での順位は 18 位と相対的に低い。自己評価であるため、「丁寧さ」の基準が個々人で異なるため、丁寧さを欠いていたとは一概には言えないが、オンライン中心の授業形式において重要となるフィードバックに不十分さがあるとすれば、改善課題といえよう。

③総合的満足度において評価 8+9+10 の割合は 65.17%であり 17 位と低かった。学生の側の総合満足度は 75%であるので、教員の自己評価の方が厳しめに現われているといえよう。これは「結果報告」に記されている全体的傾向の指摘と同様である。このズレの意味については今後考察の必要がある。

3. 「学生による認識」の Q9a（良かった点）、Q9b（改善すべき点）の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

回答について共有する機会は未だ無いが、授業改善のために上記のような課題が見えているので、FD などの機会を通じて検討したい。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 書道学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。
- Q4 提出経験においては 95%以上が提出しているが実技科目が多いこともあり課題の提出量は適切である。
- Q1a シラバス既知は 1 が 25%を占める。シラバスに対する認知を徹底し予習など自己の授業計画に反映させることを意識させる必要がある。
2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。
- Q5 学生意欲に対し 4・5 が 90%と学生の意欲を強く感じている。
- Q3 対応迅速に対し 5 が最低回答だが実技など個人レベル差が大きく対応時間がかかっていると評価したためである。学生は対応・FB については概ね高評価している。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

文学部 歴史文化学科

1. 「学生による認識」について

まずもって、回答率が全学 5 位というのは、学生の授業に対する意識の高さの反映であり、嬉しい結果であった。

次に Q1b の「この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか【シラバス通り】」に対する結果が最下位であるのは、歴史学という学問が、同じく下位に位置する政治学（科）や社会学（科）

と同様に、現実の社会と切実に切り結んでいる学問である以上、予想通りの結果であった。各教員が、新型コロナウイルス感染症の蔓延というパンデミックをそれぞれが教える地域・時代の歴史の中に位置付けて授業に反映し、更に、日本政府とアジア諸国との間で顕在化している「歴史認識」問題等の時事問題に関しても、適宜、それぞれの授業の中で言及している以上、当然の結果である。

また、Q7の【成長感覚】、Q8の【総合満足】の学生回答が上位に位置していることも嬉しい結果であった。

## 2. 「教員による認識」について

改善点として、Q4の【FB丁寧】の回答が下位にある点は、貴重な指摘として受け止めたい。どのような現状があり、どのような理由で丁寧なフィードバックが出来ていないのか、出来るだけ早く学科協議会等を通じて、まずは専任教員で検討し、非常勤講師の皆様とも意見交換を試みてみたい。

---

### 2021年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

経済学部 社会経済学科・現代経済学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

10点満点で評価した「Q8 総合満足度」について、全体平均の 8.28 と比べると、社会経済学科の平均は 8.24 で平均よりもやや低く、現代経済学科の平均は 8.36 で平均より高い。前期とは逆転した結果であり、見た目には興味深いとも言える。その他の各項目について、学科の結果と平均は以下の通りである。「Q1b シラバス通り」社会 4.33 現代 4.35 平均 4.35、「Q2 難易度適切」社会 3.56 現代 3.72 平均 3.58、「Q3b 対応迅速」社会 4.01 現代 4.07 平均 4.05、「Q4b FB 丁寧」社会 4.02 現代 4.03 平均 4.01、「Q5 自分意欲」社会 4.17 現代 4.19 平均 4.23、「Q6 教員熱意」社会 4.34 現代 4.37 平均 4.41、「Q7 成長感覚」社会 4.26 現代 4.35 平均 4.31、「Q8 総合満足度」社会 8.24 現代 8.36 平均 8.28。設問によって平均を上回ることもあれば下回ることもあるが、平均値と極端に違うような項目は無い。平均値だけでなく、回答の分布を見ても、経済学部の結果が大学全体の傾向と大きく違うことはないように思える。

授業内容の異なる前期との比較にどれほどの意味があるのかは不明だが、「Q3b 対応迅速」「Q4b FB 丁寧」「Q5 自分意欲」「Q6 教員熱意」「Q7 成長感覚」「Q8 総合満足度」の各項目は両学科ともに前期よりも平均値が上昇した。学部 FD 委員会が実施した FD 研修会などがこの結果に寄与したのだとすれば、嬉しい限りである。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

10点満点で評価した「Q8 総合満足度」について、全体平均の 7.96 と比べると、社会経済学科の平均は 8.32 で平均よりも高く、現代経済学科の平均は 7.86 で平均よりやや低い。興味深いことに、この傾向は「Q5 学生

意欲」「Q6 自分熱意」「Q7 成長実感」でも同様に見られる。この3項目が教員にとっての総合満足度に結びついていることを示唆しているかもしれない。現代経済学科のスコアが平均よりも低い理由として、5段階評価において「1」という回答が、わずかな程度とは言え多くの項目で見られるからだと考えることができる（Q5, 6, 8）。学生の意欲や教員自身の熱意を高めることが総合満足度の増加に寄与することがうかがえる。他方で、「Q1 シラバス通り」「Q3 迅速対応」「Q4FB 丁寧」の各項目では両学科ともに全体平均を上回っている。少なくとも教員の認識としては、授業運営についての各論的な項目では質の高いサービスを提供できているということの意味するだろう。「Q2 難易度適切」の結果は両学科ともに全体平均とほぼ同じだが、現代経済学科はわずかに平均を上回った。教員自身が、やや難しいと考える授業を行なっていることを意味するが、極端に難度の高い講義内容ならいざしらず、適度に難しい授業は学生にとっても刺激的だろうと思われる。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の  
結果についての考察

外国語学部 中国語学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

高数値： Q5「あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか」について、平均値は4.34であり、全学科の中では3番目に高く、選択肢4「どちらかと言えばそう思う」5「強くそう思う」を選択した学生の比率の合計は89.69であった。Q6「教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか」に対する回答平均値は4.45であり、全学平均値4.41を上回っていた。選択肢4と5の合計は89.7であった。Q7「知識が増えた、ものごとの捉えかたが深くなった」への回答平均値は4.35であり、全学平均値4.31を上回っていた。選択肢4と5の合計は89.54であった。これらのことから学生は授業に対して高い意欲や熱意を持って取り組み、授業に対する教員の熱意も感じており、成長感覚も得られている。いずれも望ましい結果であると考ええる。

低数値： Q1a「あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか」について、「知っている」と回答した学生の比率は71.58であり、全学科の中で2番目に低かった。シラバスを知ることは授業の前提であることから、今後もシラバスの周知徹底に努めていきたい。また、Q4a「この授業では提出物を出しましたか」について、「出していない」との回答比率は17.13であり全学科の中で3番目に低い数値であった。ただ「提出物を出した」と回答した学生はおおむね「提出物に対するフィードバックは丁寧である」と認識しているようである（Q4bの5「強くそう思う」44.95は全学科の中で3番目に高い）。

まとめ： Q8「すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか」に対する回答平均値は8.25であり全学平均値8.28をやや下回るものの、10段階評価で9と10を選択した学生の合計の比率は51.70であり、半数以上の学生が強い満足度を感じていることがうかがえる。今後もさらなる満足度の向上に向けて努力していきたい。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

高数値： Q6「あなたは熱意をもってこの授業を行ったと思いますか」について選択肢5「強くそう思う」と回

答した教員の割合が全学で最も高く 88.61 だった。1. 「学生による認識」でも教員の熱意を学生が感じていることが数値に表れている。

Q1「この授業はシラバスの記述通りに行ったと思いますか」について選択肢5「強くそう思う」と回答した教員の割合が全学で2番目に高く 69.62 だった。ただ「学生による認識」結果では、シラバスを読んでいない学生の割合は全学の中で2番目に低かったことから、ガイダンス等を通じて情宣に努めていきたい。

Q3「質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか」とQ4「提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか」について選択肢5「強くそう思う」を選択した教員の割合はいずれも全学で2番目に高かった（Q3は62.03、Q4は58.23）。ただQ3「対応迅速」については1「まったくそう思わない」と回答した教員がいることから、学科として今後状況把握に努めていきたい。

低数値：Q5「学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか」に対し、選択肢5「強くそう思う」と回答した教員の割合は全学で3番目に高かったものの、選択肢1「まったくそう思わない」の回答率は5.06でありこれは全学で2番目に高い数値である。具体的にどのような学生がいたのか、状況把握に努めたい。

まとめ：教員の認識としては、熱意をもって授業に臨み、シラバス通りに授業を進め、質問への対応もおおむね迅速であり、提出物へのフィードバックも丁寧に行っており総合的な自己満足度は高い。一方で、質問に迅速に対応できなかつたり、熱意のない学生がいると感じている教員の存在も確認された。今後も引き続き教員間で連携を密にし、問題が起きた場合に迅速に対応に当たれるようにしていきたい。

### 3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

中国語学科におけるアンケート回答率は学生 16.92%、教員 50.32%でありいずれも高くない。より実情に即した結果を得るために、回答率の向上を目指し今後も引き続き努力していくとともに、質の高い授業を目指し研鑽を重ねていきたい。

---

## 2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

外国語学部 英語学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

英語学科はすべての項目において全学平均前後の数値を獲得している。バランスがとれている学科といえる。

### <高数値>

Q3a「メール連絡?」: メールで教員と連絡を取ったことがあると答えた学生は 27.51%である。前期の評価の

22.09%よりも連絡が増えている。外国語学部の中国語学科と日本語学科よりも高数値である。高数値であること＝よいことであるかどうかはわからない。コロナ禍でオンデマンドの授業が多いので、教員側の不備が多く、学生が連絡してきた可能性も排除できない。数値の解釈については注意が必要である。

Q4b「FB 丁寧」：課題に対してのフィードバックが丁寧かどうかについての質問に、学内で5番目に高い学科であった(4.11)。課題に対してのフィードバックが丁寧であると学生が感じていることは、学科としては喜ばしいことである。

Q5「自分意欲」：授業に意欲的に取り組んだという回答の平均は4.29で、学内で4番目に高い学科であった。前期評価よりも平均値が高くなっているが、コロナ禍での授業の取り組み方にも慣れて、授業に集中できる環境が整った可能性がある。

<低数値>

Q1b「シラバスどおり？」：シラバス通りの授業かの問いに対して、4.22であった。学内でも平均よりも劣っている。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

<高数値>

Q5「自分意欲」：学生は授業を意欲的に取り組んだかという回答に関して、4と5の合計で86.81となり、平均の訳84%を上回っている。

Q7「成長実感」：。5（強くそう思う）の割合が6番目に高い結果であった。

<低数値>

Q3「対応迅速？」：教員は全体的に迅速に学生からの連絡に対応したかどうかについて、2（どちらかといえばそう思わない）の回答が8.79, 1（そう思わない）が3.85もあり、下から3番目に高い値となっている。順位こそかわらないものの、前期の回答の0.63を大きく上回っている。「迅速」とはどのぐらいの間に対応すべきものなのかについては学科で検討し、教員全員に周知徹底したい。

3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

前期の授業評価で学生の総合満足度（Q8）について、10段階で8以上の割合を見てみると、英語学科は外国語学部の中国語学科や日本語学科よりも顕著に低い結果であった。後期の授業評価では、総合満足度は上から9番目の学科であり、中国語学科と同位であった。今回の結果は前期のように英語学科の学生だけが満足度が劣るという状況は回避された。前期と後期の授業評価で大きく評価が分かれた理由についてはわからないが、状況が改善されてきていることは素直に喜ぶたい。

Q5「自分意欲」とQ7「成長実感」の値が高かったことから、英語学科学生が自分で学業に真摯に取り組み、そして授業から学びを実感していることが今回のアンケートから明らかになった。また、学生のQ4b「FB 丁

寧」の結果から、教員の課題に対する対応に満足していることがわかる。教員の日頃の取り組みについて正当に評価されているといえよう。しかしながら、一定数の学生が成長を実感できていないことから、それらの学生のケアをどうするかは学科の課題としたい。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の  
結果についての考察

外国語学部 日本語学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

相対的に高い値となったのは、Q1b「シラバス通り?」、Q3a「メール連絡」、Q3b「対応迅速?」、Q4a「提出経験」、Q4b「FB 丁寧?」であった。これらの点は、教員側の対応が適切で、それが学生にも伝わったように思われる。

他の項目については、ランキングとしては高位であっても低位であっても、平均値からの誤差の範囲にとどまっているので、他学科と比べてどうであるかという考察を加えるまでもなく、全学的な考察に準ずる。したがって、普通のことが普通に認識されたと推測し、学生と教員間の関係は良好であると言える。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

最高値による順位付けだけでは、判断しにくいデータが与えられたと感じている。

突出して高位のものはなく、一見低位のように見受けられるのは Q2「難易度適切」、Q8「教員満足」であった。Q2 については、目の前の学生に少し高い壁を与えて、鍛えているという解釈もできるので、特段非難されるものでもない。Q8 については、教員の自己評価が謙虚なものであったと推察する。

他の項目については、ランキングとしては高位であっても低位であっても、平均値からの誤差の範囲にとどまっているので、他学科と比べてどうであるかという考察を加えるまでもなく、一喜一憂する必要もない。

3. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

全学的に、学生が甘い評価で、教員が辛い評価であるという全学的な所見は、概ね妥当であると考えられる。学生の認識と教員の認識に関する相関性が分析されたことについては、いい試みであったと言え、考察するにあたって参考になった。

---

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

- ・Q1a(シラバスの理解)について、法律学科では「2」(はい)と答えた学生は、約78%でありほぼ全学平均(78.86% (前期 79.84%))とおなじである。Q1bでは、4と5の合計が93%であり、シラバス通り講義が行われていることがうかがわれる(教員の認識もほぼ同様)。
- ・Q2(講義の難易度)については、3と4の合計が約84%であり、難易度は適切であるといえる。ただし、13%ほど「とても難しい」(5)と感じた学生もいることから、こうした学生のフォローの仕方も検討する必要がある。
- ・Q3aの結果を見ると、法律学科の学生は9割がメール等で質問をしていない。Q2の結果のように難易度が適切であったため、講義内容を十分理解できたことが理由であるとも考えられるが、それでも他学科に比べると質問した学生の数かなり少ない。次年度、対面講義となった時に、この数値がどのように変化するか注視していきたい。Q3bの迅速対応に関しては、4と5で60%程度であることから、比較的早い対応がされていたといえる。
- ・Q4については、提出物を提出したとの回答が80%に達しているものの、他学科に比べると若干低い値となっている。フィードバックの丁寧さに関しては、68%が丁寧さを感じている。他学科に比較して大幅に低い値というわけではないが、今後改善が必要である。
- ・Q5(講義への熱意)に関しては、4の値が他学科に比べて多く、5が若干少ない。Q6の教員の熱意に関しても、4の値が多く5の値が若干少ない。ただ、1や2と答えた数も多くはないため、大きな問題はないように思われる。
- ・Q7に関しては、知識が増えたと感じた学生(4と5)は約87%に達する。残り13%についてはあまりそのように感じられなかったようであるが、その中にはQ2で授業がとても難しいと感じた学生も含まれている可能性がある。
- ・Q8の総合満足度に関しては、学内では低い方に位置しているものの、平均値を大きく下回っている状態ではない。ただし、1～5を付けた学生も全部で7%程度いることから、今後もFD活動等を通じて講義内容等質の向上を図っていく必要がある。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

- ・Q1については4及び5で90%近い値となっており、学生の認識とも合致している。
- ・Q2については、「適切」を示す3が63%、「やや難しい」を示す4が33%という値となっており、学生の認識とは若干のずれがある(学生84%)。難しいことであっても必要な事項であれば、講義で扱わざるを得ない以上、単純に難易度を下げればよいというものではないが、難しいテーマを扱った際のフォローの仕方など工夫が必要だろう。
- ・Q3については4及び5で87%と高く教員側は迅速に対応しているという認識が強い。他方で、Q4では4と5の合計は約68%であり(全学は約81%(前期は約78%))、メールに対する対応が迅速だったという認識に比べれば、フィードバックが丁寧だったという認識は弱い(この点は学生の認識とも一致している)。また全学

の平均も下回っており、より丁寧なフィードバックが必要である。

3. 「学生による認識」の Q9a (良かった点)、Q9b (改善すべき点) の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。

- ・「レジュメの説明だけでなく、リモートながら文字やイラストを用いて事例を詳しく説明してくれたので、分かりやすかったです。」との意見があった。法律学においては、紛争当事者が多く参加した論点が複雑に絡み合う問題も多いことから、リモート内においても板書機能等を用いて図解することは、学生の理解を深めることに有用であるものと思われる。
- ・「毎回の小テストが良かった」との意見もあった。他の科目も含めた「課題の総量」に配慮しつつ、ポイントを絞って復習のための小テストを課すことは、学生の理解の定着に資するものと思われる。対面講義に移行しても、オンライン講義下で作成した小テスト等は、一定程度活用できるのではないかと思われる。

---

## 2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

法学部 政治学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

前期に引き続き、本学科では、全学平均値から大きく乖離している学生からの評価項目はない。学生の回答率は、「最も包括的な設問である Q8」で前期 28.9%であったものが後期 15.59%となったが、これは同設問の全学の回答率が前期 29.7%から後期 16.99%に推移したことに対応している。

Q1a (シラバス既知) は肯定的回答が 80.6%で、前期比 2.4%減。必修科目のシラバスや、前期 A と同じ科目名の後期 B のシラバスを、読まない学生が一定数いる実状の反映とも思われる。Q1b シラバス通りの授業だったかの問いには 91.1%が肯定的に答え、前期に比べ評価がさらに上昇した (1.2%増)。Q2 授業の難易度は、全学平均 3.58 に対し本学科は 3.57 で、標準的。前期は 3.67 であったから、やや取り組みやすくなったと受け止められている。学生側の受講姿勢や理解度の向上と、授業を行う教員側の工夫との、双方の要因が考えられる。Q3b メール連絡とその回答速度は、全学平均 4.05 に対し本学科は 3.89 でやや低いが、前期の 3.79 に比べ改善された。Q5 学生自身の意欲については、82.04% (前期比 1.99%増) の学生が積極的に (評価 4 と 5 で) 答えている。Q4b 提出物のフィードバック丁寧度は全学平均 4.01 に対し本学科は 3.97、Q6 教員の熱意については全学平均 4.41 に対し本学科は 4.33 だが、平均値から大きく乖離した数値ではない。むしろ、前期比で前者は 0.08 増、後者も 0.02 増と、わずかながらも向上した。Q7 自分自身の成長実感についての質問では、85.77% (前期比 0.82%増) の学生が肯定的に (評価 4 と 5 で) 答えている。Q8 総合満足度は 10 段階評価で 8.06 (前期比 0.1 増) であり、評価 8 以上と答えた学生は 72.07%と、前期比で 4.5%も増加した。

本学科では、大教室講義が一定数あり、後期に入り授業内容も一段と密度を濃くする中、学生は学修意欲を持続し、教員は学生の関心に応える質の高い授業を展開したものと思われる。特に、Q8 において評価 8 以上と

答えた学生の比率が前期に比べ顕著に増加したことは、前期に引き続き対面式授業の実施が限定的とならざるを得なかった条件の下で、前期に比べ内容的に高度化したであろう授業が、前期以上に多くの学生に前向きに受け止められた結果と考えられ、そのように認知される授業展開を実現した各教員の努力と力量は評価されてよい。教員一人当たりの学生数が多いことも考え合わせるなら、前期に引き続き、本学科は健闘していると言える。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

教員の回答率は全学平均 52% に対し本学科は 57.14% である。前期は全学平均値を 0.3% 上回るにとどまったが、後期は 5.14% と有意に上回り、アンケートの教員への浸透は進んでいる。Q1 シラバスと授業進行の相関については、92.85%（前期比 5.35% 増）が肯定的に（評価 4 と 5 で）答えている。Q2 授業の難易度は、全学平均 3.30 のところ本学科教員は 76.79% が適切（評価 3）と答えている（前期比 12.21% 増。ちなみに評価 4 「やや難」と評価 5 「難」の合計値は 19.65% で前期比 5.35% 減）ことから、教員側は授業の大半は適正な難易度だと考えているとみられる。Q3 メール連絡への回答速度は、大規模授業ほど対応が遅滞しがちであるが、全学平均 4.28 のところ本学科教員は 86.72% が比較的迅速（評価 4）または迅速（評価 5）と答えており、前期比 9.64% 増と、少なくとも教員の意識においては向上した。他方、Q4 提出物のフィードバック丁寧度については、全学平均 4.08 のところ本学科教員は 90.57% が並（評価 3）以上の丁寧な対応と答えているが、前期比で 5.26% 減となったのは、教員の自己評価姿勢が冷静かつ謙虚であることの現われかもしれない。実際、Q6 熱意の自己評価において、全学平均 4.62 のところ本学科教員は実に 100% が肯定的（評価 4 と 5）に答えているが、評価 5 の割合は極めて控えめである。Q8 総合満足度は、10 段階で全学平均は 7.96 だが、本学科教員は 91.07% が評価 7 以上と答えている。前期比で 0.59% 減だが、ほぼ横ばいである。

---

## 2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

国際関係学部（国際関係学科と国際文化学科のとりまとめ）

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

最初に、回答率について記す。全体の回答率は前期の 29.70% から大きく後退して、ほぼ半分の 16.99% であった。国際関係学科の回答率も、前期の 35.3%（2 位）から 17.13%（10 位）に、国際文化学科のそれも、33.6%（5 位）から 22.27%（3 位）に減少している。

回答率低下の理由は多々あろうが、学生より仄聞した範囲では、「前期に答えた」「不満はない」といった反応で回答されなかった例もあったと思われる。アンケートの目的が、問題の抽出や改善の確認にあることは論を待たないが、それを年 2 回の頻度で実施することによる逆効果の可能性などにつき、再考の余地があると思う。

いずれにしても、回答率が大きく異なる状況では前期との比較は困難であるが、可能な範囲での比較を含め

て、後期の回答について記述したい。

### (1) 高数値

Q1a「シラバス既知」では、国際文化学科が平均値を大きく上回り、学科で1位となったが、国際関係学科はほぼ平均値で、8位であった。Q1b「シラバス通り」については、両学科ともに平均値を上回り、国際文化学科が4位、国際関係学科が5位であった。タイムリーな事象やデータを取り入れる授業もあるので、「シラバス通り」が絶対的な目標とは言えないであろうが、今後とも各教員に丁寧なシラバス執筆とその内容の遵守を要請していきたい。

Q2「難易度」、Q3a「メール」、Q3b「対応」では、国際関係学科が平均値を上回って上位であったが、国際文化学科は平均値の前後となっている。国際関係学部のほとんどの授業は、両学科の学生がともに履修しているため、学科間で回答の数値が異なる理由が判然としない。前期のアンケートでは、学科間に数値の大きな開きは見られず、後期のアンケートで初めて生じたケースなので、学部の今後の観察事項としたい。

### (2) 低数値

残りの設問に対する回答の数値は、決して低いわけではない。数値は平均値の前後に位置し、他学科との比較ではほぼ中間に位置しているため、ここに記すこととした。

全体としては両学科間に数値の大きな違いはなく、ともに前期のアンケートよりも低くなっている。前期よりも数値や順位が低下したことは今後の課題となるが、上述のように回答率が前期よりも低いため、前期での積極的な評価が今回は反映されていない可能性もあろう。また、順位間の数値の違いが小さいため、全学としての傾向に近づいたものとも考えられる。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

#### (1) 高数値と (2) 低数値

教員による回答では、全体的に国際関係学科の順位が低く、国際文化学科の順位が高くなっているため、高数値と低数値にかかわる記述をまとめることとした。

まず、回答率では国際関係学科が72.46%で2位、国際文化学科が62.30%で5位と、ともに高くなっている。回答率は前期よりも高くなったのに、順位は前期より低くなっている（国際関係学科は1位、国際文化学科は2位）。これは、他学科の教員回答率が向上したことを意味しているので、全体として良い傾向と思う。本学部でも、引き続き教員の回答を促していきたい。

また、Q8「総合満足」でも国際関係学科は4位、国際文化学科は2位と、ともに高い結果を得ている。評価のまとめのような設問箇所での回答結果なので、授業に関する教員の満足度が高いことは良好といえるだろう。

ところが、Q1「シラバス」からQ7「成長感覚」までの回答の順位は、国際関係学科が低く、国際文化学科が高くなっている。国際文化学科は他学科や全学平均より高く、国際関係学科は平均値前後の中位となっている。本学部においては、ほとんどの授業で両学科の学生による履修が可能で、両学科の学生が混在している。それゆえ、学生による回答はこれまで両学科間に大きな違いは見られなかったが、上述のように今回のアンケートで初めて学科間の違いが出た。教員に対するアンケートでも、前期は学科間の違いが見られなかったが、学生と同様に今回初めて違いが出た。順位間の数値の違いは小さいものが多いものの、後期においてのみ、大半の質問で順位に開きが出るのは予想外の結果であった。ある意味、興味深い現象であり、今後のアンケート結果の推移を見ながら理由を考えたい。

ただ、教員による授業認識が低いことは、授業内容の向上にかかわる問題意識や意欲の表れでもあろうから、順位の低さをもって単純に状況を判断できないと思う。学生に対するアンケート結果は、授業の満足度をそのまま表していようが、教員による消極的な回答は、授業に対する向上心とも受けとれるので、数値や順位の高低でよし悪しは決められないであろう。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の  
結果についての考察

経営学部 経営学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値「高数値と低数値に分けたうえで」を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。
  - Q1a「シラバス既知」、Q1b「シラバス通り」、Q2「難易度適切」、Q4a「提出経験」、Q5「自分意欲」、Q6「教員熱意」、Q7「成長感覚」については他学科と同等水準とみられ、総じては望ましい授業認識が得られていると考える。
  - Q3a「メール連絡」(15.8%) は他学科と比べやや少ない。Q3b「対応迅速」(3.78) が他学科と比べやや低いのはトップボックスの回答が少ないためとみられる (Q3b「対応迅速」5 : 30.4%)。
  - Q4b「FB 丁寧」(3.90) が他学科 (4 点台が多い) と比べやや低い。
  - Q8「総合満足」(8.12) は全学平均 (8.28) と比べやや低く見えるが、得点分布を見ると 8-10 点が 73.5% を占める。10 点 (20.1%) が他学科 (25-30%程度が多い) より少ない。
  - 経営学科は学科定員やカリキュラム等の特徴上、大人数での講義形式授業が多い。このことがアンケートにおいてトップボックスの回答が得られにくいことにつながっているだろう。各教員による授業コントロールの工夫は成果につながっていると考えるが、他学科と比べると、学生への課題 FB や個別相談への対応に課題もみられる。課題 FB をはじめとする学生個々と教員とのインタラクションを効果的かつ効率的に図っていく工夫が課題となるだろう。
  - なお、今回アンケートの学生の回答率が非常に低かった (12.5%)。働きかけを強めたい。
2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値「高数値と低数値に分けたうえで」を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。
  - Q1「シラバス通り」、Q2「難易度適切」、Q3「対応迅速」、Q6「自分熱意」については他学科と同等水準とみられ、教員は熱心に授業運営に取り組んでいる。
  - しかし、Q4「FB 丁寧」、Q7「成長実感」については、教員は他学科よりやや低く認識しており、教員の Q8「総合満足」(8+9+10: 57.1%) も低い。学生の認識 (73.5%) よりも低い。もっとよい授業ができると思いながらうまく実現できていないと捉えていることがうかがわれる。
  - Q5「学生意欲」のトップボックス回答が他学科 (20-30%台が多い) より著しく少ない (3.6%)。
  - なお、今回アンケートの教員の回答率が低かった (50.0%)。働きかけを強めたい。

2つのアンケートから、学生も教員もよりよい授業への期待を持っていることがわかるが、そのポイント

は、課題 FB をはじめとする学生個々と教員とのインタラクションにありそうだ。具体的な方法については科目特性等を踏まえて授業ごとに検討するべき課題となろう。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の  
結果についての考察

スポーツ・健康科学部スポーツ科学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

スポーツ科学科だけに限った事ではないが、学生の回答率が低く、このアンケートに回答している学生は、そもそも学業や課外体育など様々な活動に対しての意識が高いのではないかと考えられる。来年度以降も実施するのであれば回答率をもっと高められるようなアナウンスを考えたい。

**【高数値】**

Q2 「授業の難易度」については、前期に続き平均値が最も 3 に近かった（授業難易度が適切）という結果となり、今後も学科全体として学生の理解度の高い授業展開を目指したい。また、この設問では授業の難易度について「とても易しい」と回答している学生が他学科と比較して多いことから、希望する学生に対してはより高度な技術・知識を伝達する機会を準備するという点について検討が必要である。

これは、Q5 の「授業に対する熱意／意欲」とも関連しており（本学科は前期に引き続き最も値が高かった）、授業の難易度が易しく感じられる学生に対しての何らかのフォローによって、学生が授業に対してより高い意欲を保つ助けになると考えられる。また、後期は、感染症対策を徹底しながら対面授業を再開したこともあり、学生たちにとって待望の対面授業ということで熱意や意欲が高まったのかもしれない。

Q6 の「教員の熱意」について学生から評価されているように、学科全体として熱意をもって教育活動を行っている。特に一年生は、フレッシュマンセミナーをはじめとする、スポーツ科学科独自の授業が配置されており、その授業内容から教員の熱意を感じ取ったのかもしれない。

Q7 「成長感覚」については、9 割以上の学生が成長感覚に満足しているという結果となったが、他学科の平均も高いことから見ると、スポーツ科学科のみならず各学科の教員がハイブリッドやオンデマンドの授業の中で学生により伝わりやすく理解しやすいように工夫した結果なのではないかと考えられる。

Q8 「総合満足」については、非常に高く喜ばしいことである。4.3.13 全体的満足度に貢献する要因に記載されているように、すべての要素が重要であるが、特に「成長感覚」「教員熱意」「難易度適切」を高めていくことが、学生の「総合満足」の上昇に大きく貢献することが示唆されたことは非常に興味深いものであった。

**【低数値】**

本学科の学生アンケートは、学内において比較的ネガティブな要素が少ない傾向にあると考えられる。その中でも比較的 low 数値であると読み取れるのは Q4b の FB が丁寧であるかについての設問である。ここでは「丁寧」という表現がどの程度を指すのかについての学生間の認識の差が表れているように考えられる。スポーツ科学科の授業では実技の対面授業をはじめとして個別に「丁寧」なフィードバックが得られる機会が多くあり、回答者が授業内の提出物についても同様の（手取り足取り指導するような）「丁寧」さを求めているとすると数値としては低い傾向になるだろう。また、後期の実技に関しては、履修学生を 2 グループに分け、実技とオンデマンドのハイブリッドを交互に繰り返しており、オンデマンドの学生に対してのフィードバックが十

分でなかったことも考えられる。一方で、FBが「全く丁寧ではない」と感じる学生がいることも事実なので、このような回答に至るような対応がなるべく無くなるよう対応が必要だろう。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

スポーツ科学科の教員による授業評価アンケートの回答率が約42%と低いことから、次年度以降の回答率向上を目指す。学生に対し課題等の提出物についてべ切り厳守等を求める立場である教員の6割が回答していない状況はお粗末であると言わざるを得ない。学生に対してフィードバックの割合が低いのもこのあたりの取り組み方から改善していく必要があるのかもしれない。学生の満足度が高いスポーツ科学科、書道学科の教員回答率が低いことは興味深い。

#### 【高数値】

Q2「難易度適切」については、教員と学生との認識が一致しており、適切な授業が展開されたと考えられる。Q8「総合満足度」は教員においても高く、学生の満足度も高いことから、学生・教員双方の満足度の高い授業展開ができていることが読み取れる。本来対面で行うことが望ましい授業においても、教員の工夫により満足度の高い内容の授業が行えたということはとても重要である。

#### 【低数値】

学生アンケートでも低数値であると判断できるQ4「FBの丁寧さ」については、教員自身もある程度の欠如を感じており、今後改善の余地があると考えられる。

Q6「自分熱意」やQ7「成長実感」については、学生の回答と比較してあまり高くはない。これは手を抜いているわけではなく、学科の特性上、実技や実習などの対面授業でこそ伝えられる専門的な技術や知識等があり、それをオンデマンドや隔週でしか実施できなかったことも自己評価を低めに回答した大きな要因だと考えられる。

---

### 2021年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

スポーツ・健康科学部 健康科学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

まず始めに、健康科学科学生のアンケート回答率が、14.04%と非常に低い（全学科19位/21学科中）ことについて、学科全体の課題とし、次回以降学科全教員で学生に呼び掛けをしていく必要性を感じている。

また、シラバスに関する質問項目、Q1「シラバスの既知」に関しても、「知っている」と回答した学生の割合は、78.62%と平均値を下回り、既知割合の一番高い国際文化学科と比較して6.86%も低い。既述したアンケートの呼びかけだけでなく、学生に対するシラバスの周知への教員側の働き掛けについても健康科学科の教学上の課題としたい。

ところで、健康科学科の学びは、自然科学系の学びが主となる。また、実験・実習も多く、コロナ禍である

か否かに関わらず、課題の多いことは自然科学系の学科の特徴とも言える。更に、入学時点での自然科学系の知識・理解量に関してもその幅が広く、リメディアル教育の必要性は否めない。実際、健康科学科では、入学から前期の終了時まで、化学、生物の補習授業を実施している。

以上のような学科の背景に鑑みてアンケート結果を考察すると、Q2「授業の難易度の適切性」についての結果は予測したとおりであった。「4・かなりそう思う」「5・大変そう思う」の合計が、回答学生の 53.08% を占め、難易度の高い授業、逆に述べれば分からない授業に苦しんでいる学生が多い実態が浮き彫りになった。前述したように、自然科学系科目の高等学校までの学びに大きな差があるため、本アンケートのような結果になっていることは必然かも知れないが、他学科に比較して、「授業がとても難しい」と感じている学生の割合は、17.69%と看護学科に次いで 2 位であり、更なる授業の工夫の必要性に異論を唱えることはできない。

ところで、気になるアンケート項目の結果は、Q4「課題の提出経験」である。健康科学科では、実験や実習が多いということは前述したとおりであるが、それに伴って「課題提出は必至」とも言える。しかしながら、アンケート結果では、「88.15%・12 位/21」であり、実際は 100%に近い割合でなければ問題とも言える。初年次での教養科目において、提出物を出さなくても良い授業があるということも考え難く、その実態について学科でも説明をしていきたい。次に、他の学科に比較して良かった点について言及していきたい。Q5「自分意欲」についてである。平均点は、4.26 点と、全ての学科の中では 5 位であった。また、その内訳「4. どちらかと言えばそう思う、5. 強くそう思う」の割合は、86.93%であり、多くの学生が「臨床検査技師」を目標に修学に励んでいることが一要因と考えられる。何れにしても、教員が学生のやる気を喚起しているということもでき、教員と学生の健全な信頼関係が構築されていることを示す喜ばしいエビデンスでもある。そして、Q6 教員の熱意への認知のみならず、学生、教員間のラポールの強さが、学生の Q7 成長感覚の高さ（平均点 4.35 点、全体の 5 位、項目 4、5 の合計割合・88.63%）に影響を与えているのかも知れない（報告書においても、本調査全体学生の意欲と成長感覚との相関関係は、0.597 と強い関係性を示唆している）。

最後に、学生の総合満足度であるが、平均 8.41 点（全体の 5 位）、評価点 7 以上が、90.78%であり、安堵する結果でとなった。しかしながら、この結果で満足することなく、冒頭でお示しした「アンケート回答率」「シラバスの既知」「課題提出割合」などについて学科 FD 等をとおして全ての教員の 責任課題事項として共有をしていきたい。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

学生のアンケート回答率の低さ、「特に本学科についての課題とも言える」ということは、1. においてもお示ししたが、教員の回答率に関しても、50.70%と決して高くはなく（解答率の 1 位は、中国学科 77.42%）、学生のアンケート並びに教員のアンケート調査の意義・意味（一連のアンケートの意味）を問い直す必要性を感じずにはいられない（学科 FD での再課題）。

全ての学生がシラバスを認知するということは必要であるものの、学生の知識・技能・意欲・思考力・判断力・表現力・態度などは、クラスや年次ごとにその個性が異なり、教員がそのとおりに授業を進めることで、学生の不利益を生じさせる可能性を孕んでいる。また、先述したとおり、健康科学科・初年次学生の「いわゆる基礎学力」は、2 極化の傾向にあり（毎年、入学当初に学科独自の基礎学力テスト【理科学科・英語】を実施し、初年次学生の基礎学力テストを明確にしている）、その割合も必ずしも一定ではないため、授業実施に際しては、教員側の授業運営の柔軟性が求められる。

従って、本調査・本項目の結果（「4.どちらかと言えばそう思う」、「5.強くそう思う」の合計点が 75.00%の値（全学科中 18 位/21）について、「悲観するべきである」と結論づけることはできない。勿論、シラバス

は、授業運営における宣誓書とも言えるので、その骨子に則して授業を進めることは大原則である。しかしながら、シラバスとおりに授業を運営することが学生の不利益であると教員が検証・確認（例えば、診断的テストや課題を出したところ、高等学校での学びの復習が必要であるということを当該教員が認識すれば、逆に高等学校の学びの復習を改めて入れることは当然である）をしたならば、学生にそのことを確実に説明し、シラバスの内容変更をすることも本来ではないか。

シラバスは、学修計画書であるため、授業目標と評価の一体化をその宣誓書に示す必要性がある。シラバスそのものを理想的に示すことは誰でもできるが、授業そのものは生ものであり、その時々柔軟に、適切に対応することのできる授業力を高めることが、私達教員の課題でもある。「シラバスを上手に書く」という視点から「シラバスを学生とのより良い相互作用構築ツールとして如何に活用するか」という視点【既に議論はされているが】に変換することが今後の大きな課題でもあろう。

Q2の「授業の適切性」については、「授業がとても難しい」と感じている学生の割合が17.69%（他学科と比較して高い）、「授業がとても難しいだろう」と感じている本学科教員の割合は、2.78%であり、学生との意識乖離の大きさについて認めざるを得ない。私達教員は、「こんなことは分かるだろう」という意識の下、授業を進めがちであるが、「こんなことが分からない」状況が多々あるということを改めて認識する結果でもあった。

さて、Q4 bにおける本学科教員の割合は、「4.どちらかと言えばそう思う、5.強くそう思うの合計」が、72.31%、学生は、平均点・4.06点（全体7位/21）、項目4と5の合計割合72.81%とほぼ一致している。当然であるが、教員、学生共に、課題に対する丁寧な対応の項目4+5の割合が100%に近づくように教員側の努力が必至である。

ところで、学生の意欲が高いということは（平均点は、4.26点、全学科中5位/21、項目4、5の合計点86.93%）、先述させて戴いたとおりである。しかしながら、本学科教員の学生に対する認識（項目4と5の合計点・77.77%）については、少し厳しめであることが示唆された。学生は、自分なりに頑張っているものの、教員側がそれを認めないという。

相互の意識乖離は常かも知れないが、学生の意欲を的確に読み取り、適切な支援をすることは教員の使命であるということを改めて認識し、より学生理解に努める必要性のあることを感じた。

そして以上のことと同様に、Q7「成長実感」に対する本学科教員の見方（項目4と5の合計点・70.77%）と、学生（項目4と5の合計点・88.63%）の認識との間に望ましくないズレが生じていることも理解できた。学生が、「努力の中で成長感」を持ち、即ち「有能感」を持ち得たにも拘わらず、教員側がそれを認めないということは、学生の人格陶冶に「水を差す」ことにもなりかねない。教育姿勢の厳しさと、学生理解は同一方向を向くことが必要であることは否めない。何れにしても、本学科の学生のいわば「有能感」が高くなっているということは幸いである。

最後に、教員側のQ8「総合満足」に対する（8+9+10の割合）は、全学科中最下位（50.0%）であった。一方、前述したとおり、本学科学生の満足度は、他学科と比較して高い。

このように、学生に比較して教員側の満足度が低いことの原因は、コロナ禍における実習・実験の制限等によるものであることが推測される。

オンラインやオンデマンド授業準備のために、本学科教員・助手の皆さんは、かなりの時間を費やしてきた。実験室で、実際の実験を行いながら、それを映像化し、その映像に音を入れ、脚注も加えるという作業をひたすら行ってきた。学生側は、教員側のその苦労についても認識をしており、その認知が学生の「総合満足度」を高めている要因の一端ということもできるが、教員側は、教材作成に莫大な時間を費やしても、「学生が実際に手を動かして、様々な実験スキルを高める」という、本来必要とされる教育の目的遂行は譲れず、このような結果となったに違いない。

コロナ禍であっても、学生側の満足度がある程度担保されたということは救いでもあるが、本学科の学修特性を鑑みれば、コロナウイルスの終息を願うばかりである。

3. 「学生による認識」の Q9a (良かった点)、Q9b (改善すべき点) の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

まさに、お纏めを戴いた部分については、やはり重要な視点だと感じる。学生並びに授業アンケートを踏まえて、もう一度お纏め戴いた部分を咀嚼したい。

#### <授業に関して>

1. わかりやすく教える。⇒診断的評価を怠らず、何が分からないのか、どこまでの理解なのかを教員側が知ったうえで、学生側の理解特性を見つつ分かり易い授業を目指したい。(目標・計画と評価の一体化を目指す)。
2. 一方的に知識やスキルを伝えるスタイルのみでなく、学生が主体的になれるスタイルを取り入れる。  
⇒教員と学生の相互作用の円滑化・活性化を図る。そのためには、ICT の更なる活用、授業形態【AL】の工夫などが重要となる。(課題の量、タイミング、それに対する丁寧なフィードバック。直接的な励まし、有能感を促すようなコミュニケーションなど)。

#### <教材に関して>

3. 特にオンライン授業の場合、丁寧に作成する。可能な限り音声解説と文字資料の両方を準備する。  
⇒健康科学科では、実験・実習をオンラインやオンデマンドで実現するためかなりの労力を各教員、助手の皆さんが強いられた。お示し戴いた留意事項そのものの教材づくりに終始したが、自然科学系、特に実験・実習が伴う授業に関しては限界を感じている。学生の復習や予習のために資料としては大いにこれからも活用できると考えているが、対面での授業をすることの重要性は否めない。また、対面であっても、教材作成の原則は、丁寧に、分かり易く、であることに相違はない。
4. 教材は余裕を持って早めに公開し、いったん公開したら特段の理由がないかぎり長期間公開しておく。  
⇒今年度作成した教材を、来年度はフル活用したい。その場合、manaba はやはり有益であり、お示しを戴いたことを遵守したい。

#### <課題に関して>

5. 十分に「足場かけ」を行い、量も過重にならないよう注意する。
6. 学びを促進すると学生に感じられる課題であるよう留意する。  
⇒「講義科目、1 コマに対して、復習・予習で 4 時間」というシラバス上の留意事項を考えれば、授業終了時のアクションペーパー程度では、その理念には反すると思われる。健康科学科では、「実験・実習計画と結果のレポートが必須」となっているため、演習・講義科目では特に、学生の課題に対する重圧感は他の学科よりも大きいと思われる。従って、6 で示して戴いた「質の高い学びを促進すると感じられるような課題」を心掛けていくことが肝要であると改めて感じている。

<評価（形成的）に関して>

7. 小テスト等をこまめに行い、知識スキルの定着を図る

⇒健康科学科では、国家試験に向けて以上のような方法で学修を進めている。但し、各教科ルーブリックを作成していないため、目標と評価の一体化が、学生にとって実感できているかということについては実態を把握できていない。この点も今後の課題である。

<フィードバックに関して>

8. 質問には迅速に丁寧に答える。特にオンライン授業の場合は確実に質問ができる雰囲気と仕組みを構築する。

9. 提出物には必ず、かつ可能な限り丁寧にフィードバックをする

⇒8.9.ともに、必要十分条件であると痛感している。

<教員として>

10. 学生に寄り添う姿勢を持つ。特に授業内の「弱者」をサポートする姿勢を持つ。

11. 授業に対する熱意を前面に出し、それを学生に伝えることで、学生の熱意を引き出すよう努める。

⇒全くそのとおりだと感じている。また、10.に加えて、ハイエンドの学生に対する支援の重要性も感じている。どの学生に対しても寄り添うことは重要であるが、学生の個性や現在の様々な能力を最大限にサポートできる教員でありたい。また、そのようなコーチングの姿勢を持てるような、学科内でのFDも必要であろう。

4. 上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

授業認識（学生・教員）アンケートを確認させて戴き、本学科についても様々な問題点・課題が浮き彫りになった。そのような意味においても、本調査の詳細な分析に感謝するものである。

---

2021 年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」  
の結果についての考察

スポーツ・健康科学部 看護学科

1. 「学生による認識」について、Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

Q1 シラバスとおりの授業であったか？

本学科では4「どちらかといえばそう思う（55.0%）」ならびに5「強くそう思う（45.0%）」の回答で占めている。これは、全学科上位7位に位置付けられている。本学科の学生はシラバスとおりに授業が進行し

ていると認識していた。しかし、全科目の回答平均値は 4.29 (ピアソン相関係数  $r = .0991$ ,  $p = .0001$ ) であり、学生は「シラバスに沿って授業は進む」という先入観が強いことを教員側も認識し、その上できめ細やかな対応を意識すべきと考える。

#### Q2 学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思うか？ [難易度適切]

この設問に対する全科目の平均は  $3.30 \pm .72SD$  [最頻値 3 (適切であった)] であり、本学科は 3 (適切であった) という認識の割合が全学科に比し最も大きかった。全体を見渡すと学科によってかなり違いがある。学生による認識では「資料、動画、先生の音声付き動画もあり、わかりやすくよかったです。」「オンデマンドの資料がとても見やすい形式でした。文章、図、音声を細かく区切りながら併用するのは手間がかかるかと思いますが、大変わかりやすかったです」「パワーポイント、PDF、音声と三つの教材を配信してくれていたのが、個人的にノートをとる時にやりやすかったので良かったです。」などの回答がある。本学科は指定規則に沿った専門的な科目が多くあり、教員は難易度問わず、日々学生が着実に学修できるよう研鑽しているが、2022 年度より開始される新カリキュラム進行においても引き続き適切な学修指導へ導きたい。

#### Q3 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思うか？ [対応迅速]

本設問では全学科の平均は  $4.28 \pm .79SD$ 、本学科では 4 「どちらかといえばそう思う (40.0%)」 5 「強くそう思う (55.0%)」 であり、全科目の上位 4 位に位置する。これは、机上講義もさることながら臨地実習等の外部での学修が多く占めるため、学生への指導にも「機微に報告、連絡、相談」を欠かしていない。これに対し教員も同様の行動をとっていることから、よりこのような結果が得られたと考える。しかし、教員が 5 「強くそう思う」と認識した授業であっても学生の認識の平均は 4.26 であるため、教員が感じるほど迅速さの変化を学生は感じていないことがうかがえる。この点をも留意し学生指導に携わりたい。

#### Q4 提出物に対する FB は丁寧だったか？ [FB 丁寧さ]

全科目の平均は  $4.08 \pm .84SD$  であり、本学科では 4 「どちらかといえばそう思う (50.0%)」 5 「強くそう思う (45.0%)」 であり、全科目の上位 4 位に位置する。教員は迅速に対応しているとの認識が反映された結果である。しかし、学生アンケートと比すると、教員が認識する「FD の丁寧さ」と学生が認識する「FB の丁寧さ」は正の相関 ( $r = .3261$ ,  $p < .0001$ ) であるが、教員が感じるほどの丁寧さを感じているとは言えない点を見出せる。授業評価と共に学生が何に迷い疑問であるのかを精査し学生個々に会った FB を改めて見直すことが必要であると思われる。

#### Q7 個の授業を通じて学生の「知識が増えた」あるいは「物事のとらえ方が深くなった」あるいは「技術が向上した」などの成長があったと思うか？ [成長実感]

この設問に対する全科目の平均は  $4.30 \pm .57SD$ 、本学科は本学科では 4 「どちらかといえばそう思う (35.0%)」 5 「強くそう思う (65.0%)」 であり、全科目の上位 2 位に位置する。しかし、教員と学生認識の関係は、他の設問以上に弱いことが示唆している ( $r = .1114$ ,  $p = .0049$ )。学生に対し、事実に基づいた「ポジティブな評価」、「声掛け」などから始めるなど、今後もこれらを意識して学生対応すべきと思われる。

3. 「学生による認識」の Q9a (良かった点)、Q9b (改善すべき点) の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授

業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

2021年度学科FD研修会において『完成年度を迎え、各領域の現状(困難、工夫、課題など)の情報共有の場とし、他領域の理解を深め、新カリキュラム導入に向けた課題解決ならびに、さらなる教育の発展への糸口とする』ことを目的に、学科教員によるグループセッションを行った。そこで、「……(抜粋)いろいろな制限の中、試行錯誤して学生と対峙していて、先生同士での交流もなくなり、ある意味教員も学生も孤独だと感じていた。教員同士で積極的に意見交換できれば、もっと良い環境を学生に提供できていたかもしれません。」などの意見が聞かれた。オンラインを主とする授業形態の中で、学生たちだけでなく教員たちも孤独と共に試行錯誤取り組んでいたことが明らかになった。また「領域の先生方のご意見を伺い、学生の基礎からの学びや成長経過がよくわかり、大変参考になった」、「他領域の先生方が自領域の授業内容に言及していただいていること、学生が授業内容を踏まえた発言をしていることを知り、授業に対するモチベーションが上がりました」、「職位問わず、かつ領域のミックスディスカッション形式のため、自分の領域以外の状況考え方が垣間見れ有意義な時間だった」などの意見も多かった。

これらより本FD研修会を開催したことで大学ならびに学部・学科の方針に基、教員間での情報共有と意見交換の必要性を改めて考える機会となった。

これを受けアンケート結果から示されている懸念事項をより学科内における教員間において自己評価と共に他者評価の機会を設けるなどし精査すべく、丁寧に自己評価自己点検をしつつ授業改善の具体的な行動に移行すべきと考える。またQ9aについては、さらに学科の特性ふまえ、また教員がそれぞれもつ「専門分野」をさらに活かし、教員自身も孤独にならないよう学科内のつながりを意識しながら教育に携わることがさらなる授業改善の一步であると考え。

---

## 2021年度後期 「学生による授業認識アンケート」および「教員による授業認識アンケート」の結果についての考察

社会学部 社会学科

1. 「学生による認識」について、Q1a~Q8の中で貴学科において気になった数値(高数値と低数値に分けたうえで)を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

### 【総括】

全体としてweb回収率が16.99%として低い中で、社会学科は、回答率25.72%であり、前期の回答率も42.60%で最も高い回答率を誇っていた。学部として社会調査等に力を入れている表れともいえる。社会学科は、【Q2】「自分にとってこの授業の難易度」、【Q3b】「質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか」、【Q6】「教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか」の3つにおいて、全学の平均を上回る結果であり、それ以外の項目では、全学の平均程度であった。今後は、個々の結果に対してより分析を行い、学生に寄り添った授業運営が出来るように授業の質を高めていきたい。

### 【Q1a】あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか？

全学では「知っている」と回答したのは78.86%(前期79.84%)に対して、社会学科では75.57%(前期78.4%)であった。前期と比べて3ポイントほど下がっていた。その一方で2割が、シラバス内容を確認して

いなかった。今後は、学生達がシラバスをしっかりと読み込んだうえで、科目選択をするように履修指導を行っていききたい。

**【Q1b】** この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。

この設問には Q1a で「知っている」と回答した学生のみが回答した。全学での平均は 4.35（前期は 4.32）である。社会学科での平均値は 4.26%であった。回答別にみると、「強く思う」（40.08%）、「そう思う」（48.30%）と回答した人の割合は 88.38%（前期も同じ 88.38%）で、授業がシラバス通り行われていたと言える。

**【Q2】** 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。

全学の平均は 3.58（前期は 3.57）、「適切だった」と「やや難しい」の間に平均があることを示しており、社会学科では 3.62（前期 3.60）で、平均通りであった。難易度別にみると「とても易しかった」、「易しい」が 1.47%で、「適切だった」と回答した人は 48.0%であった。その一方で「やや難しかった」と回答したのは 37.73%、「とても難しかった」と回答したのは 13.10%であった。特に、約 1 割強が「とても難しい」と感じており、今後のこの 1 割に対して対応を検討していく必要がある。

**【Q3a】** あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。

全学では「したことがある」と回答したのは 20.98%（前期は 18.24%）であり、学科によって回答結果に差がある。社会学科は、「したことがある」と回答したのは 17.94%（前期 19.6%）であり、おおむね平均通りである。

**【Q3b】** 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか

この設問には Q3a で「メールで連絡をしたことがある」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 4.05（前期 3.99）であった。社会学科は、4.08（前期 3.97）であり、全学の平均よりやや上回っていた。回答別にみると「強く思う」、「どちらかといえばそう思う」が 71.34%で、「どちらとも言えない」が 23.02%、「どちらかといえばそう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」が 5.62%であった。特に「どちらかといえばそう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」では、前期 7.69%であったので若干の改善が見られたと言える。

**【Q4a】** この授業では提出物を出しましたか。

全学では、「出していない」が、11.81%（前期 15.1%）、「出した」が 88.19%（前期 84.9%）であった。提出物を課される場合が前期よりやや多くなり、いずれの学科も全体として課題等の提出経験が多いことがわかる。社会学科では、89.08%（前期 93.84%）であり、前期は看護学科に次いで提出物を課す割合が高かったが、後期では若干減ったといえる。

**【Q4b】** 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。

課題を提出のフィードバックの丁寧さについて、全学の平均は 4.01（前期 3.97）で概ね「丁寧である」と認識されていたといえる。社会学科は、4.00（前期 4.05）であった。学生は教員のフィードバックに対して概ね「丁寧である」と認識されていた。この丁寧さの割合を見ると、社会学科は「強くそう思う」36.38%、「どちらかといえばそう思う」33.98%と合わせると、70.37%となっているものの、「どちらとも言えない」「どちらかといえばそう思わない」「まったそう思わない」の合計 29.6%で、約 3 割が満足している回答でなかった点

は今後の課題である。

**【Q5】** あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。

全学の平均は 4.23（前期は 4.18）で、社会学科は 4.18 であった。社会学科は「強く思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合計した割合は 85.39%（前期 84.38%）であり、後期も引き続いて学生の授業に対する意欲は維持していたと言える。

**【Q6】** 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

全学の平均は 4.41（前期は 4.39）であった。社会学科は、4.44（前期 4.48）であり全学の平均を若上回っていた。この熱意の度合いを見ると、社会学科は「強くそう思う」（53.81%）、「どちらかといえばそう思う」（38.58%）と合わせると、92.39%であり、教員は熱意を持って授業を行っていることが伺えた。

**【Q7】** この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。

全学の平均値は 4.31（前期は 4.28）で、社会学科では、平均値 4.27（前期 4.28）であった。社会学科の「成長感覚」について、回答別に見てみる「強く思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合計した割合は 88.18%（前期 88.97%）であり、前期に引き続いて後期も「成長感覚」を維持しているわかる。その一方で、「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思わない」「まったそう思わない」の合計が 11.82%で、約 1 割が「成長感覚」を実感していないことが浮き彫りとなった。この 1 割に対して学習意欲の改善などの手立てが必要である。

**【Q8】** すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10 を「100%満足」、1 を「10%満足」として 10 段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

全学の平均値は 8.28（前期は 8.16）、で前期より平均値が僅かだが上昇していた。社会学科の場合は、前期と同様に 8.20 と総合評価は維持していた。その内訳を見てみると「10」が 24.02%、「9」が 24.02%、「8」が 25.48%と「8」以上が 7 割を占めていた。「6」以下が、13.27%であった。

2. 「教員による認識」について、Q1～Q8 の中で貴学科において気になった数値（高数値と低数値に分けたうえで）を取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

**【総括】** 本学科として特徴のある回答は、Q6・Q8 に対する回答である。

Q6 については、教員は自身の熱意を授業に十分に反映しきれていない印象であった。本年度の後期も大部分がオンラインという制約下で実施されたことを考慮すると、学外への調査実習などに参加できない教員の授業に対する熱意が減退傾向にあると思われる。

Q8 については、本学科の教員の約 94%が 7～9 と回答しており、教員の主観としては概ね 90%以上の満足を認識していた。この質問に対する回答は、学科ごとによりばらつきが見られるが、本学科の教員は相対的には高い総合満足度を示していると言えよう。

**【Q1】** この授業はシラバスの記述通りに行ったと思いますか。

図表 3 を見ると、教員は 4（どちらかと言えばそうである）、5（強くそう思う）を選んだ者が多いことがわかる。

社会学科では、学外活動を組み込んだ授業が比較的多い。コロナ禍という外的な要因によってさまざまな変更を余儀なくされ授業も多いはずである。そのなかで、教員が相当な工夫をし、シラバス内容に近づくように努力したことが伺える。

【Q2】 学生にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。

社会学科の教員は、4（やや難しかった）を選んだ割合（34.92%）が、比較的高い。コロナ禍で大半の授業がオンラインになるなかで、例年に比べるとより説明に時間をかけ、学生への負担を考慮した教員もいたことは推測できるが、オンラインと対面の両方の方法を探りながらの運営であったことから、完全に講義内容を学生のレベルに合わせられていない苦勞が見受けられる。

Q3 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。

社会学科の教員が選んだ結果を全学科のなかに位置づけてみると、5（強くそう思う）を選んだ教員は、全23学科（国際交流センター、教職課程センター含む）中10番目（44.44%）である。4と5を合わせると9割を少し超える（93.65%）。図表9の結果から、社会学科の教員は全体の中程度の意識であったと言える。

Q4 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。

社会学科の教員が選んだ結果を全学科のなかに位置付けてみると、4（どちらかと言えばそうである）と5（強くそう思う）を選んだ教員は、合計で87.31%となる。これは全23学科（国際交流センター、教職課程センターを含む）中、10番目である。3（どちらともいえない）は15番目（11.11%）である。学生のPC必携に合わせ教員がPCの扱いに慣れていることを考慮すれば、4と5で合85.48%というのは、社会学部としては低いといえる。

Q5 学生はこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。「学生意欲」

社会学科の教員が選んだ結果を全学科のなかに位置付けてみると、「4（どちらかと言えばそうである）」と「5（強くそう思う）」を選んだ教員は、合計で85.71%となる。その内訳は「5（強くそう思う）」と回答した教員は33.33%であり、他学科と比較すると、上位に位置している。「4（どちらかと言えばそうである）」は60.42%であり全体的には中間に位置している。

Q6 あなたは熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。「自分熱意」

本学科において「5（強くそう思う）」と回答した教員は58.73%であり、他学科と比較すると、ほぼ中間に位置している。

教員は自身の熱意を授業に十分に反映しきれていない印象である。本年度の後期も大部分がオンラインという制約下で実施されたことを考慮すると、授業に対する熱意が減退傾向にあると思われる。オン来授業における教員の熱意とは何かを今一度認識する必要がある。

Q7 この授業を通じて学生の「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。「成長実感」

本学科において「5（強くそう思う）」と回答した教員は36.51%と、他学科と比較すると中の上程度に位置し、「4（どちらかと言えばそう思う）」と回答した教員は57.14%であった。また、「3（どちらともいえない）」と答えた教員が6.35%おり全学科の順位としては2番目に高い数値となっている。社会学科の授業の場合、日常生活の批判、基礎概念の習得、多様性への理解など、成長が表面的に目に見えにくい科目も少なくない。そ

のため、教員が学生の成長をすぐには判断できない可能性が高いことが、結果に反映されていると言えよう。ただし、教員が授業の開始前後、または学期の開始前後などに、知識が増えたかどうか、あるいはものごとの捉えかたが深くなったかどうかを、学生自身にチェックさせるなど、成長実感を確認する指導を導入することで改善が見込める可能性もある。

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10 を「100%満足」、1 を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。「総合満足」

本学科の教員の約94%が7～9と回答しており、教員の主観としては概ね90%以上の満足を認識していた。この質問に対する回答は、学科ごとにかんがりのばらつきが見られるが、本学科の教員は相対的には高い総合満足度を示していると言えよう。その他のレンジでも突出した高数値や低数値は見られなかったことから、総じて見れば満足度は高いと教員が認識していたことがわかる。

以上

## 4. 考察とまとめ

前述したように 2021 年度からアンケートの設問自体をアップデートしたため、これまでのアンケート結果との直接の比較をすることは簡単ではない。そのことを踏まえた上で従来の結果との比較を試みておくことには一定の意味があるだろう。

従来のアンケートは設問に多少の変更が施されることはあったが、以下の設問は一貫して含まれてきた。

### <総合満足度>

設問：この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。

回答選択肢：⑤大いに満足した ④少し満足した ③どちらとも言えない ②あまり満足できなかった ①満足できなかった

### <自分で考える姿勢>

設問：あなたはこの授業を通して自分で調べ、考える姿勢などが身につきましたか。

回答選択肢：⑤大いに身についた ④やや身についた ③どちらとも言えない ②あまり身につかなかった ①全く身につかなかった

## 2020 年度

2020 年度はこの 2 つの設問の回答数値の和を求めてそれを「総合評価」とした。その結果は以下の通りである。(満足度単独での数値は報告書に含まれていない。)

総合評価 (Q14・Q15の合計値)

[Q14:自分で考える姿勢 / Q15:満足度]

実施年度	区分	肯定的	(やや肯定的)	どちらとも言えない	(やや否定的)	否定的	平均
2020年度 履修者	30人未満	9074 (41.3%)	8726 (39.7%)	2739 (12.5%)	936 (4.3%)	503 (2.3%)	4.1
	30人以上50人未満	5942 (38.3%)	6500 (41.9%)	1999 (12.9%)	655 (4.2%)	406 (2.6%)	4.1
	50人以上100人未満	6275 (35.5%)	7601 (43.0%)	2666 (15.1%)	764 (4.3%)	390 (2.2%)	4.1
	100人以上200人未満	5446 (35.5%)	6623 (43.1%)	2332 (15.2%)	650 (4.2%)	311 (2.0%)	4.1
	200人以上300人未満	1662 (34.4%)	2127 (44.0%)	731 (15.1%)	222 (4.6%)	92 (1.9%)	4.0
	300人以上	271 (24.6%)	453 (41.2%)	265 (24.1%)	81 (7.4%)	30 (2.7%)	3.8
	計	28,670 (37.5%)	32,030 (41.9%)	10,732 (14.0%)	3,308 (4.3%)	1732 (2.3%)	4.1

## 2019 年度

2019 年度については、「総合満足度」の数値が以下のように報告されている。

学年： 全学年

ⅢQ13 この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。

(人)

実施年度	区分	肯定的	(やや肯定的)	どちらとも言えない	(やや否定的)	否定的	平均
2018年度	文学部	7,517 (49.4%)	4,842 (31.8%)	1,881 (12.4%)	538 (3.5%)	425 (2.8%)	4.2
	経済学部	3,246 (40.2%)	2,710 (33.5%)	1,453 (18.0%)	381 (4.7%)	290 (3.6%)	4.0
	外国語	4,353 (45.4%)	3,012 (31.4%)	1,545 (16.1%)	395 (4.1%)	282 (2.9%)	4.1
	法学部	2,930 (37.8%)	2,751 (35.5%)	1,409 (18.2%)	395 (5.1%)	266 (3.4%)	4.0
	国際関係	1,839 (48.2%)	1,165 (30.6%)	597 (15.7%)	135 (3.5%)	76 (2.0%)	4.2
	経営学部	2,483 (38.2%)	2,344 (36.1%)	1,095 (16.9%)	306 (4.7%)	268 (4.1%)	4.0
	環境創造	827 (44.6%)	617 (33.3%)	329 (17.8%)	50 (2.7%)	30 (1.6%)	4.2
	スポーツ健康	2,678 (42.0%)	2,135 (33.5%)	1,129 (17.7%)	265 (4.2%)	170 (2.7%)	4.1
	社会学部	628 (33.0%)	704 (37.0%)	368 (19.3%)	136 (7.2%)	66 (3.5%)	3.9
	全学集計	25,873 (43.7%)	19,576 (33.1%)	9,438 (16.0%)	2,465 (4.2%)	1,807 (3.1%)	4.1

### 2016 年度～2018 年度

2016 年度、2017 年度、2018 年度については、「総合満足度」の数値が以下のように報告されている。

#### ●全学年集計



以上をまとめると、2016 年度から 2020 年度までの総合的な満足度の最も代表的指標に関する 5 段階評価の推移は以下の通りである。「平均」の行を見ると、5 段階評価の上位 2 段階「肯定」と「やや肯定」の合計は 75.5% であったことがわかる。

	肯定	やや肯定	どちらとも言えない	やや否定	否定
2016	34.5	35.1	22.0	5.5	3.2
2017	41.4	33.7	16.3	4.8	3.7
2018	43.4	33.2	16.1	4.3	3.1
2019	43.7	33.1	16.0	4.2	3.1
2020	37.5	41.9	14.0	4.3	2.4
平均	40.1	35.4	16.9	4.6	3.1

一方、前述のように2021年度のアンケートは10段階尺度による回答とした。段階別の回答割合はすでにヒストグラムで報告したが、それを2016年度～2020年度までと類似の方式で提示すれば以下のようなになる。

	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
2021前期	25.1	23.2	23.6	16.6	6.0	3.9	1.5	0.9	0.0	1.0
2021後期	26.7	23.8	25.0	13.0	5.2	3.0	1.3	0.9	0.0	1.0
平均	25.9	23.5	24.3	14.8	5.6	3.5	1.4	0.9	0.0	1.0
5段階換算	49.4		39.1		9.1		2.3		1.0	

5段階尺度での回答と10段階尺度での回答は、設問文言の差もあり、単純に比較できるものではないが、以下のような読み替えを試みることは、それほど不合理ではないであろう。

- 10段階の10および9 → 5段階の「肯定」
- 10段階の8および7 → 5段階の「やや肯定」
- 10段階の6および5 → 5段階の「どちらとも言えない」
- 10段階の4および3 → 5段階の「やや否定」
- 10段階の2および1 → 5段階の「否定」

その結果を示したのが上の表の「5段階換算」の行である。こうして換算された5段階の上位2段階（10段階での10および9、8および7）の合計は、88.5%となる。すなわち従来の5段階の上位2段階の合計である75.5%と類似か、それよりも高い数値が観察されたことになる。設問の表現も回答の尺度も異なるアンケート結果を直接比較することはできないことはすでに繰り返し指摘したとおりではあるが、新たに設定された設問形式によっても、従来測定されてきた満足度とある程度の一貫性のある構成概念が測定されていることが示唆されているとは言えるであろう。

2021年度に授業関係のアンケートをアップデートとしたのは、我々教員が提供している授業や評価を学生がどのように認識しているのか、そしてそれは我々教員の認識とどの程度一致しているのか、あるいはいないのか、についての現状を調査して結果を可視化することが、我々の授業や評価のあり方の質をさらに確実に保証してゆくことの資すると考えたからである。

前期、後期の2回にわたる計6種類のアンケートを通じて、従来必ずしも明らかにされていなかった学生や教員の認識が明らかになり、また従来直感的にのみ把握されていた事象がデータによって裏付けられたと言える。得られた知見の中から主なものを再掲するならば以下のようなものである。

1. シラバス内容を知っている学生は80%程度であるので、さらにシラバスの熟読を呼びかける必要がある。
2. シラバス内容を知っている学生は、授業はシラバス通りに実施されたと概ね認識している。
3. 授業の難易度については全体としては概ね適切な難易度設定がなされている。
4. 質問やメールに対する対応は概ね「迅速である」と認識されている。
5. 提出物に対するフィードバックは概ね「丁寧である」と認識されている。
6. 学生は、自身は「熱意・意欲」をもって授業に取り組んだ、と概ね認識している。ただし、2年次、3年次にはやや意欲が減退する傾向がありそうである。

7. 担当教員は熱意を持っている、と学生は概ね認識している。
8. 学生自身の意欲の自己認識と、学生が感じる教員の熱意には、強い正の関係が存在する。因果関係は不明ではあるものの、教員の側がコントロールできるのは「教えることに対する教員の熱意 (の表現)」だけであるため、因果関係があるという前提で、教員としては授業に熱意を持っているのは当然として、そのことが学生に伝わるよう一層心を砕く必要がある。
9. 授業を通じて何らかの成長を感じたという認識は多くの学生が持っている。
10. 全学的に学生の平均満足度は 80%以上である。
11. 学生の抱く「総合満足」に最も影響があるのは「成長感覚」である。
12. 授業についての教員の認識は、学生の認識と概ね一致しているが、学生がどの程度成長したか、その授業がどの程度満足すべきものであったのか、についての教員の認識は学生のそれに比べてやや厳し目のものである。
13. 付与された評価について学生は「概ね妥当である」と認識することが多い。ただしこれは回答した学生が S や A を得た者が多いため、その他の評価を得た学生の認識については不明な点が多い。
14. 評価について「低すぎる／厳しすぎる」という認識は、評価が下がるにつれて強くなるようだが、最もその認識が強いのは D 評価を得た学生であり、E 評価を得た学生はその評価をある程度納得する傾向があるようだ。
15. 評価が「低すぎる／厳しすぎる」という認識は、ひとつは評価基準が明らかでないと感じられた時、もうひとつは授業やテストの難度が高すぎると感じられた時に生まれる。

以上のような新たな知見またはすでに感じられていた事象の裏付けを生み出すことのできた 2021 年度の一連の授業・評価関連アンケートは、学生そして教員の認識を、前年度までを上回る程度に可視化し、それによって本学の今後の授業をさらに質の高いものにしてゆくために一定の役割を果たしたと考えている。

以上

## 資料

### 1. 大東文化大学全学 FD 委員会規定

(目的)

第1条 この規程は、大東文化学園内部質保証推進委員会及び学部・大学院と連携をとりつつ、大東文化大学における教員の教育の内容及び技法の改善、その他研究活動、社会活動等における教員の資質の向上を組織的に支援することを目的とする。この目的達成のため、全学FD委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(任務)

第2条 委員会は、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事項を審議検討し、実施することを任務とする。

- (1) 本学の教員の教育活動、研究活動、社会活動等に対するFDの視点からの分析及び提言、並びにこれらの効果に関する諸調査の企画、実施及び分析
- (2) FDに関連する学内外の情報収集とその普及等の広報啓発活動
- (3) FDに関する講演会、研究会その他の企画及び開催
- (4) 「学生による授業評価」の策定及び実施、授業評価結果の分析、並びに授業評価結果報告書の作成及び公表
- (5) 授業評価結果の有効活用その他授業改善に関する取り組みの支援
- (6) その他、委員会が必要と認めた事項

(組織)

第3条 委員会は、次の委員をもつて構成する。

- (1) 学長又は学長が副学長の中から指名した者 1名
- (2) 各学部が選出する者 各1名
- (3) 各研究科が選出する者 各1名
- (4) 学長が指名する者 若干名

2 委員会の委員長は、前項第1号に定める者とする。

3 委員会に副委員長を1名ないし2名置く。副委員長は委員会の同意を得て委員長が指名する。

4 副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故があつた場合は、委員長の職務を代行する。

5 委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

6 委員が欠けたときの後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

7 委員会は必要に応じて委員以外の者に同委員会への出席及び発言を求めることができる。

(運営)

第4条 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

2 委員会は、委員の過半数の出席がなければ、議事を開き、議決することができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(専門部会)

第5条 委員会は、第2条の任務を遂行するにあたり、必要に応じて専門部会を設けることができる。

2 専門部会には、委員以外の協力委員を置くことができる。

(事務局)

第6条 委員会に関する事務は、学務部学務課が担当する。

(規程の改廃)

第7条 この規程の改廃は、学長がこれを行う。

附 則

この規程は、平成18年5月15日から施行する。

附 則 (平成21年6月15日)

本規程は、平成21年6月15日から施行する。

附 則 (平成22年2月22日)

1 この改正規程は、平成22年4月1日から施行する。

2 この改正規程の施行に伴い、大東文化大学学生による授業評価実施委員会規程は、平成22年3月31日をもって廃止する。

附 則 (平成27年3月18日)

この規程は、平成27年4月1日より施行する。

附 則 (平成31年2月25日)

(施行期日)

1 この規程は、平成31年4月1日より施行する。

(規程の改正及び名称の変更)

2 平成18年5月15日制定及び施行の「大東文化大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を改正し、名称を「大東文化大学全学FD委員会規程」に変更する。

附 則 (令和元年10月28日)

この規程は、令和元年10月28日から施行する。

2021 年度大東文化大学『学生による授業認識アンケート』実施要項

全学 FD 委員会

1. 目的

履修学生の授業に対する認識を調査することで、授業の内容や方法の改善に役立てるために実施する。

2. 対象科目

- (1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が 5 名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とする。
- (2) 本アンケートは前期および後期に実施いたします。前期実施時は、前期科目（前期前半・前期後半含む）を対象とする。後期実施時は、通年および後期科目（後期前半・後期後半含む）を対象とする。
- (3) 実施対象科目を全学 FD 委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とする。
- (4) 教員より希望があった場合にはアンケート実施科目の追加または削除について、全学 FD 委員長と協議のもと個別対応とする。

3. 調査項目

- (1) Web 方式 C-Learning 上で、選択式項目を基本とし、加えて自由記述欄を設ける。
- (2) 任意で教員独自の設問（個々の教員が受講生から意見を聴取したいと思う内容）を設けてもよい。独自の設問を実施する際は、設問を提示または配信して学生に周知する。

4. 回答期間（当該教員は随時結果閲覧可能）

前期 2021年7月12日（月）～7月24日（土）対象科目：前期科目（前期前半・前期後半含む）

後期 2021年12月6日（月）～12月18日（土）対象科目：通年・後期科目（後期前半・後期後半含む）

5. 実施方法

Web 方式 C-Learning にて実施。次の方法 A あるいは方法 B による。

方法 A：実施期間内のどこかの授業内の 10～15 分程度を使って実施する。

方法 B：アンケートの QR コード等を提示/配信した上で、実施期間内（上記 4）の回答を促す。（この場合、実施期間途中で回答率をモニターし、必要に応じて回答をリマインドするとよい）

6. 結果の閲覧と集計

- (1) 担当教員は、回答期間終了後は、各自のデバイス（PC/スマートフォンなど）上で、自身の授業の集計結果および自由記述内容を確認する。
- (2) 全学 FD 委員会は、全学的な集計結果をまとめ、その分析方法を検討する。

7. 結果の取扱い

アンケートの結果を、担当教員に対する管理の強化や不利益な取扱いに利用することはない。

8. 結果の公表と活用

- (1) 担当教員は当該授業についての数値結果および自由記述についての具体的なコメントを C-Learning 上に掲載する。このコメントは当該授業の履修者が閲覧可能とする。
- (2) 上記の全学的集計結果の数値部分については『報告書』に掲載し、その『報告書』は、学生を含め学内に公開される。
- (3) 自由記述欄の内容は『報告書』に記載せず、当該教員が今後の授業の参考資料として活用する。
- (4) 外部への公表および活用については、全学 FD 委員会の責任において、本学ホームページへの掲載等を含め、必要に応じて行う。ただし、設問内容によっては、外部には公表しない。

以上

2021年度大東文化大学『教員による授業認識アンケート』実施要項

全学FD委員会

1. 目的

教員に自らの授業を振り返り内省する機会を提供し、かつ別に実施する『学生による授業認識アンケート』との結果を各教員が比較することで、授業改善に資することを目的とする。

2. 実施対象科目

『学生による授業認識アンケート』と同一とする。

3. 調査項目

基本的に『学生による授業認識アンケート』と表裏をなす選択式項目とする。

4. 実施期間

(1) 前期 成績入力時 2021年7月26日(月)～8月4日(水)

(2) 後期 成績入力時 2022年1月13日(木)～2月3日(木)

5. 実施方法

Google フォームにて実施。

6. 結果の集計

全学FD委員会は、全学的な集計結果をまとめ、その分析方法を検討する。

7. 結果の取扱い

アンケートの結果を、担当教員に対する管理の強化や不利益な取扱いに利用することはしない。

8. 結果の公表と活用

(1) 上記の全学的集計結果の数値部分については『報告書』に掲載し、その『報告書』は、学生を含め学内に公開される。

(2) 外部への公表及び活用については、全学FD委員会の責任において、本学ホームページへの掲載等を含め、必要に応じて行う。ただし、設問内容によっては、外部には公表しない。

以上

2021年度大東文化大学『学生による評価認識アンケート』実施要項

全学FD委員会

1. 目的

授業を履修した学生が、与えられた評価をどう認識するかを調査することで、次の学期以降の授業運営および評価の参考にするために実施する。

2. 実施の対象

『学生による授業認識アンケート』と同一科目とする。

3. 調査項目

(1) あなたがこの授業で得た評価はどれでしたか？ S/A/B/C/D/E

(2) 授業目標や自分の学修努力の程度に照らして、この評価についてあなたの認識は次のどれに近いですか？

①低/厳しすぎる ②やや低い/厳しい ③概ね妥当である ④やや高い/甘い

⑤高/甘過ぎる

※この回答如何によって評価が変わるものではないことを明記する。

4. 実施時期

前期、後期とも成績が公開され、成績調査申請可能期間が終了した後の10日間

(1) 前期：成績公開 9月3日(金)/成績調査依頼終了 9月9日(木)

→9月11日(土)～9月21日(火)

(2) 後期：成績公開 3月4日(金)/成績調査依頼終了 3月10日(木)

→3月12日(土)～3月22日(火)

5. 実施方法

Web方式C-Learningにて実施。

6. 集計の方法

(1) 担当教員は、回答期間終了後は、各自のデバイス(PC/スマートフォンなど)上で、自身の授業の集計結果を確認できる。

(2) 全学FD委員会は、全学的な集計結果をまとめ、その分析方法を検討する。

7. 結果の取り扱い

アンケートの結果を、担当教員に対する管理の強化や不利益な取扱いに利用することはしない。

8. 結果の公表と活用

(1) 全学的な集計結果は『報告書』に掲載し、その『報告書』は学生を含め学内に公開される。

(2) 外部への公表及び活用については、全学FD委員会の責任において、本学ホームページへの掲載等を含め、必要に応じて行う。

以上

## 2021年度大東文化大学『学生による評価認識アンケート』実施要項

全学FD委員会

## 9. 目的

授業を履修した学生が、与えられた評価をどう認識するかを調査することで、次の学期以降の授業運営および評価の参考にするために実施する。

## 10. 実施の対象

『学生による授業認識アンケート』と同一科目とする。

## 11. 調査項目

(1) あなたがこの授業で得た評価はどれでしたか？ S/A/B/C/D/E

(2) 授業目標や自分の学修努力の程度に照らして、この評価についてあなたの認識は次のどれに近いですか？

- ①低/厳し過ぎる ②やや低い/厳しい ③概ね妥当である ④やや高い/甘い  
⑤高/甘過ぎる

(3) 上記(2)で回答した理由を具体的にご記入ください。(自由記述) ※後期より追加  
※この回答如何によって評価が変わるものではないことを明記する。

## 12. 実施時期

前期、後期とも成績が公開され、成績調査申請可能期間が終了した後の10日間

(1) 前期：成績公開 9月3日(金)/成績調査依頼終了 9月9日(木)

→9月11日(土)～9月21日(火)

(2) 後期：成績公開 3月4日(金)/成績調査依頼終了 3月10日(木)

→3月12日(土)～3月22日(火)

## 13. 実施方法

Web方式C-Learningにて実施。

## 14. 集計の方法

(1) 担当教員は、回答期間終了後は、各自のデバイス(PC/スマートフォンなど)上で、自身の授業の集計結果を確認できる。

(2) 全学FD委員会は、全学的な集計結果をまとめ、その分析方法を検討する。

## 15. 結果の取り扱い

アンケートの結果を、担当教員に対する管理の強化や不利益な取扱いに利用することはしない。

## 16. 結果の公表と活用

(1) 全学的な集計結果は『報告書』に掲載し、その『報告書』は学生を含め学内に公開される。

(2) 外部への公表及び活用については、全学FD委員会の責任において、本学ホームページへの掲載等を含め、必要に応じて行う。

以上